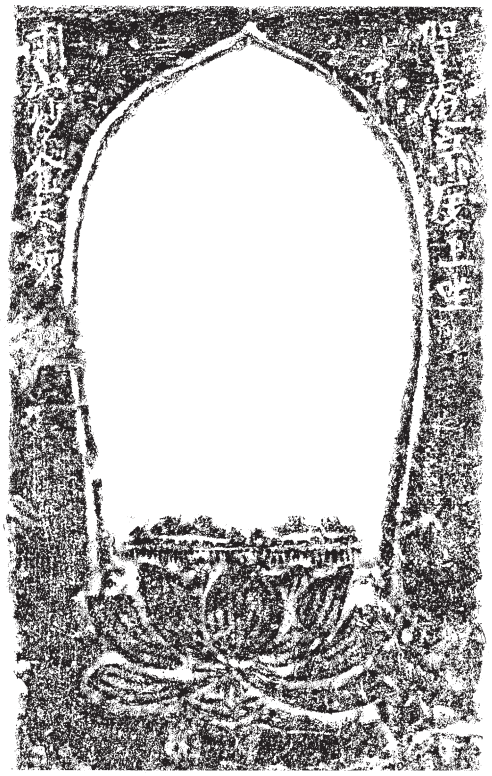
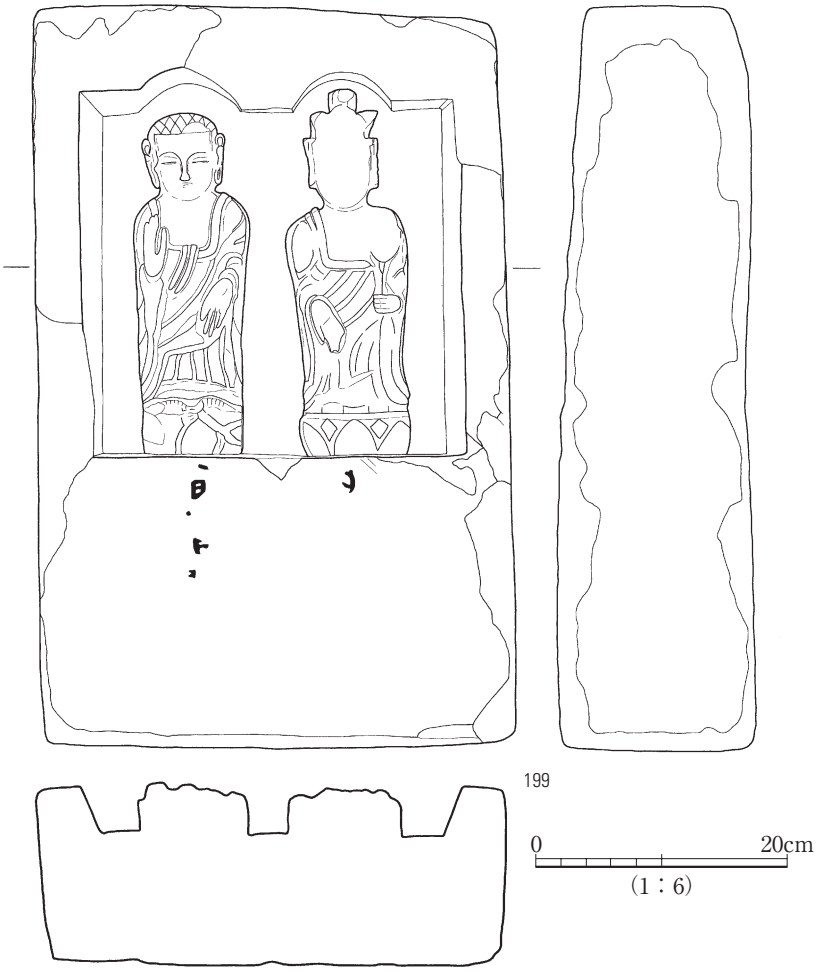


198の表面

198の裏面



第69図　石塔群出土石塔⑧［画像板碑6（拓本）・7］(S=1/6)

3．板碑

【板碑 1 ［第70図ー200］】完形で出土した。頂部は三角形を呈し，２本の頂上線をもつ。上中央部には逆向きの「卍」,中央には「奉造立塔□一本」左側には「為雪山妙好（？）禅定…」右側には「〒時慶安二…」と書かれている。慶安は５年までしかないので,「慶安二年（1649年)」となる。

【板碑 2 ［第71図ー201］】部分的に欠損しているが，完形で出土した。頂部は三角形らしき形であるが，頂部が丸くなっている。２本の頂上線をもち,額部には「閏」や「関」らしき「もんがまえ」の文字の墨書が確認できる。塔身部には３行の墨書があり，中央は「祖師西霊（「霊」は異字体)」。左側は「為貨（？）□昌□□」。右側は判読が困難であるが,「〒時寅□四…」といった文言が考えられる。

【板碑 3 ［第71図ー202］】上半部のみの検出である。頂部は明瞭な三角形を呈し，２本の頂上線をもつ。額部には墨書で「もんがまえ」の文字が書いてあり,「閏」や「関」のような文字が連想される。額部の下は切断していて不明であるが，舟形光背状の窪み上部らしきものは確認できる。

【板碑 4 ［第72図ー203］】上半部の検出である。検出されたものも半分が折れた状態であり，残存状態は良好とは言えない。頂部は一応三角形を呈しているが，丸みを帯びている。刻字や墨書などの痕跡は確認されなかった。

【石塔 1 ［第73図ー204］】上部と下部が欠損し，中位のみの部分的な検出である。表面には３行の刻字があり，中央は「造立石塔壱基」左は「為月頭常金也」右は「…□地」となっている。

【経碑［第72図ー205］】上部と下部が欠損し，中位のみの部分的な検出である。表面には３行の刻字があり，中央は「欽奉書寫…」，左は「為雪嶺吉…」，右は「為桂…」と書かれている。内容や県内の類例から考えて，この石塔は一字一石経や一部一千経を埋納した時の経碑と考えられる。一字一石経の経碑であれば，付近から経石が出土する可能性があったが，一次調査では確認されなかった。二次調査のＤ区において，経碑が確認されなかったが，約80個の一字一石経の経石が出土した。この経碑がＤ区で出土した一字一石経の経碑であるかは判断できないが，この場所で一字一石による供養があったことは推定できる。なお，この経碑のタイプは江戸時代に多く存在する。

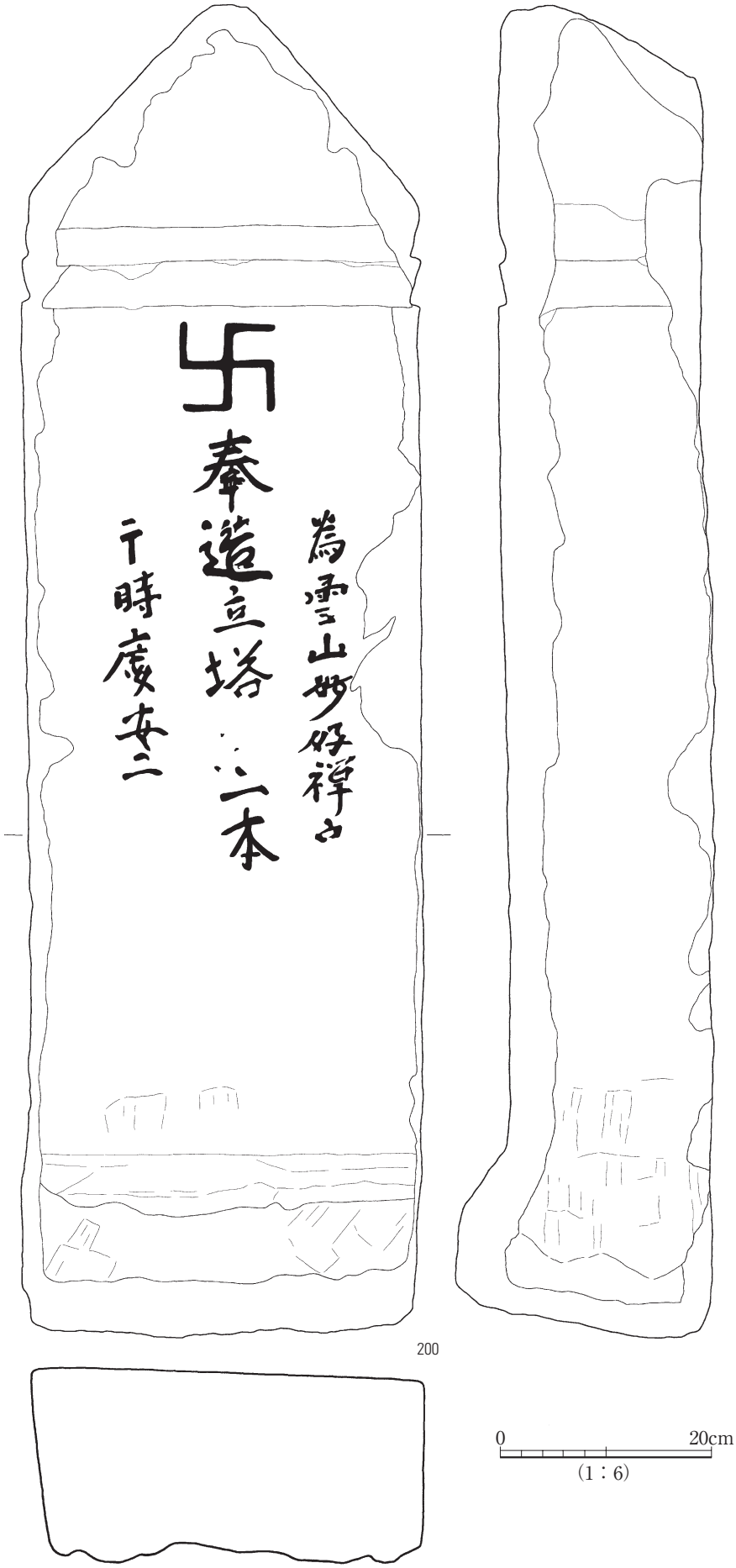
4. その他

【地蔵 1［第73図ー206］】座像であるが,首から上,両手が破損しており,全体像が不明である。右手は胸のあたり,左手は膝の上にあり,地蔵菩薩であるならば,左手は錫杖,右手は宝珠を持っていた可能性がある。両手が無いので,地蔵菩薩と断定できず，他の仏像の可能性もある。

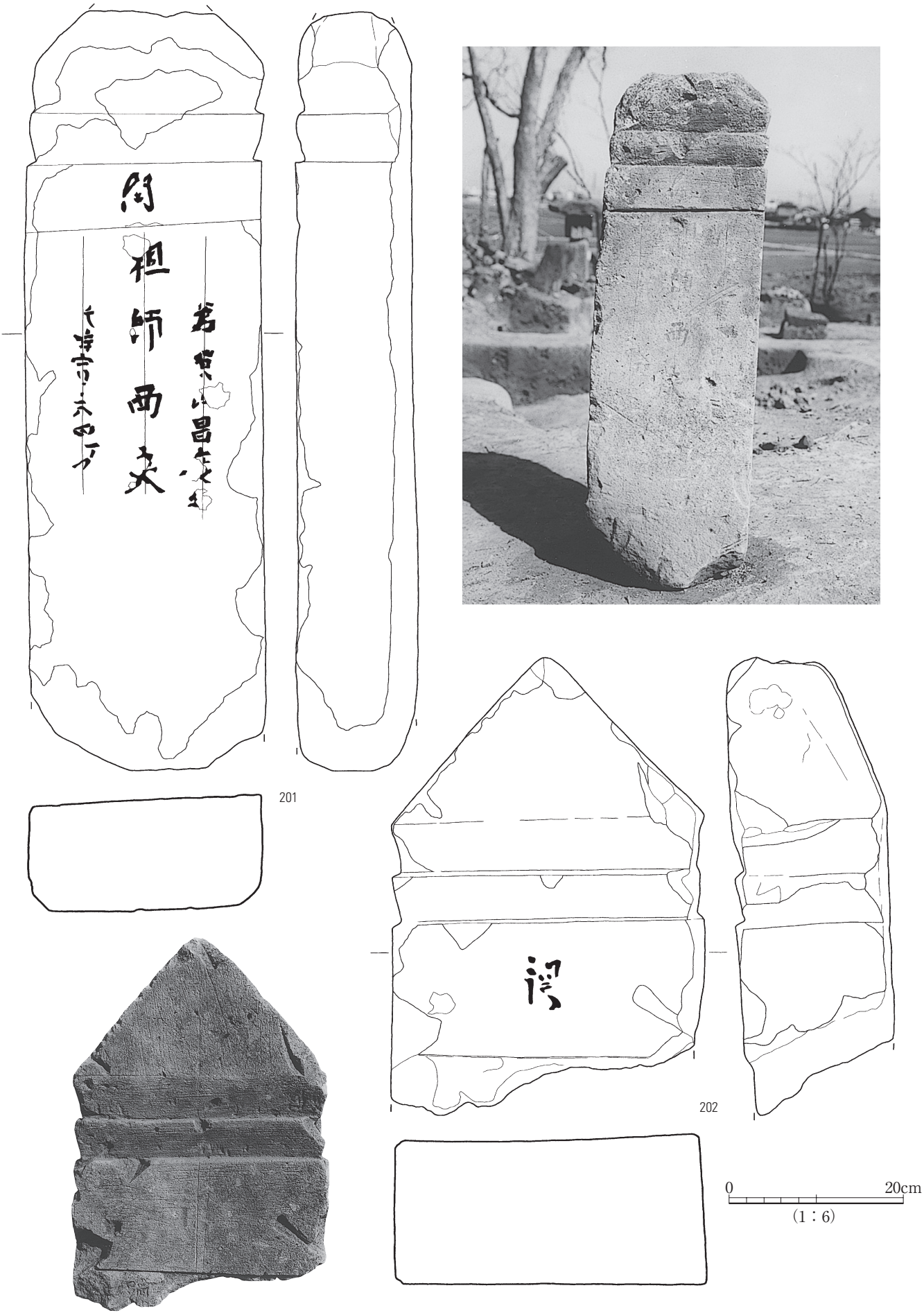
【地蔵 2 ［第74図ー207］】下部周辺が破損しているが，全体像が把握できる形で検出された。地蔵菩薩の立像である。左手は宝珠をもち，右手は現在何も持っていないがおそらく錫杖を持っていたようである。像の左右両脇と右側面に刻字が施されており，右は「明次二年巳十一月吉祥日／石立（工？）祥天」，左は「瑞雲…」，右側面「寄布三ヶ所中」とある。「明次」は「明治」の,「寄布」は「寄付」の誤りであろう。「瑞雲」の文字は,この遺跡が「瑞雲寺」関連であったことを裏付ける史料である。なお,ここが瑞雲寺とすれば,この地蔵は,刻字の明治２年（1869年）に造られたとすれば,『日向地誌』の記述による瑞雲寺の廃仏毀釈があった明治５年の３年前に造られたことになる。また，右側面部に刻まれている「祥天」は，後述する無縫塔（第79図－214）に書かれている「弟子祥天」と同一人物の可能性がある。

【地蔵 3 ［第75図ー208］】右上部が破損しているが，全体像が把握できる形で検出された立像である。１枚の凝灰岩製の板石をレリーフ状に彫りあげている。像は，蓮華座の上に立ち，左手には宝珠らしきものを掲げ，右手は胸元で施無畏印を結んでいる。顔は柔和な僧形である。顔部の背後には円形の光背の一部分が見られる。

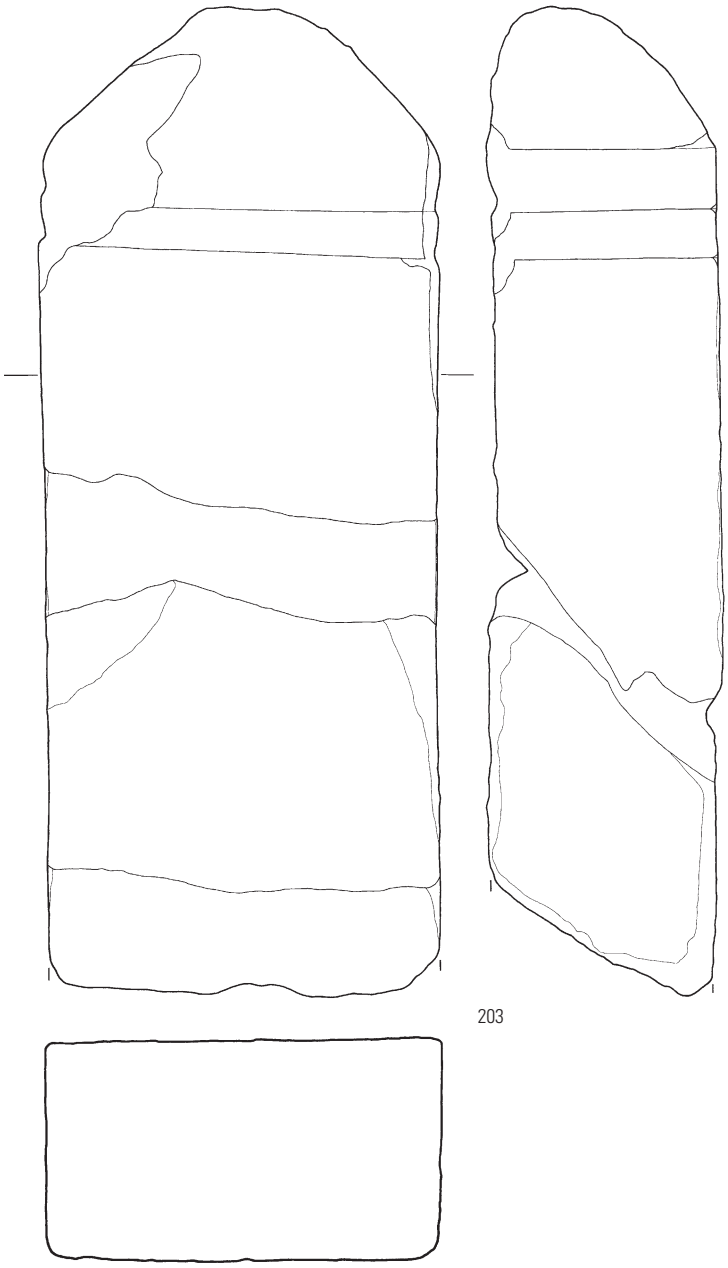
【地蔵 4 ［第75図ー209］】地蔵幢の龕部と考えられる一辺約28cmの立方体を呈する。残存状況は比較的良好であるが，顔部分が破損している。立方体６面中１面にのみ舟形光背状の窪みに錫杖を両手で持った地蔵菩薩立像が彫られている。



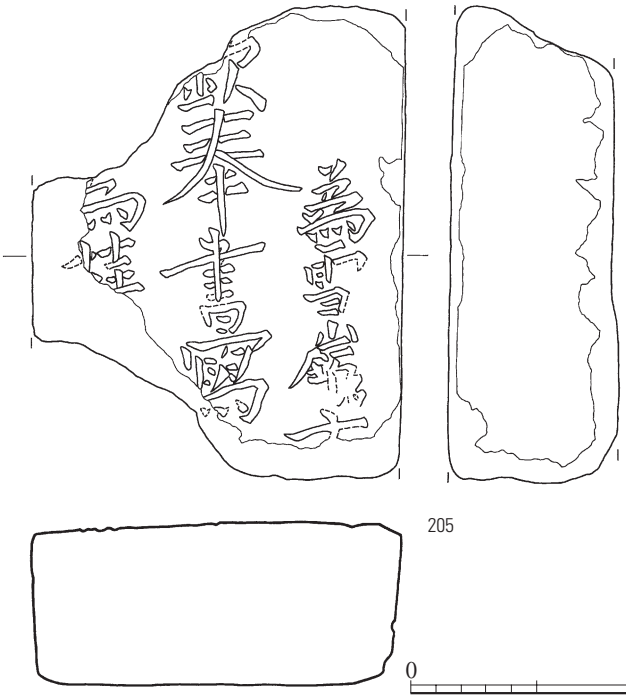
第70図　石塔群出土石塔⑨［板碑1］(S=1/6)



第71図　石塔群出土石塔⑩［板碑2・3］(S=1/6)



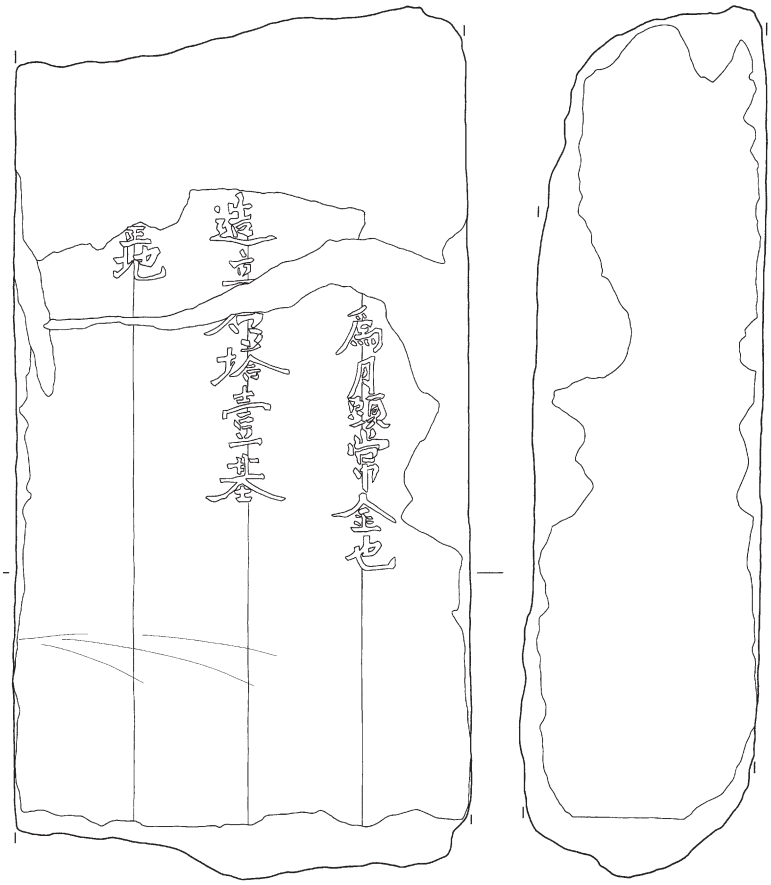
203



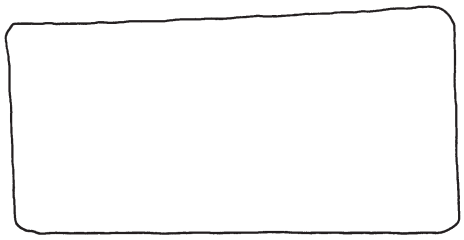
205

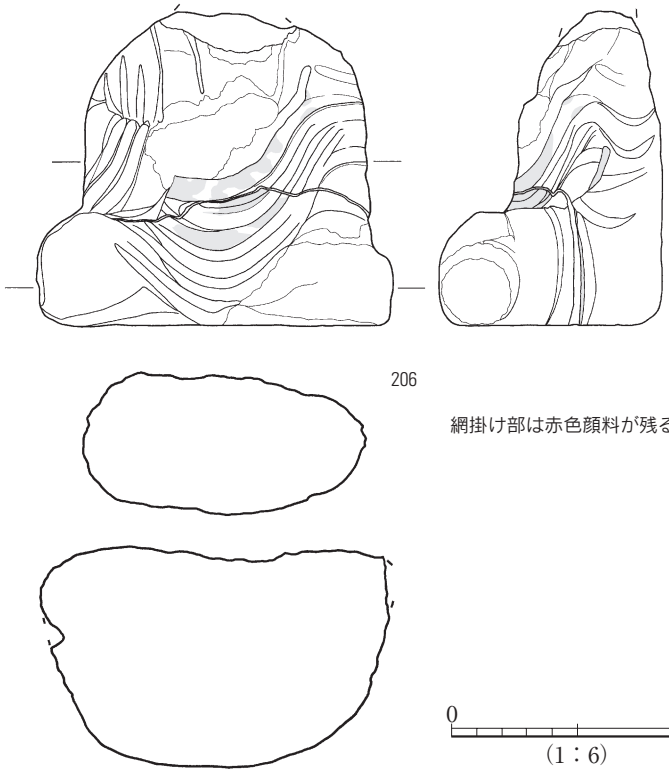
0　20cm
（1：6）

第72図　石塔群出土石塔⑪［板碑4・5］(S=1/6)



204



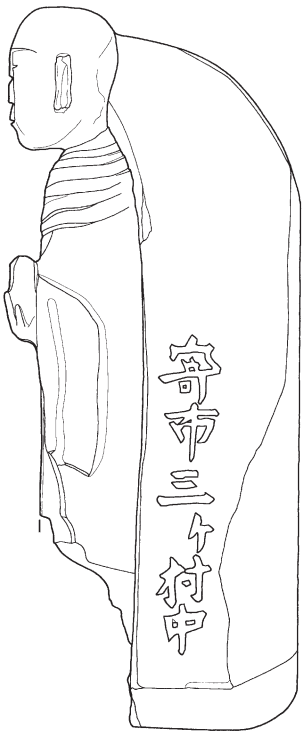


206

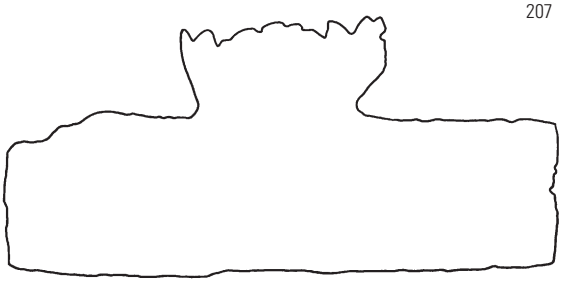
網掛け部は赤色顔料が残る部分

0　20cm
（1：6）

第73図　石塔群出土石塔⑫［石塔1・地蔵1］(S=1/6)

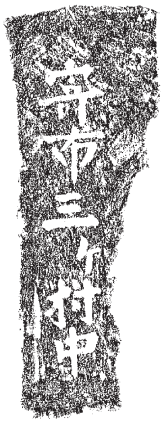


207

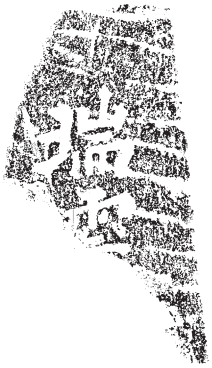


0 20cm
(1：6)

(S＝1/6)

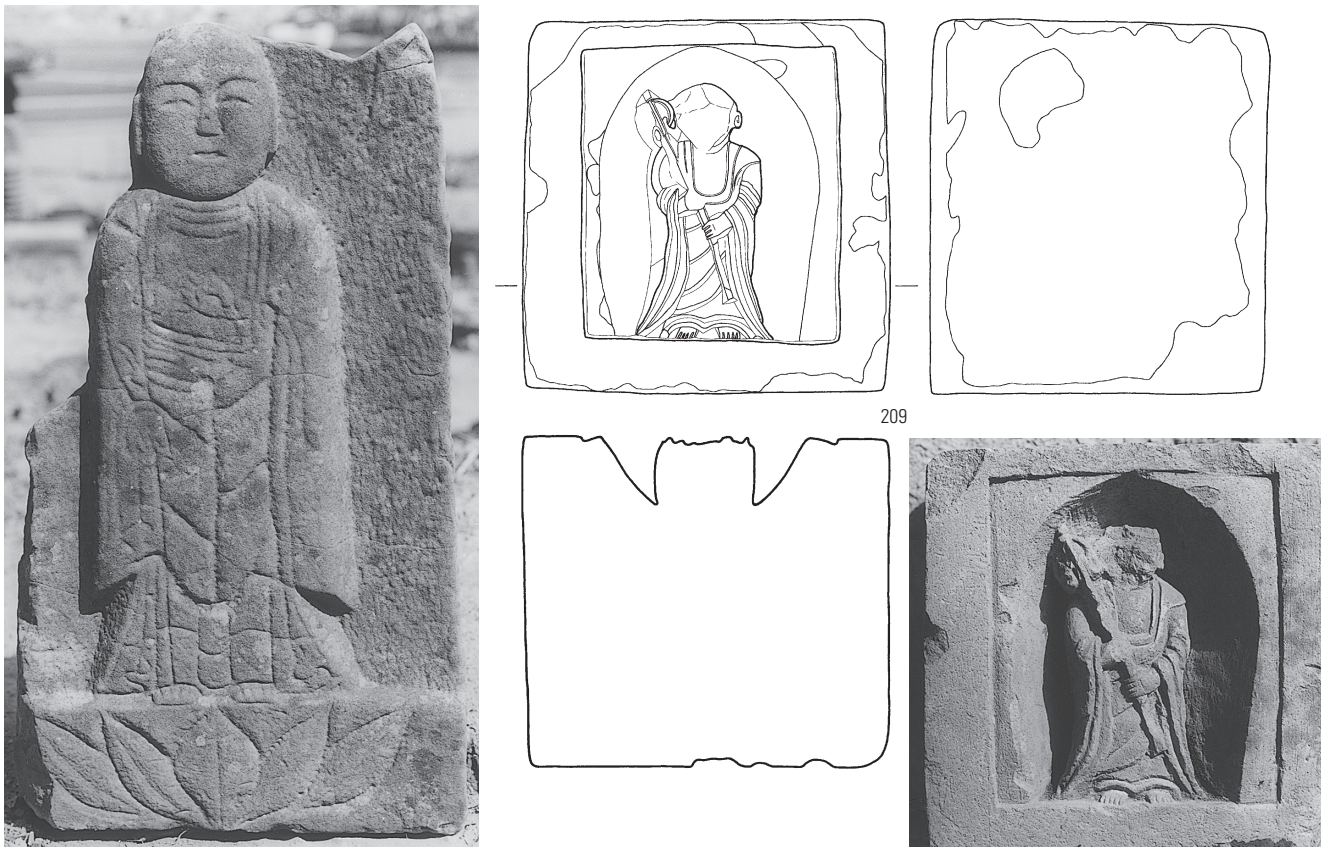


(S＝1/6)

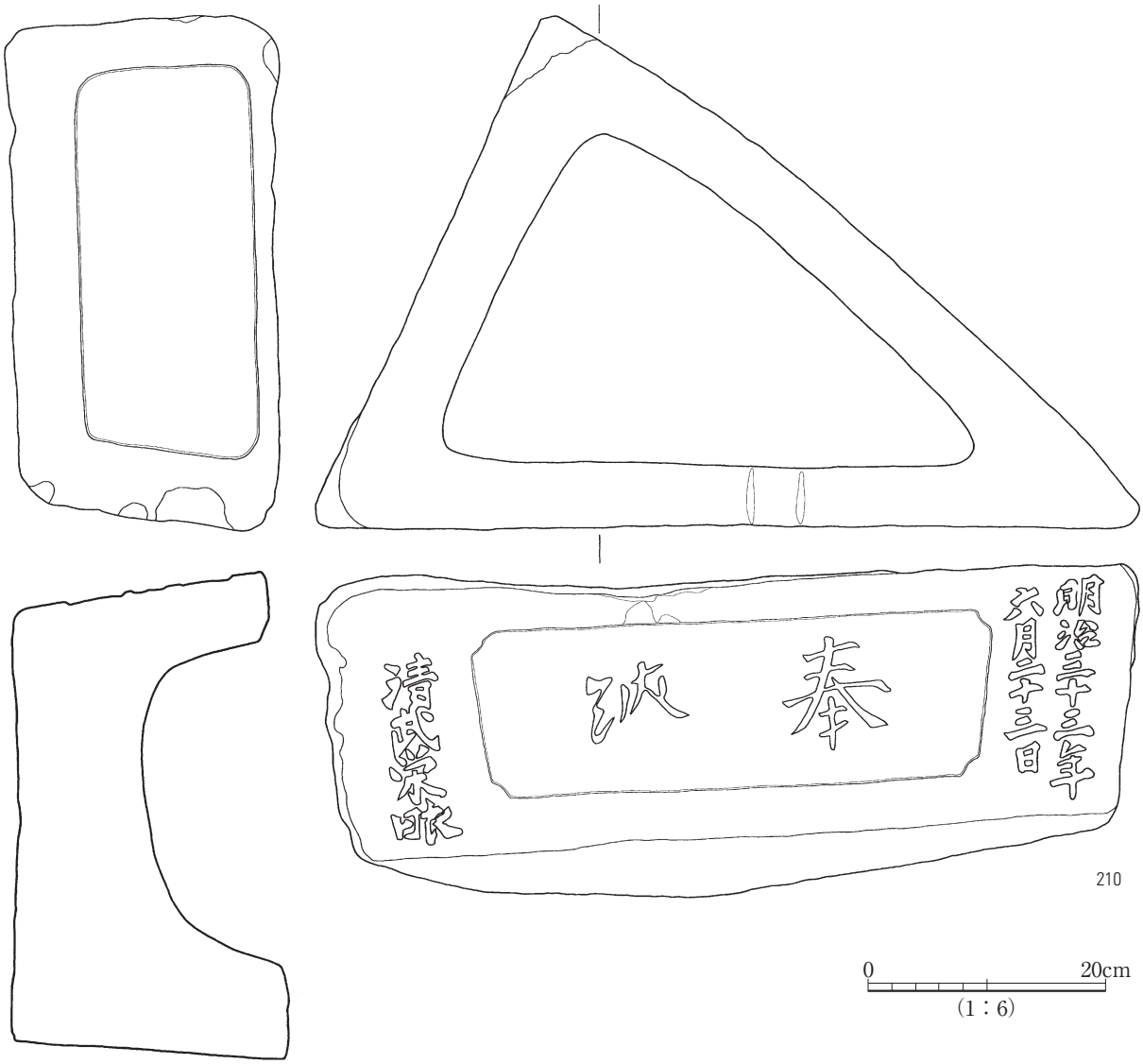


(S＝1/3)

第74図　石塔群出土石塔⑬［地蔵2］(S=1/6・1/3)



第75図　石塔群出土石塔⑭［地蔵3・4］(S=1/6)



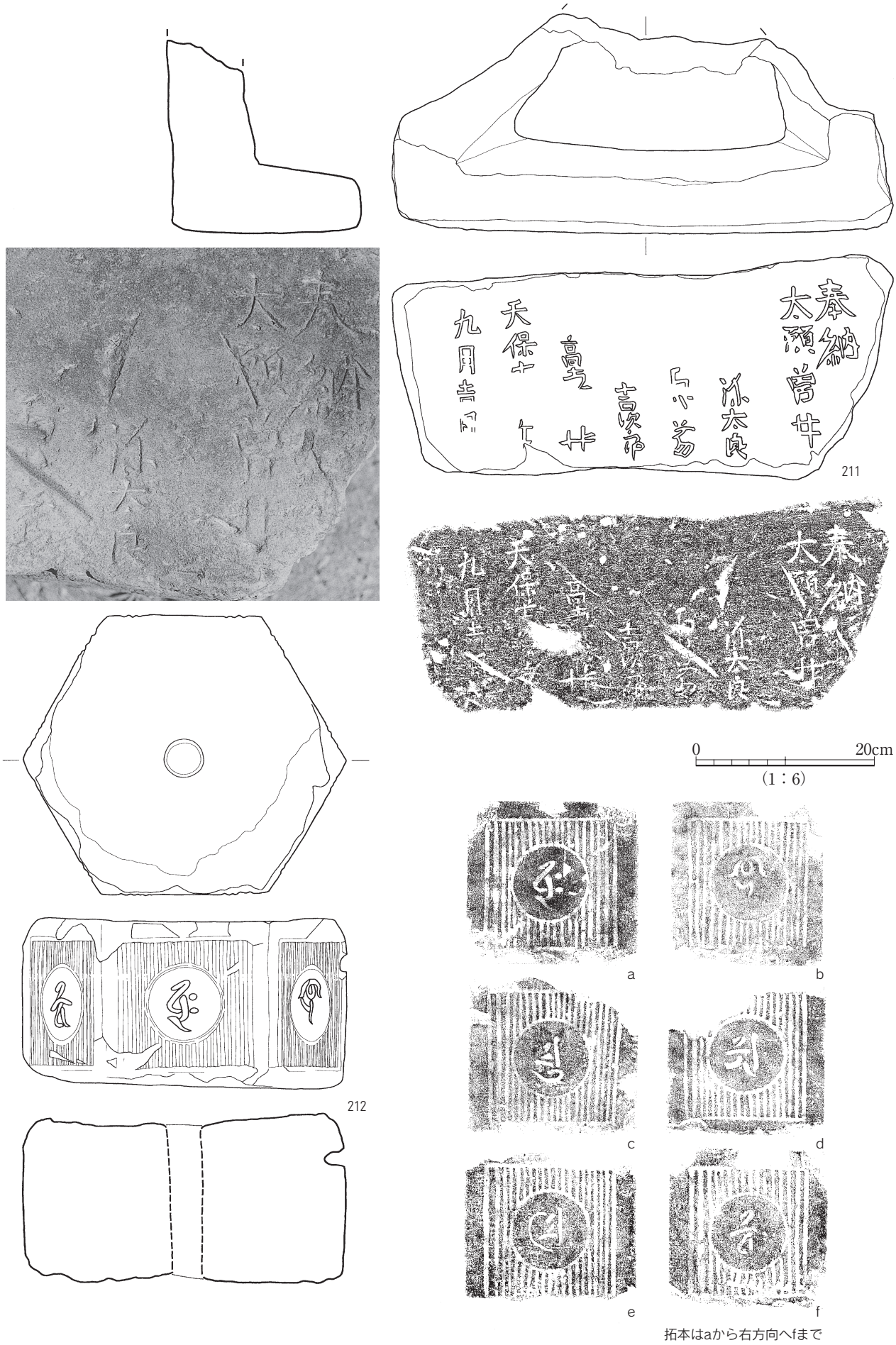
第76図　石塔群出土石塔⑮［手水鉢1］(S=1/6)

【手水鉢１［第76図ー210］】御堂跡の階段脇にあった。平面三角形で中央部が彫り窪めている。長辺部分には，中央部に大きく陽刻で「奉納」，左側に「明治三十三年／六月二十三日」，右側に「清武栄昨」と刻字されている。「清武」姓は，現在でも曽井地区周辺に多く居住していることから曽井の人間，もしくは曽井に縁のある人物と考えられる。明治33年［1900年］は，明治５年［1872年］廃仏毀釈後なので，復旧した後に奉納された可能性がある。

【手水鉢２［第77図ー211］】破損しているので，全体像は不明であるが，手水鉢１と同じく中央を彫り窪めた平面三角形を呈する。長辺の１辺には線刻による「奉納／太願曽井／弥太郎／□□□／吉次郎／高□…／天保□…／九月吉日」が確認される。この手水鉢の製作年代は，「天保」の文字から，天保年間［1830～1844年］と考えられる。

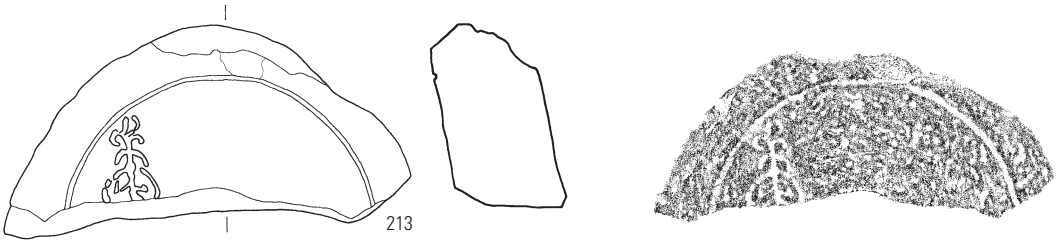
【地蔵幢［第77図ー212］】六角柱を呈し，中央部には径約４cmの穴が穿たれている。６面にはそれぞれ，縦縞模様の背景に無文の円形内に梵字が１字ずつ刻まれている。梵字の示すところは現段階では解読できていない。

【石塔片［第78図ー213］】石塔の先端部と考えられる。右側に文様が確認され，錫杖の先端部の可能性がある。線刻による円形文様が確認され，円形光背と考えられる。これらのことから，この石塔片は地蔵菩薩像の破片と考えられる。



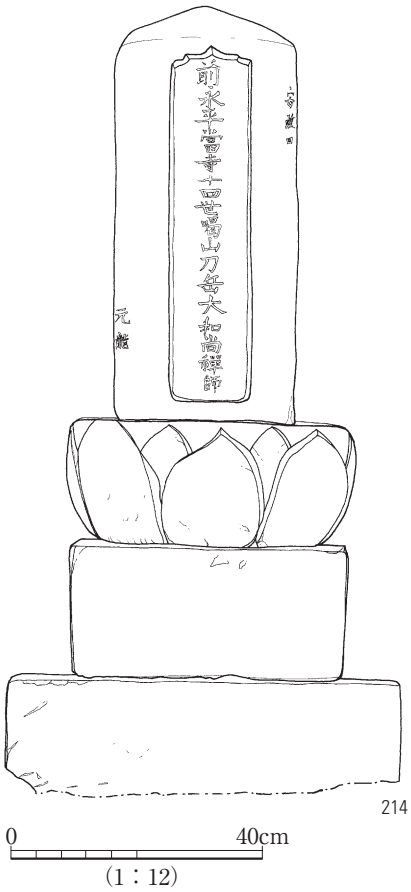
拓本はaから右方向へfまで

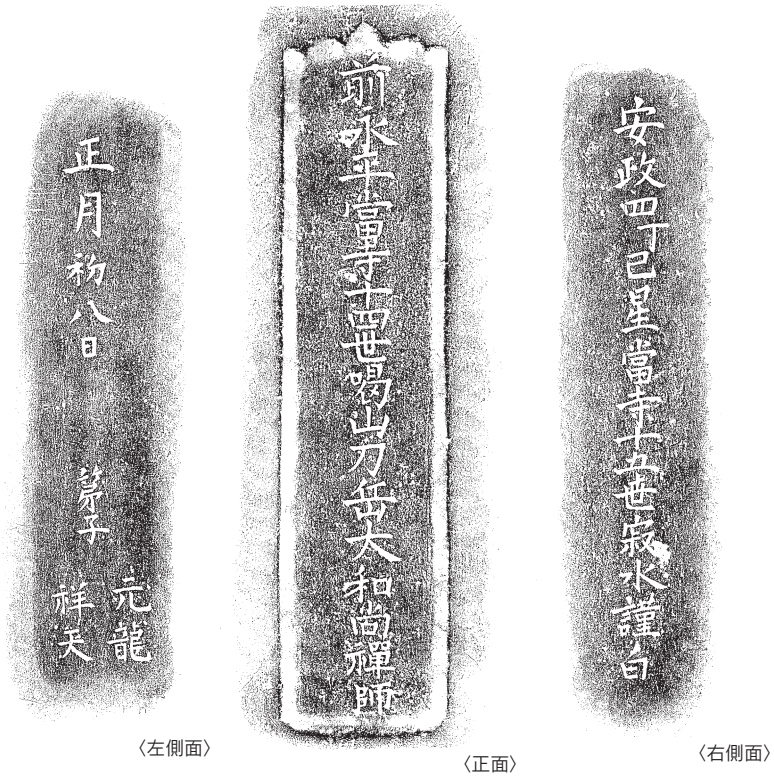
第77図　石塔群出土石塔⑯［手水鉢2・地蔵幢］(S=1/6)



第78図　石塔群出土石塔⑰［石塔片］(S=1/10)

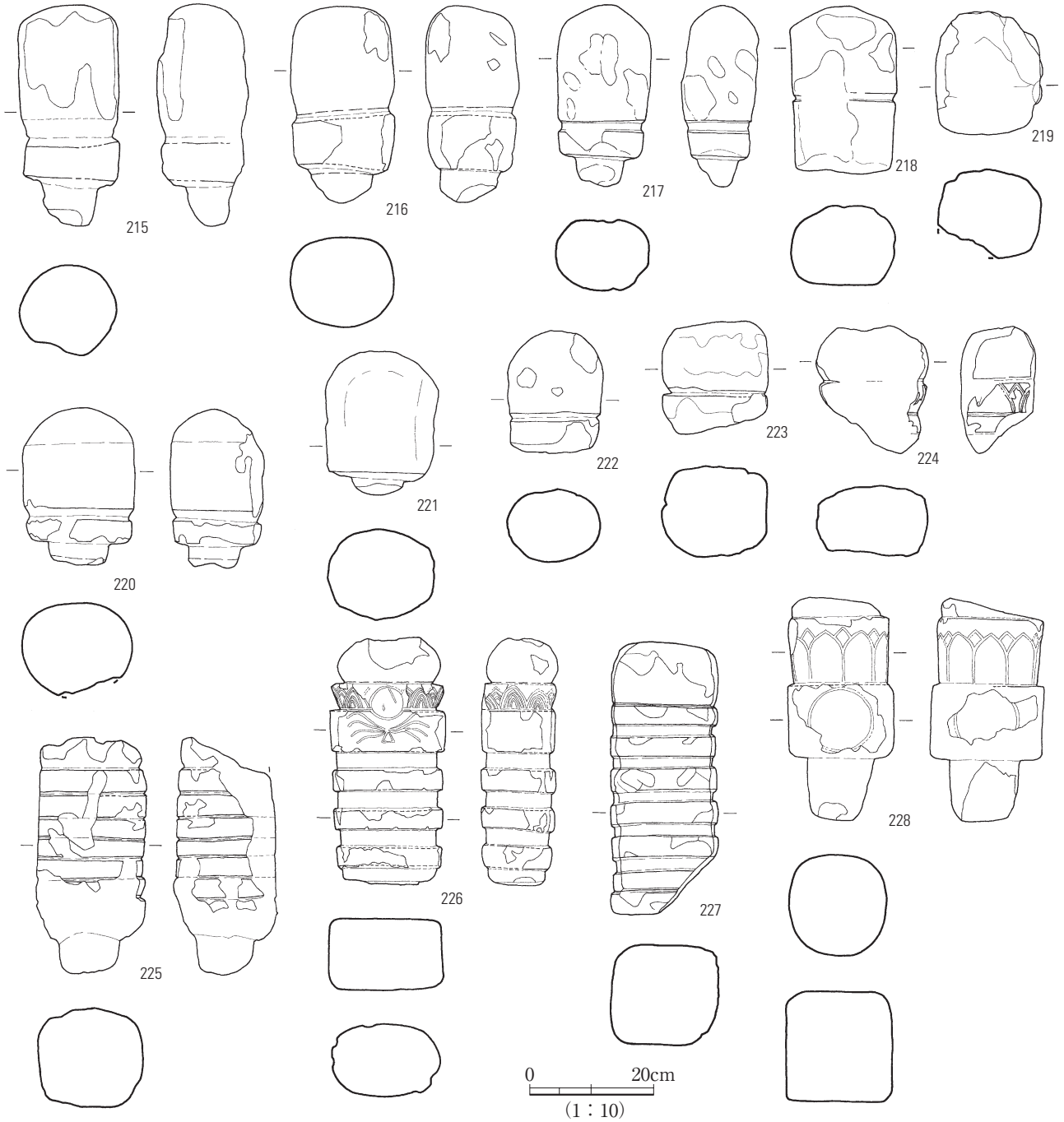
【無縫塔［第79図ー214］】石塔群の中心部に１基建立されている。総高123cm，塔身１段・請花１段・基礎３段の計５段で構成される。塔身部には正面と両側面の３面に刻字が施されている。正面は「前永平當寺十四世喝山刀岳大和尚禅師」，左側面は「安政四丁巳星當寺十五世寂水謹白」，右側面には「正月初八日　弟子　元龍／祥天」と記されている。この無縫塔は瑞雲寺十四世の墓であり，十五世の寂水と弟子の元龍と祥天がこの墓を安政四年［1857年］に建てたと考えられる。十五世の寂水は１号井戸の木枠に書かれていたものと同一人物と考えられ，幕末から明治頃に瑞雲寺住職であった可能性がある。また，弟子の一人の祥天は地蔵2（第74図－207）の祥天と年代からみても同一人物と考えられる。この無縫塔の下を掘り下げたが，土坑などは確認できなかったことから，他の石塔と同じく再配列されたと考えられる。この無縫塔は，石塔群の中心部に配されていることから考えて，明治時代の再配列時に配列の中心的存在であった可能性がある。



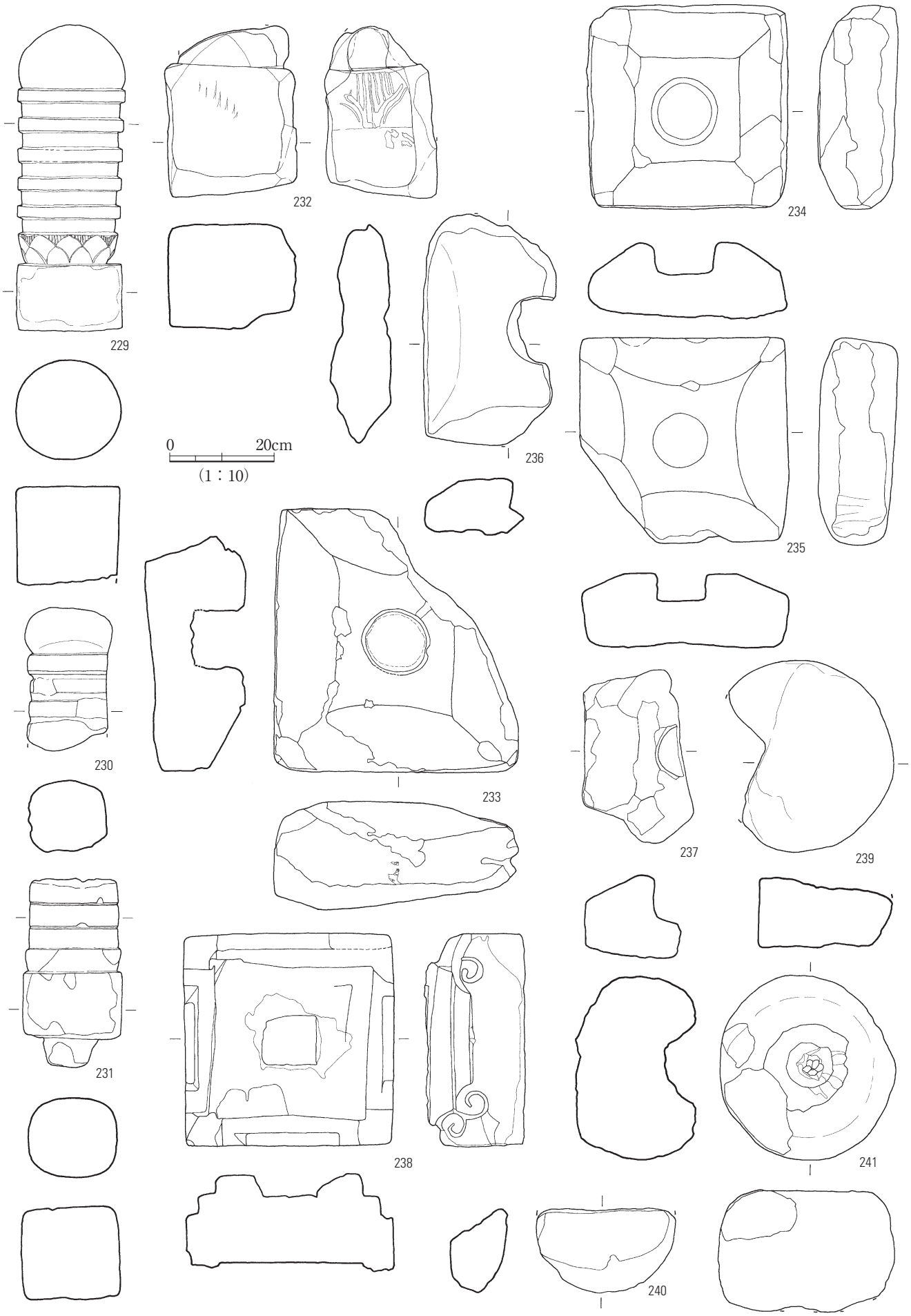


第79図　石塔群出土石塔⑱［無縫塔］(S=1/12・1/6)

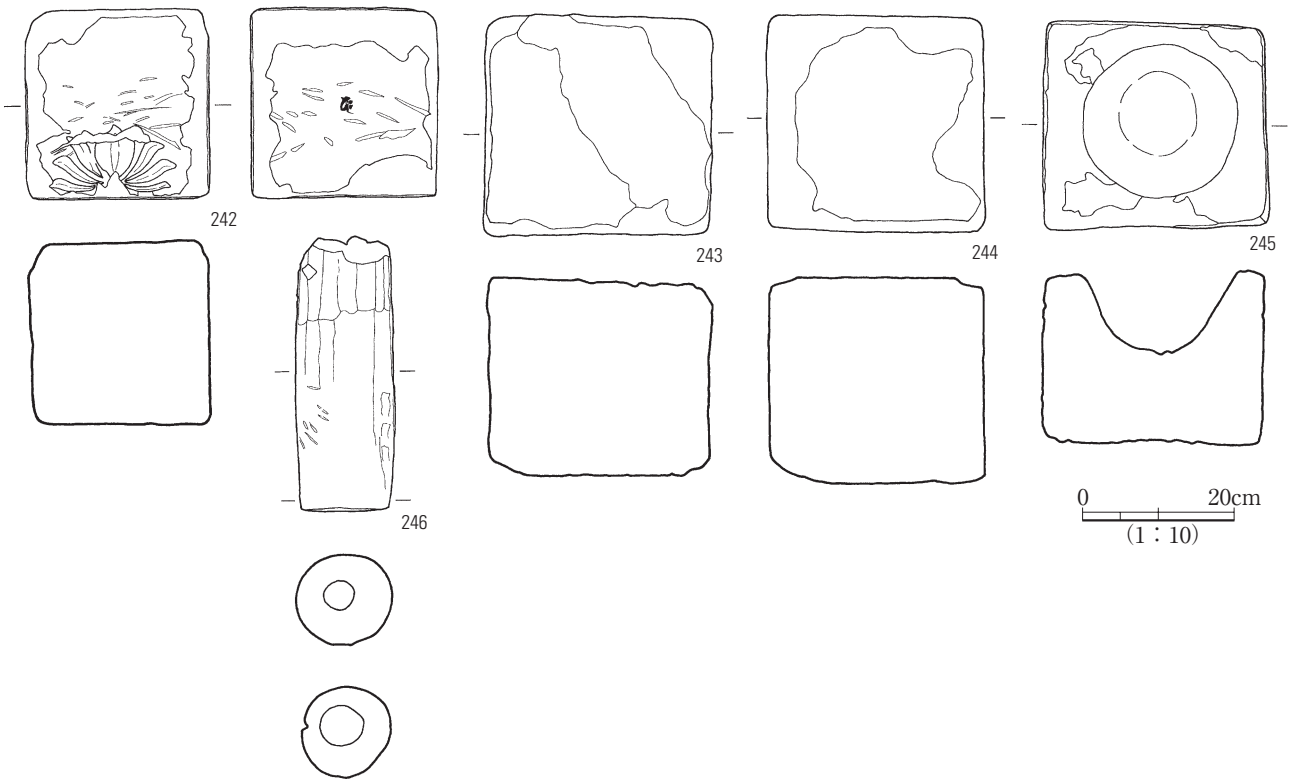
【石塔群Ａ出土その他遺物［第80図～第82図ー215～246］】215～245は石塔片である。215～223は空風輪である。いずれも宝珠部の先端が尖らず，丸みをおびた形態となっている。224は,上端部のみの出土で，全体像が把握できないが，228と類似する相輪と考えられる。225～231は相輪である。相輪部の断面は，229のみが円形で，他は長方形（226）や隅丸方形（225・227・230・231）である。228は先端が欠損しており不明であるが，請花部をもった空風輪と考えられる。232も先端が欠損しており不明であるが，相輪の宝珠・請花・伏鉢部と考えられる。233～237は火輪片である。233～235は緩やかながら直線的な笠の傾斜をもつ。236は風化著しく形態が不明瞭であるが，高さが低く扁平な形態と推測される。238は宝篋印塔の笠部である。239～241は水輪片である。239と240は風化著しく不明瞭であるが，納骨孔は無く，高さが低い扁平形である。241は高さの高いタイプで，浅い納骨孔をもつ。242～245は立方体の石塔片である。242は蓮花が刻まれ，245は孔が開いている。宝篋印塔や擬宝塔などに用いられていたと考えられる。



第80図　石塔群出土石塔⑲［宝塔片1］(S=1/10)

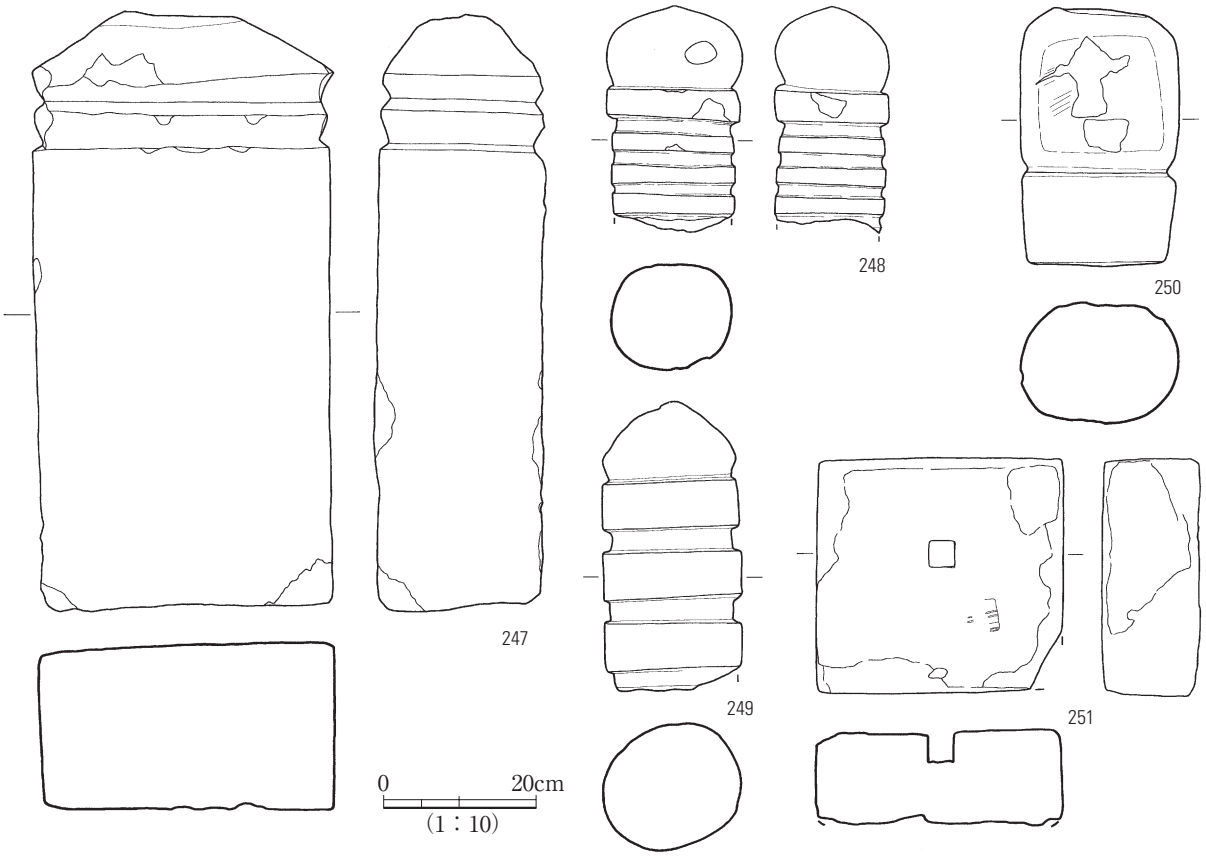


第81図　石塔群出土石塔⑳［宝塔片2］(S=1/10)



第82図　石塔群出土石塔㉑［宝塔片3］(S=1/10)

【石塔群Ｂ出土その他遺物［第83図ー247～251］】いずれも六地蔵幢の西側背後で，折り重なるように検出された。247は石碑である。頂部三角形に２本頂上線をもつ。肉眼では墨書や刻書は認められない。248・249は下部が欠損しているが相輪である。250は断面長楕円形の扁平形空風輪である。251は平面方形の地輪と考えられるが，中央部付近に一辺約３cmの方形孔がある。



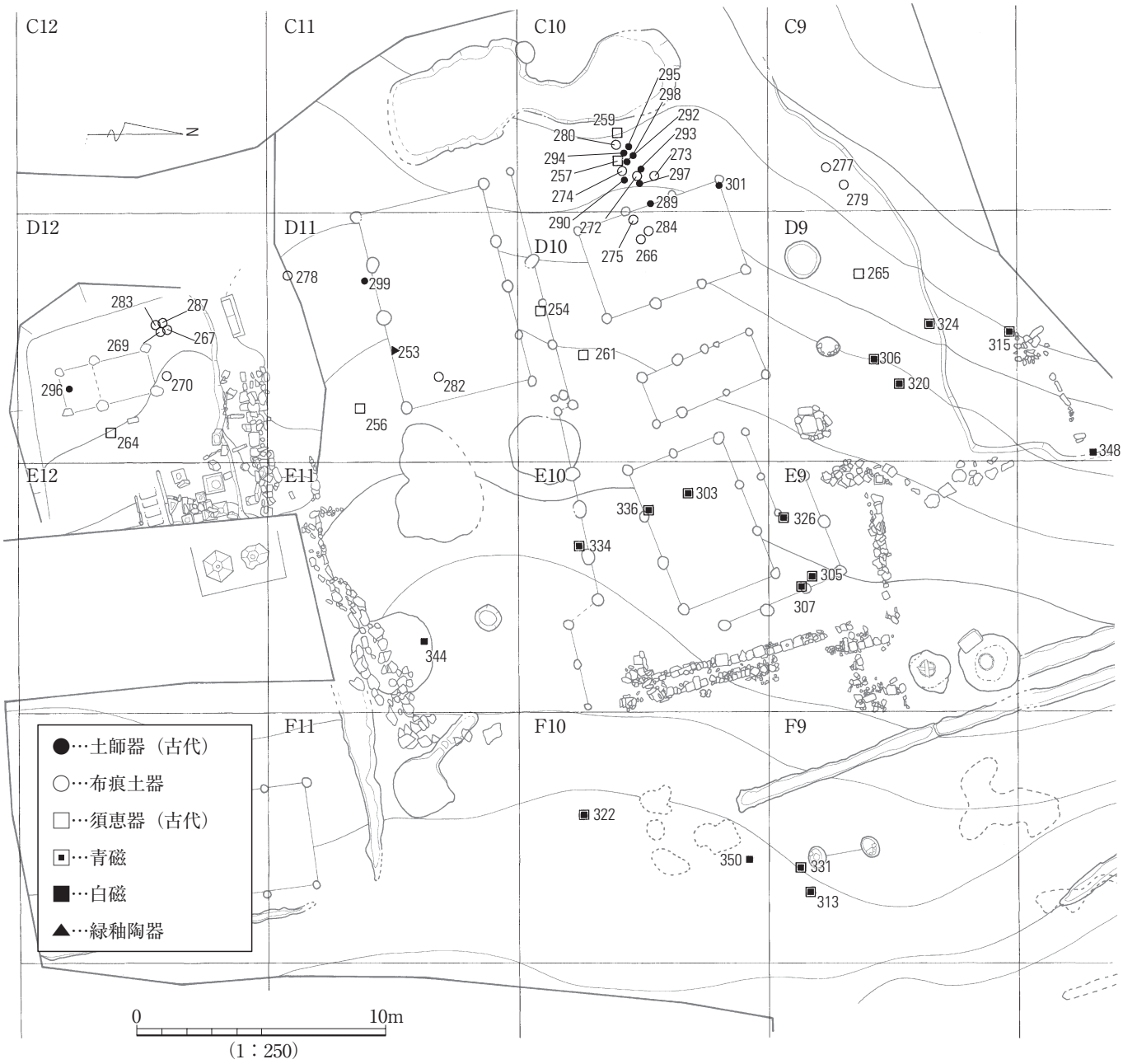
第83図　石塔群出土石塔㉒［石塔群Ｂ］(S=1/10)

第６節　遺構外出土の遺物（第84図～第111図・252～586）

遺構以外から多くの遺物が出土した。ここでは，第Ⅰ層～第Ⅱ層の表土・耕作土や第Ⅲ層～第Ⅴ層の包含層出土遺物，遺構内出土ではあるが遺構の構築年代と著しく異なる遺物，遺構内出土であるが埋土上部で流れ込みと考えられる遺物などを遺構以外出土遺物として扱う。出土した遺物は，弥生土器から近世までの土器・陶磁器・石器など多種多様ににわたる。ここでは，およそ年代順に出土した遺物の特徴を記す。

１．弥生時代～中世の遺物

【分布状況】弥生時代から中世にかけての遺物は，第84図に示すようにＡ区を中心に出土した。特に古代から中世にかけての遺物はＡ区西側とＣ区に集中する。さらに器種別にみると，古代に属する土師器（布痕土器を含む）は３号掘立柱建物跡（SB３）と分布の重なるC10とD10グリッドの中間地点に極端に集中する場所があることから，ここに住居跡など何らかの遺構が存在していた可能性が考えられる。また，中世に属する青磁は，極端な集中箇所は存在しないが，Ａ区中央部のD９・E９・E10・E11グリッドに集中する。



第84図　古代～中世遺構外出土遺物分布状況図（S＝1/250）

（１）弥生時代～古代の遺物（第85図－252～265）

252は弥生土器の高坏の脚部である。下方に透かし穴が確認できる。253は緑釉陶器椀片である。体部がゆるやかに立ち上がり，口縁部付近でわずかに外反する。254～265は須恵器である。254は坏の蓋部片である。推定口径10.6cmで，器高の低いプロポーションである。TK43期前後頃（６世紀末葉頃）に比定できるか。255・256は須恵器の甕片で，双方とも４～５mmと器壁は薄く，外面が格子状タタキ，内面が同心円状の当て具痕を有する。古墳時代終末期～古代に比定されるか。257～263は古代頃の須恵器甕である。260・261・262は胴部片であり，外面に格子状タタキを有する。260・261の内面は当て具の凹凸痕はあるが，明瞭でなくタタキの後にナデを施した可能性がある。257・258の外面は平行タタキを施している。259は外面に不定方向で交叉させた平行タタキを施す。内面は当て具痕が確認できるが，同心円状の当て具ではなく，同心弧状の当て具を用いていると考えられる。263は甕の底部である。外面に格子状タタキを施し，内面に平行状の当て具痕が確認できる。また，外面に他の須恵器片が２枚（１枚は外面，もう１枚は内面）が釉着している。264・265は壺である。264は口縁部であり，外面の口縁部と頸部の屈曲付近に工具による波状の沈線がある。265は壺の口縁部付近から頸部にかけての部分であり，くびれた頸部にＳ字状の飾耳が付く。

（２）古代の遺物（第86図～第87－266～301）

【①土師器】一部遺構から出土したものを除いて，主に第Ⅴ層中から出土した。時期は９世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。

［坏・椀（第86図－266～288）］数量は多くはないが，底部形態にいくつかパターンが存在するので大きく３つに分類する。

椀Ⅰ類…脚状の高台を有する高台椀タイプ（266～271）。高台内面はナデなどによって比較的丁寧な調整を施している。脚部の形態によって，緩やかに外反する高台（Ａ：SL１出土181・267・268・270），直線的に伸びる高台（Ｂ：266），緩やかに内湾気味に伸びる高台（Ｃ：SL１出土180・269）の３つに細分される。

坏Ⅰ類…円盤状の高台を有するタイプ（272～274）。底部は椀Ⅰ類同様，ナデなどによって比較的丁寧な調整を施している。272は，口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がり，体部のナデ単位が比較的明瞭である。

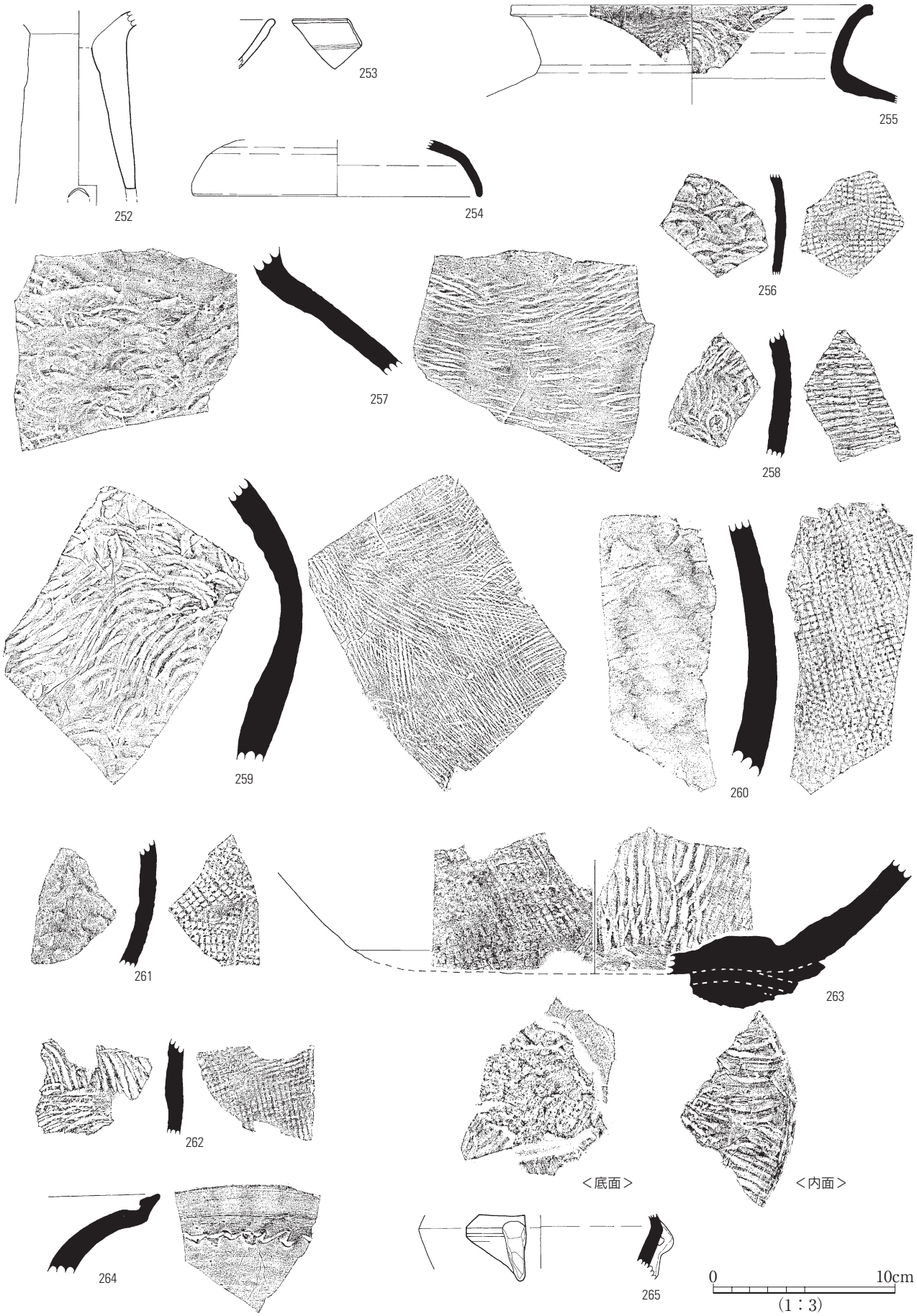
坏Ⅱ類…高台を有しない平底タイプ（275～288）。本遺跡では主流の形態である。275・276を除いて体部のナデ単位が不明瞭なものが多い。また，体部が直線的に立ち上がるもの（Ａ：275～278，280～282），内湾しながら立ち上がるもの（279・283～288）の２分類に細分される。風化著しく不明瞭なものが多いが，底部はヘラ切り痕が明瞭に残るもの（275･276･288），ナデなどによって比較的丁寧な調整を施しているもの（280･281）がある。

［布痕土器（第87図－289～301）］細片の状態で約90点出土した。全点包含層からの出土である。このうち形態が推測できる13点を図化した（第87図－289～301）。口縁端部を整形し，外面はナデと指押さえ，内面は布目痕，底部は尖底で，緩やかに内湾しながら立ち上がる逆円錐形を呈する。推定口径は8.6～13.1cmであるが，10～12cmぐらいのものが多い。完形がわかるものは無いが，器高は９～10cm前後と推測できる。器壁は1.0～1.3cm程の厚いものが多い。胎土は，橙色（Hue-5YR6/6周辺）で，１～５㎜前後の赤系・橙系土粒を多量に含む脆弱な土質である。主に口縁端部の形態によって大きくⅠ～Ⅲ類の３つに分類する。

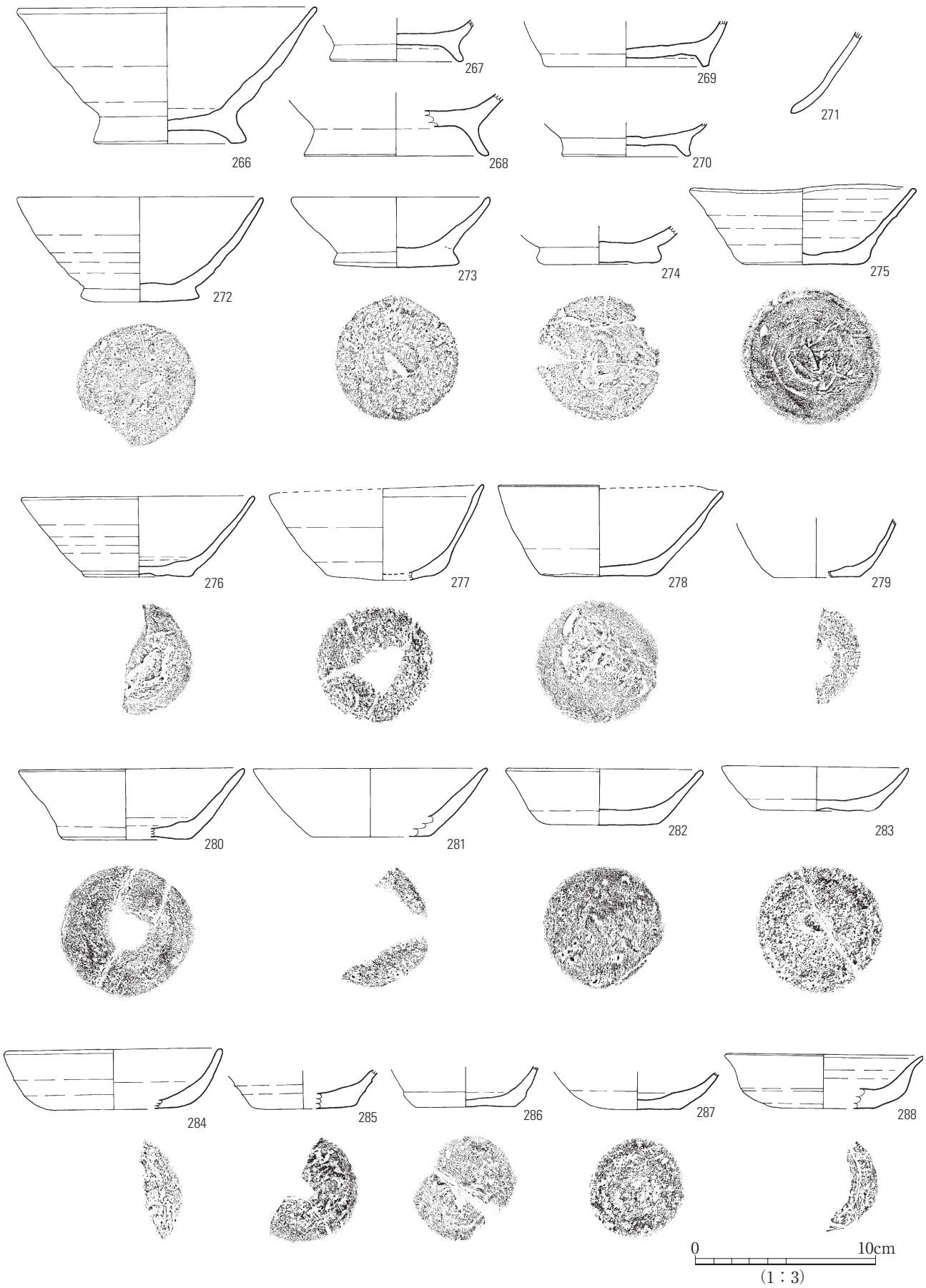
Ⅰ類…口縁部は肥厚させずに断面三角形に尖らせ，体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる（289）。

Ⅱ類…口縁端部を体部と直交もしくは鋭角になるよう整形し，口縁部下に稜線を形成する。体部と口縁部の厚さはほぼ等しい。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がるもの（ⅡＡ類：290～295）直線的に立ち上がるもの（ⅡＢ類：296～298）がある。

Ⅲ類…口縁部はⅡ類のように鋭角になるよう整形しているが，緩やかな整形である。299は他と異なり器壁が0.5cmと薄い。胎土は他と同じく１～５mm前後の赤系・橙系土粒を含むが，少量でその他２mm前後の灰色系土粒を含む。



第85図　遺構外出土遺物①［弥生～古代：弥生土器・須恵器］(S=1/3)



第86図　遺構外出土遺物②［古代：土師器］(S=1/3)

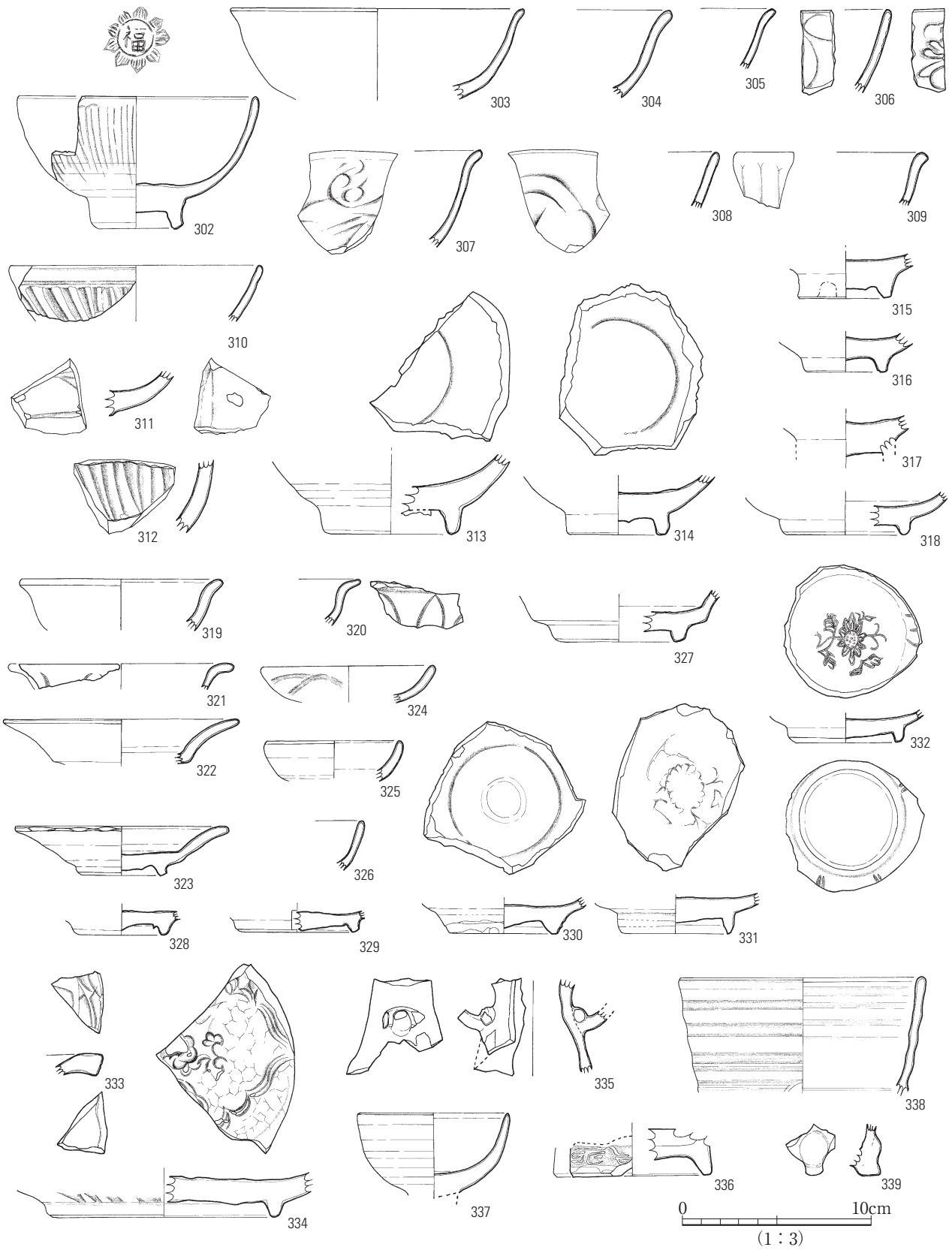
第87図　遺構外出土遺物③［古代：布痕土器］(S=1/3)

（3）中世の遺物（第88図～第93図－302～384）

【①青磁（第88図－302～339）】一部遺構から出土したものを除いて，主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。遺構出土のものは溝状遺構からの出土である。近世～近代の溝状遺構に混入したものもあるが，中世遺物のみを伴う溝状遺構からも検出されている。時期は13世紀～15世紀頃と考えられる。

碗（第88図－302～318）302は，外面が細線による退化した蓮弁文，内面見込に「福」の銘をもつ。303～305は内外面無文で，外反する口縁部をもつ。14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。306は内湾しながら立ち上がる口縁部，307は外反する口縁部で，両者とも内外面に劃花文をもつ。13世紀後半～14世紀初頭頃と考えられる。308・310は外面に鎬のない蓮弁文を有する。310は丸彫りによる表現である。311・312は胴部細片である。311は，内面に劃花文らしき文様が，外面に釉着があり不明であるが蓮弁文がうかがえる。312は細片で詳細不明であるが，内面に丸彫りの退化型蓮弁文が確認できる。313～318は底部である。313～314，317は高台内の釉を削りとっており，313は露胎部と施釉部の境界が赤色に変色している。315は高台外面の一部から高台内まで，316は畳付部分のみ無釉である。318は見込部わずかながら印花文らしき痕跡が確認できる。高台部は角高台に全面施釉した後に輪状に削り取っている。

坏・皿・浅形碗（第88図－319～332）全体のプロポーションがわかるものが少なく，「坏」「皿」「浅形碗」に区別できないものが多くある。ここでは,碗より浅形のものを一括して扱う。319～321は外反する坏の口縁部である。320・321は外面に鎬のない蓮弁文がある。322・323は腰部で大きく屈曲する坏である。323は口縁部に輪花を有し，見込が円形に無釉である。高台は外端をわずかに開く角高台で，畳付部のみ釉を剥ぎ取っている。324～326は皿の口縁部である。324は風化しているが，外面にうっすらと退化した蓮華文と考えられる波形文様が確認できる。327～332は高台をもつ底部である。327は腰部で大きく屈曲する坏の底部で，高台内のみが無釉である。



第88図　遺構外出土遺物④［中世：龍泉窯系青磁］(S=1/3)

328・329は見込部が円形の無釉，低めの角高台に高台内側が無釉，高台内側の刳り方は凸状である。330は見込部に圏線，高台外端を面取りしており，畳付部と高台内側が無釉，高台内側の刳り方は凸状である。331は坏の底部で，見込部に印花文，高台外端を面取りし，高台外面まで施釉している。332は外面が２本の縦線で５分割し，

内面見込部に印花文，内面に詳細不明蓮弁文を施す。底部は全体施釉後輪状に削り取っている。無釉部と施釉部の境界が赤色に変色している。

盤（第88図－333～334）333は口縁部である。口縁部付近で大きく屈曲し，外反している。大きく口縁帯内側には不明瞭であるが，飛雲文のような文様が認められる，334は底部である。復元推定の底部径は12.3cmと大きい。外面には詳細不明の蓮弁文が，内面見込部には蜂の巣のような幾何学文と中心部に劃花文が描かれている。底部は全体施釉後輪状に掻き取っており，無釉部と施釉部の境界が赤色に変色している。

瓶（第88図－335～336）335は双耳壺の頸部付近と考えられる。大部分が欠損しているが，耳部と遊環が釉着しているのがわかる。336は瓶の底部である。復元推定の底径は8.4cmで，底部外面に雷文帯をもつ。全体施釉後畳付部の釉を掻き取り，境界部分が赤褐色化している。また，内部の底部に釉が溜まった痕跡がある。336の年代推定は困難であるが，釉の状況などから13～14世紀代と考えられる。

脚付き坏（第88図－337）337は坏部のみの検出である。やや深めの坏部の下部に屈曲部分があり，ここに脚部が付属していたと考えられる。この種類の脚付き坏は馬上坏として呼称されることが多い。

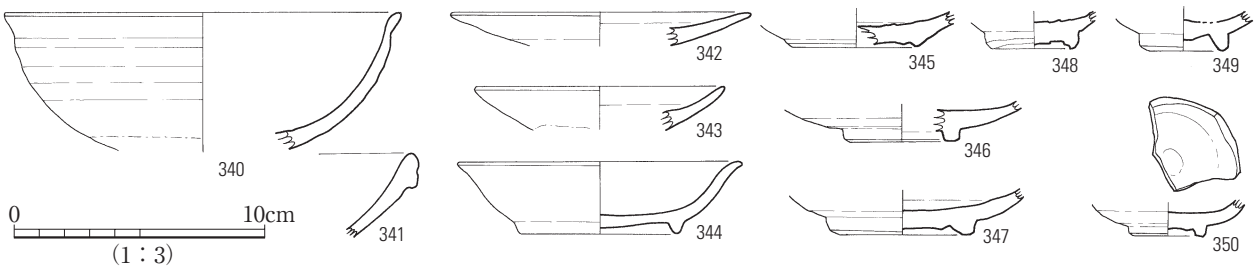
香炉（第88図－338～339）338は口縁部～体部片である。器壁は，主に外面からの回転ケズリによって，薄い波板状となっている。下部には脚の痕跡らしきものがうかがえる。339は脚部である。胎土・釉・製作技法などから338と339は同一個体と考えられる。

青磁は細片で年代比定の困難なものが多いが，305・306・312・331・332・333は13世紀中頃～14世紀初頭頃（大宰府分類青磁Ⅲ類の併行期頃：大宰府Ｆ期），303・304・315・317・319・320・322・327～330は14世紀初頭～14世紀後半頃（大宰府分類青磁Ⅳ類の併行期頃：大宰府Ｇ期），302・307・309は15世紀前半以降（大宰府分類青磁Ⅳ類期以降）頃に比定できると考えられる。

【②白磁（第89図－340～350）】明らかに近世～近代の遺構に混入したものを除いて，主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。福建・広東系の粗製の皿または坏が多い特徴がある。時期は，細片が多く比定に困難なものが多いが，主に14世紀～16世紀頃と考えられる。中には古代に比定されるような白磁も含まれるが，ここでは一括して扱う。分類及び編年基準は大宰府分類，森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」（森田分類），新垣力・瀬戸哲也「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究３』2005（沖縄分類），田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁」『博多研究会誌 第11号』(田中分類)を参考としている。

碗（第89図－340～341）340は，外反する口縁部下を薄くしており，丸みのある体部に回転篦ケズリを施している。内面は滑らかに成形し，見込部には圏線を施している。釉は体部下半までかかっている。沖縄分類Ｂ類・田中分類J-2類（14世紀後半～15世紀初頭頃）と考えられる。341は口縁部を折り重ねることによって肥厚させ，玉縁状としている。大宰府分類Ⅳ類（11世紀後半～12世紀後半頃）に属すると考えられる。

坏・皿・浅形碗（第89図－342～350）344は外反する口縁をもつ薄手の皿である。畳付部以外に釉を施してあり，小形高台をもつ。高台内の釉は薄く工具等で平滑に伸ばしているようである。景徳鎮系で森田分類Ｅ群（16世紀代）と考えられる。342・343は大きく外側に開く皿の口縁部である。両方とも口縁部付近のみの施釉である。345は碁笥底気味であるが，少し高台も意識したような印象も受ける。内外面ともわずかに上部のみに釉が確認できることから，342・343のような口縁部をもつ皿の底部と考えられる。体部下半の底部付近にはカンナ目のようなケズリ痕が確認できる。346は見込部が円形釉剥ぎ，高台付近は露胎，高台外面を斜めに削りだしたタイプである。342・343・345・347は体部が大きく開き，見込部を釉剥ぎするタイプで，沖縄分類Ｆ類（14世紀後半～16世紀代）と考えられる。346・348・350は，高台外部を斜めに削り取った皿や坏の底部片であり，外面下半部が無釉で回転ヘラ削り痕跡が残っている。沖縄分類Ｄ類・森田分類Ｄ群（14世紀後半～16世紀前半頃）と考えられる。349は見込蛇の目釉剥ぎを行っている。350は高台内の中心部を菊花状に抉って凸部を減じている。

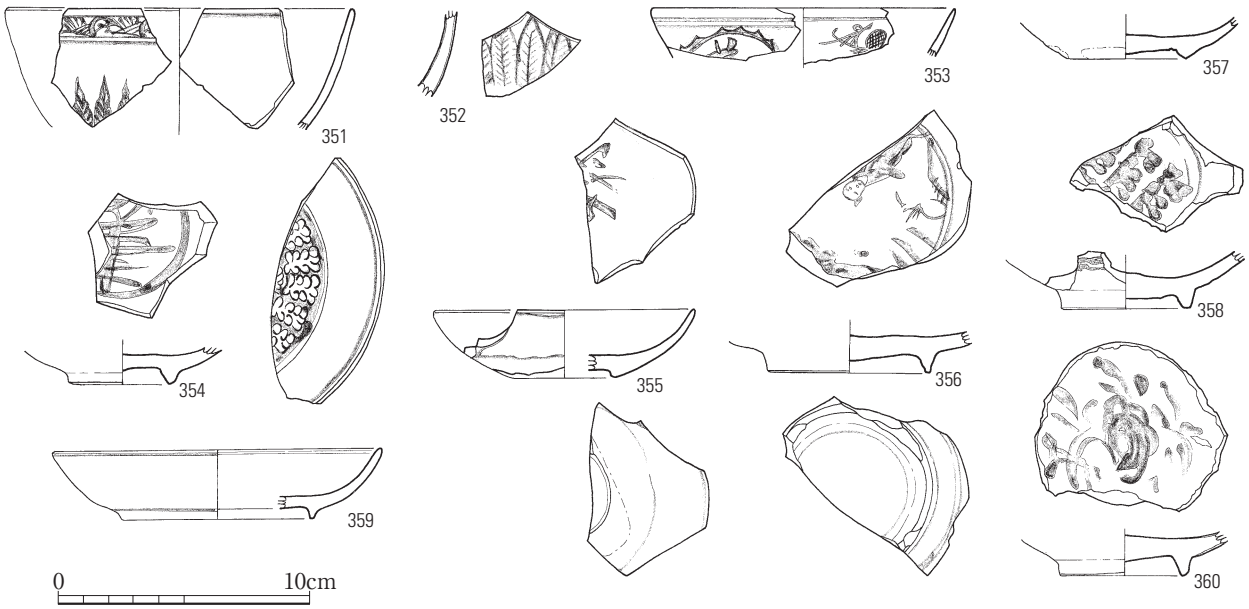


第89図　遺構外出土遺物⑤［中世：白磁］(S=1/3)

【③青花［染付］（第90図～第91図－351～367）】 4号溝状遺構（ＳＥ４）と明らかに近世～近代の遺構に混入したものを除いて，主に第Ⅲ～Ⅳ層中から出土した。細片が多く時期比定に困難なものが多いが主に14世紀～17世紀頃と考えられる。一部近世の範疇にも入るが，一括して扱う。器種は碗が少なく皿が中心となる。分類及び編年基準は，1982小野正敏「15､16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究No.２』（小野分類）を参考としている。

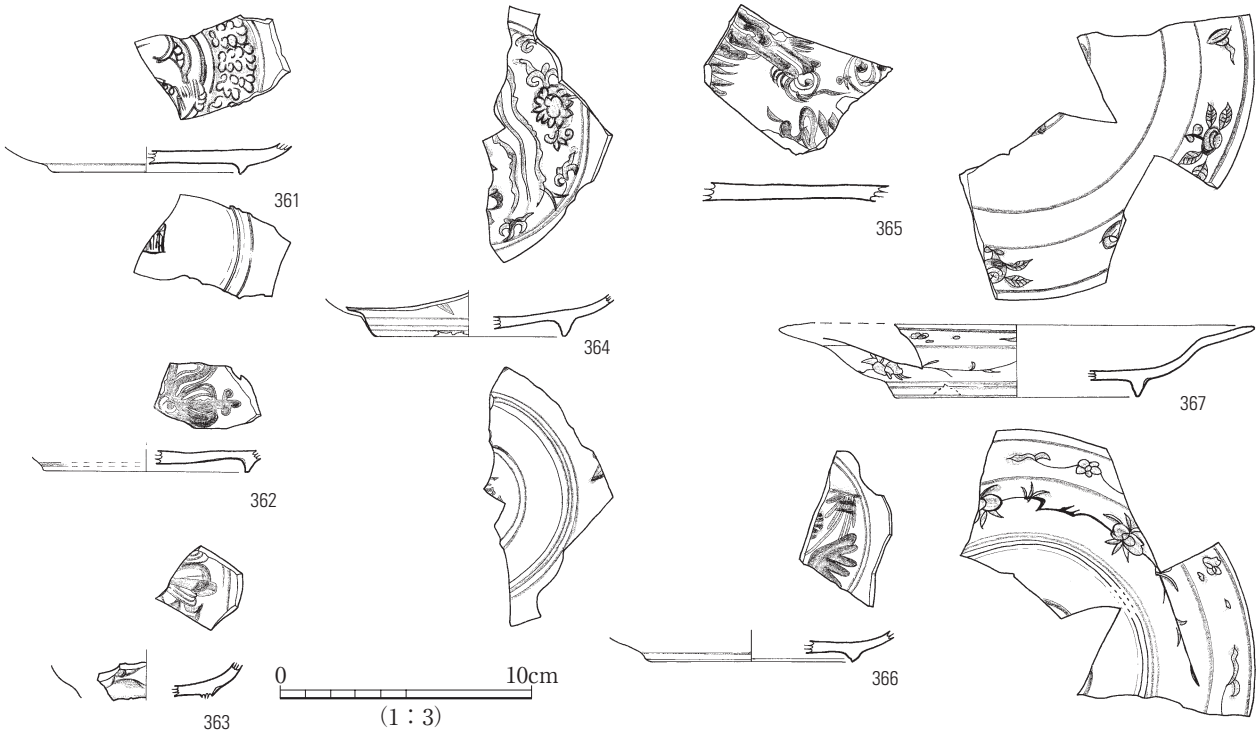
碗（第90図－351～353，355，358）351・352は体部外面に芭蕉文をもつ。器形は「蓮子碗」のタイプである。351は口縁部外面に波濤文帯，口縁部内面に圏線をもつ小野分類碗Ｃ群Ｉ類（15世紀後半～16世紀前半）に入ると考えられる。353は外面に文字を，内面に漁をする人が描かれている。355は見込に丸に「寿」を書いており，高台内は畳付部から露胎である。358は陶胎の粗製タイプであり，見込に染色体のような幾何学文をもち，高台内は畳付部から露胎である。

皿（第90図・第91図－354,356,357,359～367）355・357は碁笥底の小野分類皿Ｃ群（15世紀後半～16世紀前半）と考えられる。355は緩やかに内湾しながら立ち上がる器形を呈する。内面見込に「寿」もしくは「宝寿」らしき吉祥字を書いている。357は黄味がかった釉が体部下半までかかっていて，底部付近は回転篦ケズリ痕跡を残したままである。356は底部片であり，見込は圏線に囲まれた山水人物図が，外面は腰部に圏線，高台内に圏線がある。畳付部だけが無釉で，赤化した上に砂の付着が確認できる。おそらく小野分類皿Ｅ群ＸＩ類（16世紀後半～17世紀初頭）に入ると考えられる。360は見込に花卉文を，畳付部のみが無釉である。漳州窯産の可能性がある。359･361は同一個体の可能性がある。内湾しながら立ち上がる器形で，見込に獅子が描かれている。高台付底部で，畳付部は無釉である。361の高台内には四角で囲んだ文字が確認できるが，判読不能である。小野分類皿Ｅ群Ｘ



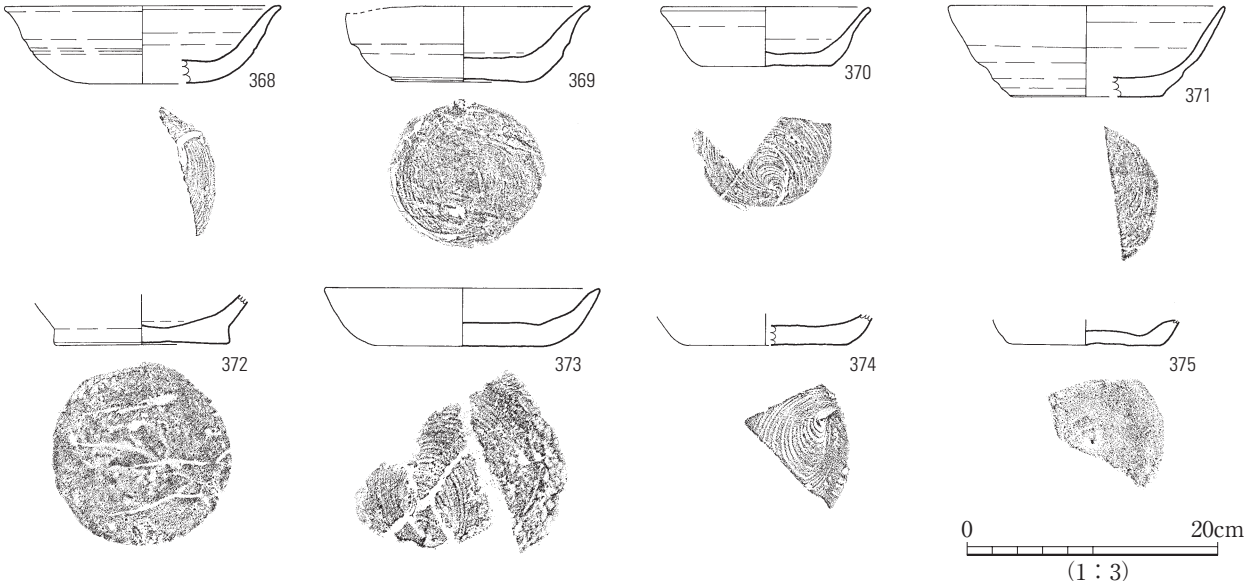
第90図　遺構外出土遺物⑥［中世：青花染付①］(S=1/3)

Ⅱ類（16世紀後半～17世紀初頭）と考えられる。362・363は細片であるが，畳付部のみが無釉で，見込に十字花文を描いている。363は外面に牡丹唐草らしき文様が確認できる。小野分類Ⅲ B 群Ⅵ類（15世紀後半～16世紀前半）に入ると考えられる。364～367は，薄手で，内湾しながら立ち上がるが一度胴部中位で大きく屈曲する器形の「つば皿」の部類である。共通点は，内傾する高台，高台外側に界線，畳付部が無釉で拭き取りか砂が付着しているものがある。小野分類Ⅲ F 群（16世紀後半以降）に入ると考えられる。



第91図　遺構外出土遺物⑦［中世：青花染付②］(S=1/3)

【④土師器（第92図－368～375）】中世に時期比定できる土師器片は 8 点図化した。うち 1 点（373）が近世に属する遺構と考えられるSZ 5 から，3 点（368，371，372）がピット中の埋土から出土した。8 点のうち回転糸切りによる底部切り離しは 6 点（368～371,373～374），回転ヘラ切りによる底部切り離しは 1 点（372），不明 1 点（375）である。368･369は坏であり，厚手の底部から緩やかに内湾するように立ち上がり，口縁部で外反する器形をもつ。369は外面全体及び内面底部が著しく黒変している。371はやや内湾しながら直立気味に立ち上がる坏で，外面には凹凸著しいヘラ削りの痕跡が確認できる。372は坏である。風化し不明瞭であるがヘラ切りによる底部切り離しと

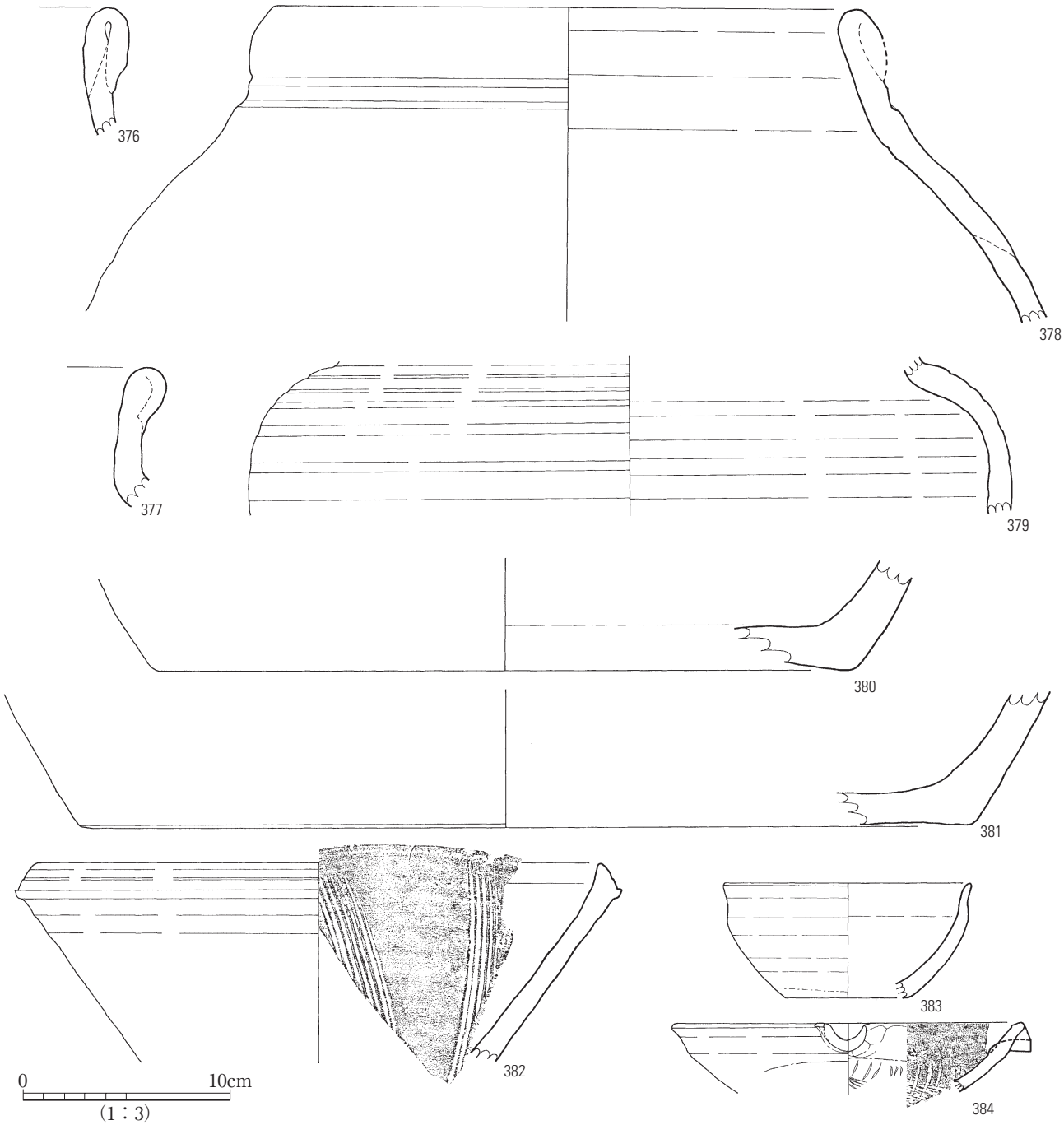


第92図　遺構外出土遺物⑧［中世：土師器］(S=1/3)

考えられる。また，底部には４条の条線がある。他の回転糸切りの底部をもつものに比べて時期的に古く，中世の早い段階に位置づけされそうである。373～374は皿である。375は風化著しく，全体の調整や形態が不明である。底部の切り離し方法も確認できない。器形はおそらく皿であろう。

【⑤陶器】

（ａ）備前系陶器（第93図－376～382）出土したものを８点図化した。内訳は４号井戸跡（SF４）出土１点（66），遺構外出土７点（376～382）である。376～381は甕である。376～378は,直立または内傾気味の口縁部を折り曲げ，玉縁状に肥厚させる口縁部をもつ。間壁編年（間壁忠彦1991『備前焼』ニューサイエンス社）の第Ⅳ期（主に15世紀代）の特徴をもち，この時期に比定できる。378は外面に灰黄色～オリーブ黒色系の自然釉が口縁部から胴部上半にかけてかかっている。380～381は底部である。断定はできないが，胎土や焼成状況から考えて備前系甕の底部と判断



第93図　遺構外出土遺物⑨［中世：備前系・瀬戸美濃系陶器］(S=1/3)

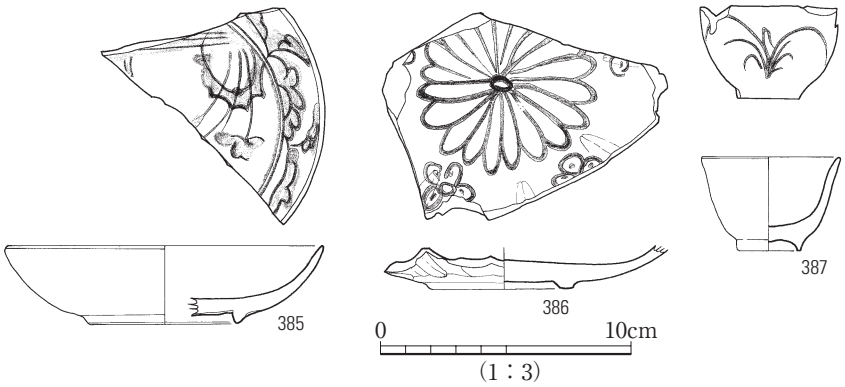
した。382は擂鉢である。放射状にひろがる７条１単位の擂目をもつ。口縁部は，上部を少し立ち上げ，下部を摘み出すことによって器壁よりも少し厚い口縁帯を作っている。口縁帯には条線はもたないが，わずかにナデによって調整を施している。間壁編年を参考にすると，376～381の甕同様，第Ⅳ期に時期比定できるのではなかろうか。

（ｂ）瀬戸・美濃系陶器（第93図－383～384）遺跡からは４点出土した。内訳は遺構から３点（SZ６[第93図－383]・ＳＥ４[第57図－185]・石列Ａ[第23図－44]），包含層から１点（384）である。遺構出土３点のうちSZ６出土（383）は遺構年代と大きな開きがあると考えられるので，ここで扱う。383は天目茶碗である。口縁はＳ字形にくびれ，内外面に鉄釉を施す。胴部下部は無釉である。底部が欠損しており，詳細は不明であるが，14世紀後半から15世紀代と考えられる。384は瀬戸の卸皿である。外面の口縁部から体部上半には緑釉が施され，内面の体部下半部には縦位の，底部付近は横方向の卸目が施されている。15世紀代と考えられる。

（４）近世の遺物（第94図～第108図－385～554）

【①初期伊万里系磁器（第94図－385～387）】

遺跡からは５点出土した。そのうち４点の図化を行った。４点の内，１点が石列Ａ区内出土（第23図－45），3点が遺構外出土（385～387）である。385・386は皿である。386は見込部に菊花文をもつ菊花形皿である。385・386はいずれも底厚な器形で，畳付部に砂が付着し，器面にはフリモノが付着している。387は小杯である。底部は外面の約半分まで施釉してあり，高台内や畳付部は無釉である。外面には緑色の草文が確認されるとともに，わずかに青色の文様が確認できる。



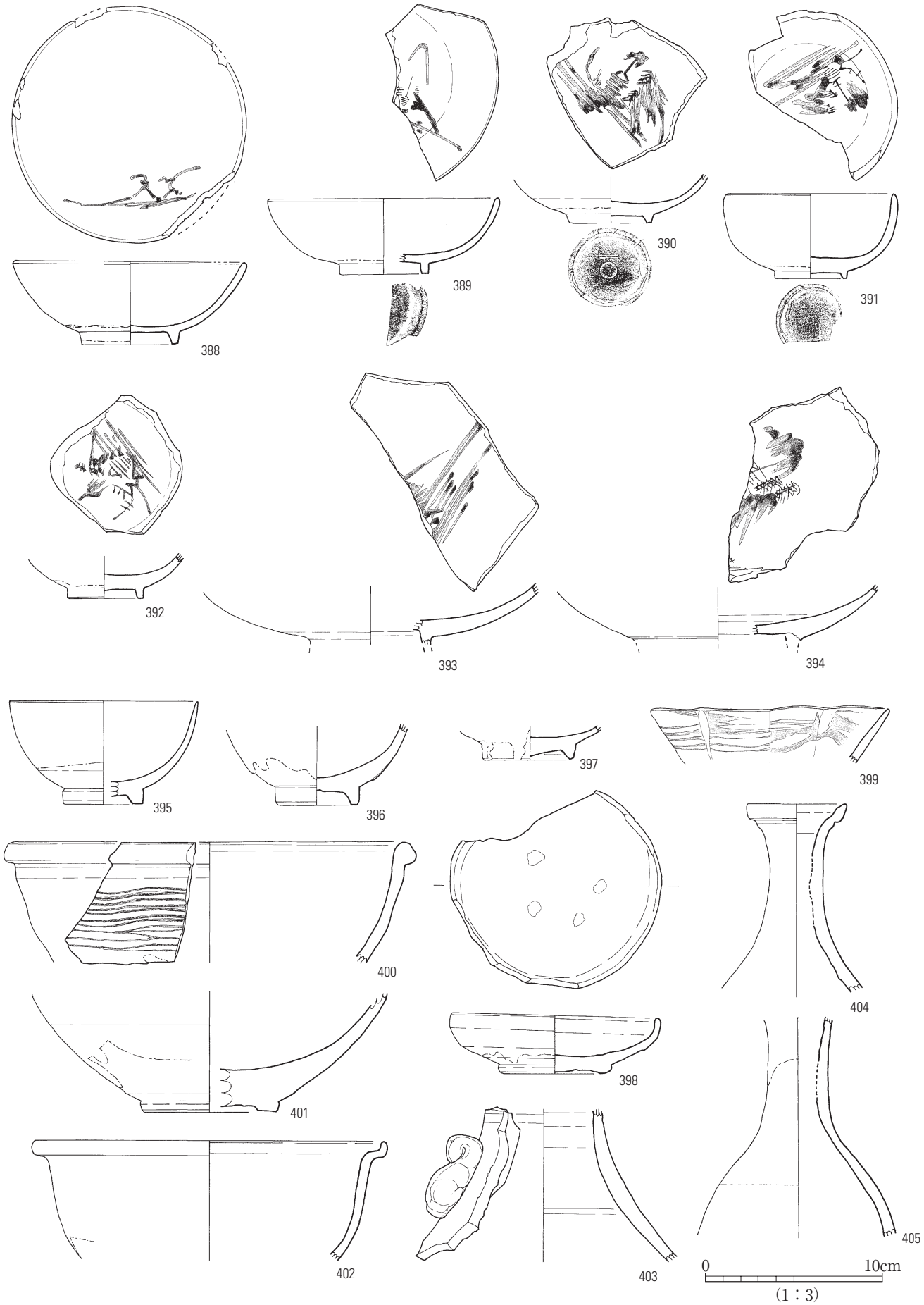
第94図　遺構外出土遺物⑩［近世：初期伊万里系磁器］(S=1/3)

【②京焼風唐津系陶器（第95図－388～394）】

図化した８点のうち，遺構出土は１点（SZ６：１点），遺構外出土７点（第95図－388～394）である。17世紀後半頃に時期比定できる。388～392は碗である。いずれも底部は畳付部分を平坦に削り，高台内を平滑に仕上げている。見込部には錆絵風の山水文や竹林文が描かれている。388は底部付近に鉄釉を施して後，内外面の施釉を行っている。畳付部のみ無釉である。389・390は高台内にわずかに印銘が確認できるが，判読できない。391は高台内に「清水」の印銘が確認できる。393・394は皿である。いずれも高台部分が欠損しているため底部の調整は不明であるが，いずれも高台内の施釉が確認できる。

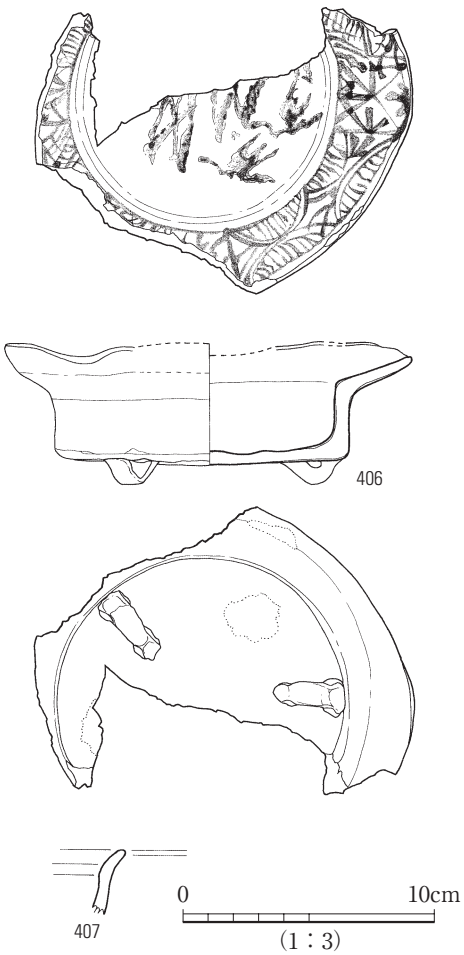
【③唐津系陶器（第95図－395～405）】

図化した18点のうち，７点が遺構出土（ＳＥ４：２点，SF４：１点，SZ２：１点，SZ６：３点），11点が遺構外出土（第95図－395～405）である。395～397は碗である。395は内面全面に灰オリーブ色の，外面に青緑色釉をかけている。体部下半から底部にかけては露胎である。396は内面灰オリーブ色，外面緑銅色に釉をかけわけている。体部下1/3から底部にかけて露胎である。SZ２出土の144と類似している。いずれも内野山北窯産の可能性があり，17世紀後半から18世紀前半頃に時期比定される。397は淡黄白色の施釉が施してあり，底部付近は露胎である。底部は畳付部分を平坦に削っているが，高台内は兜巾底気味に仕上げている。京焼風陶器にも見える。398は皿である。



第95図　遺構外出土遺物⑪［近世：唐津系陶器］(S=1/3)

内外面灰色施釉，底部は低い高台で，ヘラ切りのようである。見込部に４つの胎土目積みをもつ。外面および見込部に液体などの跡か鉄銹色の付着物をもつ。16世紀末葉頃と考えられる。399は稜花形の鉢（向付）である。白化粧土を刷毛塗りしている。18世紀代か。400･401は鉢である。400は口縁部を肥厚させた口縁帯を有し，内外面に白化粧土を刷毛塗りしている。18世紀前半頃と考えられる。401は内面と外面は体部の途中まで褐色釉を施している。底部は低めの器台で，畳付部と高台内を削り，平滑に仕上げている。402は土鍋である。上半部のみ施釉している。関西系の可能性もある。403～405は瓶である。403は鉄釉を施す。頸部にＳ字状の把手をもつ。花生と考えられる。404・405は瓶であるが，形態から徳利と考えられる。いずれも17世紀代と考えられる。



第96図　遺構外出土遺物⑫
［近世：瀬戸美濃系陶器］(S=1/3)

【④瀬戸・美濃系陶器（第96図－406～407）】

瀬戸・美濃系と考えられる陶器は２点出土した。いずれもＡ区の遺構外出土である。406は１号掘立柱建物跡（SB１）近くで出土した輪花鉢（向付）である。おそらく志野と考えられる。全体の約2/5が出土しており，全体のプロポーションがおよそ推定できる。底部は紐状のものをアーチ状に貼り付けた脚台を３分割にした箇所に取り付けている。器形は体部上部で大きく外側に開く。見込部に竹林文，大きく開いた内側口縁帯に幾何学文を鉄釉で描いている。その上から灰透明色のおそらく長石釉をかけている。いわゆる絵志野の類と考えられる。時期は16世紀末～17世紀初頭頃か。407は口縁部である。細片であるため詳細は不明であるが，釉調や胎土が406と酷似しているため列記する。

【⑤肥前系磁器（第97図～第102図－408～488）】

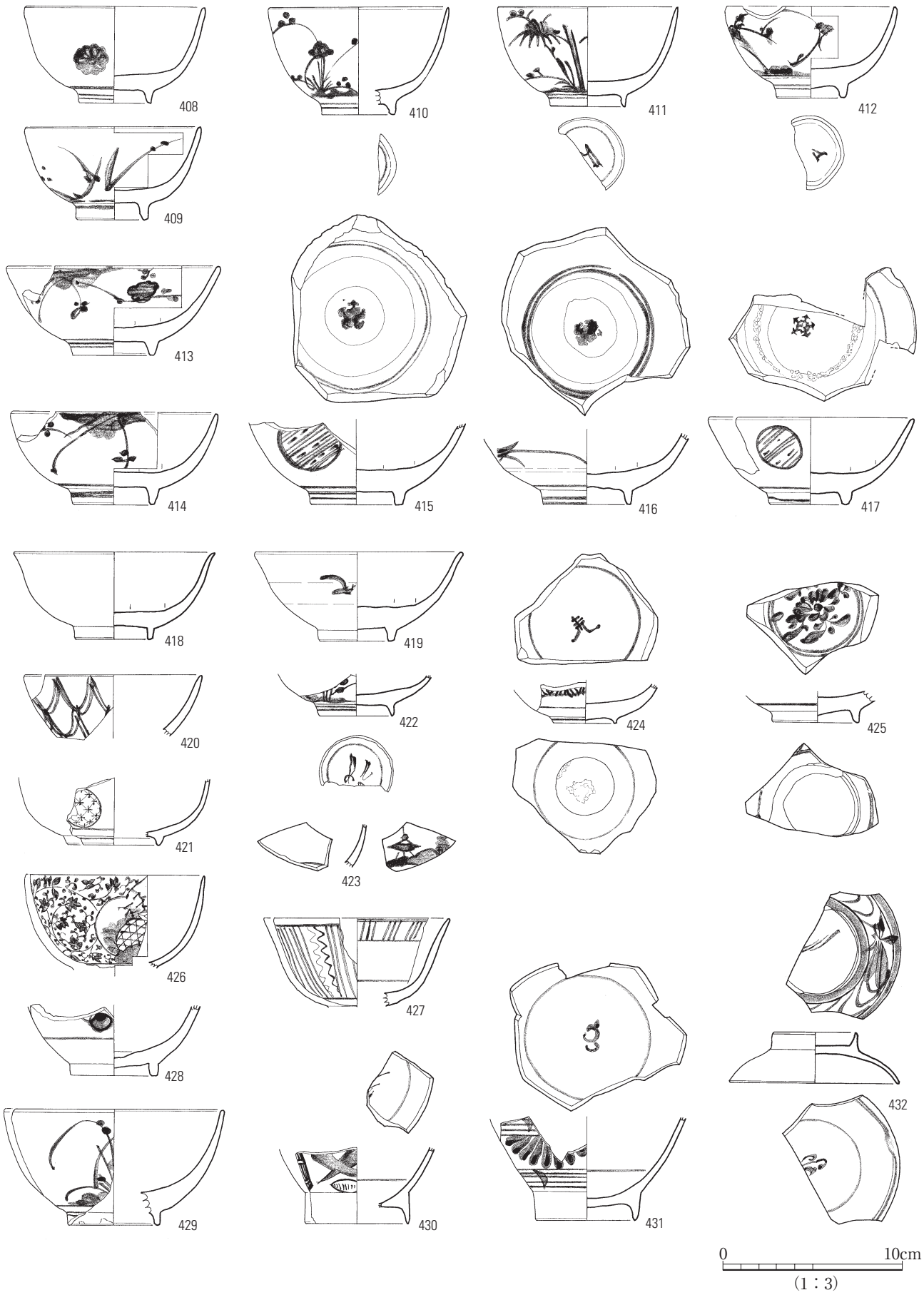
肥前系と考えられる磁器は本遺跡出土遺物の中でも中心的存在であり，多数出土した。ここでは，器種別を中分類の基礎とした上で記述を行う。中には肥前に産地を求めることが困難で，断定できないものも多く存在するが，産地不明の染付磁器も「肥前系」としてここで取り扱うこととする。

（Ａ）碗（第97図～第99図－408～446）…碗は器形によってさらに細分する。

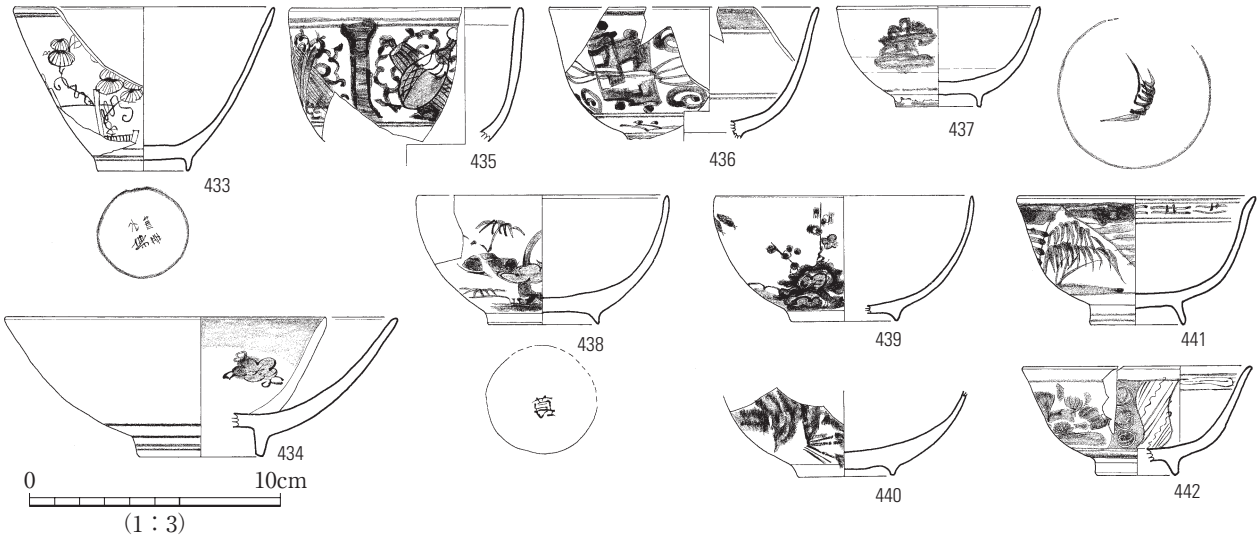
碗Ⅰ類…丸形碗ａ（408～412,420）：丸みをおびながら立ち上がる器形をもつ。粗製のいわゆる「くらわんか碗」。主に18世紀後半頃に属する。図化していない破片などをあわせると20～30個体分出土している。コンニャク印判による菊花文（408）,草花文や竹林文（409～412）,二重網目文（420）を施すものがある。

碗Ⅱ類…丸形碗ｂ（413～417）：碗Ⅰ類と似ているが，口縁は，口径がやや大きく，丸みを帯びているが碗Ⅰ類ほどでなく，やや開き気味に立ち上がる。見込部は蛇の目釉剥ぎである。主に18世紀後半頃に属する。図化していない破片などをあわせると20個体前後分出土している。415～417は見込部に五弁花のコンニャク印判を施している。文様には多様性があり，梅樹文（413・414）・丸文（415・417）・草文（416）などがある。

碗Ⅲ類…丸形碗ｃ（421～426，428～429）：部分的な細片であるため，分類が困難なものを一括して扱う。421は外面に籠目文をもつ。器形は碗Ⅰ類に似ているが，薄手で胎土が陶質のようである。422は高台内に文字を崩したような文様が描かれている。崩された「大明年製」の可能性がある。423は薄手で外面に東屋山水文が確認できる。424は見込部に寿文字文を施す。18世紀後半頃か。426は薄手で，丸みを持ちながら立ち上がる器形で，



第97図　遺構外出土遺物⑬［近世：肥前系磁器①］(S=1/3)



第98図　遺構外出土遺物⑭［近世：肥前系磁器②］(S=1/3)

外面に花唐草文と丸文の組み合わせの文様を施す。17世紀後半頃と考えられる。428は内面見込部が他と異なり平坦ではなく凹状となっている。429は器形が碗Ⅰ類で，碗Ⅱ類のように蛇の目釉剥ぎをもつ。文様もくらわんか碗に多い雪輪梅花文と考えられる。18世紀後半頃と考えられる。

碗Ⅳ類…端反碗（418・419・427）：口縁部形は丸みを帯びながら立ち上がるが，口縁端部付近で外反する。18世紀末葉頃から19世紀前半頃に属する。SZ１で３点出土している（第39図－76～78）。遺構外での出土数は少ない。蛇の目釉剥ぎをもつもの（418・419）がある。427は外面によろけ縞文を施す。

碗Ⅴ類…広東碗（430～432）：薄手で底部から口縁部にかけて直線的に開く器形をもつ。高台は高く径が大きい。18世紀末葉頃から19世紀中頃に属する。432は蓋部である。

碗Ⅵ類…朝顔形碗（433）：薄手で，底部で大きく屈曲し，開きながら直線的に立ち上がる器形をもつ。433は外面に朝顔文，底部高台内に「宣明年製」の銘款がある。17世紀後半頃と考えられる。

碗Ⅶ類…大形碗（434）：434の口径は，他の碗の口径が10cm前後に比べて，15.5cmと大きい。器高に対して口径が大きく，底部から口縁部にかけて大きく開く器形をもつ。うがい茶碗と考えられる。

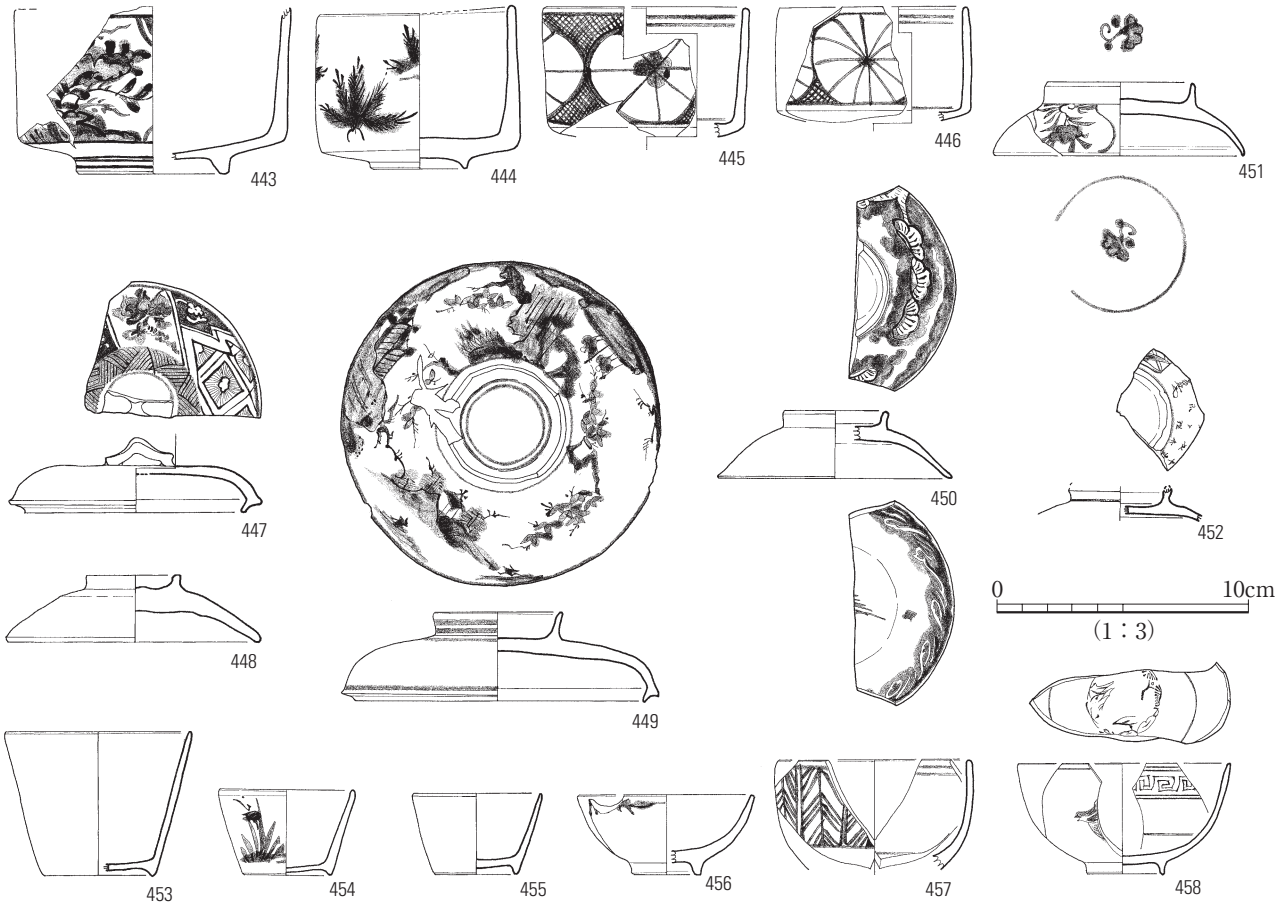
碗Ⅷ類…小丸碗（435～442）：口径が８～10cmと口径の小さいものを一括して扱う。435は蓋付きの碗か鉢である。口縁部内面に幅0.7cm程釉を掻き取った帯状の部分が存在する。外面は宝文であり，17世紀後半頃と考えられる。436は外面に宝文で，巻物をモチーフとしているようである。呉須の青色発色が鮮やかで，呉須が盛り上がる特徴をもつ。瀬戸・美濃系磁器と考えられる。19世紀中頃か。本遺跡では，同じような文様をもつものが５個体以上出土している。437は粗製で淡黄色である。外面に松文のコンニャク印判が施されている。18世紀後半～19世紀頃と考えられる。438は高台内に「筒江」の銘款がある。「筒江」は筒江窯を示す。18世紀代と考えられる。439は雪輪梅樹文であり，18世紀前半と考えられる。440は呉須が群青に発色しており，笹文を施している。18世紀後半頃か。441は端反形で，口縁内面に変形した雷文帯，外面には笹文，見込部に笹文をもつ。19世紀前半に属する。442は色絵磁器である。やや端反気味の口縁をもち，口縁内面は赤色細線書きの雷文帯をもつ。19世紀代と考えられる。

碗Ⅸ類…筒形碗（443～446）：底部で直角に立ち上がる円筒形の碗である。443の推定口径は11.2cmと大きいのに対して，444～446の推定口径は7.8～8.2cmである。443は18世紀代の蓋付鉢の可能性がある。444～446は18世紀後半頃から19世紀初頭にかけての湯呑碗と考えられる。

（Ｂ）蓋（第99図－447～452）：蓋は碗や鉢などに用いられてきたと推定できるが，どの器種に用いられてきたか断定に難しい。ここでは蓋部に用いられたものを一括して扱う。ほとんどが18世紀中頃～19世紀代に属すると

考えられる。447は熨斗状の鈕をもつ色絵磁器である。448は青白磁調で，内面が蛇の目釉剥ぎとなっている。449は庭園らしき文様を描いている。18世紀代頃か。450は暗青灰色の呉須で，外面に松木文，口縁部内面に墨弾きの技法を一部用いた波文を施している。器形は口縁が外反し，19世紀代の端反碗などの蓋の可能性がある。452は小形蓋である。外面に崩した文字の文様を施している。

（C）**小坏**（第99図－453～458）:453は薄手の白磁調で，他のものより口径が7.4cmと大きい。大きさから考えて18世紀代のそば猪口であろう。454・455は19世紀代に生産された猪口形の盃と考えられる。457は外面矢羽根文を施す。推定口径7.6cmで，大きさから考えて19世紀代の丸型湯呑み碗であろう。458は内面見込部に環状の松竹梅文，口縁部内面に雷文帯，外面に鳥と植物の文様を施す。19世紀前半頃と考えられる。

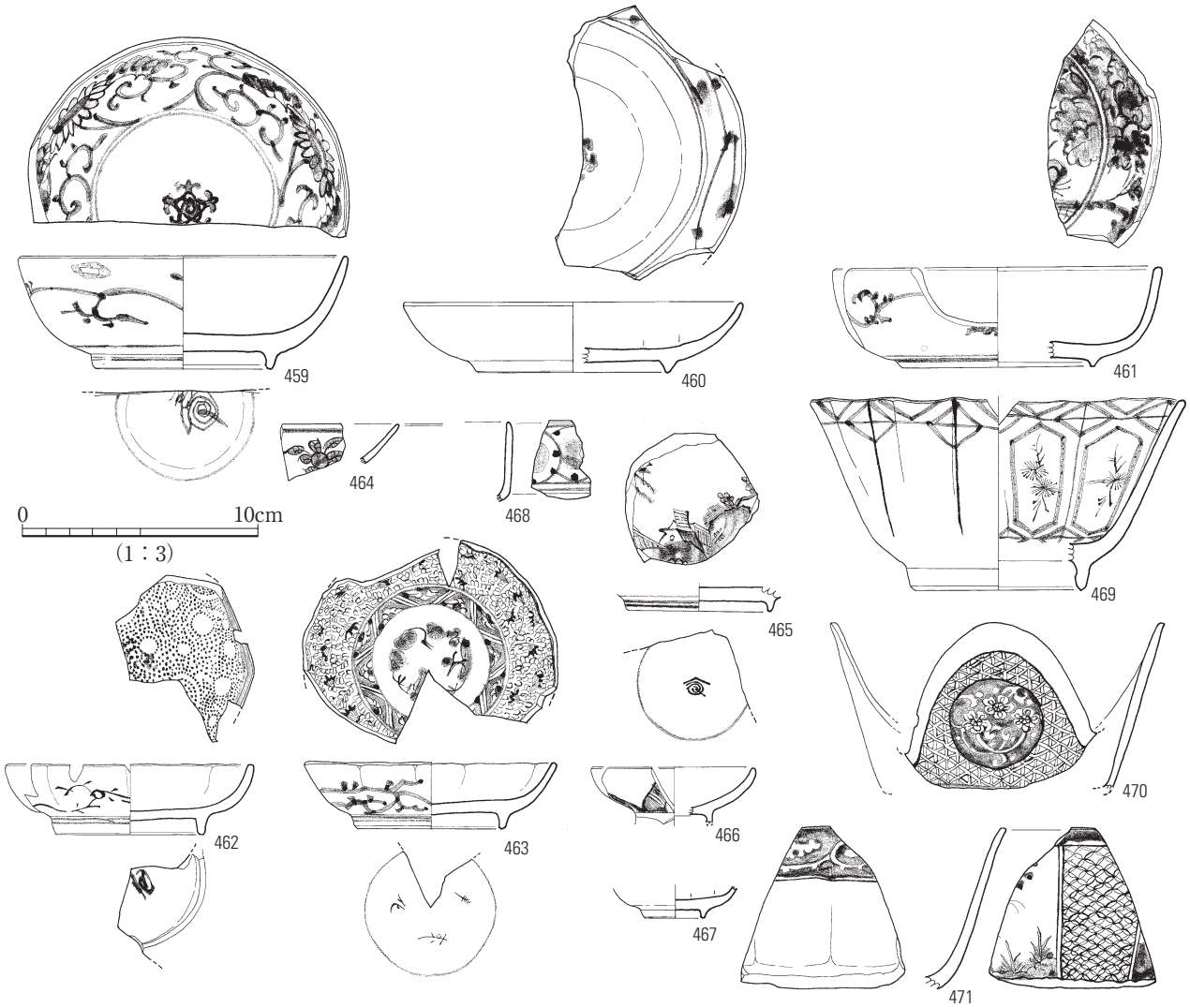


第99図　遺構外出土遺物⑮［近世：肥前系磁器③］(S=1/3)

（D）**皿**（第100図－459～467）：本遺跡出土の磁器皿は，小皿である直径10cm前後の輪花皿と15cm前後の丸形五寸皿が中心であり，直径20～30cm前後の大皿・中皿は少ない。また，遺構外出土は少なく，図化したもので９点である。459～461は推定口径12～14.4cm・推定器高８cm前後のいわゆる平形五寸皿である。外面の蛇行唐草文（459・461）,見込部の五弁花（459・460），見込部の蛇ノ目釉剥ぎ（460），高台内の渦福の銘款など18世紀代のおそらく波佐見窯系の特徴をもつ。459は口縁部に口紅装飾を施す。462は破片であるが，復元すると六角形になると考えられる。内面に点描による円形文，外面は退化した牡丹唐草文を，口唇部には口紅を施す。463は内面に環状松竹梅文，外面に牡丹唐草文を配する。高台内に「成化年製」と銘款がある。18世紀後半に属する。同形のものが図化はしていないが１号井戸跡から出土している。465は底部付近のみであるが，見込部に山水風景文，高台内に山の下に渦福の銘款をもち，18世紀後半頃と考えられる。467は白磁調の小皿で，内面は蛇の目釉剥ぎ，高台内に紅らしき灰赤色の残留物が確認できる。おそらく紅皿である。

（E）**鉢**（第100図－468～471）：468は薄手の口縁部から体部にかけての破片で，外面に円形文を施している。おそらく段重の部分と考えられる。469は八角鉢で内面全面に幾何学文を施す。471は口縁の外反する八角鉢で

ある。外面が区画され，各区画内に七宝文や草花文を施す。口縁部内面に墨弾きによる蛸唐草文帯をもつ。469・471は19世紀代と考えられる。470は赤絵磁器である。４分割した山形突出部をもつ波縁鉢である。時期については不明である。

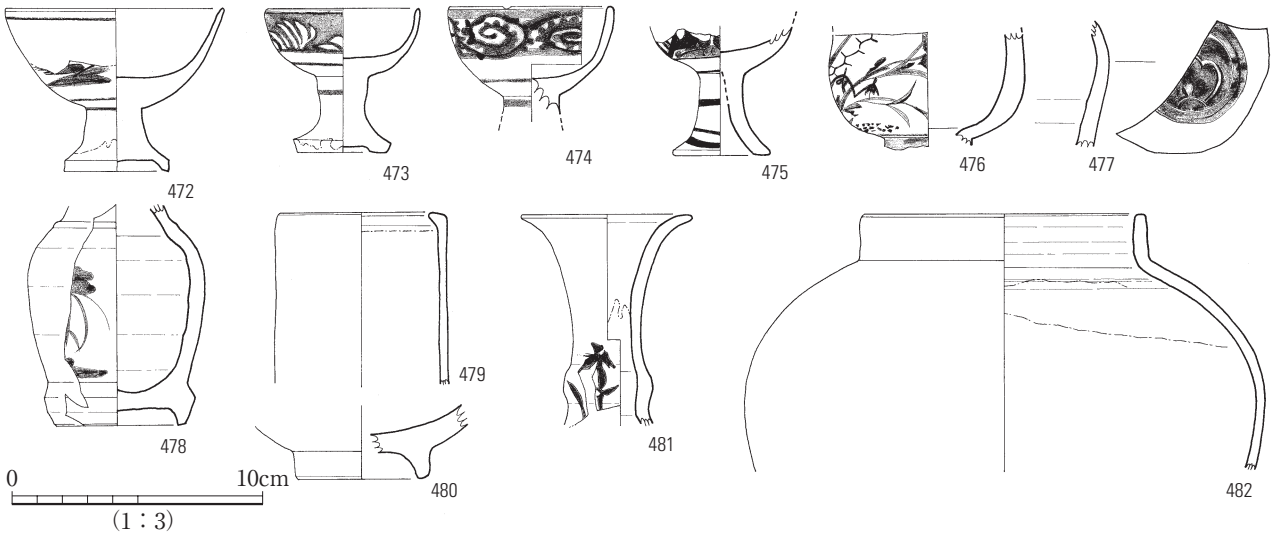


第100図　遺構外出土遺物⑯［近世：肥前系磁器④］(S=1/3)

（Ｆ）**仏飯器**（第101図－472～475）：473は外面が赤絵による半菊花文と考えられる。474は外面蛸唐草文様を施し，18世紀後半頃と考えられる。475は，脚台が他のようにロクロ成形による底部削りだしではなく，坏部付近まで抉こみが存在する。赤・青・緑の三色を用いて文様を描いている。詳細時期は不明であるが，いずれも18～19世紀頃に時期比定できる。

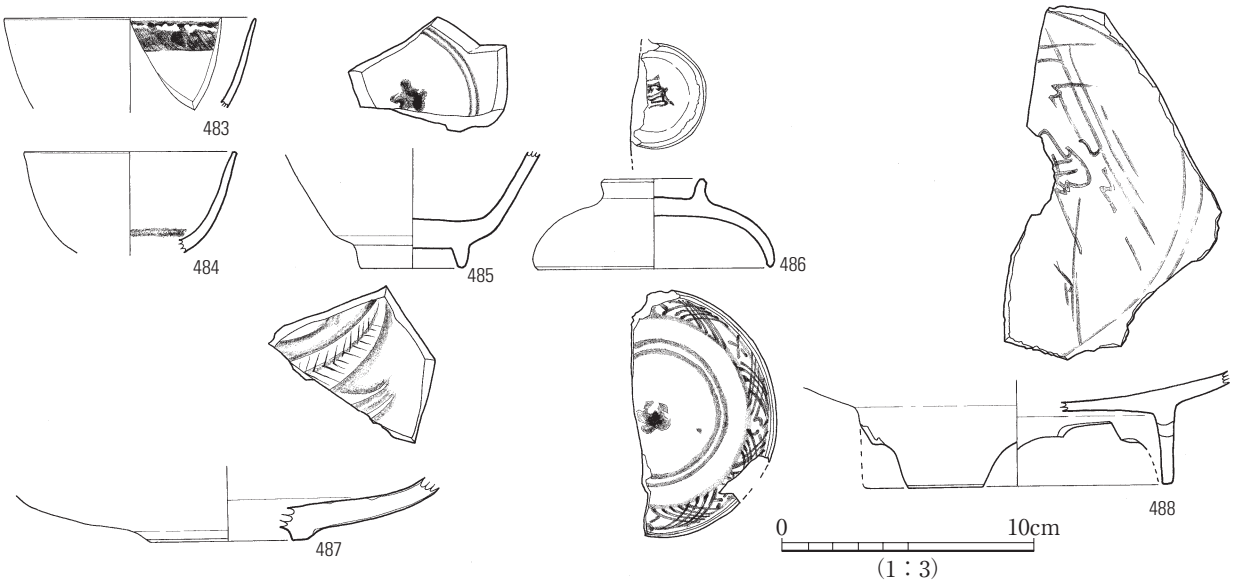
（Ｇ）**瓶**（第101図－476～478，481）：476は底部付近であり，丸型湯呑み碗のプロポーションと似ているが，器壁が厚く異なる。477はやや薄手の肩部付近であり，外面に丸に橘らしき文様を施す。478は白磁調の釉を施す。481は徳利の口縁部から頸部にかけての部分と考えられる。SZ１出土の体部（第40図－116）と酷似し，同一個体の可能性がある。

（Ｈ）**その他**（第101図－479～480，482）その他少数の器種を一括して扱う。479は筒形を呈する。白磁調の釉を外面が全面及び内面が口縁部付近のみに施す。形態から考えて筆筒の可能性がある。480は明緑灰色釉を施す底部である。鉢の底部ともとれるが，高台が高く，香炉などの可能性もある。482は壺である。外面が全面，内面が肩部付近まで白磁調の釉を施す。18世紀後半～19世紀代頃に時期比定できる。



第101図　遺構外出土遺物⑰［近世：肥前系磁器⑤］(S=1/3)

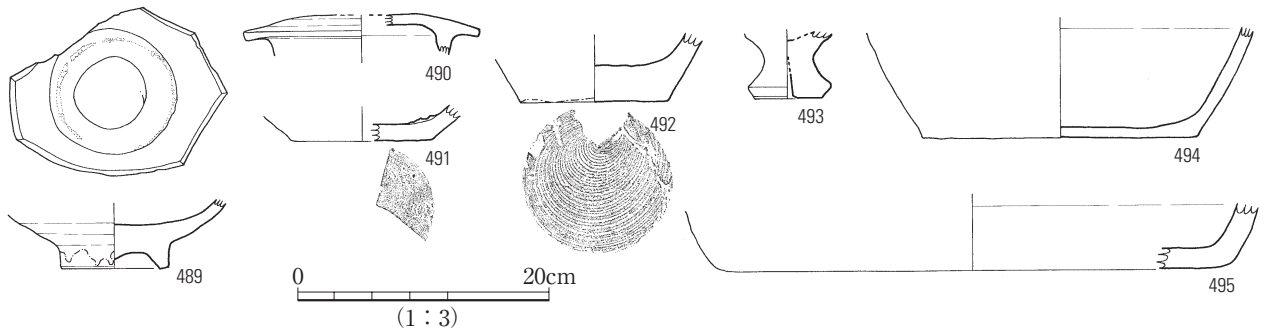
（Ｉ）**青磁染付陶磁器**（第102図－483～488）:肥前系とされる青磁染付陶磁器を一括して扱う。波佐見窯で生産されたと考えられる。483～485は碗である。外面に明緑灰色の青磁染付を，内面に灰白色釉を施す。483・484は丸形碗，485は蓋付の朝顔形碗である。485は見込部にコンニャク印判の五弁花文を施す。486は形態から考えて碗の蓋である。外面に明緑灰色の青磁染付を，内面に灰白色釉を施す。内面見込部にコンニャク印判の五弁花文を，口縁内面に四方襷文帯をもつ。摘部内側に銘款を有するが，判読できない。487は皿である。龍泉窯系青磁と酷似している。内外面にオリーブ灰・緑灰色の青磁釉を施す。畳付部は無釉で，砂が付着している。内面見込部は芭蕉文を施す。17世紀前半頃と考えられる。488は三方に高台脚をもつ皿である。底部は蛇の目釉剥ぎを行っている。見込部に水辺のような文様を施している。17世紀前半頃と考えられる。



第102図　遺構外出土遺物⑱［近世：肥前系青磁染付磁器］(S=1/3)

【⑥薩摩系陶器（第103図ー489～495）】

489は碗の底部である。外面は底部付近まで施釉。底部は露胎で，兜巾底である。内面は見込部が蛇の目釉剥ぎである。490は土瓶の蓋部である。外面のみ施釉である。491は皿の底部である。内面のみ施釉で，内面にワラ灰か焼成後の付着物が確認される。底部は糸切り底である。灯明皿の可能性がある。492は瓶の底部である。底部は無釉で，糸切り底で痕跡が残る。内外面の釉は光沢のある飴色である。493は無釉で，底部中央部に径約４mmの穿孔が施されている。形態からひょうそくと考えられる。494･495は，手触りがざらつく灰褐色系の釉が施されている。鉢の底部と考えられる。



第103図　遺構外出土遺物⑲［近世：薩摩系磁器］(S=1/3)

【⑦陶器擂鉢（第104図ー496～506）】

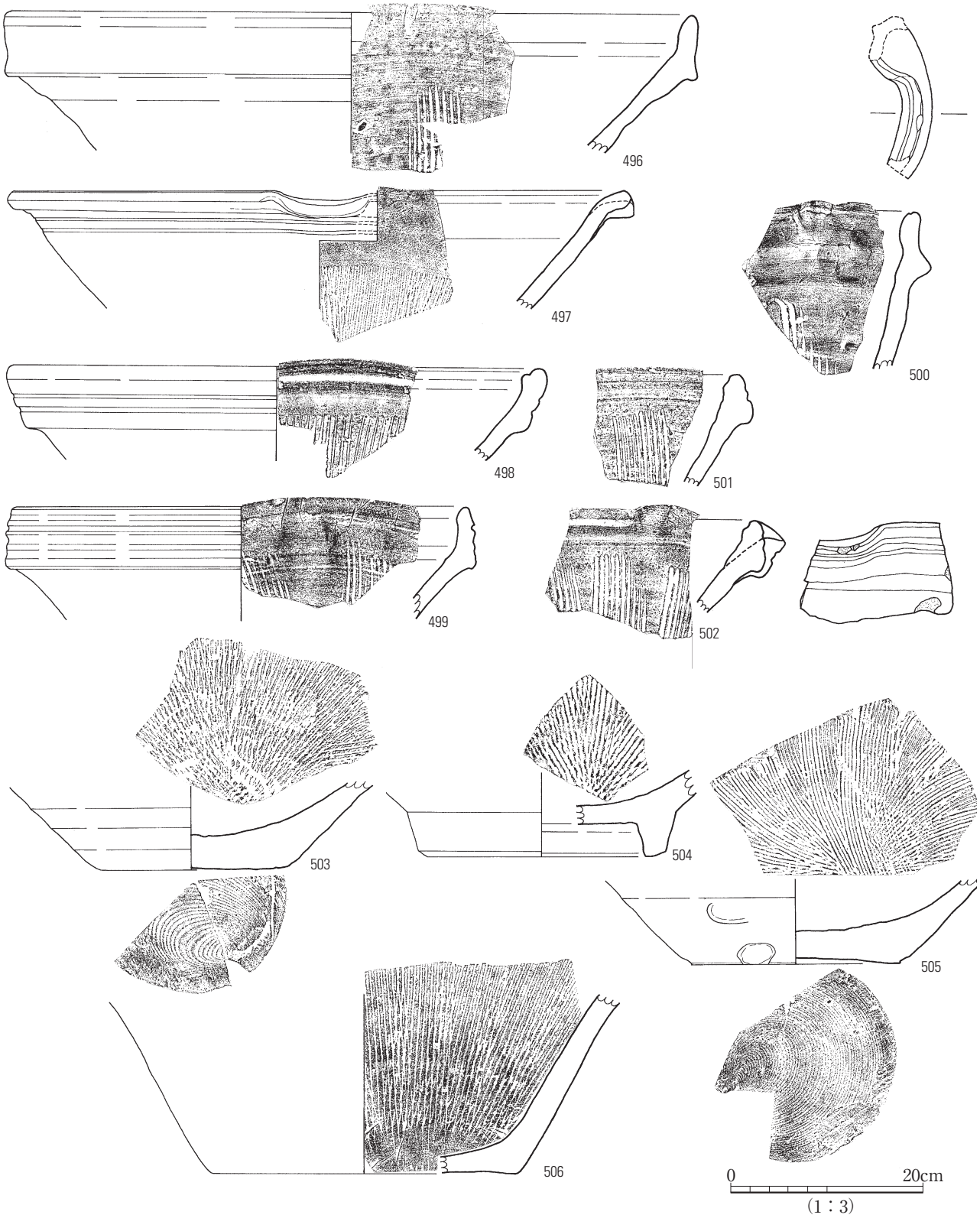
陶器擂鉢が複数出土した。ある程度産地が推定できるものもあればできないものもあるが一括して扱う。496は口縁帯に凹線表現をもたず，放射状の擂目が９条１単位となっている。497は内外面に褐色釉が施されており，わずかに肥厚させた口縁を外反させる。擂目は丁寧な櫛描きを施し，上端をなで揃えている。唐津産と考えられる。498は口縁内部に１条の縁帯もつことから堺系と考えられる。499は，灰色系の発色をした口縁部で，口縁帯に４条程度の凹線表現をもち，やや斜方向の擂目をもつ。500は，他の擂鉢に比べて口径が小さく，立ち上がりのある体部をもち，コップのような器形を呈すると考えられる。502は口縁帯に３条の凹線表現，口縁内部に１条の縁帯らしき表現がある。擂目は放射状の10条１単位で，器面はにぶい赤褐色である。503・505は底部糸切り痕をもつ底部で放射状の擂目をもつ。産地は不明である。504は高台をもつ底部で放射状に擂目をもつ。外面にわずかではあるが釉が付着している。産地は不明であるが，18世紀後半～19世紀前半頃の唐津産の可能性がある。506は底面にナデ調整を施す底部である。12条１単位の擂目は放射状であるがかなり摩耗しており，使い込まれたことが推測される。

【⑧産地不明陶磁器・瓦質土器・土師器（第105図ー507～529）】

（Ａ）**磁器碗**（第105図－507～508）：507･508は磁器碗である。白磁調に白粉が吹いたような釉を施す。507は蓋部で，508は碗である。508は畳付部のみが無釉である。２つは径の大きさから蓋と身の関係ではないと考えられるが，同一産地，同一のセット関係であった可能性がある。他にも数個体同じ釉調のものが出土している。

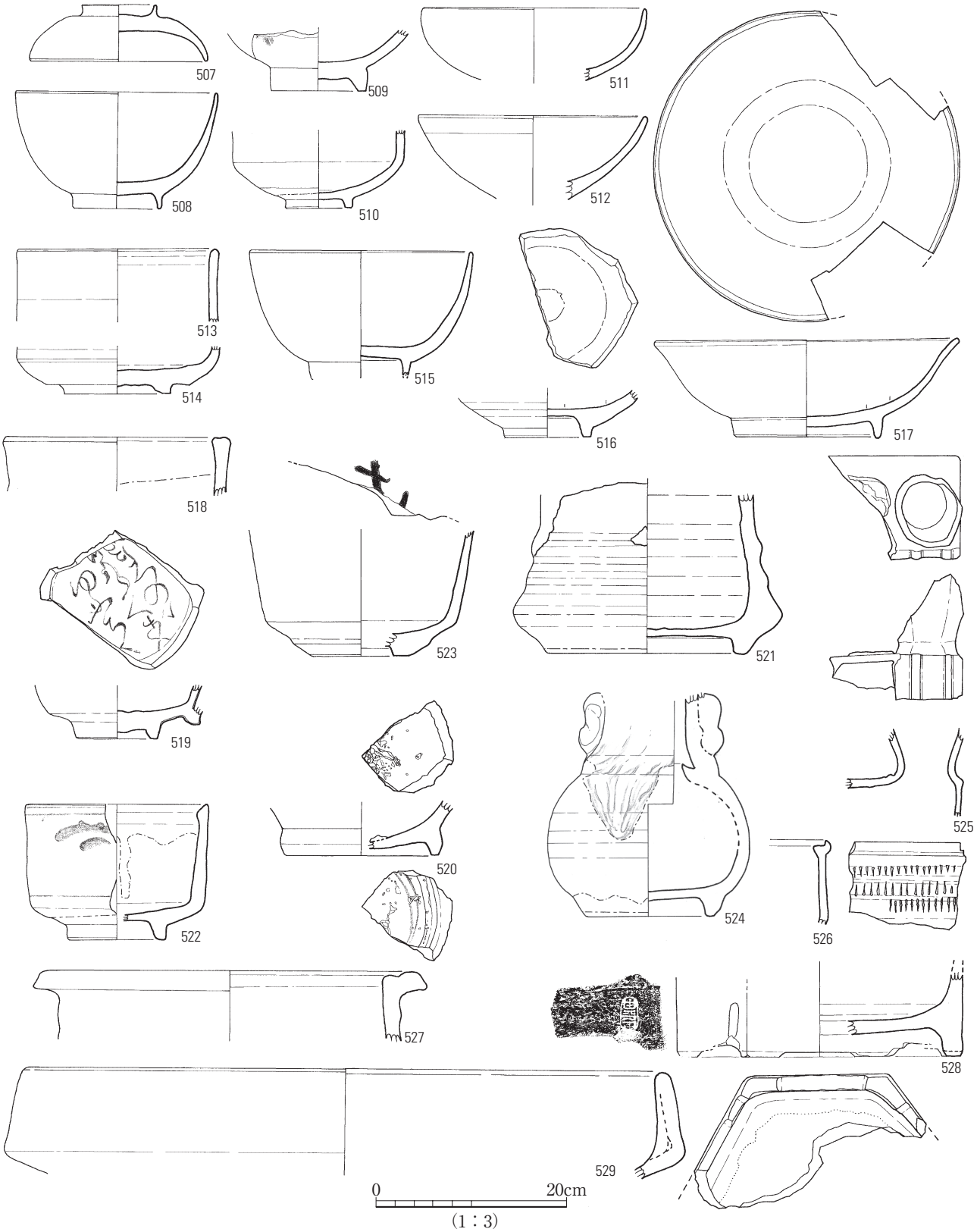
（Ｂ）**陶器碗・鉢**（第105図－509～517，520）：509～516は碗である。509は畳付部以外施釉している。畳付部は平滑に削られており，17世紀後半頃の唐津産の可能性がある。510は体部下半で大きく屈曲する腰折型で，底部付近が露胎である。底部は畳付部と高台内部が平滑に仕上げられており，唐津産と考えられる。511は口縁部で丸みをもちながら立ち上がる器形を呈し，白磁調釉を施している。碗と考えられるが，合子などの可能性もある。512は貫入著しく，にぶい黄色釉を施す口縁部である。図化はしていないが，類似する釉をもつ底部は，饅頭心状の底部に畳付部を整形している。513・514は筒形碗である。514の底部は畳付部から高台まで露胎である。両者は，ともににぶい黄橙色釉を施しており，おそらく同一個体と考えられる。形態から考えて，湯呑み茶碗か。515は貫入の多い白磁調の釉が施された深めの碗である。高台付近が欠損しており不明であるが，高台内外面・高台内部は釉が施してある。516は内外面に貫入の多い淡黄色釉を施した碗である。畳付部は平滑に削られており，無釉である。見込部は蛇の目釉剥ぎである。産地は不明であるが，京・信楽系の可能性もある。517は灰色胎土に黄褐色釉を施した鉢である。わずかに口縁部が外反する器形で，見込部には蛇の目釉剥ぎ，畳付部のみが無釉である。520は細片で詳細不明であるが，鉢の底部と考えられる。にぶい黄褐色胎土に黒褐色釉を施し，見込部及び高台内側に藁灰らしきものが付着している。

（Ｃ）**陶器香炉・火入・水指**（第105図－518～519，521～523）：518･519は同一個体と考えられる陶胎青磁の香炉である。518は外面全面および内面の上半に青磁調釉が施している。519は外面のみ施釉で，内面見込部に，判読不能



第104図　遺構外出土遺物⑳［近世：陶製擂鉢］(S=1/3)

であるが，かな文字が書かれている。521は水指である。きめ細かい灰白色の胎土に内外面に貫入の多い青磁釉を施す。底部の畳付部と高台内に赤変箇所があるが，意図的に鉄釉を塗布しているようである。522は火入である。外面が底部付近を除く部分，内面が口縁部付近に灰青色釉を施している。筒形の器形に内側が玉縁状に肥厚する口縁部をもつ。523は陶胎青磁の火入である。外面が畳付部を除く部分，内面が口縁部付近に青磁調釉を施している。見込部に化粧土を施した上に墨書で文字を書いているが，破片のため識字できない。



第105図　遺構外出土遺物㉑［近世：産地不明陶磁器・瓦質土器・土師器］（S＝1/3）

（D）**陶磁器その他**（第105図－ 524～526）：524は仏花瓶である。頸部から上が欠損しているが，頸部にＳ字状の耳部をもつ。一度暗オリーブ色釉を施した後に，青と白色の混じった釉薬をかけている。525は薄手の磁器の外側に黒色釉を施している。器形は欠損しており全容が不明であるが，上部にむかって緩やかに開く部分と直方体部分から構成される。器種を断言することは難しいが，筆洗の可能性がある。526は関西系の行平鍋の口縁部と考えられる。内面には光沢のある黄褐色釉を施す。外面には暗褐色釉を施した後に飛び鉋が施される。

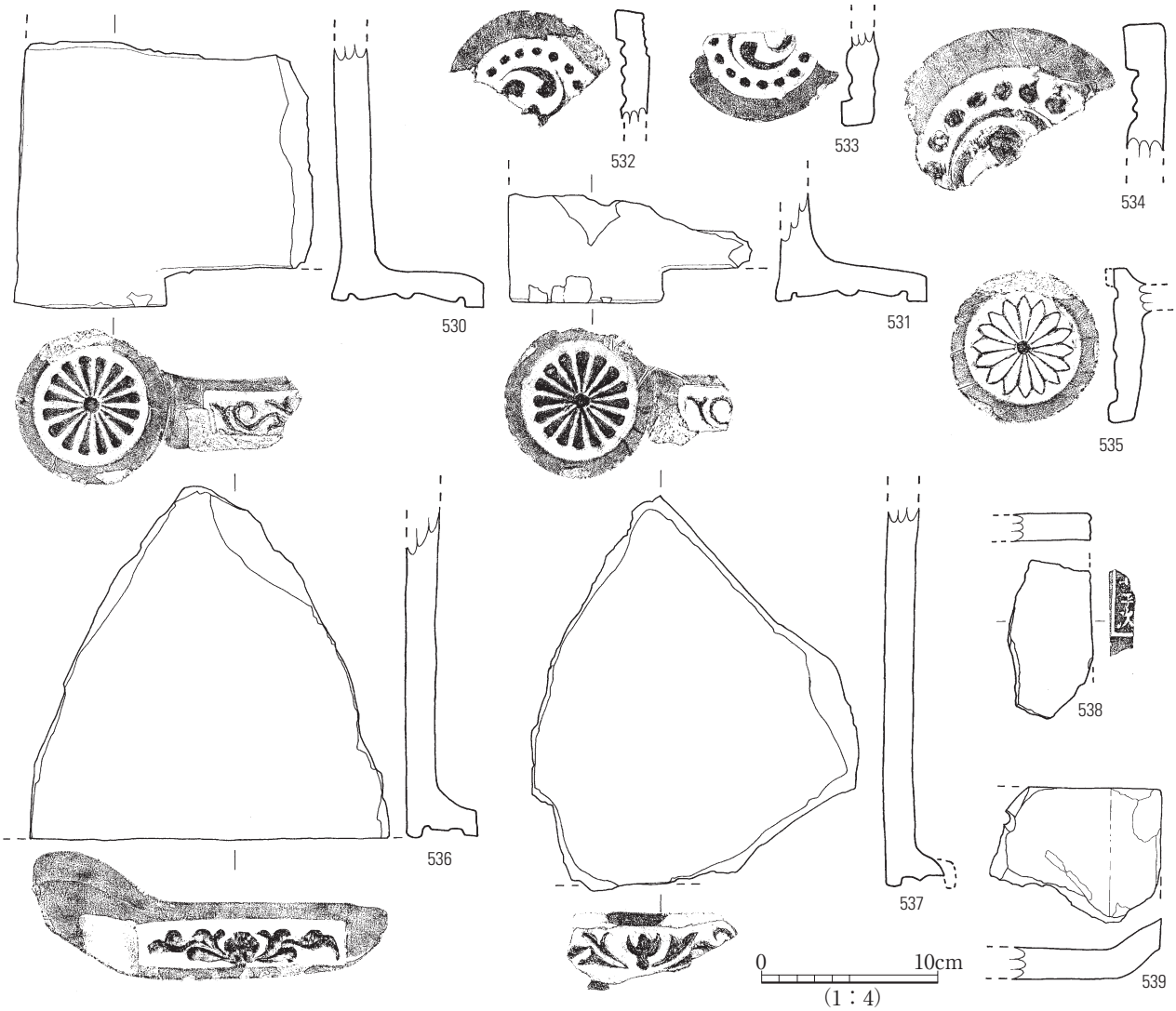
（E）**瓦質土器**（第105図－527～528）：527は鉢の口縁部である。おそらくSZ１出土の獅子頭をもつ鉢の胴部（第41図－127）と同一個体である。528は六角鉢である。体部に判読出来ないが，印刻が施されている。

（F）**土師質土器**（第105図－529）：529は土師質の焙烙と考えられる。産地が不明であり正確なことは不明であるが，関西系焙烙の編年を参考にすれば，類似した形態は18世紀後半～19世紀前半頃に位置付けられていることが多い。

【⑨瓦（第106図～第107図－530～546）】

瓦は遺構外から多数出土した。多くは御堂があったＣ区，及びＡ区からである。図化は銘や瓦当面に文様が確認できるものを中心に17点行った。

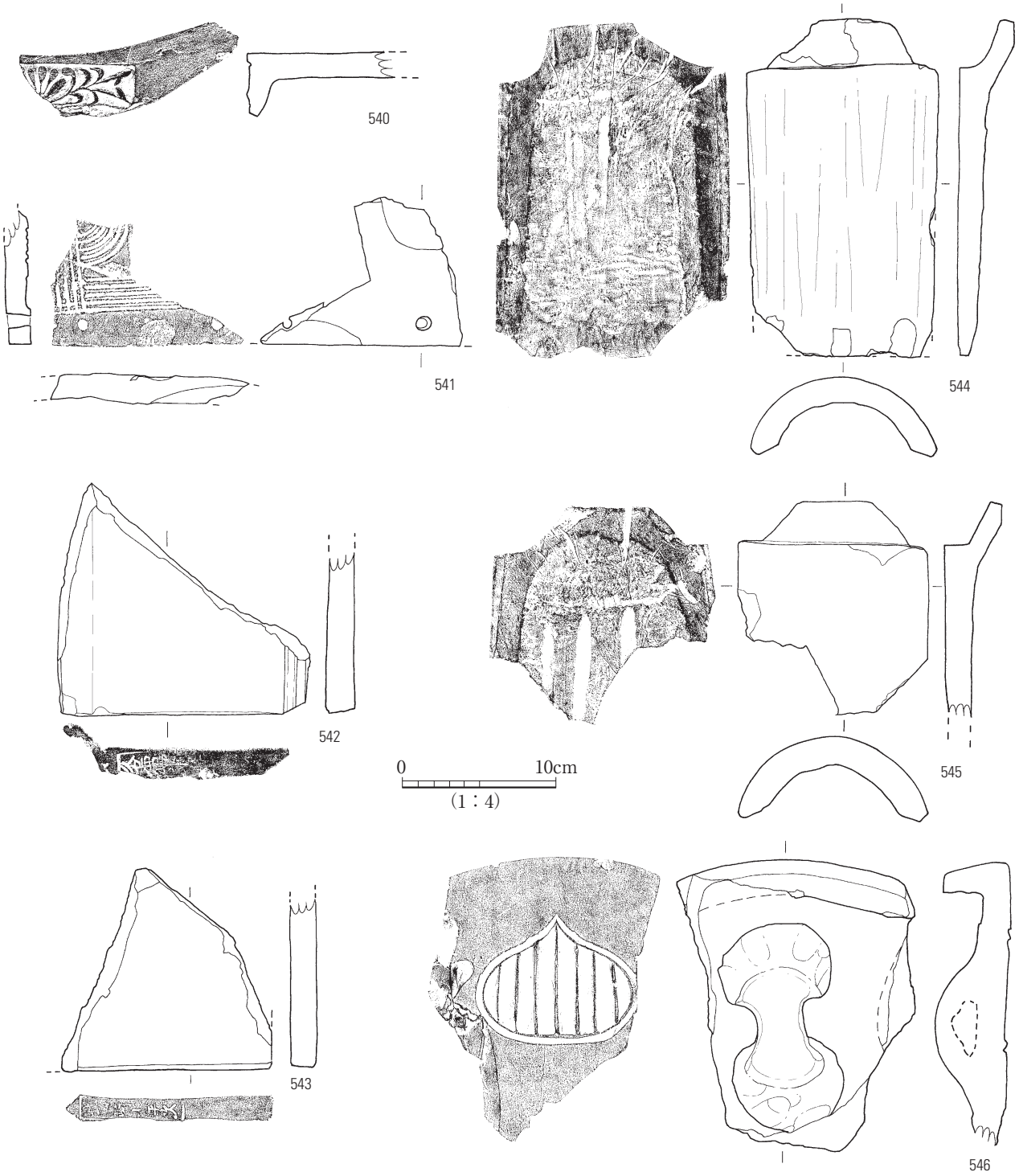
530・531は軒桟瓦である。丸瓦部は陽刻の菊花文，瓦当面は唐草文である。531は中心部が無く不明であるが，530はおそらく中心飾が橘文である。532～535は軒丸瓦の瓦当面である。532～534は中心の三巴文を珠文帯が囲む。532の裏面上部には，幅約2.2cmの木篦などの工具で撫でたと考えられる波状の痕跡が確認される。これは背部の瓦と容易に接合するための接合面とも考えられる。535は菊花文である。裏面上部に長さ2.7cm幅1.5cmの長方形の突起物が確認できる。536・537・540は唐草文をもつ軒平瓦である。536～537は中心飾に橘をもつ。540は中心飾に



第106図　遺構外出土遺物㉒［近世：瓦①］(S=1/4)

半菊花文と考えられる文様をもつ。538～539，541～543は平瓦である。538・543は「城ヶ崎小平次」またはその一部の印刻をもつ。同じ印刻をもつ瓦は池跡と考えられる遺構（SZ１）からも多数出土している。542は「久島…」と判読できる印刻をもつ。本遺跡において，銘のある印刻は「城ヶ崎小平次」が主流であり，「久島」の印刻はこ

の１点のみである。541は２か所の釘穴をもち，片面に櫛歯状工具で縦・横・同心円状に文様を施している。目的については不明であるが，文様ではなく滑り止め目的と考えられる。544・545は丸瓦である。いずれも裏面には布目痕跡が確認され，その上から幅約７mmの先丸状工具で縦方向の掻き取りを行っている。製作方法は，丸瓦と玉縁部の境界付近に著しいナデ痕跡と粘土の継目が確認されることから，丸瓦部分に別造りした玉縁部を合成する方法であることがわかる。544･545,そしてSZ１出土の142は大きさや製作方法から同一規格品の可能性が考えられる。546は飾瓦である。表面は宝珠文が中央部にある。脇部には何らかの装飾が確認されるが,破損しており不明である。裏面は把手状のものが付着している。



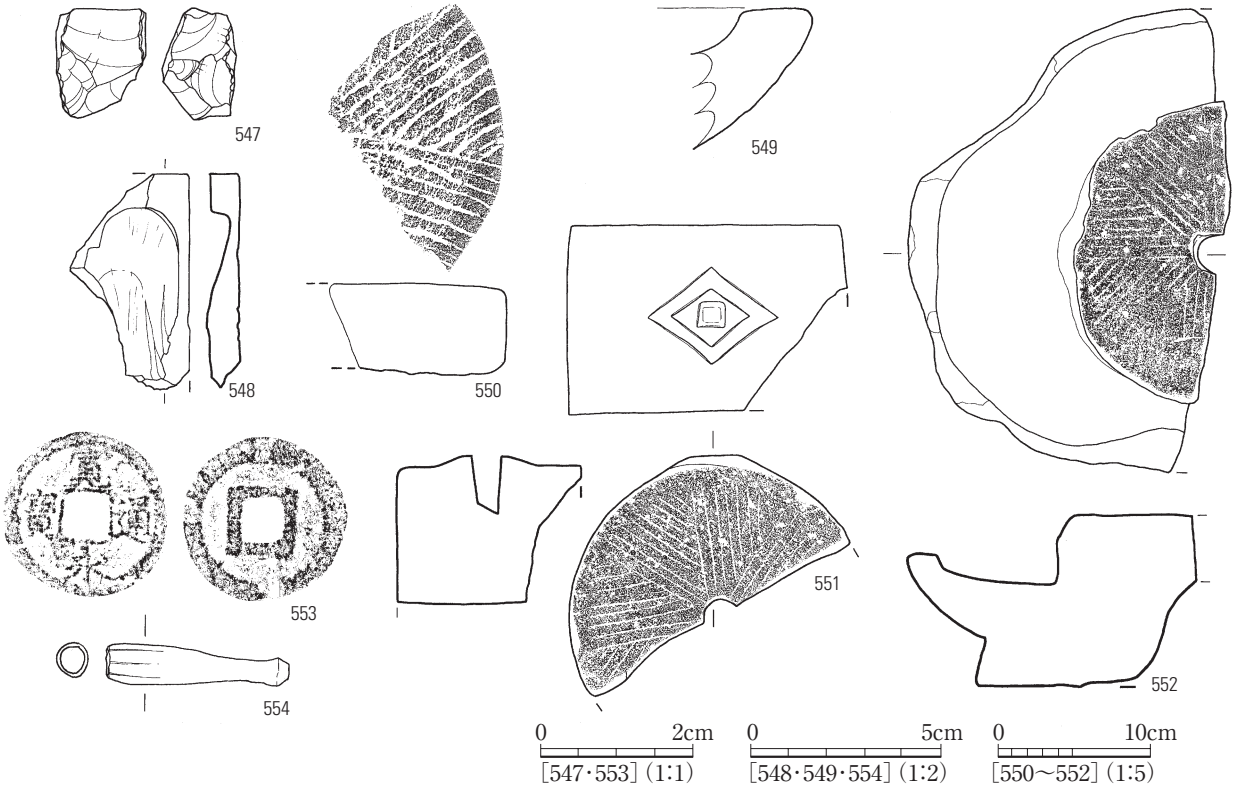
第107図　遺構外出土遺物㉓［近世：瓦②］(S=1/4)

【⑩石器（第108図ー547～552）】

547は火打石である。乳白色玉髄製で１cm弱の立方体に近い形で，稜に連続するツブレが確認できる。548は堆積岩系の石材を用いた硯である。549は凝灰岩製の石臼の口縁部と考えられる。550～552は凝灰岩製の石臼である。いずれにも放射状の擂目が施されている。551は方形の挽き木孔を，中央に心木孔を穿っている。552は，中心に心木孔を穿っている。551・552は擂面同士の径を推定すると18.5～18.8cmとなり，同一個体の可能性がある。形態から考えると茶臼の可能性がある。551・552の擂目は目が浅く，摩耗していると推測できる。

【⑪金属製品・銭貨（第108図ー553～554）】

553は銭貨で寛永通宝である。554は煙管の吸口部である。羅宇との接続部から中位にかけてわずかに膨らみ，吸



第108図　遺構外出土遺物㉔［近世：石器・金属製品・銭貨］(S=1/1・1/2・1/5)

口部にかけて細くなる形態で，羅宇接続部から中位にかけて縦位の条線が施されている。

（５）中世～近世の石塔片（第109図～第110図－555～574）

遺構外や後世の遺構に配されたものなどを一括して扱う。555～574は石塔片である。時期については不明であるが，一部近代に入るものも含む可能性があるものを除き，中世～近世に時期比定される。555～559は空風輪片である。555と558は宝珠部の先端がわずかに尖る。557は欠損しており不明であるが，先端はおそらく丸みを帯びたものと考えられる。560・561は九輪部をもたない相輪一部であり，露盤付近である。560は○と×の組み合わせのような文様であり，561は十字のような文様である。562～564も相輪部である。562～563は九輪部が線刻によって一つ一つの間隔が密接して表現されているが，564は一つ一つが独立するように間隔をあけて表現されている。565～567は火輪片である。565は屋根部に工具で「×」と短い２本線が刻まれている。後世につけられたものかは不明である。567はＡ区の石列Ｄの交点近くの石列Ｅの上部から検出された。後に記述する574と同一石塔であった可能性がある。574同様，他の凝灰岩製と異なる硬質の凝灰岩を用いる。石材の違いか，製作年代の違いか，他の石塔片に比べて風化の度合いが少なく，直線的な表現である。568は水輪片である。納骨孔はなく，径に比して高さが比較的あるタイプである。569～573は平面方形で，高さがあまりない直方体を呈する。五輪塔の地輪もしくは石

第109図　遺構外出土遺物㉕［中世～近世：石塔片①］(S=1/8)

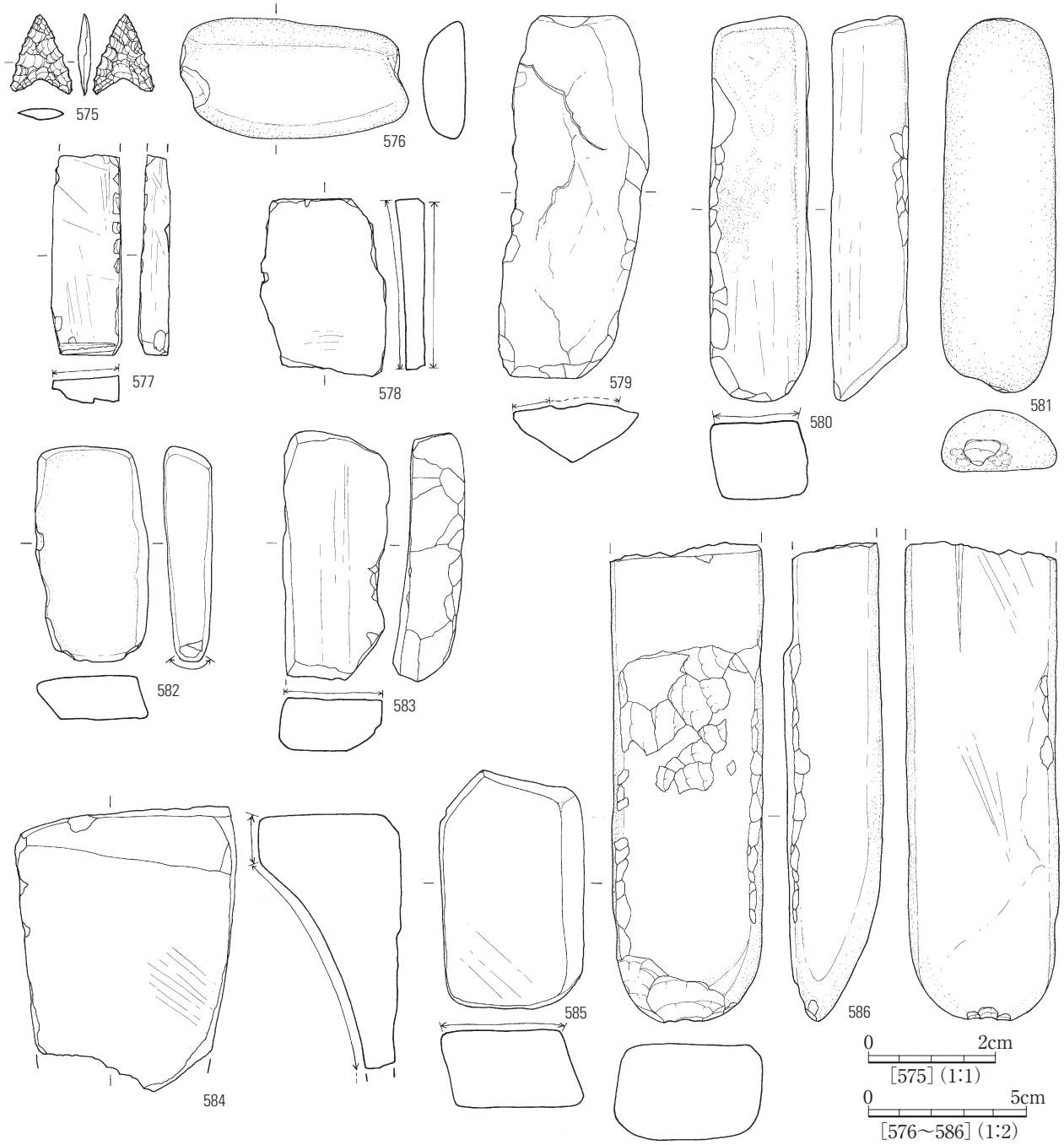
塔等の基礎部もしくは基壇部と考えられる。571は平面部の隅部と側面部に，572は側面部に工具による線状痕が確認される。火輪部である565にも同様の線状痕が確認できるが，565同様，製作時につけられたものか，後世につけられたものかは不明である。574は立方体を呈する石塔の一部と考えられる。石材は567と同様，硬質の凝灰岩を使用している。４面のうち一面に仏像を施している。仏像は右手が胸の部分で親指と人差し指をあわせた来迎印を結んでいることから阿弥陀如来と考えられる。また，顔部は鼻から口にかけての部分が欠損している。この遺跡ではこうした顔部のみ欠損した仏像が多いことから，廃仏毀釈時に破壊された痕跡と考えることができる。廃仏毀釈時に破損されたと考えると，『日向地誌』の記述では，廃仏毀釈は明治５年頃に行われたとされていることから，それ以前に建立されていた可能性がある。

第110図　遺構外出土遺物㉖［中世～近世：石塔片②］(S=1/8)

（6）時期不明遺物（第111図－575～586）

時期の特定できない遺物を一括して扱う。

575～586は石器である。575はチャート製の打製石鏃である。形態からおそらく縄文時代に属すると考えられる。縄文時代に帰属する遺物は他に無く，斜面上方からの混入品の可能性がある。576は石錘と考えられる。扁平の砂岩礫の両端を凹ませている。川近くの立地から考えて，この地での出土は違和感が無いが，他に同類品の出土がない。577～580・582～585は砥石である。580は砂岩製である。583・584は明確な線状痕をもつ。584は頁岩製で，大きな凹面を形成している。近世に属する可能性がある。581・586は砂岩製の敲石である。いずれも下端部に敲打痕が確認できる。581は下端部に丸みをもつ凸面をもつ。砥石とは異なる他の用途で形成された可能性がある。586は柱状に整形されている。



第111図　遺構外出土遺物㉗［時期不明：石器］(S=1/1・1/2)

第Ⅲ章 第二次調査の記録

第１節　調査の概要

第二次調査の調査対象区域は，調査前から板碑等の石塔の存在が知られていたが，平成17年度の第一次調査時には用地が未買収であり，調査対象からはずれていた箇所である。平成18年度末に用地買収の目処が立ったこともあり，平成19年４月18日付け第8001－10047号で宮崎土木事務所より調査依頼が発せられ，平成19年５月24日から発掘調査を開始した。

調査対象区域は第一次調査の南側急斜面に位置する約100m^{2}の範囲である（第３図）。作業員の安全を期するため，まず調査箇所までの経路を確保し，その後，各石塔の基底面まで表土を掘削した結果，当初確認されていた石塔の他に，水輪の残欠（第119図－601）や板碑形の墓碑（第114図－591）などが確認できた。

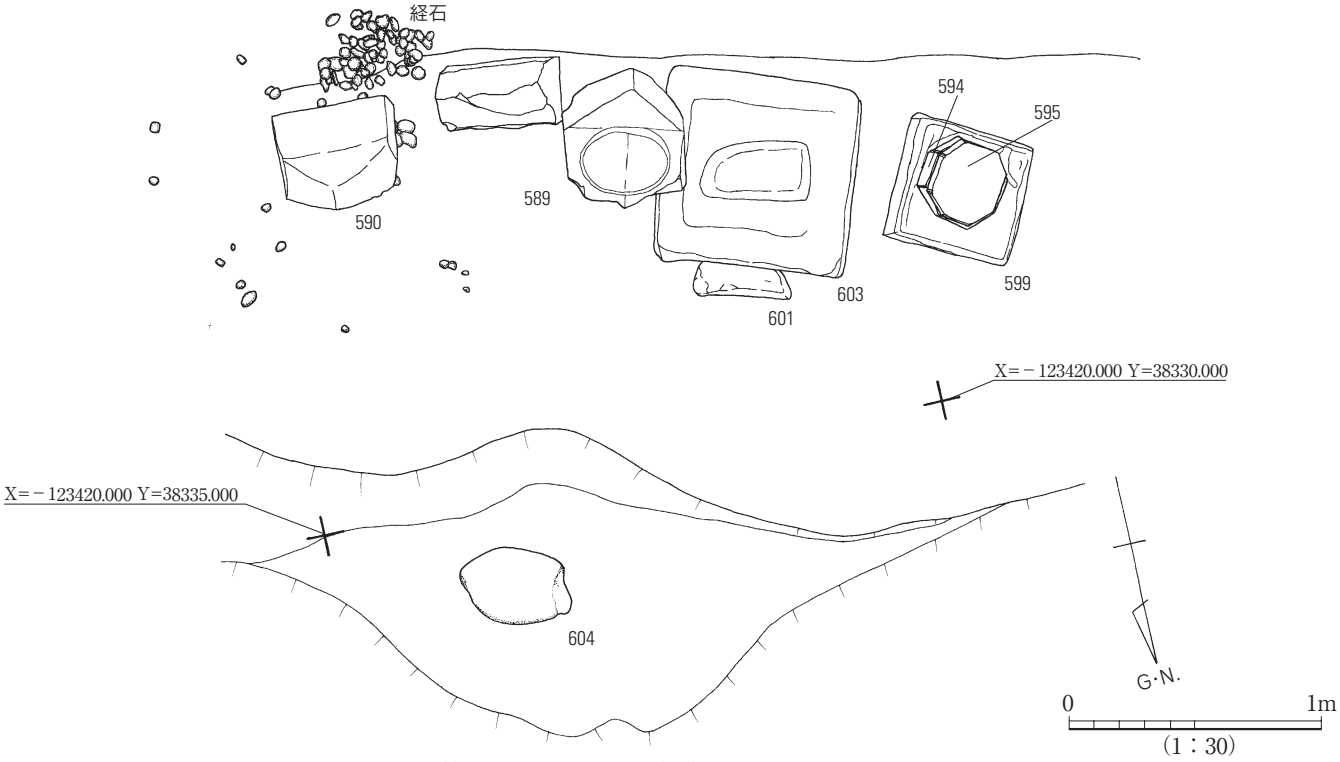
その後，遺構配置図を作成し，石塔を移動した。石塔移動後に，最も東に位置する板碑の周辺から，経石の出土をみたため，その出土状況の記録を行い，調査箇所での作業を終了した。

調査箇所での作業終了後，調査事務所で各石塔の精査，実測を行い，平成19年６月29日に調査を終了した。

第２節 Ｄ区の調査（第112図～第124図）

第二次調査対象区となったＤ区では，板碑３，自然石を用いた墓碑１，無縫塔塔身部２，石塔竿部３，中台部２，基礎部１，相輪１などが確認された。確認された石造物の石材は，墓碑が砂岩製である以外は，全て凝灰岩である。石塔の組み合わせについては，正規の組み合わせのものはなく，調査以前に既に移動され，原位置を止めていないものと考えられる。経石に関しては，石塔類との位置関係は本来のものではないと考えられる。なお，石塔移動後，下面の精査を行ったが墓壙などの下部遺構は検出されなかった。

石塔類の検出状況

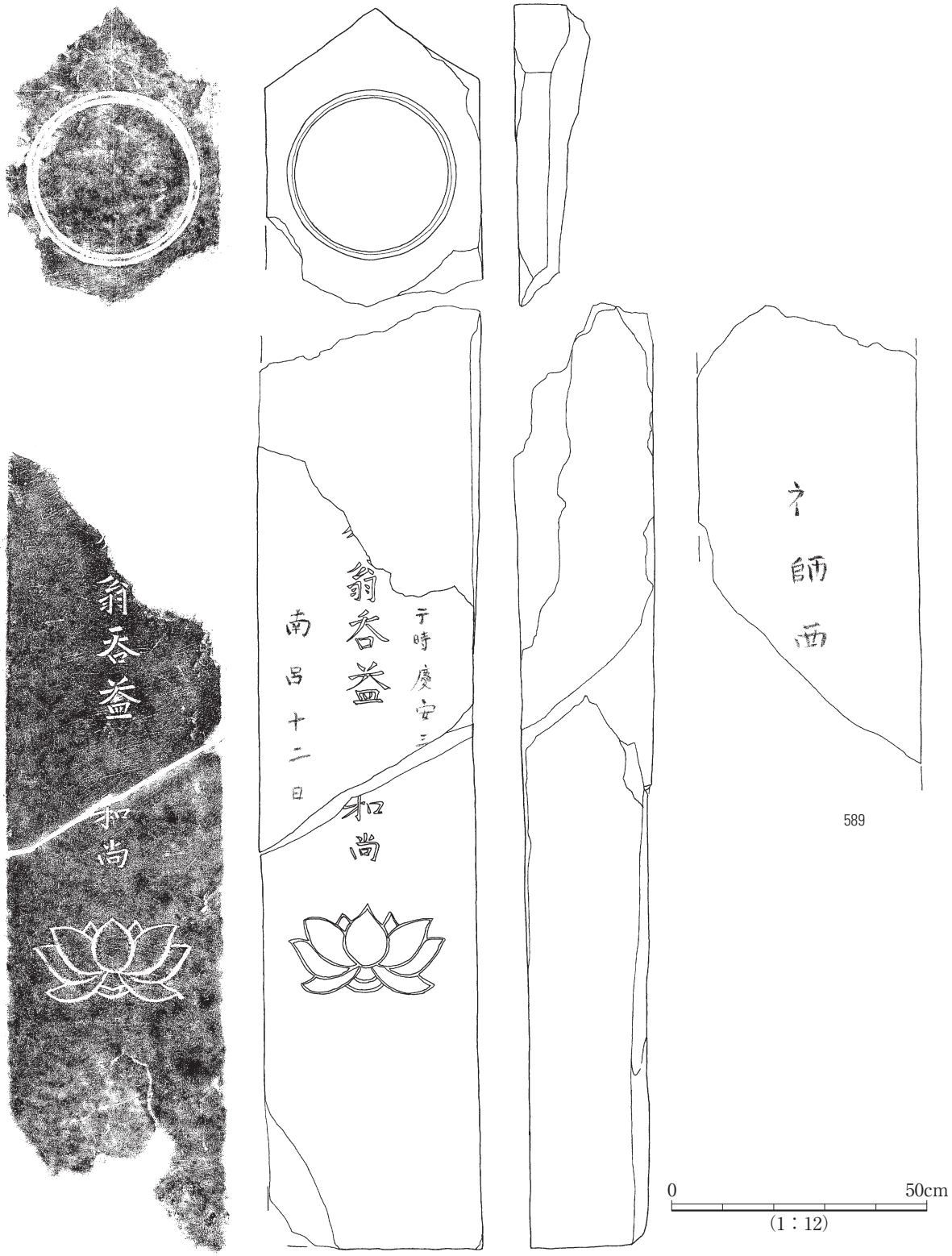


第112図　Ｄ区遺構検出状況図(S=1/30)

【① 板碑類[第113図・第114図ー589～591]】

板碑が３基検出された。

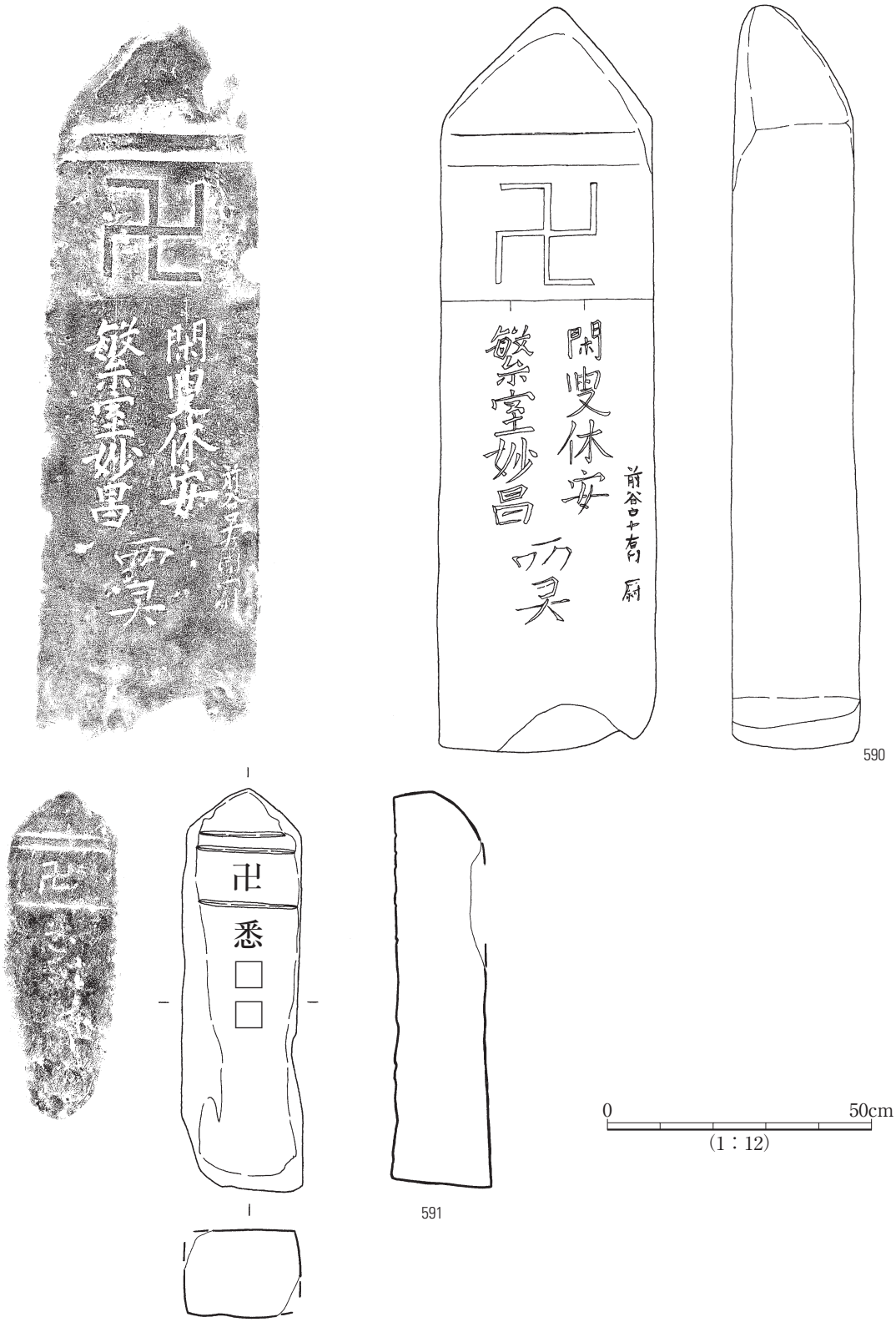
589（第113図－589）は山形部が破損し分離した板碑である。復原長は198cm以上で，幅50cm強，厚さは25cm前後である。二条線はなく額部に月輪の区画が陽刻されている。砕身中央に「□翁呑益和尚」，中央下部に蓮華座が陰刻され，右に「□時慶安三年」，左に「南呂十二日」の墨書がみえる。背面も丁寧に整形されており，「□師西」と墨書されている。



第113図　Ｄ区出土遺物①［板碑］(S=1/12)

590（第114図）は高さ140cm，幅40cm，厚さ23cmで額部に「卍」が陽刻されている。二条線は前面のみに陰刻され，側面には巡らない。碑身部には「閑叟休安」「繁室妙昌」の文字が二列に陰刻され，碑身下部中央に「両霊」とある。碑身下部右には「前谷□十右門 尉」の銘が陰刻される。

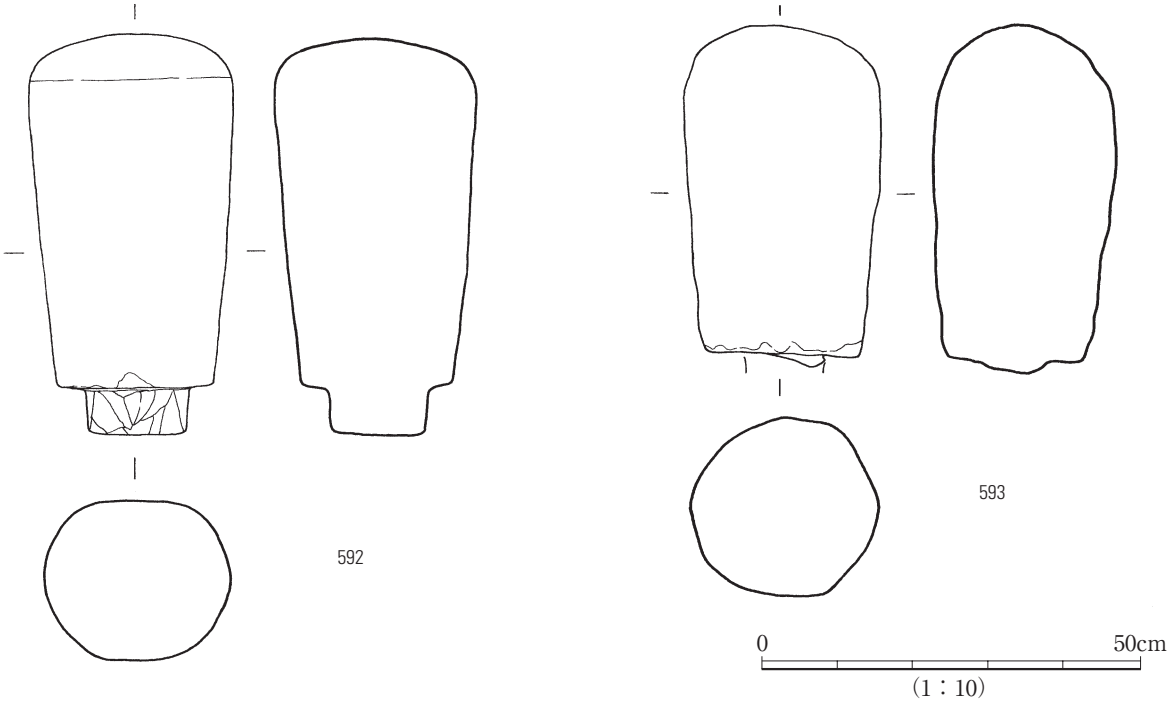
591（第114図）は，板碑型の墓碑であると考えられる。高さ約75cm，幅23cm前後，厚さ18cm前後である。前面のみに二条線が陰刻され，側面には及ばない。額部と碑身部は陰刻線により区分され，額部には「卍」が陰刻されている。碑身にも文字の陰刻が確認できるが，表面の風化が激しく判然としない。



第114図　D区出土遺物②［板碑］(S=1/12)

【② 無縫塔塔身部[第115図ー592～593]】

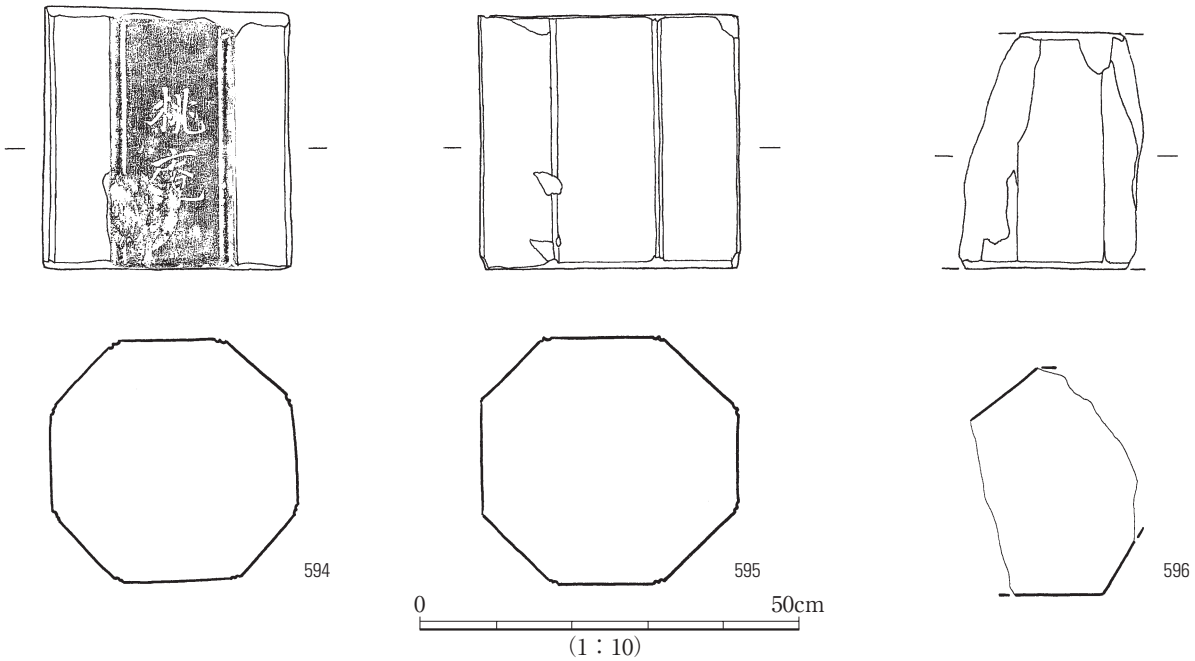
無縫塔の塔身が２個体確認された。592は塔身部の高さ47cm，臍部の長さ６cmで，593は塔身部42cm，臍部を欠損している。両個体とも銘などの線刻はなく墨書も確認できなかった。



第115図　Ｄ区出土遺物③［無縫塔］(S=1/10)

【③ 石塔竿部[第116図ー594～596]】

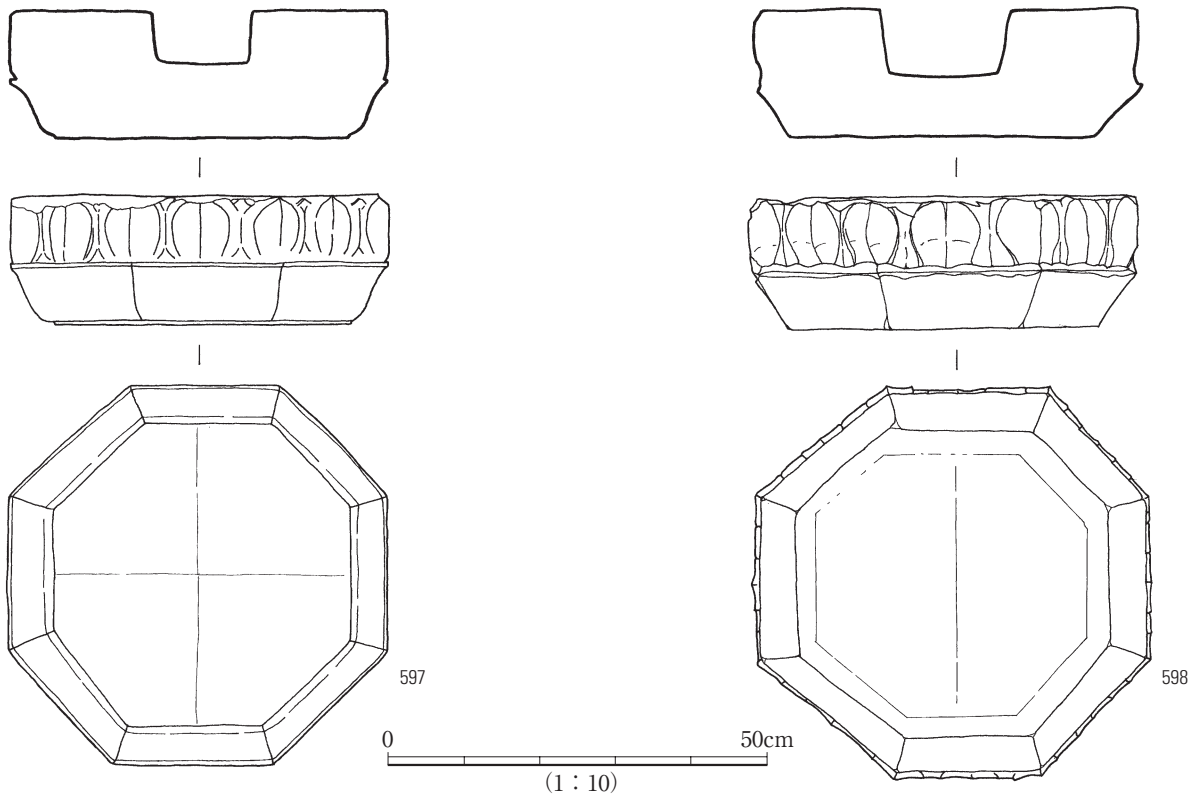
無縫塔の竿部と考えられるものが３個体検出された。３固体中２個体（第116図－594･595）の法量はほぼ同一で，高さ31～34cm，幅30～33cmで一辺12～15.5cmの８角柱に整形されている。２固体のうち１個体（第116図－594）には「桃庵」の陰刻がある。また，破損が激しく法量が明確でないもの（第116図－596）が1個体あるが，残存部から他の２個体とほぼ同一規格に復原できる。



第116図　Ｄ区出土遺物④［石塔竿部］(S=1/10)

【④ 中台部[第117図ー597～598]】

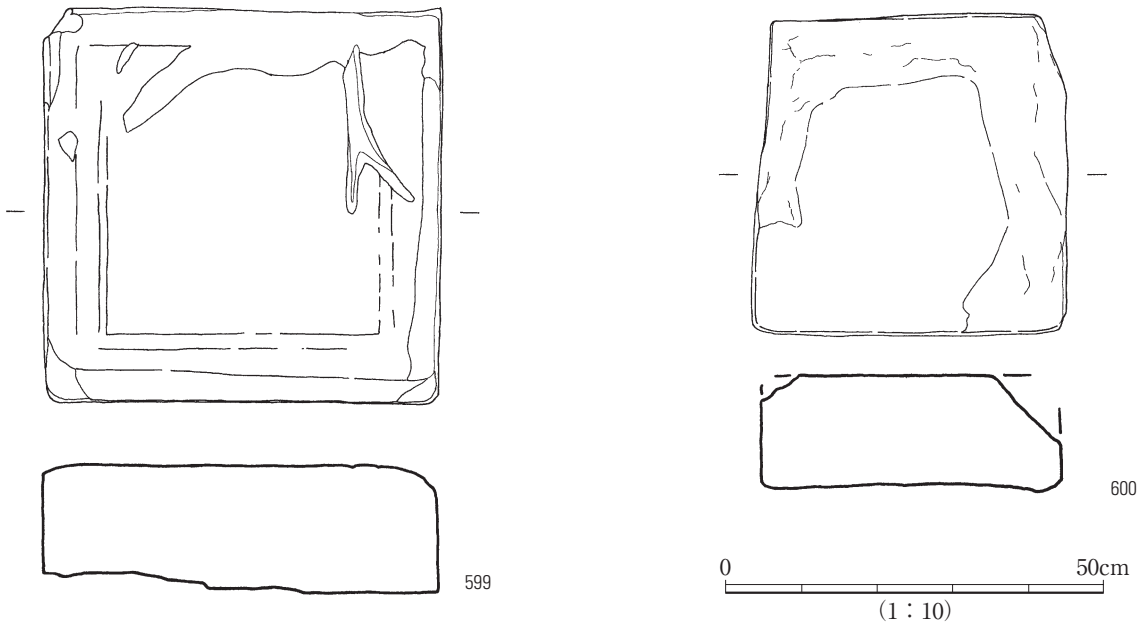
無縫塔の中台部と考えられるものが２個体（第117図597・598）出土した。両個体とも，平面形は一辺20cm程度の八角形をなし，側面上部に蓮弁が陽刻されている。上面中央には，直径約15cm前後の臍穴が穿たれている。598は下面に八角形の区画が細線で陰刻されている。



第117図　Ｄ区出土遺物⑤［石塔中台部］(S=1/10)

【⑤ 地輪部[第118図ー599～600]】

五輪塔の地輪部と考えられる個体が２個体（第118図－599･600）出土している。599は平面形一辺約52cmの方形，厚さ12.5cmである。600は風化が激しいが，平面形一辺約42cmの方形に復原できる。厚さは約15cmである。



第118図　Ｄ区出土遺物⑥［五輪塔片］(S=1/10)

【⑥ 水輪部[第119図－601]】

五輪塔の水輪部と考えられる個体が１個体出土した。板碑の基礎部と考えられる個体（第119図601）の下に基礎の水平を保つように据えられていた。半月状に欠損しており，径約38cmに復原できる。厚さ約８～10cmと非常に扁平である。形状から無縫塔の丸形竿であった可能性もある。

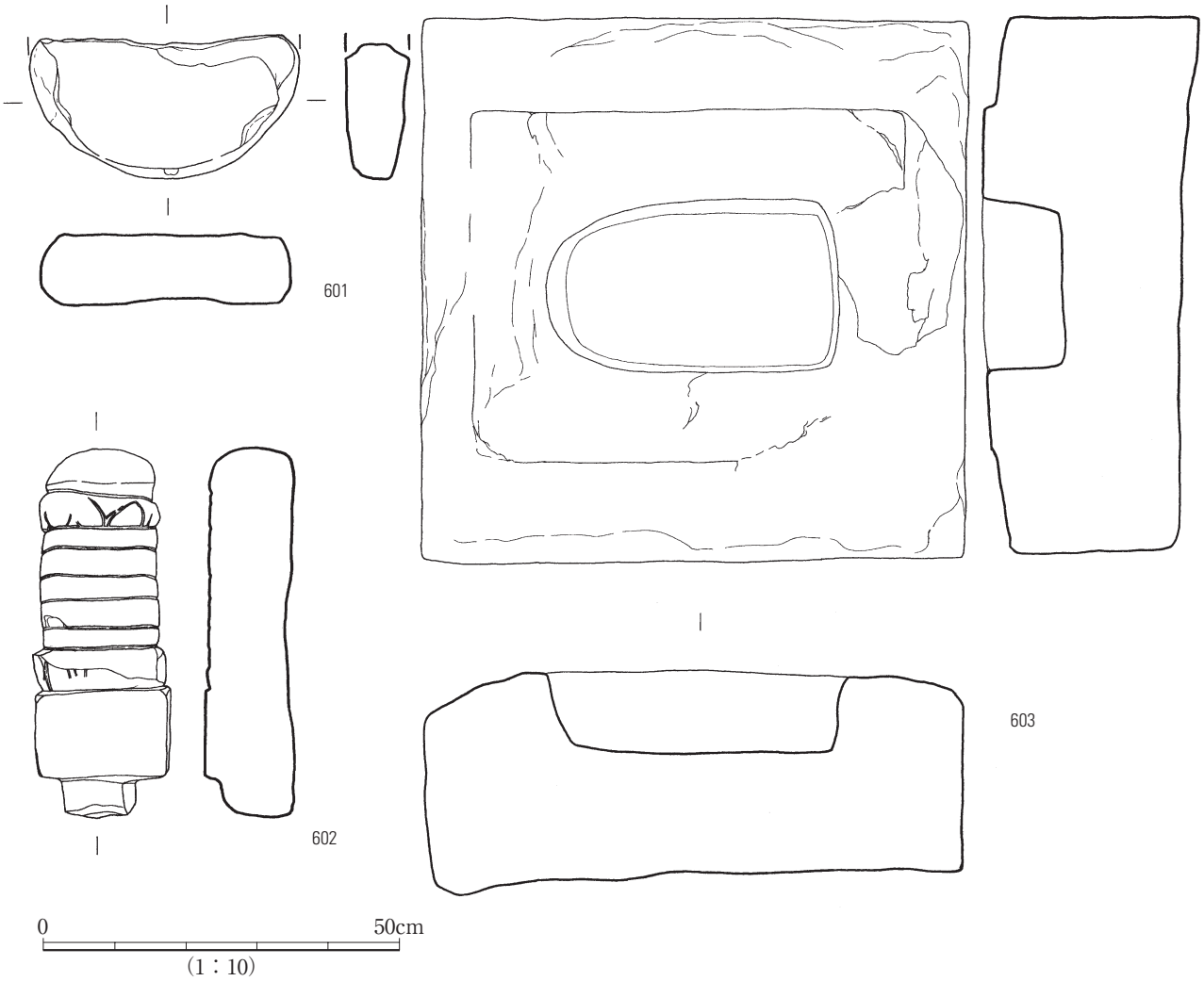
【⑦ 相輪部[第119図－602])】

宝塔の相輪部と考えられる個体が１個体出土している。全長は約52cmで，約17cmの細線により五重に区画された宝輪部の上下に，蓮弁を細線で表現した請花が配置され，その上部に宝珠，下部に露盤が表現される。露盤の下部には約６cmの臍が造られている。断面は約11cm～12cmと非常に扁平で，また，各部の造作も荒く全体に退化した印象である。

【⑧ 基礎部[第119図－603]】

検出状況から板碑の基礎部と考えられる個体が１個体出土している（第119図－603）。検出時は，中台（第117図－597）が上部におかれ，その上に無縫塔の塔身（第115図－592）が立てられていた。

平面形一辺約77cmの正方形で，厚さは25cm前後である。中央に長さ約41cm，幅約14cm，深さ約11cmの隅丸長方形の臍穴が穿たれている。



第119図　Ｄ区出土遺物⑦［石塔片］(S=1/10)

【⑨ 墓碑[第120図－604]】

自然石を利用した墓碑が１個体検出されている。墓碑は高さ約98cm，幅約40～42cm，厚さ20～24cm，正面中央部に「鶴市丸」の文字が陰刻されており，文字の周囲は研磨され平坦な面を形成している。

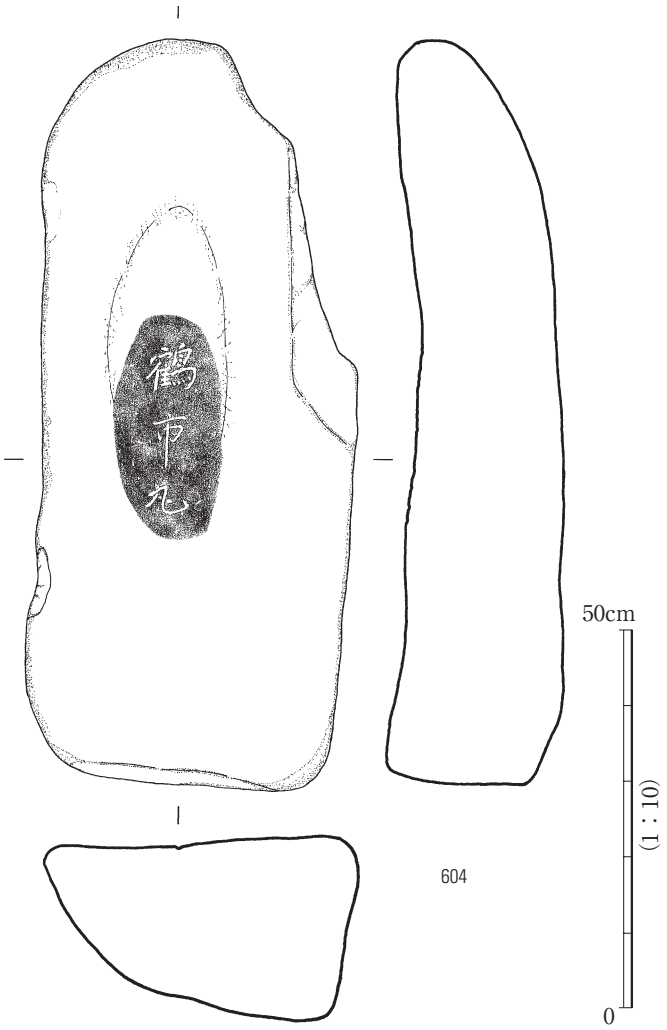
【⑩ 経石[第122図～第124図－605～684]】

板碑（590）の周辺に集中して円礫が253個出土した。このうち，81個に墨書が確認でき，そのうち文字が判別できたものは52個である。

礫は，主に径５cm前後の砂岩で，確認できた文字は40種である。

最も多く確認できた文字は「阿」で，「帝」がこれに次ぐ（第６表）。

文字の組成や，墨書の一つが「那多夜」と確認できる（第122図－612)ことなどから，経石に記された経典は「妙法蓮華経陀羅尼品第二十六」である可能性が高いと考えられる。出土した経石が「陀羅尼品」の一部であった場合，全文字数約1200字が書かれた礫のうち4/5が失われた計算になる。



第120図　Ｄ区出土遺物⑧［墓碑］(S=1/10)

第３節　小結

『日向地誌』（平部嶠南：文献①）の記載や，第一次調査で地蔵後背部に「瑞雲」の銘があったことなどから，曽井第２遺跡が瑞雲寺跡であることはほぼ間違いない。地元住民によると，Ｄ区周辺にはかつて多数の石塔が存在し，ミカン畑や住宅地の造成時にその多くが失われたようである。今回の調査範囲については，寺院の後背斜面に建てられた供養塔が，ミカン畑開墾時に移動されたものと考えられる。

石塔群形成の時期であるが，Ｄ区に限っていえば，板碑の１つ（589）に慶安３（1650）年の銘があること，他の板碑（590）も他地域の形態と比較すると17世紀代に比定できる（原田昭一：文献②）こと，礫石経が盛行する時期が江戸時代である（坂詰秀一編：文献③）ことなどを含めると，17世紀中葉前後と考えられる。

また，確認された礫石経に記された経典が「妙法蓮華経陀羅尼品第二十六」だとすれば，近世初期には「瑞雲寺」が法華宗系の寺院に変容していた可能性も考えられる。

参考文献

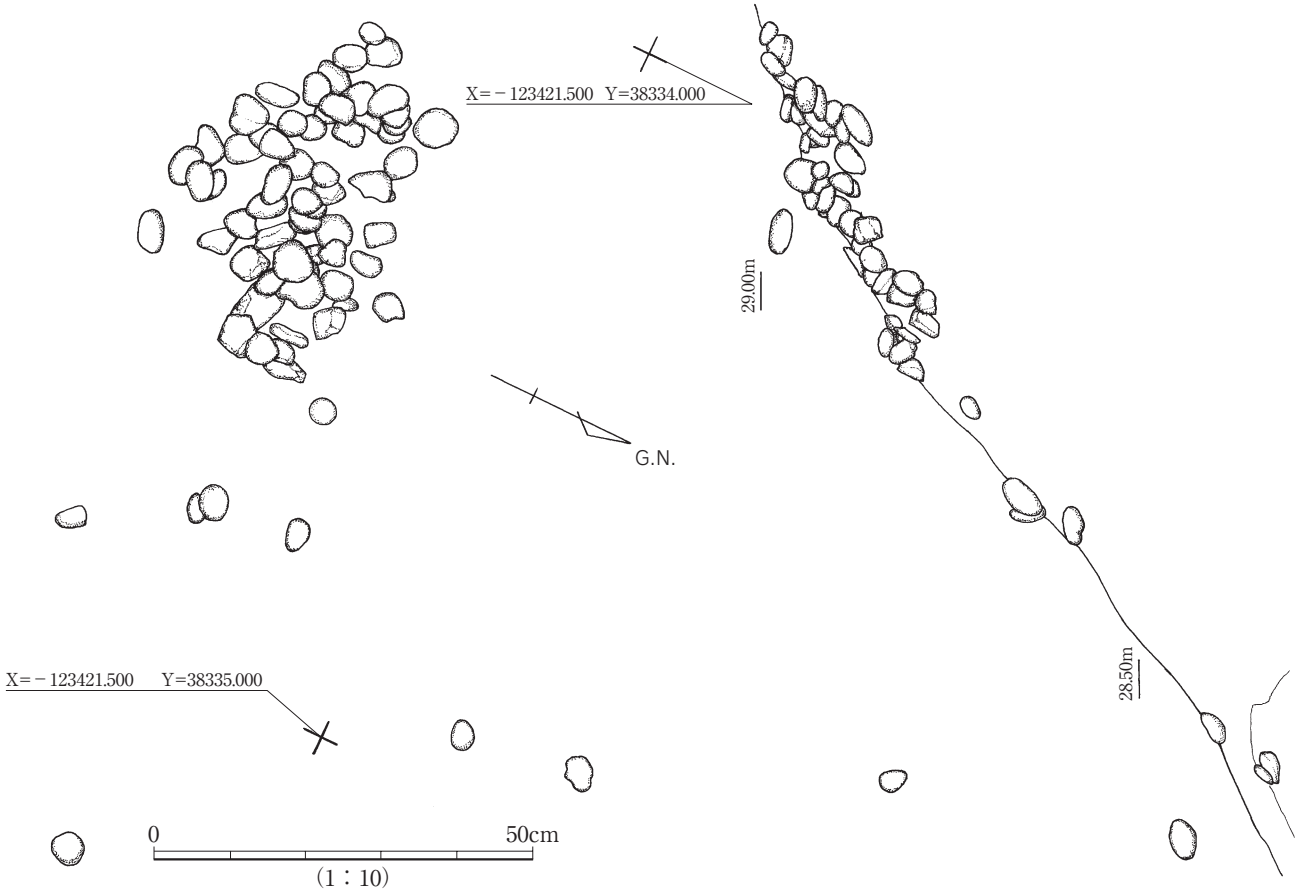
文献①：平部嶠南1884『日向地誌』（1976『日向地誌（復刻版)』青潮社）

『日向地誌』は，平部怖南により明治17（1884）年に記されたものを，1976年に青潮社が復刻したものである。

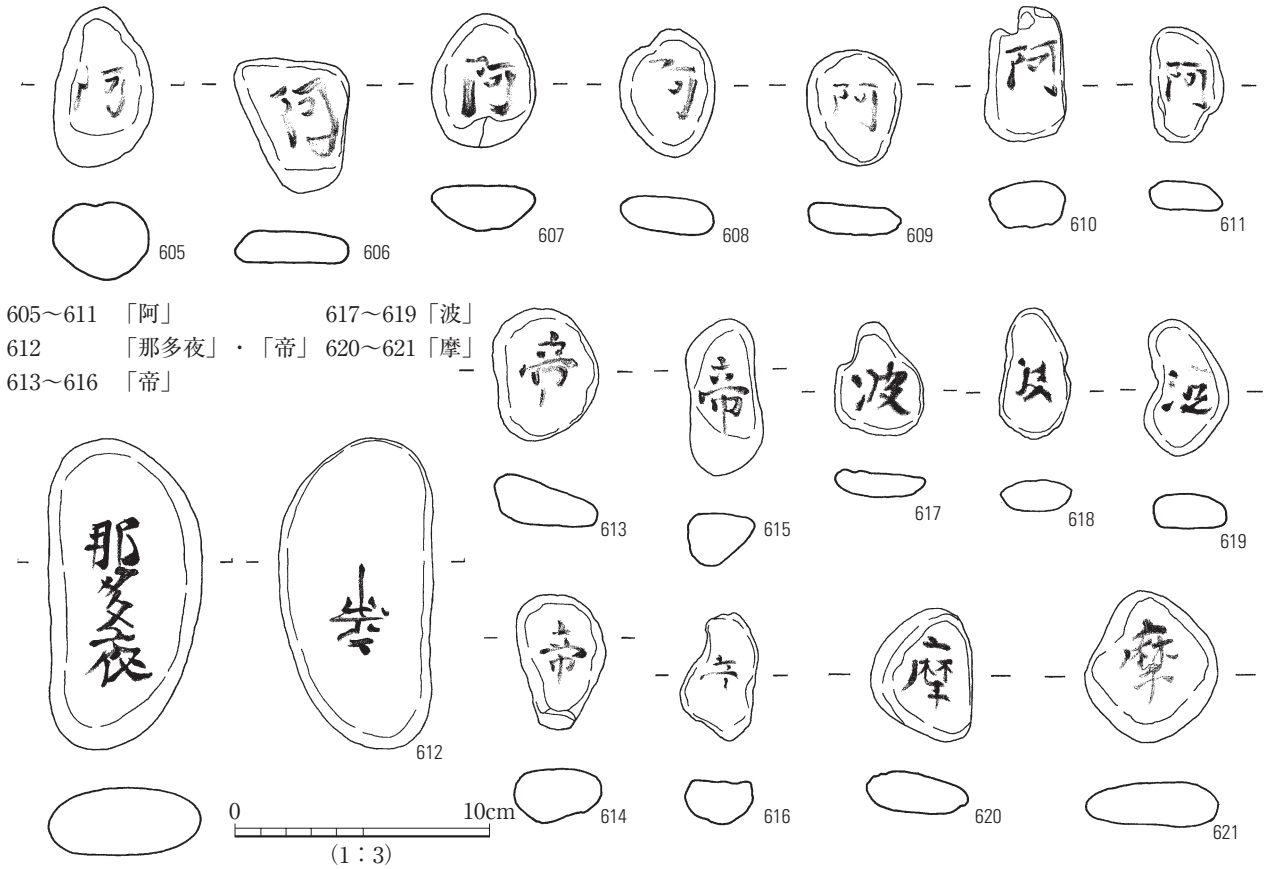
文献②：原田昭一2004「板碑変遷史一豊前・豊後における紀年銘板碑を通して－」『古文化談叢』第51集

文献③：坂詰秀一編2003『仏教考古学事典』

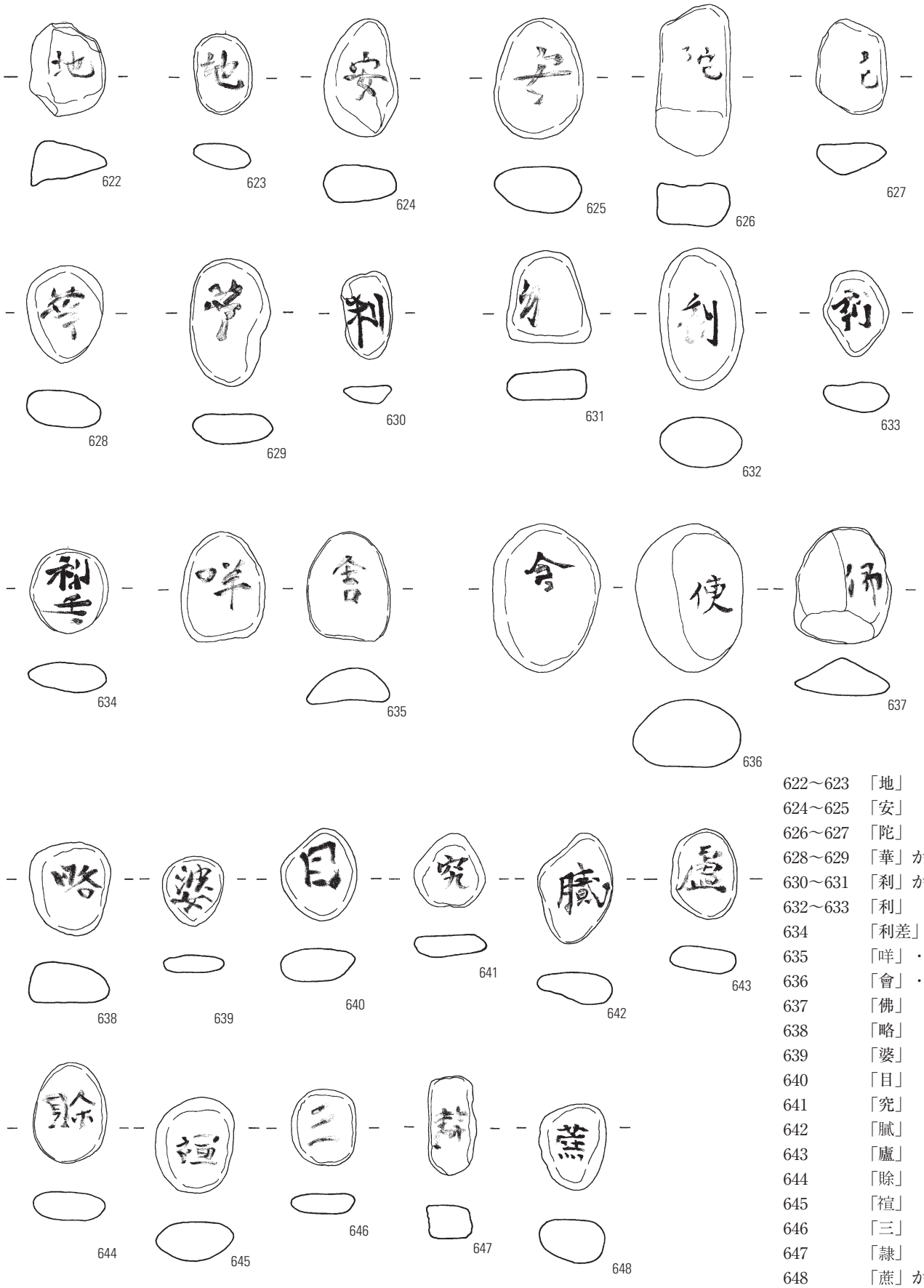
文献④：佐藤進・濱口富士雄編2006『全訳 洪辞海』第二版



第121図　経石出土状況実測図(S=1/10)



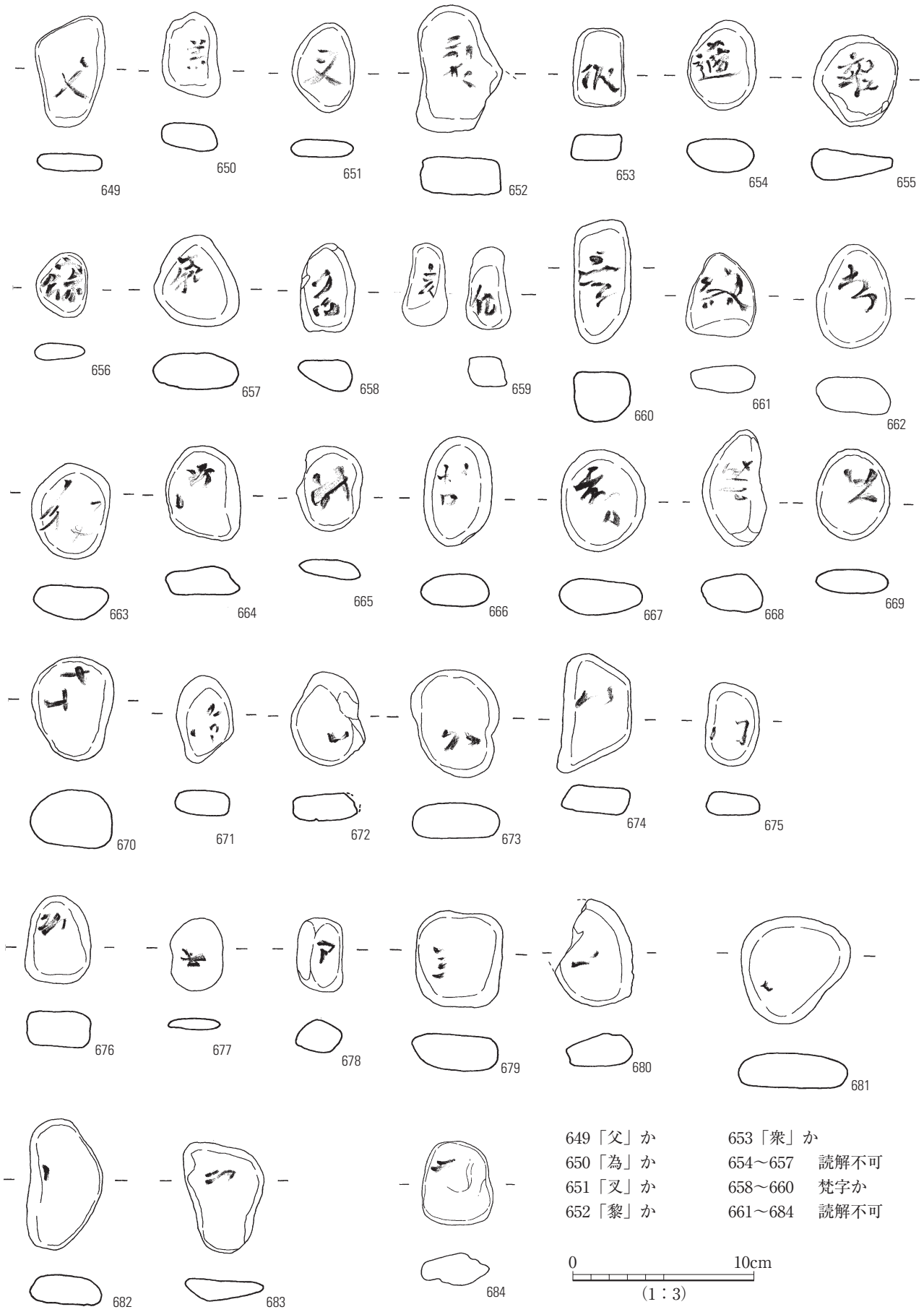
第122図　D区出土遺物⑨［経石］(S=1/3)



622～623　「地」
624～625　「安」
626～627　「陀」
628～629　「華」か
630～631　「利」か
632～633　「利」
634　「利差」か
635　「咩」・「舎」
636　「會」・「便」
637　「佛」
638　「略」
639　「婆」
640　「目」
641　「究」
642　「臓」
643　「盧」
644　「賒」
645　「宣」
646　「三」
647　「隷」
648　「蔗」か

0　10cm
（1：3）

第123図　D区出土遺物⑩［経石］(S=1/3)



649「父」か
650「為」か
651「叉」か
652「黎」か
653「衆」か
654～657　読解不可
658～660　梵字か
661～684　読解不可

第124図　D区出土遺物⑪［経石］(S=1/3)

文字	図番号	数量	石材	出土数に占める割合(%)	墨書確認数に占める割合(%)	「陀羅尼品」における文字数
阿	605 ～ 611	7	砂岩	2.77%	8.33%	18
帝	612 ～ 616	5	砂岩	1.98%	5.95%	5
那多夜	612	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
波	617 ～ 619	3	砂岩	1.19%	3.57%	3
摩	620 ～ 621	2	砂岩	0.79%	2.38%	9
地	622 ～ 623	2	砂岩	0.79%	2.38%	2
安	624 ～ 625	2	砂岩	0.79%	2.38%	2
陀	626 ～ 627	2	砂岩	0.79%	2.38%	16
華？	628 ～ 629	2	砂岩	0.79%	2.38%	12
刹？	630 ～ 631	2	砂岩	0.79%	2.38%	6
利	632 ～ 633	2	砂岩	0.79%	2.38%	7
利差?	634	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
咩	635	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
舎	635	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
會	636	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
便	636	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
佛	637	1	砂岩	0.40%	1.19%	25
略	638	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
婆	639	1	砂岩	0.40%	1.19%	11
目	640	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
究	641	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
膩	642	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
盧	643	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
賒	644	1	砂岩	0.40%	1.19%	3
袒(禰)	645	1	砂岩	0.40%	1.19%	7
三	646	1	砂岩	0.40%	1.19%	4
隷	647	1	砂岩	0.40%	1.19%	12
蔗？	648	1	砂岩	0.40%	1.19%	5
父？	649	1	砂岩	0.40%	1.19%	1
為(爲)？	650	1	砂岩	0.40%	1.19%	6
叉？	651	1	砂岩	0.40%	1.19%	9
黎？	652	1	砂岩	0.40%	1.19%	2
衆？	653	1	砂岩	0.40%	1.19%	5
梵字？	658 ～ 660	4	砂岩	1.58%	4.76%	−
読解不可	654 ～ 657	4	砂岩	1.58%	4.76%	−
読解不能	661 ～ 684	24	砂岩	9.49%	28.57%	−

第 6 表　D 区出土経石一覧表

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
32	SF5	SF5－1	3	土師器		高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/6	
33	SF5	SF5	88	磁器	青磁	皿	口縁部～底部	内外面施釉。内面に2～4条の縦位花弁文。	釉調:オリーブ灰(10Y6/1)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	精良	3/4	推定口径8.2cm・底径5.2cm・器高2.7cm
34	SE3	SE3－3+SE3－7+SE3－8+SE3－9+SE3－13	70	磁器	青磁	碗	口縁部～底部	内外面施釉。底部は全面施釉後，輪状に掻き取っている。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y7/1)	精良	1/3	推定口径15.5cm・推定底径6.3cm・高さ6.65cm
35	SE3	SE3－5+SE3－11+SE3－12+SE3－14	91	磁器	青磁	坏	口縁部～底部	内外面施釉。高台内部と内面見込み部は無釉。内面見込みに草木文の印刻あり。	釉調:灰オリーブ(7.5Y6/2)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/5	推定口12.5cm・底径6.8cm・器高3.2cm
36	SE3	SE3－1	98	磁器	青磁	坏	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:緑灰(7.5YG6/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/20	推定口径11.8cm
37	SE3	SE3－16	96	磁器	青磁	坏	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/20	推定口径11.8cm
38	SE1	SE1	78	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面に間弁の無い鎬蓮弁文あり。	釉調:オリーブ灰(7.5Y6/2)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/20	
39	SE1	SE1－2	59	須恵器		坏	蓋部	内外面ともに回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	1㎜程の灰白色土粒を含む	1/10	
40	SE8	SE8－1	89	磁器	青磁	皿	口縁部～底部	内外面施釉。内面に2条の縦位花弁文。内面見込部に草花文らしき文様あり	釉調:オリーブ灰(25GY6/1)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	9/10	推定口径8.1cm・底径5.0cm・器高3.1cm
41	SE9	SE9	399	瓦質陶器		不明	蓋？盤？	内外面は回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	1㎜以下の光沢粒と黒褐色土粒を多く含む。	1/6	推定口径17.0cm・推定底径12.0cm・推定器高3.7cm
42	SE9	SE9	309	磁器	肥前系染付	小皿	口縁部～体部	内外面施釉。外面に松木の文様，内面側面に四方襷文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/10	ー
43	石列A区	石レツA西	132	磁器	青花染付	皿	体部～底部	外面腰部に草花文，高台外面に2本線。内面見込み部に2本の界線と草花文。高台畳付部には釉がかかっていない。	釉調:明緑灰(5G7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	推定底径6.8cm
44	石列A区	石レツA西	171	陶器	瀬戸・美濃系	天目茶碗	口縁部～体部	内外面施釉（鉄釉）。	釉調:褐(7.5YR 4/3)・黒褐(7.5YR3/1)	胎土:灰黄(2.5Y 7/2)	1㎜程の暗褐色石粒をわずかに含む	1/10	推定口径12.4cm
45	石列A区	石レツA西	177	磁器	初期伊万里？	皿	底部	内外面施釉。内面見込み部に波のような文様が確認できるが，細片のため不明。高台畳付部は砂が付着している。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	推定底径4.6cm
46	石列A区	石レツA西	345	磁器	肥前系染付	不明	体部	内外面施釉。外面に寿の文字。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/8	－
53	SF1	SF1	356	磁器	産地不明	碗	体部～底部	内外面施釉（貫入多し）・無文。体部下半から底部にかけて無釉。	釉調:浅黄(5Y7/3)	胎土:灰白(5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/6	推定底径3.6cm
54	SF1	SF1	283	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。外面はおそらく椿花の草花文。内面は見込部に圏線と椿花文。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/3	推定つまみ径4.3cm
55	SF1	SF1	307	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。蛇の目凹形高台。内面見込み部に足付ハマの痕跡あり。	釉調:明青灰(5G7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	4/5	口径13.7cm，底径7.4cm，器高3.55cm
56	SF1	SF1	338	磁器	肥前系染付	蓋付鉢	底部付近	内外面施釉。畳付部は無釉。外面は文様があるが詳細不明。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	推定底径7.4cm
57	SF1	SF1	274	磁器	肥前系染付	鉢（角鉢）	口縁部～底部	口縁部端反りの8角鉢。内外面施釉。外面は幾何学文。内面は区画内に草花文。内面見込部に昆虫文。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	2/5	推定口径11.2cm，推定底径5.1cm，器高5.45cm
58	SF1	SF1	328	磁器	肥前系染付	小杯	口縁部～底部	内外面施釉。口縁部に口紅。外面無文。内面見込部に笹らしき文様。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/2	推定口径5.7cm，推定底径2.65cm，器高2.85cm
59	SF1	SF1	38	土師器		円盤形製品	—	底部を転用したものと考えられる。3か所に穿孔，表裏面には研磨のためかツルツルしている。	灰白色(7.5YR78/1)	灰白色(7.5YR78/1)	－	1/10	現存長3.2cm，現存幅4.2cm，厚さ0.8cm
60	SF1	SF1	379	陶器	産地不明	仏花瓶	口縁部～底部	内外面施釉。畳付は無釉。頸部に耳状把手が2つ。	釉調:暗紫灰(5RP4/1)	胎土:灰白(N6/)	含有物はほとんど無い。	9/10	口径9.0cm，底径5.9cm，器高12.8cm
61	SF1	SF1	334	磁器	肥前系染付	瓶（徳利）	口縁部～底部	外面施釉。外面は胴部に花文。口縁部は玉縁状に肥厚している。内面は頸部付近まで施釉。底部に砂付着。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/1	口径3.6cm，底径8.7cm，器高25.35cm
64	SF3・SF4	SF3+SF4南	259	磁器	肥前系染付	碗(大形碗)	口縁部～体部	内外面施釉。外面は折松葉文と口縁部に圏線。内面は口縁部に圏線。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/6	推定口径22.4cm
66	SF4	SF4南	139	陶器	備前系	甕	口縁部～肩部	内外面に回転ナデ。内面頸部付近は斜方向のナデ	外面:灰赤(2.5YR4/2)	内面:褐灰(10YR6/1)	10㎜程の灰白粒を少量，3㎜以下の白・透明光沢粒を含む	－	推定口径38.8cm
67	SF4＋包含層	SF4南+F8+349	207	陶器	唐津系	大皿	口縁部～体部	内外面緑色施釉。白化粧土の刷毛目がわずかにあり。	釉調:緑	胎土:黄灰(2.5Y6/1)	精良	1/8	推定口径31.4cm
68	SF4	SF4下	298	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。内面に野菜文。蛇ノ目凹形高台。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/8	推定口径14.7cm，推定底径7.9cm，推定器高4.2cm
69	SF4＋包含層	SF4南+Ⅲ	184	磁器	肥前系染付(波佐見？)	皿	体部	内外面に施釉。口縁部内面には格子文，見込み部には水らしき文様。	外面:オリーブ灰(10Y5/2)	内面:緑灰(7.5GY56/1)	精良	1/6	
70	SF4	SF4南	361	陶器	産地不明	碗	体部～底部	内外面施釉(貫入多し)・無文。畳付部無釉。	釉調:浅黄(5Y7/3)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	2/3	推定底径3.8cm
71	SF4	SF4南	363	陶器	産地不明	碗	体部～底部	内外面施釉。白土刷毛目塗り。	釉調:にぶい黄橙(10YR7/2)	胎土:褐灰(10YR6/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/6	推定底径4.5cm
72	SF4＋包含層	SF4南＋Ⅲ+F8上	279	磁器	肥前系染付	鉢(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。外面は草花文（おそらく牡丹）。内面は口縁部付近に雷文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/4	推定口径8.6cm
76	SZ1	SZ1	267	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は圏線と蝶文。内面は口縁部と見込部に圏線。見込部に記号。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/1	口径10.2cm，底径3.9cm，器高5.8cm
77	SZ1	SZ1	241	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。口縁部に圏線，見込部に圏線と記号文。外面は笹文，口縁部と底部に圏線。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/5	推定口径9.8cm，底径3.8cm，器高5.8cm
78	SZ1	SZ1	240	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。内面無文。外面は幾何学文。底部に2本の圏線。内面は，口縁部付近に退化した雷文を，見込部は圏線と水文。	釉調:灰白(N8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	5/6	推定口径10.8cm，底径4.0cm，器高6.0cm
79	SZ1	SZ1	229	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は口縁部付近は雨降り文，体部は何かは書かれているが不明である。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/10	推定口径10.1cm
80	SZ1	SZ1	257	磁器	肥前系染付	碗（朝顔形碗）	口縁部～底部	内外面施釉。外面は文様があるが，内容不明（山水文の可能性）。内面は無文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/8	推定口径11.8cm，推定底径5.6cm，器高6.7cm

第7表　出土遺物観察表①

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
81	SZ1	SZ1	236	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。全面に草花文。内面は口縁部付近に雷文，見込み部　に環状の自然らしき文様あり。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/2	推定口径12.55cm,底径5.0cm,器高5.0cm
82	SZ1+石列B･D付近	SZ1+石レツB･D付	225	磁器	肥前系染付	碗	口縁部付近～底部	内外面施釉。外面には草花文。畳付部は無釉で砂付着。見込部に蛇の目釉剥ぎ。底部付近に圏線。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	2/5	推定底径4.1cm
83	SZ1	SZ1	243	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面は格子目（幾何学）文。口縁部は圏線。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/10	推定口径7.8cm
84	SZ1	SZ1	261	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	内外面施釉。内外面に宝文（巻物の変形か？）。口唇部に口紅。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	9/10	口径8.3cm,底径2.85cm,器高3.9cm
85	SZ1+SF1	SZ1+SF1	272	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	口縁部は端反。内外面施釉。外面は波線をもつ区画間，窓絵に亀か花？と蠟か虫。内面は口縁部に圏線。区画は主に朱色。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/1	口径8.9cm,底径3.4cm,器高4.45cm
86	SZ1	SZ1	249	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	口縁部～体部	内外面施釉。外面は半菊花唐草文と圏線。内面は口縁部に圏線。	釉調:灰白(N8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/16	推定口径9.6cm
87	SZ1	SZ1	357	陶器	産地不明	碗	口縁部～底部	内外面施釉（貫入多し）・無文。体部下半から底部にかけて無釉。	釉調:灰オリーブ(5Y6/2)	胎土:灰白(5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	2/3	口径8.5cm,底径3.2cm,器高4.5cm
88	SZ1	SZ1	358	陶器	産地不明	碗	口縁部～底部	内外面施釉（貫入多し）。体部下半から底部にかけて無釉。外面に笹文。	釉調:灰白(5Y7/2)	胎土:灰白(5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/3	推定口径10.55cm,底径3.8cm,器高5.5cm
89	SZ1+包含層	SZ1+D11Ⅱ	221	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草文（松葉文）。畳付部は無釉。見込部は蛇の目釉剥ぎ。	釉調:灰白(7.5Y7/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	4/5	推定口径11.9cm,底径5.0cm,器高5.0cm
90	SZ1+包含層	SZ1+F8上	371	磁器	清朝磁器･徳化窯	碗(小碗)	口縁部～底部	内外面に白磁調の施釉。高台内は無釉。器壁が2㎜程と薄い。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	4/5	口径8.05cm,底径3.35cm,器高4.15cm
91	SZ1	SZ1	352	陶器	唐津系	碗	体部～底部	内外面施釉（貫入多し）・無文。体部下半から底部にかけて無釉。胎土目積み痕。	釉調:浅黄(7.5Y7/3)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/5	推定底径4.4cm
92	SZ1	SZ1	252	磁器	肥前系青磁染付	碗	体部～底部	内外面施釉，外面青磁釉。内面は見込部に圏線と五弁花。	釉調:明緑灰(10GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/10	不明
93	SZ1	SZ1	250	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	体部～底部	内外面施釉。外面は破損が大きく圏線のみ確認。内面は見込部に昆虫文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/4	底径5.4cm
94	SZ1	SZ1	281	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。内外面は草花文（おそらく紅葉）で一部赤彩色。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	3/4	つまみ径3.7cm,口縁部径8.7cm,器高2.45cm
95	SZ1	SZ1	297	磁器	肥前系染付	皿	底部付近	内外面施釉。外面に圏線。内面は内容不明（草木文か山水風景文か）。蛇ノ目凹形高台。高台内銘款は渦福。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/5	推定底径8.8cm
96	SZ1	SZ1	296	磁器	肥前系染付	皿	底部付近	内外面施釉。外面に圏線。内面は内容不明（宝文か）。蛇ノ目凹形高台。高台内銘款は渦福。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/5	推定底径9.0cm
97	SZ1	SZ1	293	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は無文。内面は格子文と梅花文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	9/10	口径10.2cm,底径6.0cm,器高2.25cm
98	SZ1	SZ1	292	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は無文。内面は山水風景図。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	4/5	推定口径10.1cm,底径5.8cm,器高2.15cm
99	SZ1	SZ1	291	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は無文。内面は山水風景図。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	9/10	口径10.5cm,底径5.25cm,器高2.15cm
100	SZ1	SZ1	290	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は無文。内面は山水風景図。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/2	推定口径13.5cm,底径5.4cm,器高2.45cm
101	SZ1	SZ1+SZ1－2	299	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。内面に山水風景文。蛇ノ目凹形高台。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	9/10	口径14.9cm,底径8.5cm,器高4.45cm
102	SZ1	SZ1	306	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。蛇の目凹形高台。内面見込み部に足付ハマの痕跡あり。	釉調:灰白(10Y7/1)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	精良	1/1	口径13.35cm,底径7.4cm,器高3.6cm
103	SZ1	SZ1	294	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は唐草文。内面は金魚。蛇ノ目凹形高台。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	4/5	口径12.7cm,底径7.7cm,器高3.05cm
104	SZ1	SZ1	367	陶器	産地不明	小皿	口縁部～底部	内外面に黄褐色施釉。見込に3か所の胎土目積痕と花弁文などの印刻あり。	釉調:明黄褐(2.5Y7/6)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	9/10	口径9.2cm,底径3.85cm,器高3.1cm
105	SZ1	SZ1	368	磁器	珉平焼？	小皿	口縁部～底部	内外面に明黄褐色施釉。見込に龍文らしき文様。底部に1か所のハリ支え痕か。	釉調:明黄褐(2.5Y6/6)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/3	推定口径7.4cm,推定底径3.9cm,器高1.7cm
106	SZ1	SZ1	372	陶器	産地不明	碗(湯呑み碗)	口縁部～底部	内外面施釉。底部は無釉。外面に明黄褐色土の刷毛塗りを施す。他に同じ規格の個体が3個体以上ある。	釉調:明黄褐(2.5Y6/6)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	2/3	推定口径6.55cm,底径3.5cm,器高5.4cm
107	SZ1	SZ1	316	磁器	肥前系染付	小形碗(湯呑碗)	口縁部～底部	内外面施釉。胎土は陶胎。外面は縦位の縞文と墨絵。内面は無文。	釉調:灰白(N8/)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	9/10	推定口径6.3cm,推定底径3.2cm,器高5.4cm
108	SZ1	SZ1	318	磁器	肥前系染付	小形碗(湯呑碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は矢羽根文。内面は無文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定口径6.3cm,推定底径3.35cm,器高5.45cm
109	SZ1	SZ1	322	磁器	肥前系染付	猪口	口縁部～底部	内外面施釉。外面は樹木と網干らしき風景文。内面無文。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/2	推定口径6.1cm,底径3.15cm,器高4.75cm
110	SZ1	SZ1	324	磁器	肥前系染付	小杯	口縁部～底部	内外面施釉。外面は笹文。内面無文。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/5	推定口径6.4cm,推定底径2.8cm,器高3.95cm
111	SZ1	SZ1	278	磁器	肥前系染付	鉢(蓋付鉢)	口縁部～体部	内外面施釉。外面は草花文。内面は無文。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/10	推定口径9.4cm
112	SZ1	SZ1	373	陶器	産地不明	鉢	口縁部～体部	外面施釉。内面は体部のみ施釉。口縁部付近は無釉。口唇部には口紅。外面には白色化粧土と鉄釉色の草文。一部縦位の取り付け耳らしきものも確認できる。	釉調:灰褐(7.5YR6/2)	胎土:にぶい黄橙(10YR7/3)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/8	－
113	SZ1	SZ1	311	磁器	肥前系染付	小皿(紅皿)	口縁部～底部	内外面施釉。外面に蛸唐草の型押し。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定口径6.2cm,推定底径2.2cm,器高1.95cm
114	SZ1	SZ1	331	磁器	肥前系染付	仏飯器	口縁部～底部	内外面施釉。脚部が一部無釉。坏部下方に圏線。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(2.5GY8/2)	精良	1/2	底径3.5cm
115	SZ1	SZ1	395	陶器	薩摩系	仏花瓶	頸部～底部	外面施釉。内面頸部付近まで施釉。外面は回転ナデ。2か所の耳付き。	釉調:暗褐(7.5YR2/1)	胎土:にぶい橙(7.5YR7/4)	含有物は殆どなし。	9/10	底径5.3cm
116	SZ1	SZ1	335	磁器	肥前系染付	瓶(徳利)	胴部～底部	外面施釉。外面は胴部に植物文。内面は無釉。内面底部付近に黒色変色。底部に砂付着。336と同一個体か。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/4	底径7.8cm
117	SZ1	SZ1	400	陶器	産地不明	人形	顔部	外面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	灰白(10YR7/1)	1㎜以下の褐色土粒を多く含む	－	

第8表　出土遺物観察表②

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
118	SZ1	SZ1	375	陶器	産地不明	火入	体部～底部	内面は無釉。外面は釉でなく化粧土による装飾か？前面に弧状の窓あり。底部に脚部３か所。底面に刻印あり銘は不明瞭「□□堂」とだけ判読できる。	釉調:黒(10Y2/1)	胎土:灰白(10YR8/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	2/5	推定底径10.7cm
119	SZ1	SZ1	388	陶器	薩摩系	土瓶	体部	内外面施釉。注口部あり。外面の頸部から胴部上半にかけて複数の沈線文。389と同一個体か。	釉調:灰白(5Y7/2)	胎土:にぶい褐(7.5YR5/3)	１mm以下の乳白色土粒を多く含む	1/8	
120	SZ1	SZ1	390	陶器	薩摩系	土瓶	体部	内外面施釉。注口部あり。外面口縁部付近に10条ほどの沈線文。	釉調:暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	胎土:にぶい褐(7.5YR5/4)	１mm以下の灰白色土粒を多く含む	1/8	
121	SZ1	SZ1	387	陶器	薩摩系	土瓶	蓋部	外面施釉。内面無釉。内外面回転ナデ。頂部に摘部あり。	釉調:黒褐(7.5YR3/1)	胎土:灰褐(7.5YR4/2)	１～２mm程の黒褐色・灰褐色土粒を含む	1/3	推定基部径6.65cm
122	SZ1	SZ1	389	陶器	薩摩系	土瓶	体部	内外面施釉。外面の頸部から胴部上半にかけて複数の沈線文。388と同一個体か。	釉調:灰オリーブ(5Y4/2)	胎土:にぶい褐(7.5YR5/3)	１mm以下の乳白色土粒をわずかに含む	1/5	推定口径9.3cm
123	SZ1	SZ1	152	陶器		擂鉢	底部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には７条以上を単位とする擂目が放射状に施される。	外面:赤褐(10R 5/3)	内面:赤褐(10R 5/3)	２mm以下の灰白・黒色粒を含む	1/8	推定底径13.3cm
124	SZ1＋包含層	SZ1+D9 Ⅲ	158	陶器		擂鉢	底部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には９条を単位とする放射線状の擂目。底部は工具によるナデらしき痕跡。	外面:灰褐(5YR 5/2)	内面:赤褐(10R 4/4)	３mm以下の乳白色粒を含む		推定底径17.1cm
125	SZ1	SZ1	391	陶器	薩摩系	土瓶	底部	内面施釉。外面は無釉で，回転ナデの痕跡が著しく残る。	釉調:灰褐(5YR6/2)	胎土:にぶい橙(2.5YR6/4)	１mm程の灰白色，灰褐色，黒褐色土粒を多く含む	1/6	推定底径6.65cm
126	SZ1＋SZ5＋包含層	SZ１+SZ5+26 Ⅲ	144	陶器	東南アジア産？	四耳壺	頸部～胴部	外面肩部には耳，頸部には２～３条の凹線，全面に釉がかかっている。内面は無釉で，回転ナデが施されている。	外面:灰黄褐(10YR 4/2)	内面:暗褐(10YR3/3)	１mm以下の白色，0.5mm以下の黒色粒を含む	－	
127	SZ1	SZ1	402	瓦質陶器		鉢	胴部～底部	内面は回転ナデ。外面タタキによる文様。胴部中央部に獅子頭のような飾りをもつ。401と同一個体か。	胎土:灰(N6/)	胎土:灰(N6/)	１mm程の暗赤褐色土粒を多く含む	1/4	底径12.2cm
128	SZ1	SZ1	381	瓦質陶器		火鉢	頸部～体部	外面は亀甲状と格子状の刻文。内面は回転ナデ	褐灰(10YR5/1)	褐灰(10YR4/1)	１mm以下の黒褐色・灰白色土粒，光沢粒を含む	1/20	
144	SZ2	SZ2	182	陶器	唐津(内野山系？)	碗	口縁部付近～底部	高台部分以外の内外面施釉。外側緑銅色。	外面:暗オリーブ(7.5Y4/3)	内面:灰オリーブ(5Y6/2)	精良	4/5	推定底径4.2cm
145	SZ3	SZ3	313	磁器	肥前系染付(青磁染付)	筒形碗(湯呑碗)	口縁部～底部付近	内外面施釉，外面青磁釉。内面は口縁部に四方襷文，腰部に２本の圏線。	釉調:(外面)灰白(10Y7/1),(内面)明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	1/16	推定口径7.8cm
146	SZ3＋SZ4	SZ3+SZ4	404	土師質土器		焙烙	口縁部～胴部	内外面は回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	１～３mmの赤褐色・黒褐色・灰褐色土粒，金雲母・黒色光沢粒を含む	1/16	推定口径32.8cm
147	SZ4	SZ4	245	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面は水辺の葦の文様に見える。腰部に圏線。内面は口縁部と腰部に圏線。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/3	－
148	SZ4	SZ4	326	磁器	肥前系染付	小杯	口縁部～底部	内外面施釉。外面は流水と紅葉の文様。内面無文。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	3/5	推定口径6.6cm，底径2.65cm，器高3.3cm
149	SZ5	SZ5	128	磁器	肥前系染付	染付　皿	底部	内外面施釉。底部は蛇の目高台タイプ。内面見込み部に文様あり。	釉調:水色	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/5	推定底径11.0cm
150	SZ5	SZ5	68	陶器	常滑？	甕	底部	おそらく常滑焼。外面は回転ナデ，内面は棒状工具によるナデ，底部は平行文の当て具痕が放射気味に残る。	暗褐(10YR3/3)～にぶい黄橙(10YR7/4)	暗褐(7.5YR3/4)	１mm以下の暗褐色土粒を含む	1/20	
151	SZ5	—	142	陶器	備前？	甕	底部	内面は主に横方向のナデ，外面は比較的丁寧なナデ。	外面:灰褐(5YR 6/2)	内面:暗赤灰(7.5R4/1)	２mm程の白色粒を少量，１mm以下の灰色粒を多く含む。	－	推定底径30.2cm
152	SZ6	SZ6+F8上	219	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。畳付部は無釉。底部付近に圏線。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:明オリーブ灰(5GY7/1)	精良	1/2	推定口径9.6cm，推定底径4.2cm，器高5.0cm
153	SZ6	SZ6	220	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面にはコンニャク印判による施文（内容不明）。畳付部は無釉。底部付近に圏線。	釉調:灰白(5Y7/1)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	精良	1/2	推定口径10.5cm，推定底径4.5cm，器高5.8cm
154	SZ6	SZ6	238	磁器	肥前系染付	碗	体部～底部	内外面施釉。内外面菊散文。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	底径4.0cm
155	SZ6	SZ6	359	陶器	産地不明	碗	口縁部～底部	内外面施釉(貫入多し)・無文。畳付部無釉。	釉調:にぶい黄(2.5Y6/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/3	推定口径12.3cm，推定底径3.7cm，器高5.3cm
156	SZ6	SZ6	349	磁器	産地不明	蓋付碗	蓋部	内外面は白磁調の施釉・無文。摘頂部は一部無釉。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(2.5Y8/1)	精良	7/8	摘部径3.0cm，基部径8.6cm，器高3.2cm
157	SZ6	SZ6	201	陶器	唐津系	皿	体部～底部	内外面褐色施釉。底部付近は無釉。高台内は兜巾底。見込み部に鉄絵による草文。	釉調:暗灰黄(7.5Y5/2)	胎土:にぶい橙(7.5YR7/3)	精良	4/5	底径4.9cm
158	SZ6＋石列Ｄ付近	SZ6+石レツD中付	191	陶器	唐津京焼風	碗	口縁部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。高台内に「方」の墨書。見込み部に水と草花の文様。	釉調:淡黄(2.5Y8/4)	胎土:浅黄橙(10YR8/4)	精良	1/8	口径12.7cm・底径4.6cm・器高5.2cm
159	SZ6	SZ6	364	陶器	産地不明	碗	体部～底部	内外面施釉。白土刷毛目塗り(内面渦状)。	釉調:灰白(7.5YR8/1)	胎土:にぶい橙(5YR6/3)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/4	推定底径4.0cm
160	SZ6＋包含層	SZ6+F8上	203	陶器	唐津系	鉢	口縁部	内外面口縁部付近のみ銅緑色施釉。口唇部と口縁外部は工具による調整。	釉調:緑灰(5G5/1・6/1)	胎土:にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	1/10	推定口径33.6cm
161	SZ6	SZ6	206	陶器	唐津系	水差	口縁部～体部	外面と口縁部内面は褐色施釉。内面はオリーブ黄色施釉。外面に白化粧土と緑釉の刷毛目文様あり。	釉調:灰オリーブ(5Y5/2)・オリーブ黄(5Y6/3)	胎土:灰褐(7.5YR5/2)	精良	1/10	推定口径20.6cm
164	SZ7	SZ7	218	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。底部に記号が書かれている。畳付部に砂が付着している。底部付近に圏線。	釉調:灰白(7.5Y7/1)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/2	推定口径10.1cm，推定底径4.1cm，器高4.95cm
165	SZ7＋包含層	SZ7+F8上	376	陶器	唐津(陶胎染付)	火入	口縁部～底部	外面は施釉。底部付近は無釉。外面に染付の草花文。内面は口縁部付近のみ施釉。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:淡黄(5YR8/3)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/2	推定口径10.7cm，底径5.9cm，器高7.4cm
166	SZ7	SZ7	155	陶器	堺系？	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデと横方向のナデによる調整。内面には12条を単位とする擂目が施される。口縁部外側には３本の凹線を，内側には縁帯を有する。	外面:赤褐(10R 4/3)	内面:赤褐(10R 4/3)	３mm以下の白色，２mm以下の黒色粒を含む	1/10	推定口径31.0cm

第９表　出土遺物観察表③

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
168	SZ8	SZ8	263	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	体部～底部	内外面施釉。内外面とも線描による菊散らし文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/3	底径3.2cm
169	SZ8	SZ8	351	陶器	唐津系	小丸碗	体部～底部	内外面は施釉。高台内外面は無釉。外面に一部緑色釉の文様が確認できる。	釉調:灰白(7.5Y7/2)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/6	底径3.2cm
170	SZ8	SZ8	248	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	体部～底部	内外面施釉。外面は破損が大きく圏線のみ確認。内面は見込部に記号文(昆虫文？)と圏線。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5GY8/1)	精良	1/4	推定口径6.0cm
171	SZ8	SZ8	353	陶器	唐津系	碗	口縁部～体部	内外面施釉（貫入多し）・無文。	釉調:浅黄(5Y7/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/8	推定口径9.5cm
172	SZ8	SZ8	256	磁器	肥前系染付（青磁染付）	碗	口縁部～体部	内外面施釉，外面青磁釉。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	推定口径11.6cm
173	SZ8	ＳＺ８	186	陶器	肥前系？	皿	口縁部～底部	内外面に施釉。高台内部は無釉で赤化している。	外面:明オリーブ灰(5GY7/1) 高台内:明赤褐(2.5YR5/8)	内面:明オリーブ灰(5GY7/1)	精良	1/5	推定口径11.8cm・推定底径6.5cm・器高3.7cm
174	SZ8＋包含層	SZ8+F8上	344	磁器	肥前系染付	香炉・火入？	口縁部～胴部	内外面施釉で無文。釉色は内面が灰白色，外面が明緑灰色。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/6	推定口径8.4cm
175	SZ8	SZ8	366	陶器	産地不明	碗？火入？	体部～底部	外面に灰色施釉。内面無釉で黒変あり。回転篦ケズリ痕が残る。高台内も回転篦ケズリ痕が明瞭に残る。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/4	推定底径7.0cm
176	SZ8	SZ8	325	磁器	肥前系染付	小杯	口縁部～底部	内外面施釉。外面は山水風景文。内面無文。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/3	推定口径6.6cm，推定底径2.9cm，器高4.6cm
177	SZ8	SZ8	157	陶器	堺系？	擂鉢	口縁部	内外面は主に回転ナデと横方向のナデによる調整。内面には11条以上を単位とする擂目が施される。口縁部外側には2本の凹線。	外面:赤褐(10R 4/4)	内面:赤褐(10R 4/4)	3㎜以下の灰白色，0.5㎜以下の透明光沢粒を含む	1/10	推定口径21.5cm
178	SZ8	SZ8	154	陶器	堺系？	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデと横方向のナデによる調整。内面には擂目が放射状に施される。口縁部外側には2本の凹線を，内側には縁帯を有する。	外面:にぶい赤褐(2.5YR 4/3)	内面:にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	3㎜以下の灰白色，2㎜以下の黒色粒を含む	1/8	推定口径27.8cm
179	SZ8	SZ8	161	陶器	唐津系	擂鉢	口縁部～体部	内外面は回転ナデの後に施釉。内面には13条程度の擂目が施される。口縁部に注口あり。	釉調:暗赤褐(2.5YR 3/1)	胎土:にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	1㎜以下の灰白色粒を含む	1/6	推定口径30.6cm
180	SL1	SL1－3	4	土師器		高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデ	橙(2.5YR7/8)	橙(2.5YR7/6)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/16	
181	SL1	SL1－4	7	土師器		高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデ。内面内黒。	赤橙(10YR6/6)。底部淡赤橙(2.5YR7/3)	黒(2.5YR1.7/1)	2㎜の褐色砂粒・1㎜の灰褐色砂粒を含む	1/4	
182	SE4	SE4－2	1	土師器		皿	底部	底部糸切り底，内外面回転ナデ	橙(5YR7/8)	にぶい褐(7.5YR6/3)	2㎜程の褐色砂粒，1㎜程の黒色砂粒を含む。	1/2	
183	SE4	SE4－11	37	土師器		不明	底部	内外面風化著しいがナデは確認できる。底面は粗い糸切り痕跡。	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR6/3)	1㎜以下の赤褐色土粒を含む	不明	底径7.5cm
184	SE4	SE4－13	57	須恵器		坏	蓋部	内外面ともに回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	2㎜以下の灰白色土粒を含む	1/4	推定蓋径8.4cm
185	SE4	SE4－12	173	陶器	瀬戸・美濃系	天目茶碗	口縁部～体部	内外面施釉（鉄釉）。	釉調:灰褐(7.5YR 5/2)・褐灰(7.5YR5/1)	胎土:淡黄(2.5Y 8/3)	含有物はほとんど無い。	1/10	
186	SE4	SE4－5	75	磁器	青磁	碗	口縁部	口縁部はゆるやかに内湾する。内外面施釉。外面に細線状の蓮弁文あり。	釉調:深緑	胎土:灰白(7.5Y6/1)	精良	1/16	推定口径10.9cm
187	SE4	SE4－14	129	磁器	青花染付	染付　碗	口縁部	外面口縁部は2本の界線と葉らしき文様。内面口縁部には1本の界線。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/20	推定口径12.3cm
188	SE4	SE4－6,7	200	陶器	唐津系	皿	口縁部～底部	内外面灰色施釉。底部付近は無釉。高台内は兜巾底。	釉調:灰オリーブ(7.5Y5/3)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	精良	2/5	推定口径10.5cm・推定底径3.8cm・推定器高3.7cm
189	SE4	SE4－3,4,8	199	陶器	唐津系	碗	口縁部～底部	内外面灰色施釉。底部付近は無釉。見込み部に4個の砂目跡，高台付近にも砂が付着している。内野山窯系か？	釉調:灰(5Y6/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/2	推定口径13.3cm・底径4.6cm・器高4.4cm
252	包含層	—	36	弥生土器		高坏	脚部	風化著しいが，外面は丁寧なナデ（ミガキの可能性もある），内面はおそらく工具によるナデが施されている。下方に透かし孔を穿っている。	橙(5YR7/6・7/8)	浅橙(5YR8/4)	3㎜程の白色砂粒，1㎜程の黒・褐色砂粒を含む	1/4	－
253	包含層	280	53	緑釉陶器		埦	口縁部	内外面回転ナデの後に施釉	オリーブ黄(5Y6/3)	オリーブ黄(5Y6/3)	精良	1/10	
254	包含層	262	58	須恵器		坏	蓋部	内外面ともに回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	1㎜以下の灰白色土粒を含む	1/5	推定蓋径15.4cm
255	包含層	SF1	54	須恵器		甕	口縁部～頸部	口唇部は丁寧なナデ。口縁部の内外面は回転ナデ。肩部は外面がナデの後に格子状のタタキ，内面は同心円状の当て具痕。	灰(N5/)	灰(N6/)	1～2㎜の黒褐色土粒を含む	1/10	推定口径19.8cm
256	包含層	370	62	須恵器		甕	胴部	外面は格子状タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰(N7/)	灰(5Y6/1)	0.5㎜以下の橙色土粒を含む	1/20	
257	包含層	171	64	須恵器		甕	頸部～胴部	外面は平行タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰褐(5YR5/2)	暗灰褐(2.5Y4/2)	0.2㎜以下の灰白色土粒，2㎜以下の灰色土粒を含む	1/10	
258	包含層	352	61	須恵器		甕	胴部	外面は平行タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	0.5㎜以下の白・黒色土粒を含む	1/20	
259	包含層	169	65	須恵器		甕	胴部	外面は平行タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰(5Y5/1)～灰白(5Y7/2)	灰(N5/)	1㎜以下の黒色土粒を含む	1/10	
260	包含層	193	66	須恵器		甕	胴部	外面は格子状タタキ，内面は同心円文の当て具痕をナデ消している。	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2㎜以下の赤褐色土粒，0.5㎜以下の黒色土粒を含む	1/10	
261	包含層	261	60	須恵器		甕	胴部	外面は格子状タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰(7.5Y5/)	灰(7.5Y5/)	含有物はほとんど無い。	1/10	
262	包含層	—	63	須恵器		甕	胴部	外面は格子状タタキ，内面は同心円文の当て具痕が残る。	灰(N4/)	灰(7.5Y5/1)	0.1㎜以下の灰白色土粒を含む	1/20	
263	包含層	—	67	須恵器		甕	胴部～底部	外面は格子状タタキ，底部に破片が2枚重なって付着している。内面は平行文の当て具痕が残る。	暗灰黄(2.5Y4/2)・黒褐(2.5Y3/2)	黄灰(2.5Y4/1)	3㎜以下の黄灰・光沢黒色土粒，0.1㎜以下の透明土粒を含む	1/20	

第10表　出土遺物観察表④

番号	出土場所	注記	実測番号	種類	器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
264	包含層	416	56	須恵器	壺	口縁部	外面は回転ナデの後に一条の棒状工具による波状文。内面は回転ナデ。	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄褐(10YR5/2)	0.1㎜以下の黒色土粒を含む	1/20	
265	包含層	245	55	須恵器	鉢	口縁部付近	内面は回転ナデ，外面に耳状の把手が付着	灰(10Y4/1)	灰(10Y5/1)	2㎜以下の灰白色土粒を含む	1/20	
266	包含層	108+120+128+129+130+131+132+133+134+135	16	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。内外面の一部に黒片部分がある。	橙(5YR6/8)	浅黄(5YR8/4)	2㎜以下の黒色砂粒，1㎜以下の褐色砂粒を含む	2/3	推定口径16.6cm・底径8.4cm・高さ7.5cm
267	包含層	395	30	土師器	高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は高台をもつ。	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/3	底径7.4cm
268	包含層	SF1	2	土師器	高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	1～6㎜程の褐色砂粒，1㎜程の黒色砂粒を含む	1/6	
269	包含層	392	26	土師器	高台付埦	口縁部付近～底部	内外面風化著しく調整不明。内外面にわずかに横方向のナデが確認できる。底部調整不明であるが，ヘラ切りと考えられる。	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/2	推定底径9.0cm
270	包含層	405	32	土師器	高台付埦	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は高台をもつ。	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	1㎜以下の黒色砂粒を含む	1/6	推定底径7.2cm
271	包含層	SZ1	5	土師器	高台付埦	体部	内外面風化著しいが回転ナデ。内面内黒・指頭痕あり。	浅黄橙(7.5YR8/4)	黒(2.5Y2/1)	1㎜以下の褐・灰褐色砂粒を含む	1/8	
272	包含層	137+138+163	29	土師器	坏	口縁部～底部	内外面回転ナデ。底部内面は回転ナデの後にナデを施している。底部はヘラ切り底。	橙(7.5YR7/6～6/6)	橙(5YR6/6)～a浅黄橙(10YR8/4)	2.5㎜以下の褐色砂粒，1㎜以下の暗褐灰砂粒・2㎜程の光沢粒を含む	1/2	推定口径13.4cm・底径6.6cm・推定高さ5.8cm
273	包含層	155	21	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は，低円盤底で，風化著しいがおそらくヘラ切り底である。	橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR7/8)	2㎜以上の褐色砂粒を含む	3/4	推定口径11.0cm・底径7.0cm・推定高さ3.9cm
274	包含層	117+118	31	土師器	坏	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は調整不明であるが糸切り底の可能性がある。	明赤褐(5YR5/8)	にぶい橙(5YR7/4)	2㎜程の乳白色，黒褐色砂粒を含む	1/4	底径6.8cm
275	包含層	124+125+126+132+141	11	土師器	坏	口縁部～底部	内外面は回転ナデ。底面は回転ヘラ切り底	浅黄橙～橙(7.5YR8/4～7/6)	浅黄橙～橙(7.5YR8/4～7/6)	1㎜以下の黒・褐色砂粒を含む	3/4	口径12.6cm・底径6.8cm・高さ4.2cm
276	SH・包含層	SH+一括	18	土師器	坏	口縁部～底部	内外面は回転ナデ。底面はおそらくヘラ切り底であり，一部にワラらしき圧痕が確認できる。	淡赤橙(2.5YR7/4)	橙(2.5YR6/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径13.0cm・推定底径6.0cm・高さ4.4cm
277	包含層	231+233+234+235	22	土師器	坏	口縁部～底部	内外面は風化著しく調整不明であるが。内外面は回転ナデ。底面は調整不明であるが，ヘラ切底らしき痕跡。一部ワラのような圧痕が確認できる。口唇部内側には多の部分より丁寧な横方向のナデを施している。	浅黄(2.5Y8/4)～橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	2㎜以下のにぶい赤褐色砂粒，1㎜以下の褐灰色砂粒を含む	3/4	口径11.9cm・底径6.4cm・高さ5.05cm
278	包含層	321	19	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデの後に縦方向のナデを施している。底面は風化著しいが，おそらくヘラ切り底である。	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	2㎜以下の暗褐色砂粒，1㎜以下の橙色砂粒を含む	2/3	推定口径12.5cm・推定底径6.4cm・高さ4.85cm
279	包含層	237	25	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しく調整不明。外面にわずかにナデが確認できる。底部調整不明であるが，ヘラ切りと考えられ，ワラらしき繊維痕が確認できる。	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(10YR8/3)	2㎜程の赤褐・にぶい橙・褐灰色砂粒，1㎜以下の褐灰・赤褐色砂粒を含む	1/3	推定底径4.6cm
280	包含層	170	17	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は風化著しいが，おそらくヘラ切り底であり，一部にワラらしき圧痕が確認できる。	にぶい橙(5YR7/4)	淡橙(5YR8/4)	2㎜程の黒・褐色砂粒を含む	2/3	推定口径12.5cm・底径7.3cm・高さ3.9cm
281	包含層	C10下	9	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいがナデは確認できる。底部調整不明	にぶい黄橙(10YR7/4～8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	2㎜以下の黒褐・褐色砂粒，1㎜以下の明赤褐色砂粒を含む	1/2	
282	包含層	286	20	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は風化著しいが，おそらくヘラ切り底である。	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/6)	2㎜以上の黒色砂粒，1㎜以下の褐色砂粒を含む	7/8	推定口径10.8cm・底径6.6cm・高さ3.1cm
283	包含層	391	34	土師器	高台付埦	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデが確認できる。口唇部は摩耗著しく，口唇部かどうか判断が難しい。底部外側に高台が外れたような円形の痕跡が残る。	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	2㎜以上の褐色砂粒を含む	4/5	推定口径10.2cm・底径6.6cm
284	包含層	201	33	土師器	坏	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデが確認できる。口唇部は摩耗著しく，口唇部かどうか判断が難しい。底部はヘラ切り底の可能性がある。	橙(7.5YR7/8)	橙(7.5YR7/6)	3㎜程の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径11.7cm・底径8.2cm・推定高さ3.1cm
285	包含層	V	10	土師器	坏	体部～底部	内外面は回転ナデ。底面調整は不明	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.5㎜以下の黒褐・褐色砂粒を含む	1/4	推定底径5.8cm
286	SH・包含層	SH+113	14	土師器	坏	底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底部調整不明であるが，糸切りらしき痕跡もある	橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR7/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定底径5.6cm
287	包含層	393	35	土師器	坏	口縁部付近～底部	内外面風化著しいが回転ナデは確認できる。底面は風化著しく調整不明。	明赤褐(2.5YR5/8)～橙(5YR7/6)	橙(2.5YR6/8～5YR7/6)	1㎜以上の赤褐色砂粒を含む	1/2	推定底径3.7cm
288	包含層	—	28	土師器	坏	口縁部～底部	内外面回転ナデ。底部は風化著しく調整不明であるが，糸切り底と考えられる。	黒褐(2.5Y3/1)～橙(7.5YR6/6)～にぶい黄橙(10YR6/3)	明褐(7.5YR5/8)～にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜以下の褐色砂粒を含む	1/2	推定口径11.0cm・推定底径4.6cm・推定高さ3.1cm
289	包含層	136	42	土師器	布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	5㎜以下の橙色土粒，3㎜以下の暗赤褐色土粒を含む	1/4	推定口径12.1cm
290	包含層	146	43	土師器	布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	6㎜以下の橙色土粒，0.5㎜以下の褐色土粒を含む	1/4	推定口径13.1cm
291	包含層	F8上	39	土師器	布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	0.5㎜以下の褐色土粒を含む	1/8	推定口径12.8cm

第11表　出土遺物観察表⑤

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
292	包含層	166	48	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/4)	1～6㎜の灰褐色土粒を含む	1/6	推定口径9.7㎝
293	包含層	145+152	44	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	明赤褐(2.5YR5/5)～橙(7.5YR7/6)	明赤褐(5YR5/6)	3㎜以下の橙・暗赤褐色土粒を含む	1/3	推定口径10.5㎝
294	包含層	116+146	45	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	1～5㎜の灰褐・赤褐色土粒を含む	1/3	推定口径11.2㎝
295	包含層	159	41	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は調整不明瞭だが，布目と考えられる。	橙(5YR6/6)～灰白(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	4㎜以下のにぶい橙・橙・灰褐色土粒を含む	1/6	推定口径10.2㎝
296	包含層	379	49	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	1～3.5㎜の灰褐色土粒，3㎜の橙色土粒を含む	1/6	推定口径8.6㎝
297	包含層	149	46	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1～5㎜の橙色土粒を含む	1/8	
298	包含層	160	47	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しいが，外面はナデ，内面は布目が確認できる。	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	1～3㎜の赤褐色土粒，1～4.5㎜の褐灰褐色土粒を含む	1/8	
299	包含層	266	50	土師器		布痕土器	口縁部～体部	風化著しく，内外面の調整不明。外面には一部指押さえが確認できる。	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	1～5㎜の赤褐色土粒，1～2.5㎜の灰白色土粒を含む	1/10	
300	包含層	C10下	40	土師器		布痕土器	体部	風化著しいが，外面はナデと指押さえ，内面は調整不明瞭だが，布目がわずかに確認される。	橙(5YR6/6)～にぶい橙(5YR7/4)	明赤褐(2.5YR5/6)～橙(5YR6/6)	4㎜以下の灰褐・橙・にぶい赤褐色土粒，2㎜以下の暗赤褐色土粒を含む	1/8	
301	包含層	372	51	土師器		布痕土器	底部付近	風化著しく，内外面の調整不明。底面にはわずかながら平坦面が存在する。	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	1～5㎜の赤褐色土粒，1～3㎜の灰白色土粒を含む	1/10	
302	包含層	F9南上+SZ6	69	磁器	青磁	碗	口縁部～底部	内外面施釉。底部は畳付を越えて高台内側まで施釉。外面は細描連弁文。内面見込みに「福」の文字。	釉調:青緑色	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/2	推定口径12.8㎝・底径4.95㎝・推定高さ6.95㎝
303	包含層	330	71	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	内外面施釉。内面部分にわずかに貫入部分がある。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y6/1)	精良	1/5	推定口径15.3㎝
304	包含層	SZ1	73	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	口縁部はゆるやかに外反。内外面施釉。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y7/1)	精良	1/20	
305	包含層	364	74	磁器	青磁	碗	口縁部	口縁部はゆるやかに外反。内外面施釉。	釉調:オリーブ灰(7.5Y6/2)	胎土:灰白(10Y5/1)	精良	1/20	
306	包含層	337	79	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面に片切彫りによる草木文あり。	釉調:オリーブ灰(10Y4/2)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/30	
307	包含層	363	72	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	口縁部はゆるやかに外反。内外面施釉。内外面に片彫りの草木文。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/16	
308	包含層	Ⅲ	77	磁器	青磁	碗	口縁部	口縁部は直線状。内外面施釉。外面に退化蓮弁文あり。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/20	
309	包含層	F8Ⅲ	99	磁器	青磁	碗	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:浅黄(2.5Y7/4)	胎土:浅黄(2.5Y7/3)	精良	1/20	
310	包含層	SZ6+F8上	80	磁器	青磁	碗	口縁部	内外面施釉。外面に丸彫りによる退化蓮弁文あり。	釉調:浅黄(7.5Y7/3)	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/20	
311	包含層	Ⅲ	86	磁器	青磁	碗	体部(底部付近)	内外面施釉。外面は蓮弁文の可能性があるが小片で不明。内面はも不明であるが草木文の可能性がある。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2・5/2)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/10	
312	包含層	SX1	87	磁器	青磁	碗	体部(底部付近)	内外面施釉。外面は小片で詳細不明であるが無文。内面は丸彫の蓮弁文。	釉調:青緑	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/10	
313	包含層	24Ⅲ	81	磁器	青磁	碗	体部～底部	内外面施釉。施釉は高台内側まで。内面見込み部分に圏線。	釉調:青緑	胎土:灰白(5GY8/1)	精良	1/4	
314	包含層	石レツB－2南	85	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。釉は高台内面途中まで。外面は凹凸が激しい。内面見込みに圏線	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(10Y7/1)	精良	1/4	
315	包含層	344	82	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。釉は畳付から底面まで無釉。	釉調:オリーブ灰(5GY6/1)	胎土:灰(5Y6/1)	精良	1/3	
316	包含層	D8Ⅲ	83	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。釉は畳付部分だけ掻き取っている。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰(10Y8/1)	精良	1/20	
317	包含層	F8Ⅲ	84	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。釉は底面部分だけ掻き取っている。	釉調:灰白(5Y8/2)	胎土:橙(7.5YR6/6・灰白(2.5Y8/2)	精良	1/10	
318	包含層	F11南東上	106	磁器	青磁	碗	底部	内外面施釉。施釉は高台内面まで。	釉調:青緑色	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/8	推定底径6.7㎝
319	包含層	Ⅲ	97	磁器	青磁	坏	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:オリーブ灰(10Y4/2)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/20	推定口径10.5㎝
320	包含層	340	92	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉。外面に蓮弁文	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(7.5YR7/1)	精良	1/10	
321	包含層	D11Ⅲ	101	磁器	青磁	坏	口縁部	内外面施釉。外面に蓮弁文	釉調:灰オリーブ(7.5Y5/3)	胎土:灰白(10Y7/1)	精良	1/20	推定口径12.0㎝
322	包含層	63Ⅲ	100	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:オリーブ灰(2.5GY5/1)	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/20	推定口径12.5㎝
323	包含層	F8上	90	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～底部	内外面施釉。口縁部に輪花。高台内部と内面見込み部は無釉。	釉調:オリーブ灰(5Y6/2)	胎土:灰黄(2.5Y6/2)	精良	2/3	推定口11.1㎝・底径4.75㎝・器高2.6㎝
324	包含層	341	94	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉。外面に蓮弁文	釉調:灰白(10Y7/2)	胎土:灰(N6/)	精良	1/6	推定口径9.3㎝
325	包含層	—	95	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:灰オリーブ(7.5Y5/2)	胎土:灰(7.5Y6/1)	精良	1/20	推定口径7.1㎝
326	包含層	358	93	磁器	青磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉	釉調:灰(7.5Y6/1)	胎土:灰(N6/)	精良	1/12	
327	包含層	G11上	108	磁器	青磁	坏	底部	内外面施釉。施釉は高台内面まで。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	精良	1/8	
328	包含層	Ⅲ	104	磁器	青磁	Ⅲ	底部	内外面施釉。内面見込み部分は円形に無釉部分あり。	釉調:オリーブ灰(10Y5/2)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/4	底径4.7㎝
329	包含層	SZ1	107	磁器	青磁	Ⅲ	底部	内外面施釉。施釉は高台内面及び底面の一部まで。内面見込み部に円形の無釉部分あり。	釉調:にぶい黄(2.5Y6/4)	胎土:淡黄(2.5Y8/4)	精良	1/8	推定底径6.5㎝

第12表　出土遺物観察表⑥

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
330	包含層	SX1	102	磁器	青磁	坏	底部	内外面施釉。内面見込みに圏線１本。高台内は釉を掻き取っている。	釉調:緑青色	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/4	底径5.7cm
331	包含層	23Ⅲ	103	磁器	青磁	Ⅲ	底部	内外面施釉。内面見込みに草花文。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(5Y7/3)	精良	1/4	底径5.9cm
332	包含層	ハイ土	105	磁器	青磁	Ⅲ	底部	内外面施釉。内面見込み部分に草花文。内面に複数（単位不明）と外面に２条の縦位の花弁文。	釉調:オリーブ灰(5GY6/1)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/4	底径5.7cm
333	包含層	23Ⅲ	113	磁器	青磁	盤	口縁部	内外面施釉。口縁内面部に文様あり。	釉調:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/20	推定口径7.9cm
334	包含層	18	112	磁器	青磁	盤	底部	内外面施釉。内面見込部に草花文。全体に網目状の貫入が認められる。	釉調:オリーブ灰(10Y8/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/8	推定底径12.3cm
335	包含層	E9Ⅲ	114	磁器	青磁	瓶	頸部	内外面施釉。	釉調:灰オリーブ(7.5Y4/2)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/20	
336	包含層	325	115	磁器	青磁	瓶	底部	内外面施釉。高台外面に雷文あり。内面に１cm程の著しい釉溜まりあり。	釉調:青緑色	胎土:灰白(N7/)	精良	1/20	推定底径8.4cm
337	包含層	Ⅲ	111	磁器	青磁	高足坏	坏部	内外面施釉。	釉調:オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/4	推定口径7.9cm
338	包含層	SZ6	109	磁器	青磁	香炉	口縁部～底部付近	内外面施釉。内面底部付近に一部無釉部分あり。	釉調:緑灰(7.5GY6/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/6	推定口径13.0cm
339	包含層	D8Ⅲ	110	磁器	青磁	香炉	脚部	外面施釉。内面無釉。	釉調:緑灰(7.5GY6/1)	胎土:灰白(5Y8/2)	精良	1/20	
340	包含層	—	440	磁器	白磁	碗	口縁部～体部	内外面施釉。内面見込みに圏線１本。	釉調:灰白(7.5Y7/2)	胎土:灰白(7.5Y8/)	精良	1/6	推定口径15.8cm
341	包含層	SZ8	117	磁器	白磁	碗	口縁部	内外面施釉。口唇部に一条の凹面あり。	釉調:灰オリーブ(5Y6/2)	胎土:灰白(5Y7/2)	精良	1/20	
342	包含層	F8上	118	磁器	白磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉。内面見込み部と外面底部付近に円形の釉の掻き取りあり。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/20	推定口径11.6cm
343	包含層	—	119	磁器	白磁	Ⅲ	口縁部～体部	内外面施釉。内面見込み部と外面底部付近に円形の釉の掻き取りあり。	釉調:灰白(7.5Y7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/20	推定口径9.8cm
344	包含層	15Ⅱ	116	磁器	白磁	碗	口縁部～底部	内外面施釉。高台内面付近のみ釉が無い。	釉調:灰白(7.5Y7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/4	推定口径11.4cm・底径6.3cm・推定高さ2.9cm
345	包含層	SX1	124	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内面見込み部は釉が掻き取られている。外面底部付近無釉。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/8	底径5.0cm
346	包含層	石レッB－1付	125	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内外面施釉。外面底部付近無釉。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/8	底径4.6cm
347	包含層	D9Ⅲ	121	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内面施釉，見込み部は釉が掻き取られている。外面底部付近無釉。	釉調:明オリーブ灰(5YG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/4	底径5.7cm
348	包含層	346	123	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内面施釉，見込み部に蛇の目釉剥ぎ。外面底部付近無釉。	釉調:灰白(N8/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/6	底径3.4cm
349	SZ1	SZ1	120	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内面施釉。外面無釉。	釉調:灰白(2.5Y8/2)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/5	底径3.5cm
350	包含層	25Ⅲ	122	磁器	白磁	Ⅲ	底部	内面施釉。外面底部付近無釉。	釉調:灰白(N8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	底径3.1cm
351	包含層	F8上	131	磁器	青花染付	碗	口縁部～体部	外面口縁部は１本の波濤文。体部には芭蕉文。内面口縁部には１本の界線。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/10	推定口径13.8cm
352	包含層	31Ⅲ	511	磁器	青花染付	碗	体部	内面施釉。外面に綾杉文。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/20	
353	包含層	F8上	130	磁器	青花染付	碗	口縁部	外面口縁部は２本の界線と文字らしき文様。内面口縁部には１本の界線と漁をする人物。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:白	精良	1/20	推定口径12.1cm
354	包含層	G11上	134	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内面見込み部に○に「寿」の文字。底部畳付と高台内は無釉。畳付部削り取ってある。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/4	推定底径2.2cm
355	包含層	SZ3	127	磁器	青花染付	Ⅲ	口縁部～底部付近	内外面施釉。外面底部付近無釉。碁笥底。内面見込み部に「寿」の文字。	釉調:灰白(5Y7/2)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	推定底径4.0cm
356	包含層	SZ8	135	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	外面腰部に２本，高台外面に１本の圏線。内面見込み部は２本の界線の中に山水人物図。無釉部は砂が多く付着した畳付部のみ	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/6	推定底径6.5cm
357	包含層	52Ⅲ	126	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。外面底部付近無釉。碁笥底。	釉調:灰白(7.5Y8/2)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/3	底径4.6cm
358	包含層	—	133	磁器	青花染付	Ⅲ	体部～底部	外面の文様は不明瞭。内面見込み部に１本の界線と不明幾何学文。底部は畳付け部と高台内の一部が無釉である。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/6	推定底径5.2cm
359	包含層	Ⅲ	164	磁器	青花染付	Ⅲ	口縁部～底部付近	内外面施釉。内外面口縁部と腰部に１条の界線。内面見込み部に文様あり。高台部には砂が付着。167 と同一個体。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/4	推定底径7.7cm
360	包含層	FGⅢ	175	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。外面底部付近に界線１本。内面見込み部に花卉文。高台畳付部は釉が掻き取られている。	釉調:灰白(2.5Y8/2)	胎土:にぶい黄橙(10YR6/3)	精良	1/6	推定底径5.15cm
361	包含層	Ⅲ	167	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。腰部に１条の界線。内面見込み部に文様あり。獅子の文様と考えられる。高台部には砂が付着。底部に文字款があるが細片で判読不能。164 と同一個体。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/10	推定底径7.7cm
362	包含層	E9Ⅲ	512	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。腰部に１条の界線。内面見込み部に十字花文。畳付部は露胎。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/20	推定底径8.3cm
363	包含層	—	165	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。外面に施文があるが細片で確認できず。内面見込み部に十字花文。高台内部は釉が掻き取られている可能性。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/20	
364	包含層	F8上	166	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。腰部に１条・高台外面に２条の界線。外面に文様が確認できるが細片で不確定。内面見込み部に蓮池文あり。水草らしき文様は蛸脚文に見える。高台部畳付部は無釉で赤化。底部に文字款があるが細片で判読不能。	釉調:明緑灰(10G7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/6	推定底径7.5cm
365	包含層	F8上	169	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。内面見込み部に種類不明の文様あり。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/6	
366	包含層	C11付	168	磁器	青花染付	Ⅲ	底部	内外面施釉。外面腰部に１条の界線。内面見込み部に草花文あり。高台畳付部は掻き取りのため無釉。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/10	推定底径8.1cm

第13表　出土遺物観察表⑦

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
367	包含層	FGⅢ+33Ⅲ	170	磁器	青花染付	Ⅲ	口縁部～体部	折縁Ⅲ。内外面施釉。内外面に花文あり。底部畳付部には砂が付着している。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	2/5	推定口径18.3cm・推定底径9.7cm・器高3.0cm
368	包含層	SH	23	土師器		坏	口縁部～底部	内外面ともに回転ナデ。口唇部外面には他の外面より丁寧な斜方向のナデを施している。	橙(7.5YR7/6)	浅黄(5YR6/6)～橙(7.5YR7/6)	0.5㎜以下の褐色・明赤褐色砂粒を含む	1/6	推定口径11.0cm・推定底径5.7cm・推定高さ3.1cm
369	包含層	—	27	土師器		坏	口縁部～底部	内外面回転ナデ。底部内面は回転ナデの後にナデを施している。底部は糸切り底。底部内外面に黒色変化が認められる。	赤黒(2.5YR1.7/1)・橙(2.5YR7/8)	橙(2.5YR7/8)	1㎜以下の褐色砂粒を含む	8/9	口径9.7cm・底径5.6cm・高さ3.0cm
370	包含層	D9Ⅲ+339	13	土師器		坏	口縁部～底部	内面は回転ナデ。外面は回転ナデとナデ。底面は糸切り底	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.5㎜以下の褐色砂粒を含む	1/3	推定口径8.4cm・推定底径5.2cm・高さ2.35cm
371	包含層	SH	12	土師器		坏	口縁部～底部	内外面は回転ナデ。底面は糸切り底	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	0.5㎜以下の黒褐色砂粒を含む	1/3	推定口径11.0cm・推定底径6.0cm・高さ3.6cm
372	包含層	SH	15	土師器		坏	底部	内面は風化著しく調整不明（おそらく回転ナデ）。外面は回転ナデ。底面は調整不明であるが，糸切り底らしき痕跡。底面に長さ３～４㎝・幅１㎜程の線状痕が４本確認できる。	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	2㎜程の褐色砂粒を含む	1/3	底径7.0cm
373	包含層	SZ5	8	土師器		Ⅲ	口縁部～底部	内外面風化著しいが回転ナデ。底部糸切り底	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	1㎜以下の黒・0.5㎜以下の明赤褐色砂粒を含む	3/5	
374	包含層	—	52	土師器		Ⅲ	口縁部付近～底部	内外面ともに回転ナデ。底部は糸切り底	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	1㎜程の黒色砂粒を含む	1/4	推定底径6.6cm
375	包含層	119	24	土師器		Ⅲ	口縁部～底部	内外面風化著しく調整不明。内外面上部にわずかに横方向のナデが確認できる。底部調整不明であるが，ヘラ切りと考えられる。	褐灰(7.5YR1/4)～にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	0.5㎜以下の褐色砂粒を含む	1/4	推定口径7.4cm・推定底径5.9cm・推定高さ1.05cm
376	包含層	D９Ⅲ	136	陶器	備前系	甕	口縁部	内外面に回転ナデ。内面頸部付近は斜方向のナデ。	釉調:暗赤灰(2.5YR3/1)	胎土:赤(10R5/6)	1㎜以下の白・灰色粒，２㎜以下の黒色粒をわずかに含む	－	
377	包含層	—	138	陶器	備前系	甕	口縁部	内外面に回転ナデ。	外面:赤灰(2.5YR4/1)	内面:灰赤(2.5YR5/2)	わずかに１㎜以下の白色粒を含む以外含有物は殆ど無い。	－	
378	包含層	石レツB2南+D9Ⅲ+G11上	140	陶器	備前系	甕	口縁部～胴部	外面には全体的に釉（自然釉？）がかかっている。内面は主に回転ナデであるが，横方向のナデもある。	外面:淡黄(2.5Y8/3)	内面:灰赤(2.5YR4/2)	３㎜程の灰白粒を少量，１㎜以下の灰白粒を含む	－	推定口径28.0cm
379	包含層	—	137	陶器	備前系	甕	肩部	内外面に回転ナデ。	外面:灰赤(10R4/2)	内面:灰赤(10R4/2)	１㎜以下の灰白粒，３㎜程の石粒を含む	－	
380	包含層	D11Ⅱ	141	陶器	備前系	甕	底部	内面底部付近は回転ナデ，内面胴部付近は不定方向の工具痕あり。外面は比較的丁寧なナデ。	外面:にぶい橙(5YR6/4)	内面:灰褐(5YR4/2)	５㎜以下の白色土粒，３㎜以下の灰・褐・黒色光沢粒を含む	－	推定底径33.9cm
381	包含層	石レツC付	143	陶器	備前系	甕	底部	内外面は丁寧なナデ	外面:灰黄褐(10YR 4/2)	内面:灰褐(7.5YR5/2)	３㎜以下の黒・乳白色粒，２㎜以下の赤褐色粒を含む	－	推定底径41.2cm
382	包含層	SX1	146	陶器	備前系	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には７条を単位とする擂目。	外面:にぶい赤褐(2.5YR4/3)	内面:にぶい赤褐(2.5YR4/3)	４㎜以下の灰白，３㎜以下の黒色粒を含む	1/8	推定口径29.2cm
383	包含層	SZ６	172	陶器	瀬戸・美濃系	天目茶碗	口縁部～底部付近	内外面施釉（鉄釉）。底部付近無釉。	釉調:褐(7.5YR 4/3)・黒褐(7.5YR3/1)	胎土:淡黄(2.5Y 8/3)	１㎜以下の暗褐・白色粒をわずかに含む	1/6	推定口径12.0cm・推定底径6.1cm・推定器高5.5cm
384	包含層	324	145	陶器	瀬戸・美濃系	卸皿	口縁部～体部	内外面口縁部付近に施釉。注口部あり。体部内面に縦位と横位の刻目。	釉調:オリーブ灰(10Y 6/2)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	精良	1/16	推定口径16.6cm
385	包含層	29Ⅲ	174	磁器	初期伊万里	Ⅲ	口縁部～底部	内外面施釉。外面無文。内面に花卉文。高台畳付部は砂が付着している。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/6	推定口径12.7cm・推定底径6.1cm・推定器高3.15cm
386	包含層	FGⅢ	176	磁器	初期伊万里	Ⅲ	底部	菊花Ⅲ。数本（おそらく７本）の菊花状の凹み。内面見込みには大型の菊花と小型の花文。高台畳付部は砂が付着している。	釉調:明緑灰(5G7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定底径5.6cm
387	包含層	—	178	磁器	初期伊万里	小坏	口縁部～底部	染付草文盃。内外面施釉。外面に深緑色の草文。底部高台及び高台内部は無釉。	釉調:灰白(N7/)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	3/5	推定口径5.5cm・底径2.6cm・器高3.7cm
388	包含層	188	190	陶器	唐津京焼風	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面底部付近に黒色の化粧土が施されている。畳付部は無釉。見込み部に竹林文。	釉調:明黄褐(2.5Y7/6)	胎土:浅黄(2.5Y8/3)	精良	9/10	口径13.3cm・底径5.5cm・器高4.8cm
389	包含層	F9南上	193	陶器	唐津京焼風	碗	口縁部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。底部は平滑。高台内に刻銘の端部らしき痕跡。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y8/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/3	推定口径12.9cm・推定底径5.0cm・器高4.2cm
390	包含層	F10西 上	195	陶器	唐津京焼風	碗	体部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。底部は平滑。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y8/4)	釉調:淡黄(2.5Y8/3)	精良	1/2	底径4.7cm
391	包含層	石レツB・D付	192	陶器	唐津京焼風	碗	口縁部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。底部は平滑。高台内に「清水」の刻銘。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y7/4)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/2	推定口径9.4cm・推定底径4.0cm・器高4.8cm
392	包含層	Ⅲ	198	陶器	唐津京焼風	碗	体部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。底部は平滑。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y7/3)	胎土:灰白(2.5Y8/3)	精良	1/3	底径4.3cm
393	包含層	F9南上	196	陶器	唐津京焼風	Ⅲ	体部～底部付近	内外面施釉。底部も高台内部まで施釉。高台は欠損。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y7/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/4	底径6.9cm
394	包含層	石レツB・D付+石レツD東	194	陶器	唐津京焼風	Ⅲ	口縁部付近～底部	内外面施釉。底部も高台内部まで施釉。底部は平滑。高台は欠損。見込み部に山水文。	釉調:淡黄(2.5Y7/4)	胎土:灰白(2.5Y7/1)	精良	1/2	
395	包含層	Ⅲ	181	陶器	唐津(内野山系？)	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面下 1/3 は無釉。	外面:暗オリーブ(5Y4/4)	内面:灰オリーブ(5Y6/2)	精良	1/3	推定口径10.5cm・推定底径5.8cm・器高4.4cm
396	包含層	Ⅲ	183	陶器	唐津(内野山系？)	碗	口縁部付近～底部	高台部分以外の内外面施釉。外側青緑色の釉が上から 3/4 のところまで。	外面:青緑色	内面:灰オリーブ(5Y5/2)	精良	3/5	底径4.4cm
397	包含層	Ⅲ	197	陶器	唐津(内野山系？)	碗	体部～底部	内外面施釉。底部付近は無釉。底部は兜角っぽく仕上げている。高台内。見込み部に積み跡が残っている。。	釉調:淡黄(2.5Y8/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/4	底径5.1cm
398	包含層	421	204	陶器	唐津系	Ⅲ	口縁部～底部	内外面灰色施釉（藁灰？）。貫入著しい。底部付近は無釉。見込み部に４個の砂目。高台はヘラ切り底。	釉調:灰黄(2.5Y7/2)	胎土:淡黄(2.5Y8/3)	精良	4/5	推定口径11.6cm・推定底径6.2cm・推定器高3.4cm

第14表　出土遺物観察表⑧

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
399	包含層	石レツB・D付近	202	陶器	唐津系	鉢	口縁部	内外面は灰色に白色化粧土の刷毛目を施す。高台内は兜巾底。口縁部は輪花鉢の形状。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰(7.5Y5/1)	精良	1/10	推定口径13.5cm
400	包含層	Ⅲ	205	陶器	唐津系	鉢	口縁部～体部	内外面褐色施釉。白化粧土の刷毛目あり。	釉調:暗灰黄(2.5Y4/2)・灰オリーブ(5Y6/2)	胎土:褐灰(2.5Y8/4)	精良	1/6	推定口径22.6cm
401	包含層	Ⅲ	208	陶器	唐津系	鉢	体部～底部付近	内外面褐色施釉。外面の底部付近は無釉。	釉調:褐灰(7.5YR4/1・4/2)	胎土:灰白(10YR7/1)	精良	1/5	推定底径7.7cm
402	包含層	Ⅲ	209	陶器	唐津系？関西系？	土鍋	口縁部～体部	内外面褐色施釉。外面下部は無釉。	釉調:明褐灰(5YR3/2)・褐(7.5YR5/1)	胎土:褐灰(7.5YR5/1)	精良	1/6	推定口径19.6cm
403	包含層	E9Ⅲ	210	陶器	唐津系	瓶	頸部	内外面褐色施釉。頸部中位にS字状の把手あり。	釉調:暗褐(10YR3/3)	胎土:褐灰(10YR5/1)	精良	1/20	
404	包含層	16	212	陶器	唐津系	瓶	口縁部～頸部	内外面褐色施釉（鉄釉）。	釉調:にぶい赤褐(5YR4/3)	胎土:灰褐(5YR5/2)	精良	1/4	推定口径5.6cm
405	包含層	石レツD中付	211	陶器	唐津系	瓶	頸部～胴部	内外面褐色施釉。外面頸部にオリーブ黄色の刷毛目文様，下半は無釉。	釉調:極暗赤褐(10R2/3)・オリーブ黄(5Y6/4)・灰褐(7.5YR5/2)	胎土:赤褐(10R5/6)	精良	1/3	
406	包含層	D8Ⅲ	179	陶器	志野	鉢(輪花鉢)	口縁部～底部	口縁部内面には幾何学文，見込み部には竹林らしき文様。底部には3か所の脚台がある。	釉調:灰白(5Y8/1)	胎土:にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	1/2	推定口径16.2cm・推定底径11.6cm・器高5.6cm
407	包含層	石レツB・D付	180	陶器	志野？	鉢(輪花鉢？)	口縁部	内外面施釉。	釉調:灰白(5Y8/1)	胎土:にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	1/10	
408	包含層	F8上+Ⅲ	213	磁器	肥前系染付	碗(くらわんか碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面にはコンニャク印判による菊花文。底部付近に圏線。	釉調:灰白(10Y8/)	胎土:灰白(5GY8/)	精良	1/2	推定口径9.8cm，底径4.1cm，器高5.5cm
409	包含層	D9Ⅲ	217	磁器	肥前系染付	碗(くらわんか碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。畳付部は無釉。内面見込部に砂が多量に付着。底部付近に圏線。	釉調:明緑灰(7.5GY8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定口径9.8cm，底径4.05cm，器高5.15cm
410	包含層	石レツB－2南	214	磁器	肥前系染付	碗(くらわんか碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。底部付近に圏線。	釉調:灰白(10Y8/)	胎土:灰白(7.5GY8/)	精良	2/3	推定口径9.2cm，推定底径3.8cm，器高5.05cm
411	包含層	Ⅲ	215	磁器	肥前系染付	碗(くらわんか碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面には竹林文。底部に文字が書かれているが，破片のため判読不能。底部付近に圏線。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	1/2	推定口径9.8cm，推定底径4.1cm，器高5.5cm
412	包含層	F8上	216	磁器	肥前系染付	碗(くらわんか碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。底部に記号が書かれているが判読不能。畳付部に砂が付着している。底部付近に圏線。	釉調:灰白(5Y7/1)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/2	推定口径9.2cm，推定底径3.8cm，器高5.05cm
413	包含層	Ⅲ+F8上	222	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文（梅花文の可能性も）。畳付部は無釉。見込部は蛇の目釉剥ぎ。底部付近に圏線。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	4/5	口径12.0cm，底径4.6cm，器高4.95cm
414	包含層	—	226	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草花文。畳付部は無釉。見込部に蛇の目釉剥ぎ。底部付近に圏線。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	3/8	推定口径11.6cm，底径4.5cm，器高5.1cm
415	包含層	SX1	223	磁器	肥前系染付	碗	口縁部付近～底部	内外面施釉。外面には丸文。畳付部は無釉。見込部は蛇の目釉剥ぎに五弁花のコンニャク印判，輪状に砂痕跡。底部付近に圏線。	釉調:灰白(2.5Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/)	精良	2/3	底径5.15cm
416	包含層	F上	223	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には草文。畳付部は無釉。見込部圏線内に蛇の目釉剥ぎと五弁花のコンニャク印判。底部付近に圏線。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	2/3	底径4.85cm
417	包含層	E9Ⅲ+石レツD西	224	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面には丸文。畳付部は無釉で砂付着。見込部は圏線内に蛇の目釉剥ぎ，五弁花のコンニャク印判，輪状に砂痕跡。底部付近に圏線。	釉調:灰白(10Y6/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	2/5	推定口径11.3cm，底径4.5cm，器高4.8cm
418	包含層	F8上+－	227	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。畳付部は無釉。見込部に蛇の目釉剥ぎ。口縁部は緩やかな端反り。	釉調:明緑灰(7.5GY7/1)	胎土:灰白(10Y8/)	精良	1/3	推定口径11.2cm，底径4.3cm，器高4.8cm
419	包含層	石レツC付+石レツD東	228	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～底部	内外面施釉。外面に草文らしき文様。見込部に蛇の目釉剥ぎ。口縁部は緩やかな端反り。	釉調:灰白(10Y7/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定口径11.6cm，底径4.2cm，器高4.9cm
420	包含層	F8上	230	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は二重網目文。	釉調:灰白(5Y7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/10	推定口径9.8cm
421	包含層	F8Ⅲ	231	磁器	肥前系染付	碗	体部～底部	内外面施釉。外面は丸に籠目。底部に圏線。内面は無文だが，わずかに桃色がかっている。	釉調:灰白(5Y8/1)	胎土:淡黄(2.5Y8/3)	精良	1/8	推定底径5.1cm
422	包含層	E9 Ⅲ +SX1	233	磁器	肥前系染付	碗	底部	内外面施釉。外面は草花文。底部には圏線。底部には圏線の中に識字不能の墨書がある。	釉調:明オリーブ灰白(5GY7/2)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/5	底径4.1cm
423	包含層	SX1	232	磁器	肥前系染付	碗	体部	内外面施釉。外面は山と楼閣。内面は無文だが，下部に圏線らしきものが確認される。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/20	推定底径5.2cm
424	包含層	—	234	磁器	肥前系染付	碗	底部	内外面施釉。外面はわずかしか無いが，おそらく綾杉文。底部には圏線。底部には圏線の中に識字不能の文字が1つある。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/4	底径3.55cm
425	包含層	—	235	磁器	肥前系染付	碗	底部	内外面施釉。外面は圏線のみが確認できる。内面は見込み部に2本の圏線内に菊花文。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/5	底径4.75cm
426	包含層	F8上	237	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。全面に花唐草文と丸文の組み合わせ。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	推定口径9.9cm
427	包含層	F8上	244	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面はよろけ縞文。腰部に圏線。内面は口縁部に梯子状の幾何学文，腰部に圏線。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/10	推定口径10.3cm
428	包含層	FGⅢ	239	磁器	肥前系染付	碗	体部～底部	内外面施釉。内面無文。外面は細片で不明であるが，花文と考えられる。外面腰部に1本の圏線。	釉調:灰白(10Y8/)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	1/3	底径4.8cm
429	包含層	F8Ⅲ	242	磁器	肥前系染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉。外面は草花文，底部に圏線。内面は無文で蛇の目釉剥ぎ。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/4	推定口径12.0cm，推定底径5.0cm，器高6.4cm
430	包含層	Ⅲ	251	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	体部～底部	内外面施釉。外面は文様はあるが，内容不明。内面は見込部に圏線と文様があるが，内容不明。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	底径5.7cm

第15表　出土遺物観察表⑨

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
431	包含層	SX1+－	246	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	体部～底部	内外面施釉。外面は半菊花唐草文と圏線。内面は見込部に記号文と圏線。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	底径5.75cm
432	包含層	—	247	磁器	肥前系染付	碗(広東碗)	蓋部	内外面施釉。外面は花唐草文と圏線。内面は見込部に記号文（昆虫文？）と圏線。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y10/1)	精良	1/2	推定口径9.45cm
433	包含層	—	258	磁器	肥前系染付	碗(朝顔形碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は線描の朝顔文と圏線。高台内に「宣明化製」の銘款。内面は無文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/3	推定口径10.25cm,推定底径3.6cm,器高6.45cm
434	包含層	D11Ⅱ	260	磁器	肥前系染付	碗(大形碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は底部付近に圏線。内面は梅花文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	推定口径15.5cm,推定底径4.8cm,器高5.5cm
435	包含層	Ⅲ	268	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	口縁部～体部	内外面施釉。外面は区画された宝文。内面は無文。	釉調:灰白(5B7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	3/5	推定口径9.3cm
436	包含層	F9南上+石レツD東	262	磁器	瀬戸・美濃系	碗(小丸碗)	口縁部～底部付近	内外面施釉。外面に宝文（巻物の変形か？）。内面に圏線。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/3	推定口径10.6cm
437	包含層	F8上	270	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面はコンニャク印判による松文と腰部に圏線。内面は無文。	釉調:淡黄(5Y8/3)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	2/5	推定口径8.2cm,推定底径3.5cm,器高3.95cm
438	包含層	Ⅲ	264	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は松竹文。高台内に窯名「筒江」の銘款。内面は無釉だが，見込部に砂が多量に付着。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/2	推定口径9.9cm,底径4.4cm,器高5.1cm
439	包含層	Ⅲ	265	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は庭園風の風景文。内面は無文。	釉調:灰白(N8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/5	推定口径10.2cm,推定底径2.3cm,器高4.95cm
440	包含層	F8上	266	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	体部～底部	内外面施釉。外面は草文（笹文か？）。内面は無文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/3	底径3.9cm
441	包含層	D9Ⅲ	269	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	口縁部は端反。内外面施釉。外面は笹文。内面は口縁部に変形雷文。内面見込部に圏線と笹文。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	3/5	口径9.5cm,底径3.7cm,器高5.1cm
442	包含層	SX1+SZ8	271	磁器	肥前系染付	碗(小丸碗)	口縁部～底部	口縁部は端反。内外面施釉。外面は幾何学の区画に花文。内面は口縁部に雷文。区画線は主に朱色。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/2	推定口径9.0cm,推定底径3.1cm,器高4.3cm
443	包含層	SX1+F8上	277	磁器	肥前系染付	筒形碗？鉢？	口縁部～体部	内外面施釉。外面は草花文。底部付近に圏線。内面は無文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/4	推定口径11.2cm,推定底径5.8cm,器高6.4cm
444	包含層	Ⅲ+F8Ⅲ	312	磁器	肥前系染付	筒形碗(湯呑碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面に松葉文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/1	口径7.8cm,底径3.05cm,器高6.0cm
445	包含層	Ⅲ+F8Ⅲ	314	磁器	肥前系染付	筒形碗(湯呑碗)	口縁部～底部付近	内外面施釉，外面青磁釉。内面は口縁部と腰部に圏線。外面は格子地に花文。	釉調:灰白(7.5Y7/1)	胎土:灰白(5Y7/1)	精良	1/6	推定口径8.15cm
446	包含層	石レツB－2南	315	磁器	肥前系染付	筒形碗(湯呑碗)	口縁部～底部付近	内外面施釉。外面は格子地花文，内面は口縁部に圏線。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良		推定口径7.4cm
447	包含層	C9Ⅱ	284	磁器	肥前系染付	鉢？段重？	蓋部	つまみが別造りである。内外面施釉。外面の頂部付近は檜垣文と周囲は色絵による区画文と植物文。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/3	基部径8.8cm
448	包含層	SZ1+SX1	280	磁器	肥前系染付	鉢？(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。見込部に蛇の目釉剥ぎ。皿の可能性もあり。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	9/10	口径10.1cm,底径3.7cm,器高2.7cm
449	包含層	F8上	287	磁器	肥前系染付	鉢(蓋付鉢)	蓋部	内外面施釉。外面は庭園文。内面は無文。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/1	つまみ径5.1cm,基部径12.6cm,器高3.5cm
450	包含層	D9Ⅲ	282	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。外面は松木文。内面は口縁部に白抜きの波文。内面見込部に詳細不明（波千鳥文？）の文様あり。	釉調:明青灰(5B8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/3	推定つまみ径4.2cm,基部径9.4cm,器高2.6cm
451	包含層	Ⅲ+石レツC付	288	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。外面は草花文。高台内に型紙摺りらしき銀杏文。内面は口縁部に圏線，見込部に圏線と銀杏文。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	2/3	推定つまみ径5.8cm,推定基部径10.0cm,器高2.85cm
452	包含層	F10南 Ⅲ	285	磁器	肥前系染付	碗(蓋付碗)	蓋部	内外面施釉。外面は文字のようなものが書いてあるが判読不能。内面は無文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/5	基部径4.0cm
453	包含層	F8上+Ⅲ+FGⅢ	320	磁器	肥前系染付	小杯(猪口)	口縁部～底部	内外面施釉。内外面無文。白磁のような釉である。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/2	推定口径7.4cm,推定底径4.3cm,器高5.65cm
454	包含層	F8上	321	磁器	肥前系染付	小杯(猪口)	口縁部～底部	内外面施釉。外面に菖蒲のような食物の文様。内面無文。	釉調:灰白(2.5Y8/2)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	精良	2/5	推定口径5.4cm,推定底径3.4cm,器高3.45cm
455	包含層	F10西上	323	磁器	肥前系染付	小杯(猪口)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は口縁部付近に笹らしき文様。内面無文。畳付部に砂粒付着。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	2/5	推定口径7.0cm,推定底径2.6cm,器高3.15cm
456	包含層	D9Ⅲ	327	磁器	肥前系染付	小杯(猪口)	口縁部～底部	内外面施釉。内外面無文。白磁のような釉である。	釉調:灰白(10Y8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	3/5	推定口径5.0cm,推定底径3.15cm,器高3.2cm
457	包含層	石レツD東	317	磁器	肥前系染付	小杯(湯呑碗)	口縁部～底部付近	内外面施釉。内面は口縁部と腰部に圏線。外面は矢羽根文。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/8	推定口径7.6cm
458	包含層	SZ1－1	319	磁器	肥前系染付	小杯(湯呑碗)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は鳥と植物の文様。内面は口縁部に雷文，腰部に圏線，見込部に環状松竹梅文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/4	推定口径8.45cm,底径2.95cm,器高4.32cm
459	包含層	Ⅲ	289	磁器	肥前系染付	皿(五寸皿)	口縁部～底部	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は唐草文と圏線。高台内は圏線と銘款渦福。内面は口縁部に菊唐草，見込部に五弁花	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/2	口径12.0cm,底径7.5cm,器高4.75cm
460	包含層	Ⅲ	302	磁器	肥前系染付	皿(五寸皿)	口縁部～底部	内外面施釉。内面側面に梅らしき文様。見込み部は蛇の目釉剥ぎで，コンニャク印判の五弁花。外面は無釉。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	3/5	推定口径14.4cm,推定底径8.0cm,器高2.95cm
461	包含層	Ⅲ	295	磁器	肥前系染付	皿(五寸皿)	口縁部～底部	内外面施釉。外面は唐草文。内面は草木文。蛇ノ目凹形高台。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/5	推定口径14.0cm,底径8.2cm,器高4.15cm
462	包含層	Ⅲ	305	磁器	肥前系染付	皿(八角皿)	口縁部～底部	内外面施釉。内面は点描による円形文。口唇部には口紅。外面側面には簡略化された唐草文。高台内銘款に渦福。	釉調:明青灰(5BG7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/3	推定口径10.5cm,推定底径6.4cm,器高2.95cm
463	包含層	石レツD東+石レツB2－南	300	磁器	肥前系染付	皿(輪花皿)	口縁部～底部	内外面施釉。内面に環状の松竹梅文。外面は唐草文。高台内に「成化年製」の銘款。ＳＦ１から同型が出土	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	4/5	口径10.6cm,推定底径6.1cm,器高2.8cm
464	包含層	Ⅲ	304	磁器	肥前系染付	皿	口縁部～胴部	内外面施釉。内面側面に圏線と植物らしき文様。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(5GY8/1/)	精良	1/20	－
465	包含層	SI2	303	磁器	肥前系染付	皿	口縁部～底部	内外面施釉。内面見込み部に家屋が入る山水風景図。高台内銘款に渦福。同じ文様皿片がSZ4でも出土。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/6	推定底径6.1cm
466	包含層	F11南上	308	磁器	肥前系染付	小皿	口縁部～底部付近	内外面施釉。外面に幾何学的な区画文。	釉調:淡黄(7.5Y8/3)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/8	推定口径7.0cm,推定底径約3.3cm,器高約2.5cm
467	包含層	—	310	磁器	肥前系染付	小皿(紅皿)	底部付近	内外面施釉。見込み部に蛇の目釉剥ぎ。高台内に紅がわずかに残っている。	釉調:灰白(N8/)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/3	底径2.55cm

第16表　出土遺物観察表⑩

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
468	包含層	D9Ⅲ	339	磁器	肥前系染付	段重（蓋付鉢）	口縁部～体部	内外面施釉。内面の口縁部付近は無釉。外面は円形文。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/20	－
469	包含層	191	273	磁器	肥前系染付	鉢（角鉢）	口縁部～底部	16角の鉢。内外面施釉。外面は幾何学文。内面は幾何学文と菊花文。割面に漆継ぎの痕跡有り。	釉調:灰白(5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	2/5	推定口径15.9cm，推定底径7.0cm，器高8.1cm
470	包含層	Ⅲ	275	磁器	肥前系染付	鉢（輪花鉢）	口縁部～体部	4か所突出の波縁鉢。内外面施釉。外面は幾何学文の区画割り内に花文。内面無文。	釉調:灰白(7.5Y8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/6	推定口径14.2cm
471	包含層	—	276	磁器	肥前系染付	鉢（角鉢）	口縁部～体部	口縁部端反りの8角鉢。内外面施釉。外面は七宝文と草花文。内面は口縁部に白抜きの蛸唐草文。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/8	－
472	包含層	F8上+Ⅲ	329	磁器	肥前系染付	仏飯器	口縁部～底部	内外面施釉。脚部が一部無釉。外面に植物らしき文様があるが，欠損しており詳細不明。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	3/5	推定口径8.7cm，底径4.2cm，器高6.5cm
473	包含層	SX1	330	磁器	肥前系染付	仏飯器	口縁部～底部	内外面施釉。脚部が一部無釉。外面は赤絵による半菊花らしき文様。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	3/4	推定口径6.2cm，底径3.5cm，器高5.7cm
474	包含層	SX1+SZ8	332	磁器	肥前系染付	仏飯器	口縁部～脚部	内外面施釉。外面は口縁側部に蛸唐草文。内面無文。	釉調:明青灰(10BG7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/5	推定口径6.5cm
475	包含層	353	333	磁器	肥前系染付	仏飯器	坏部～脚部	内外面施釉。外面は口縁側部に赤・青・緑の色絵。内面無文。	釉調:明青灰(5B7/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/2	推定底径3.7cm
476	包含層	—	341	磁器	肥前系染付	瓶？	体部～底部付近	内外面施釉。外面に植物文。底部付近に圏線。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(5Y8/2)	精良	1/8	－
477	包含層	SX1	342	磁器	肥前系染付	瓶？	体部～底部付近	内外面施釉。外面は丸文に橘のような花の文様。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/8	－
478	包含層	FGⅢ	340	磁器	肥前系染付	瓶	頸部～底部	外面白磁のような釉。外面は植物らしき文様であるが，詳細不明。内面は無釉。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	推定底径5.1cm
479	包含層	Ⅴ	346	磁器	肥前系染付	筆筒	口縁部～体部	外面施釉。内面は口縁部付近のみ施釉。外面に文様の一部が確認できるが，僅かのため詳細不明。平戸系か。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	1/6	推定口径6.6cm
480	包含層	E10 Ⅲ	343	磁器	肥前系染付	不明（鉢？香炉？）	底部付近	内外面明緑灰色釉で無文。高台内は無釉。	釉調:明緑灰(5GY8/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/10	推定底径5.25cm
481	包含層	SX1+SZ2	336	磁器	肥前系染付	瓶（徳利）	口縁部～頸部	外面施釉。外面は頸部に草花文。内面は口縁部のみ施釉。335と同一個体か。	釉調:明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/5	口径6.8cm
482	包含層	19+C9Ⅱ+190	337	磁器	肥前系染付	壺	口縁部～肩部	外面白磁のような釉を施し無文。内面は口縁部と胴部施釉。肩部付近無釉。	釉調:明緑灰(7.5GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/8	口径11.3cm
483	包含層	22	255	磁器	肥前系青磁染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉，外面青磁釉。内面は口縁部に斜行文帯。	釉調:明緑灰(7.5GY7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/8	推定口径9.9cm
484	包含層	Ⅲ	254	磁器	肥前系青磁染付	碗	口縁部～体部	内外面施釉，外面青磁釉。内面は見込部にぼやけた圏線。	釉調:明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/8	推定口径8.4cm
485	包含層	石レツC付	253	磁器	肥前系青磁染付	碗	体部～底部	内外面施釉，外面青磁釉。内面は見込部に圏線とコンニャク印判の五弁花。	釉調:明緑灰(7.5GY7/1)	胎土:灰白(N8/)	精良	1/5	推定底径4.2cm
486	包含層	Ⅲ	286	磁器	肥前系青磁染付	碗（蓋付碗）	蓋部	内外面施釉，外面青磁釉。高台内に銘款あるが判読不能。内面は，口縁部に四方襷文，見込部に圏線とコンニャク印判の五弁花。	釉調:明緑灰(7.5GY7/1)	胎土:灰白(N7/)	精良	1/2	推定つまみ径4.1cm，基部径9.6cm，器高3.55cm
487	包含層	石レツD中付	185	磁器	肥前系青磁染付	Ⅲ	体部	内外面に施釉。見込み部には芭蕉文。底部畳付部は無釉で砂目が付着している。	外面:オリーブ灰(10Y5/2)	内面:緑灰(7.5GY56/1)	精良	1/10	推定底径6.6cm
488	包含層	E9東	187	陶器	肥前系青磁染付	高台付Ⅲ	底部付近	青磁染付，内外面に施釉。高台内は蛇の目釉剥ぎ。3方に脚，脚間は窓付。見込み部に文様。	外面:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:灰白(7.5Y7/1)	精良	1/2	推定底径12.4cm
489	包含層	F10西 上	392	陶器	薩摩系	碗	底部	内外面施釉。内面見込部は蛇の目釉剥ぎで砂付着。高台付近は内外面無釉。	釉調:暗赤灰(2.5YR3/1)	胎土:にぶい赤褐(2.5YR5/3)	1㎜以下の灰白色土粒をわずかに含む	1/4	底径4.2cm
490	包含層	—	386	陶器	薩摩系	土瓶	蓋部	外面施釉。内面無釉。内外面回転ナデ	釉調:暗褐(7.5YR3/3)	胎土:灰褐(7.5YR4/2)	1～2㎜程の黒褐色土粒を含む	2/5	
491	包含層	石レツB－1付	394	陶器	薩摩系	Ⅲ（灯明Ⅲ？）	底部	外面施釉。外面は無釉で，回転ナデの痕跡が残る。底部は糸切り痕。	釉調:暗褐(7.5YR3/3)	胎土:灰褐(7.5YR6/2)	含有物は殆どなし。わずかに1㎜以下の乳白色土粒を含む	1/8	推定底径5.6cm
492	包含層	EGⅢ	393	陶器	薩摩系	瓶	底部	内外面は回転ナデの後に施釉。内面の釉は飴色。底部には糸切り痕。	釉調:褐(10YR4/4)	胎土:にぶい橙(5YR6/4)	含有物は殆どなし。わずかに1㎜以下の乳白色土粒を含む	1/8	底径5.9cm
493	包含層	E9Ⅲ	385	陶器	薩摩系	ひょうそく	体部～底部	外面無釉。底部中心部に径4㎜程の穿孔。	－	胎土:赤灰(10R5/1)	含有物はほとんど無い。	1/2	底径2.2cm
494	包含層	石レツB・D付	397	陶器	薩摩系	鉢	底部付近	内外面は回転ナデの後に施釉。	釉調:暗赤褐(10R3/2)	胎土:灰褐(2.5Y8/1)	2㎜以下の乳白色・灰黄色土粒を多く含む	1/6	推定底径10.9cm
495	包含層	F11南上	396	陶器	薩摩系	鉢	底部付近	内外面は回転ナデの後に施釉。	釉調:淡黄(5Y8/3)	胎土:暗赤褐(5Y3/6)	1㎜以下の乳白色土粒を多く含む	1/8	推定底径22.5cm
496	包含層	345+D9Ⅲ	149	陶器	産地不明	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には9条を単位とする擂目。	外面:明赤褐(2.5YR 5/6)	内面:にぶい赤褐(5YR 5/4)	3㎜以下の乳白色，7㎜以下の小石粒を含む	－	推定口径35.2cm
497	包含層	D9Ⅲ	160	陶器	唐津系？	擂鉢	口縁部～体部	内外面は回転ナデの後に施釉。内面には擂目が施される。口縁部に注口あり。	釉調:明赤褐(5YR 3/3)	胎土:にぶい赤褐(2.5YR 5/3)	4㎜以下の灰白色，2㎜以下の黒色粒を含む	1/10	推定口径32.4cm
498	包含層	F8上	156	陶器	堺系？	擂鉢	口縁部	内外面は主に回転ナデと横方向のナデによる調整。内面には10条以上を単位とする擂目が施される。口縁部外側には2本の凹線を，内側には縁帯を有する。	外面:にぶい赤褐(5YR 4/3)	内面:にぶい赤褐(5YR 4/3)	3㎜以下の灰白色，0.5㎜以下の透明光沢粒を含む	1/10	推定口径27.6cm
499	包含層	F8上	150	陶器	産地不明	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には6条以上を単位とする擂目。口唇部には4条の凹線。	外面:黄灰(2.5Y 6/1)	内面:黄灰(2.5Y 6/1)	3㎜以下の黒色，1㎜以下の灰白色粒を含む	－	推定口径23.7cm
500	包含層	石レツC付	148	陶器	産地不明	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には7条を単位とする擂目。注口は内側に入り込んでいる。	外面:橙(5YR 6/6)	内面:橙(2.5YR 6/6)	1㎜以下の黒色，4㎜以下の乳白色粒を含む	－	
501	包含層	石レツD中付	151	陶器	産地不明	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には10条を単位とする擂目。口唇部には2条の凹線。	外面:赤褐(10YR 4/3)	内面:赤褐(10YR 4/3)	3㎜以下の灰白色，2㎜以下の黒色光沢粒を含む	1/16	

第17表　出土遺物観察表⑪

番号	出土場所	注記	実測番号	種類		器種	部位	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	残存量	法　量
502	包含層	F8上	147	陶器	産地不明	擂鉢	口縁部～体部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には10条を単位とする擂目。	外面:にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	内面:にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	1.5㎜以下のにぶい黄褐・黒色光沢粒を含む	1/10	
503	包含層	石レツD中付+F10西上	163	陶器	瀬戸・美濃系？	擂鉢	底部	内外面は回転ナデ。外面下部には工具によるナデ。内面には放射状の擂目が施される。底部は糸切り底。	外面:にぶい赤褐(2.5YR 5/3)	内面:にぶい赤褐(2.5YR 5/3)	3㎜以下の灰黄色粒，3㎜程の黒色光沢粒を含む	1/3	推定底径9.9cm
504	包含層	石レツC付	153	陶器	唐津系？	擂鉢	底部	内外面に施釉。内面には6条以上を単位とする擂目が施される。底部には高台。	釉調:オリーブ褐(2.5Y 4/3)	胎土:にぶい赤褐(5YR 5/3)	2㎜以下の灰白，1㎜以下の黒色光沢粒を含む	1/6	推定底径12.8cm
505	包含層	—	162	陶器	瀬戸・美濃系？	擂鉢	底部	内外面は回転ナデ。外面には一部指頭痕がある。内面には10条以上の擂目が施される。底部は糸切り底。	外面:にぶい橙(2.5YR 6/4)	内面:にぶい褐(7.5YR 4/3)	2㎜以下の灰白色粒を含む	1/2	推定底径10.8cm
506	包含層	F8上	159	陶器	産地不明	擂鉢	底部	内外面は主に回転ナデによる調整。内面には12条を単位とする放射線状の擂目。底部はナデ調整。	外面:赤褐(10R 4/3)	内面:赤褐(10R 4/3)	5㎜以下の乳白色粒を含む		推定底径16.1cm
507	包含層	F8上	348	陶器	産地不明	蓋付碗	蓋部	内外面は白磁調の施釉・無文。	釉調:灰白(2.5GY8/1)	胎土:灰白(10Y8/1)	精良	7/8	摘部径3.9cm，基部径9.2cm，器高2.95cm
508	包含層	F8上	347	磁器	産地不明	碗	口縁部～底部	内外面は白磁調の施釉・無文。高台内まで施釉。畳付部のみ無釉。	釉調:明緑灰(10GY8/1)	胎土:灰白(7.5Y8/1)	精良	1/3	推定口径10.6cm，推定底径4.6cm，器高6.1cm
509	包含層	石レツD東+Ⅲ	350	陶器	唐津系	碗	体部～底部	内外面は畳付部以外施釉。外面に一部緑色釉が確認できる。	釉調:淡黄(2.5Y8/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/3	底径4.9cm
510	包含層	D9Ⅲ+E9東	354	陶器	唐津系	碗	体部～底部	内外面施釉（貫入多し）・無文。体部下半から底部にかけて無釉。	釉調:浅黄(5Y7/3)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/5	推定底径3.6cm
511	包含層	62Ⅲ	355	陶器	産地不明	碗	口縁部～体部	内外面施釉（貫入多し）・無文。	釉調:灰白(5Y7/2)	胎土:灰白(5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/8	推定口径11.5cm
512	包含層	F8Ⅲ	360	陶器	産地不明	碗	口縁部～体部	内外面施釉（貫入多し）・無文。	釉調:にぶい黄(2.5Y6/4)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/10	推定口径11.9cm
513	包含層	E9Ⅲ石レツD東	365	陶器	産地不明	碗？水差？	口縁部～体部	内外面に灰色施釉。回転篦ケズリ痕が残る	釉調:にぶい黄橙(2.5Y6/3)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	含有物はほとんど無い。	1/10	推定口径10.6cm
514	包含層	E9 Ⅲ	365	陶器	産地不明	碗？水差？	底部付近	内外面に灰色施釉。畳付部と高台内側は無釉。回転篦ケズリ痕が残る	釉調:にぶい黄橙(2.5Y6/3)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	含有物はほとんど無い。	1/10	推定底径5.6cm
515	包含層	408	362	陶器	産地不明	碗	口縁部～底部付近	内外面白磁調の施釉（貫入多し）・無文。	釉調:灰白(5Y8/1)	胎土:灰白(5Y8/2)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	2/3	推定口径11.7cm，推定底径5.05cm
516	包含層	石レツB－2南	370	陶器	京・信楽系？	碗	体部～底部	内外面に淡黄色施釉。畳付部のみ無釉。見込は蛇の目釉剥ぎ。	釉調:淡黄(2.5Y7/4)	胎土:灰白(2.5Y8/2)	含有物はほとんど無い。	1/4	推定底径4.6cm
517	包含層	SX1	369	陶器	産地不明	鉢	口縁部～底部	内外面に明黄褐色施釉。畳付部のみ無釉。見込は蛇の目釉剥ぎ。底部に2か所の胎土目積痕か。	釉調:明黄褐(2.5Y6/6)	胎土:灰白(5Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	9/10	口径16.0cm，底径7.75cm，器高5.05cm
518	包含層	36Ⅲ	189	陶器	産地不明(陶胎青磁)	香炉	口縁部	陶胎青磁。内外面のみ施釉。内面の下半は無釉。188と同一個体か。	内外面:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:浅黄橙(10YR6/2)	精良	1/8	推定口径11.5cm
519	包含層	—	188	陶器	産地不明(陶胎青磁)	香炉	体部～底部付近	陶胎青磁。外面のみ施釉。畳付部高台内部は無釉。見込み部にはかな墨書が書かれているが判読不能。189と同一個体か。	外面:オリーブ灰(10Y6/2)	胎土:浅黄橙(10YR6/2)	精良	1/3	底径4.4cm
520	包含層	SX1	384	陶器	産地不明	鉢？	底部付近	内外面施釉。畳付部は無釉で砂付着。内面見込にワラ灰が付着。	釉調:黒褐(10YR3/2)	胎土:にぶい黄褐(10YR6/3)	1～3㎜程の灰白色・暗赤褐色土粒をわずかに含む	1/10	推定底径8.0cm
521	包含層	SX1	374	陶器	産地不明(陶胎青磁)	水指	体部～底部	内外面施釉（貫入多い）だが，底部畳付部は無釉。高台内に回転篦ケズリ痕を残す。	釉調:オリーブ灰(10Y5/2)	胎土:灰白(10Y7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/2	推定底径10.4cm
522	包含層	—	378	陶器	産地不明(陶胎青磁)	火入	口縁部～底部	外面は施釉。底部付近は無釉。内面は口縁部付近のみ施釉。外面に染付文。	釉調:オリーブ灰(2.5Y6/1)	胎土:灰黄(2.5Y7/2)	含有物はほとんど無いが，微細な黒色土粒を含む。	1/3	推定口径9.6cm，推定底径5.2cm，器高7.1cm
523	包含層	石レツA西	377	陶器	産地不明(陶胎青磁)	火入	口縁部付近～底部	外面は施釉。畳付部は無釉。内面は口縁部付近のみ施釉。見込は化粧土を施し墨書（識字不能）。	釉調:明緑灰(10GY7/1)	胎土:灰白(N8/)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/4	推定底径4.8cm
524	包含層	SX1	380	陶器	産地不明	仏花瓶	頸部～底部	内外面施釉。畳付は無釉。頸部に耳状把手が2つ。	釉調:暗オリーブ(5Y4/3)	胎土:灰(5Y6/1)	含有物はほとんど無いが，微細な黒色土粒を含む。	4/5	底径6.6cm
525	包含層	SX1	382	磁器	産地不明	不明(筆洗？)	体部	外面施釉。内面無釉。	釉調:黒(N1.5/)	胎土:灰白(5Y8/1)	精良	1/3	
526	包含層	F8上	383	陶器	関西系	行平鍋	口縁部	内面施釉。外面化粧土の刷毛目。外面に3段の飛び鉋跡。	釉調:灰オリーブ(5Y6/3)	胎土:灰白(10YR7/1)	きめ細やかで含有物はほとんど無い。	1/20	－
527	包含層	SI1	401	瓦質陶器		鉢	口縁部	内面は回転ナデ。外面タタキによる文様。402と同一個体か。	胎土:灰(N6/)	胎土:灰(N6/)	1㎜程の暗赤褐色土粒を多く含む	1/20	
528	包含層	SI1	398	瓦質陶器		鉢(六角鉢)	体部～底部	内外面無釉。内面は回転ナデの後に工具によるナデ。外面に判読不能の刻印。	灰(N6/)	にぶい黄橙(10YR7/2)・灰色(N5/)	2㎜以下の褐色，1㎜程の黒褐色・灰褐色土粒・白色光沢粒を多く含む	2/5	
529	包含層	Ⅲ	403	土師質土器		焙烙	口縁部～胴部	内外面は回転ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	橙(5YR6/6)	1～3㎜の赤褐色・灰白・黒褐色・灰褐色土粒，金雲母を含む	1/10	推定口径33.0cm

第17表　出土遺物観察表⑫

(1)石器

番号	実測番号	出土場所	注　記	種　類	器　種	石　材	法　量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
65	451	SF3	SF3 北	石器	砥石	頁　　岩	3.75	4.3	0.6	12.5
74	454	SF4	SF4 南	石器	敲石	砂　　岩	10.8	4.0	3.2	231.4
75	456	SF4	SF4 南	石器	敲石	砂　　岩	15.6	4.3	3.2	310.8
129	441	SZ1	SZ1	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	5.9	5.1	1.6	86.8
162	447	SZ6	SZ6	石器	砥石	砂　　岩	8.1	2.9	2.0	70.1
163	459	SZ6	SZ6	石器	敲石	砂　　岩	9.7	14.6	3.6	738.6
167	460	SZ7	SZ7	石器	敲石	砂　　岩	8.8	16.1	5.0	1026.7
547	470	包含層	F8 上	石器	火打石	乳白色玉髄	1.4	1.2	1.0	2.3
548	445	包含層	F8 上	石器	硯	頁 岩 ?	5.7	3.2	0.8	16.0
549	457	包含層	SI2	石器	石臼	凝灰岩	11.6	2.2	1.1	173.7
550	458	包含層	186	石器	石臼	凝灰岩	21.6	10.3	5.8	1750.0
551	462	包含層	−	石器	石臼上	凝灰岩	20.0	10.5	12.4	3868.0
552	463	包含層	−	石器	石臼	凝灰岩	30.5	21.4	11.5	7200.0
575	467	包含層	E11 V	石器	石鏃	チャート	2.5	2.0	0.35	1.0
576	461	包含層	F11南上	石器	石錘	砂　　岩	3.8	7.1	1.3	63.2
577	453	包含層	石レツD東上	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	6.25	2.2	0.85	19.1
578	450	包含層	SC4-4	石器	砥石	凝灰岩	5.5	4.0	1.0	27.9
579	449	包含層	石レツB-1付	石器	砥石	頁　　岩	11.3	4.7	2.0	115.0
580	444	包含層	石レツD中付	石器	砥石	砂　　岩	12.0	3.2	2.4	181.2
581	446	包含層	D9 Ⅲ	石器	敲石	砂　　岩	6.7	3.6	1.4	60.0
582	448	包含層	250	石器	砥石	凝灰岩	7.8	3.3	1.7	68.8
583	442	包含層	FG Ⅲ	石器	砥石	リソイド岩(陶石)	8.9	7.0	4.5	288.1
584	443	包含層	SX1	石器	砥石	砂　　岩	7.5	4.5	2.5	163.1
585	455	包含層	E9 Ⅲ	石器	敲石	砂　　岩	11.7	3.7	1.9	134.0
586	452	包含層	E9 Ⅲ	石器	砥石	砂　　岩	15.0	4.8	3.0	390.0

(2)その他

番号	実測番号	出土場所	注　記	種　類	部　位	特　徴	法　量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
62	406	SF1	SF1	銭貨	−	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	2.3
553	407	包含層	F10 西	銭貨	−	寛永通宝	2.2	2.2	0.1	2.0
554	405	排土中	ハイ土	煙管	吸口	縦位の刻線あり	4.9	0.9	0.1	6.3

(3)瓦

番号	実測番号	出土場所	注　記	種　類	器　種	文様・銘など	法　量			
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
63	408	SF1	SF1	瓦	飾瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	6.5	6.2	2.4	94
73	510	SF4	SF4 下	瓦	飾瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	7.8	14.4	5.4	369
130	421	SZ1	SZ1	瓦	軒瓦	陰刻の菊花文	8.6	8.6	2.5	150
131	420	SZ1	SZ1	瓦	軒瓦	陽刻の菊花文	11.1	3.3	3.4	242
132	423	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	印刻あり判読不能	5.3	7.1	1.7	58
133	425	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「…次」	7.7	7.8	1.9	139
134	426	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「…小平次」	8.3	10.2	1.7	141
135	429	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「城ヶ崎小平次」	12.5	13.7	1.6	305
136	428	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「…小平次」	7.1	9.2	1.7	136
137	424	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「…ヶ崎小平次」	9.6	7.2	1.9	140
138	430	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	印刻あり判読不能	20.7	15.6	1.9	851
139	427	SZ1	SZ1	瓦	平瓦	銘「…次」	7.7	6.6	1.9	96
140	431	SZ1	SZ1	瓦	平瓦(角部?)	なし	10.1	12.3	1.8	257
141	432	SZ1	SZ1	瓦	袖瓦	なし	25.5	16.9	1.7	998
142	433	SZ1	SZ1	瓦	丸瓦	なし	22.2	13.0	1.5	816
143	422	SZ1	SZ1	瓦	飾瓦(鬼瓦?)	渦巻き状の刻文	8.7	9.3	5.3	275
530	414	包含層	SI1	瓦	軒桟瓦	菊文と唐草文	8.9	16.4	2.5	868
531	410	包含層	SI1	瓦	軒桟瓦	菊文と唐草文	8.3	12.8	2.1	338
532	412	包含層	SI1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	12.2	9.1	1.8	78
533	411	包含層	SI1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	8.8	8.5	1.9	85
534	409	包含層	SI1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	6.8	12.4	2.4	226
535	413	包含層	SI1	瓦	軒丸瓦	巴文と珠文	8.7	8.7	2.1	151
536	416	包含層	SI1	瓦	軒桟瓦	唐草文	19.9	20.4	2.0	930
537	417	包含層	SI1	瓦	軒桟瓦	唐草文	22.7	18.7	1.8	770
538	438	包含層	−	瓦	平瓦	銘「…小平次」	4.7	9.1	1.6	66
539	419	包含層	SI2	瓦	平瓦	なし	7.6	9.6	1.8	157
540	415	包含層	SI1	瓦	軒桟瓦	唐草文	14.5	19.5	1.8	382
541	437	包含層	−	瓦	平瓦	線刻あり	9.7	13.2	1.7	168
542	436	包含層	石レツD西	瓦	平瓦	銘「久島…」	15.2	16.6	1.8	453
543	439	包含層	−	瓦	平瓦	銘「城ヶ崎小平次」	13.2	13.8	1.8	314
544	435	包含層	SX1	瓦	丸瓦	なし	20.2	12.6	1.6	805
545	418	包含層	SI2	瓦	丸瓦	なし	13.9	12.5	2.9	440
546	434	包含層	SX1	瓦	飾瓦	宝珠文	18.9	15.7	4.9	799

第19表　出土遺物計測表

第Ⅳ章　自然科学分析

曽井第２遺跡の発掘調査では，井戸跡や池跡と考えられる遺構が出土した。これらの遺構の性格や用途および当時の周囲の植生・環境を把握する目的で，花粉分析，寄生虫卵分析，珪藻分析，植物珪酸体分析，樹種同定，フローテーションによる微細自然遺物の検出及び分析作業を行った。分析作業は，花粉分析（第１節）・寄生虫卵分析（第２節）・珪藻分析（第３節）・植物珪酸体分析（第４節）・SH1出土木製品の樹種同定（第５節）を株式会社古環境研究所が，SF1・5出土木製品の樹種同定（第６節）を株式会社吉田生物研究所が，フローテーション作業による微細自然遺物の分析作業（第７節）を埋蔵文化財センターで行った。

第１節　花粉分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．方法

花粉の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

２）水洗処理の後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

３）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

３．結果

（１）分類群

出現した分類群は，樹木花粉29，樹木花粉と草本花粉を含むもの５，草本花粉28，シダ植物胞子２形態の計64である。分析結果を**表１**に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔**樹木花粉**〕マキ属，モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，マツ属単維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤマモモ属，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，アカメガシワ，サンショウ属，モチノキ属，カエデ属，ムクロジ属，ブドウ属，グミ属，カキ属，モクセイ科，ツツジ科

〔**樹木花粉と草本花粉を含むもの**〕クワ科－イラクサ科，バラ科，マメ科，ウコギ科，ニワトコ属－ガマズミ属

〔**草本花粉**〕ガマ属－ミクリ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，ソバ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，ハス，キンポウゲ属，アブラナ科，ワレモコウ属，ノササゲ，フウロソウ属，アカバナ科，アリノトウグサ属－フサモ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，シソ科，キツネノマゴ，オオバコ属，ヘクソカズラ属，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔**シダ植物胞子**〕単条溝胞子，三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）**池状遺構（SZ１，池跡？）**南地点の底面（試料３）では，花粉がほとんど検出されなかった。埋土下部（試料２）では，樹木花粉ではスギが優勢であり，マツ属複維管束亜属，シイ属－マテバシイ属，クリ，コナラ属アカガシ亜属，カエデ属，ブドウ属，ツツジ科などが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり，カヤツリグサ科，セリ亜科，アブラナ科，イボクサ，ミズアオイ属などが伴われる。埋土上部（試料１）では，シダ植物胞子の占める割合が高くなり，カヤツリグサ科，アブラナ科が増加している。

北地点の埋土下部（試料２）と埋土上部（試料１）でも，おおむね同様の結果であるが，樹木花粉のブドウ属が特徴的に検出され，グミ属，カキ属なども出現している。また，草本花粉ではハス，ソバ属も認められた。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり，風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから，他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。

２）**１号井戸跡（SF１）**埋土（試料１）では，樹木花粉ではスギが優勢であり，マツ属複維管束亜属，クリ，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり，ヨモギ属，カヤツリグサ科，アブラナ科，ソバ属などが低率に伴われる。

３）**２号井戸跡（SF２）**地山層（試料４）および埋土底部（試料３）では，花粉がほとんど検出されなかった。埋土下部（試料２）では花粉密度が低いが，草本花粉ではイネ属型を含むイネ科，ヨモギ属，カヤツリグサ科が優勢であり，タンポポ亜科，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，セリ亜科，ソバ属などが伴われる。樹木花粉ではシイ属－マテバシイ属，クリ，マツ属複維管束亜属，コナラ属アカガシ亜属などが認められる。埋土上部（試料１）では樹木花粉の占める割合が高く，スギ，マツ属複維管束亜属，シイ属－マテバシイ属が優勢であり，クリなどが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり，カヤツリグサ科，ヨモギ属，キク亜科，アブラナ科，ソバ属などが伴われる。

４）**３号井戸跡（SF３）**埋土（試料１）では，樹木花粉の占める割合が高く，スギ，マキ属が優勢であり，クリ，シイ属－マテバシイ属などが低率に伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり，ヨモギ属，アブラナ科などが低率に伴われる。

５）**５号井戸跡（SF５）**埋土（試料１，２）および井戸外（試料３）とも，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優勢であり，アカザ科－ヒユ科，ヨモギ属，カヤツリグサ科，アブラナ科などが伴われる。樹木花粉では，マツ属複維管束亜属が比較的多く，クリ，コナラ属アカガシ亜属，シイ属

－マテバシイ属などが伴われる。

6）6号井戸跡（SF 6）埋土（試料１）では，花粉が検出されなかった。

4．花粉分析から推定される植生と環境

（1）池状遺構（SZ 1，池跡？）遺構埋土の堆積当時は，遺構内もしくはその近辺にイネ科，カヤツリグサ科，セリ亜科，イボクサ，ミズアオイ属，ハスなどの水生植物が生育していたと考えられ，池状の水域の存在が示唆される。また,周辺では水田稲作をはじめソバやアブラナ科などの畑作が行われていたと推定される。アブラナ科には，アブラナ（ナタネ），ダイコン，ハクサイ，タカナ，カブなど多くの栽培植物が含まれている。

森林植生としては，周辺にスギを主体としてマツ類，シイ類，カシ類，クリなども見られる森林が分布していたと推定される。スギは植栽や造林，マツ類は植栽や二次林が想定される。また，遺構の近隣にはブドウ属が生育していたと考えられ，カエデ属，ツツジ科，グミ属，カキ属などの存在も認められた。

（2）井戸跡（SF 1，SF 2，SF 3，SF 5，SF 6）１号井戸跡（SF 1）と２号井戸跡（SF 2）の埋土の堆積当時は，周辺で水田稲作をはじめソバやアブラナ科などの畑作が行われていたと考えられ，遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類，シイ類，カシ類，クリなども見られる森林が分布していたと推定される。３号井戸跡（SF 3）でも，おおむね同様の状況であったと考えられるが，マキ属が特徴的に認められ，近隣に生育していた可能性が考えられる。

５号井戸跡（SF 5）の埋土の堆積当時は，イネ科，アカザ科－ヒユ科，ヨモギ属などの草本類が優勢な日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ，遺跡周辺にはマツ類，シイ類，カシ類，クリなどが分布していたと推定される。また，その他の地点で優勢なスギがあまり見られないことから，他の遺構とは時期や性格が異なる可能性が考えられる。

６号井戸跡（SF 6）では，花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

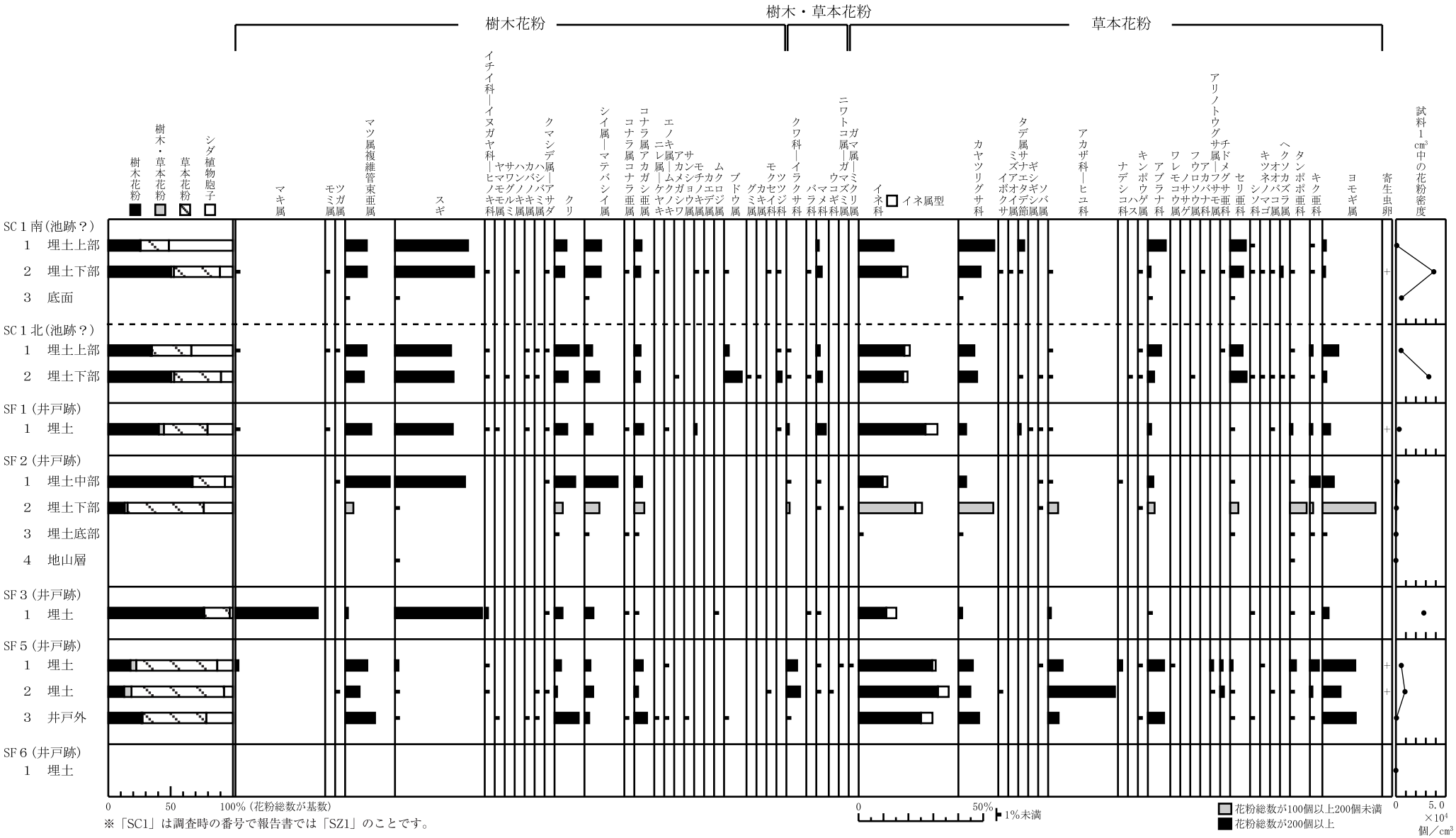
中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表１　曽井第２遺跡における珪藻分析結果

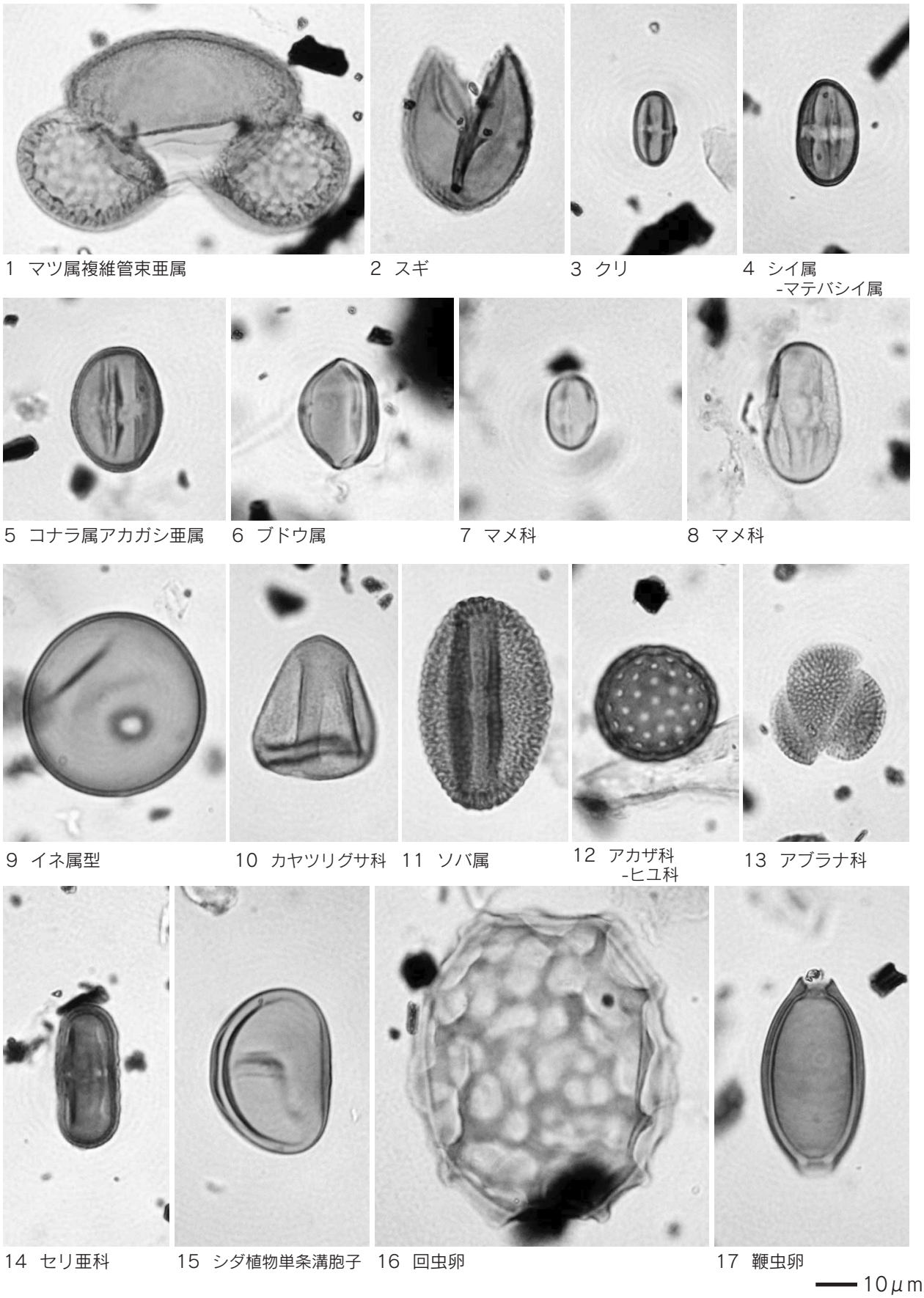
分類群	ＳＺ１南			ＳＺ１北		ＳＦ１	ＳＦ２				ＳＦ３	ＳＦ５			ＳＦ６
	1	2	3	1	2	1	1	2	3	4	1	1	2	3	1
貧塩性種（淡水生種）															
Achnanthes exigua		2													
Achnanthes lanceolata		4		3											
Amphora copulata				1											
Amphora montana	1	5			5	11	2	39	1		28	3	52	39	
Amphora spp.											2				
Amphora veneta	1	2		4	1										
Anomoeoneis styriaca						6									
Caloneis bacillum					3	1					1				
Caloneis hyalina		4			2	2					57	4	8		
Caloneis lauta		2		3	2			2							
Caloneis molaris				1											
Caloneis silicula					2										
Caloneis spp.														1	
Cymbella gracilis						3					1				
Cymbella lanceolata				2	2										
Cymbella minuta		2													
Cymbella naviculiformis					1										
Cymbella perpusilla						3									
Cymbella silesiaca		6		3	3	1								1	
Cymbella tumida	1	5		1	3										
Denticula sp.											3				
Diploneis spp.	7	3		3	2	3					1			1	
Diploneis subovalis	2	7		10	3	2					3				
Epithemia adnata		5													
Epithemia turgida	1	2													
Eunotia bilunaris						6									
Eunotia flexuosa						22									
Eunotia implicata						1									
Eunotia minor	6	52		10	14	2									
Eunotia naegelii												1			
Eunotia praerupta						2	1								
Eunotia pseudoserra					5										
Eunotia soleirolii	2														
Eunotia spp.	3				1										
Fragilaria capucina		1													
Frustulia rhomboides v. *saxonica*						1								1	
Frustulia vulgaris				1	6	4		1			6			3	
Gomphonema acuminatum		4		2	5	8									
Gomphonema affine				2											
Gomphonema angustatum		1		1	2										
Gomphonema augur		2													
Gomphonema augur v. *turris*				2	15	4									
Gomphonema clevei		3			2										
Gomphonema globiferum		1													
Gomphonema gracile		6		5	9	6					3				
Gomphonema minutum		5			3										
Gomphonema mexicanum						10									
Gomphonema parvulum	2	13		7	5	13					1		5	5	
Gomphonema pseudsphaerophorum		6		1	5										
Gomphonema sphaerophorum					2	3									
Gomphonema spp.	2	5		2	5	8								1	
Gomphonema truncatum		1			2	11									
Gyrosigma spp.	3	12		4	15										
Hantzschia amphioxys	10	4		37	2	9	7	44			10	9	23	5	
Melosira varians				1											
Navicula confervacea	1	12		4	4	71		2			1		1		
Navicula contenta	20	13		48	8	37	3	30			27	193	36	21	
Navicula cryptocephala														1	
Navicula cryptotenella					6										
Navicula elginensis	3	35		14	17	1		2			8	3		3	
Navicula gallica						4					3	2	1		
Navicula goeppertiana					1	35							1		
Navicula gregaria													8	8	
Navicula ignota				4											
Navicula kotschyi		1		1	1						4	3			
Navicula mutica	37	30		61	40	25	4	55			25	26	33	10	
Navicula mutica v. *ventricosa*													2		
Navicula pupula		6		1	2						2			1	
Navicula pusilla					3										
Navicula pusio							1								
Navicula spp.		1		1	2	13		2			3	2	3	4	
Navicula submolesta													11	2	
Navicula tokyoensis						1									
Navicula veneta					2	1							9	3	
Navicula viridula v. *rostellata*		3		1							1		3	2	
Neidium affine					1								3		
Neidium spp.	1			2	1			1			1	3	1	4	
Nitzschia brevissima				1	1	5		3	1		13	8	8	3	
Nitzschia debilis	2	1		2	6	10		4			35	21	7	8	
Nitzschia frustulum													1		
Nitzschia nana				1		2					5		8	2	
Nitzschia palea						3		9			14	30	43	40	
Nitzschia recta					1										
Nitzschia sinuata v. *delognei*														4	
Nitzschia spp.	1	1		1	3	1		4			6		3	6	
Orthoseira roeseana	3														
Pinnularia acrosphaeria	7	8		8	3										
Pinnularia appendiculata	2	1			2			2			2	3	3	1	
Pinnularia balatonis		2													
Pinnularia borealis	2			7	7		1	6			6	3	9	2	
Pinnularia brevicostata					2										
Pinnularia gibba	2	11		6	6										
Pinnularia hemiptera	1				4										
Pinnularia intermedia											3				
Pinnularia interrupta		1		1	8										
Pinnularia maior					1										
Pinnularia microstauron		3		6	2	4		8	2		5	1	50	3	
Pinnularia obscura				1											
Pinnularia schroederii	2	1		10	6	3	3	1				2		2	
Pinnularia spp.	7	2			5			13			6	4	5	2	
Pinnularia subcapitata	9			4	2	3	1	24			5	20	8	7	
Pinnularia viridis				1				2							
Rhopalodia gibba	6	2		4	4	1	1								
Rhopalodia spp.		1													
Stauroneis acuta				1											
Stauroneis anceps		1		1											
Stauroneis phoenicenteron		5		1	7										
Stauroneis smithii		2		2	2						7		1		
Stauroneis sp.1														1	
Stauroneis spp.		1													
Surirella angusta		1			1	1	2	5			3		4	3	
Surirella ovata				1				2	1		1		3	1	
Synedra ulna		1			1										
貧－中塩性種（淡－汽水生種）															
Rhopalodia gibberula	9	13		9	20	19	1				9		2		
中－真塩性種（汽－海水生種）															
Achnanthes delicatula	1	3			1										
Hantzschia elongata					1										
Nitzschia coarctata					2										
Nitzschia levidensis v. *victoriae*											1				
Nitzschia littoralis											2				
Nitzschia lorenziana					4										
Nitzschia sigma						2					2				
Nitzschia vitrea											1	1			
合　計	157	327	0	311	317	384	27	261	5	0	317	342	355	201	0
未同定	17	20	0	21	17	16	1	11	1	0	28	37	24	15	0
破片	80	134	0	88	79	69	10	78	0	0	73	39	77	66	0
試料１cm³中の殻数密度	5.7 $\times10^4$	3.5 $\times10^5$	0.0	9.6 $\times10^4$	5.1 $\times10^5$	5.1 $\times10^5$	1.3 $\times10^4$	9.3 $\times10^4$	4.0 $\times10^3$	0.0	7.9 $\times10^5$	1.9 $\times10^5$	1.0 $\times10^6$	4.1 $\times10^4$	0.0
完形殻保存率（%）	68.5	72.1	－	79.0	80.9	85.3	－	77.7	－	－	82.5	90.7	83.1	76.6	0.0



※「SC1」は調査時の番号で報告書では「SZ1」のことです。

図１　曽井第２遺跡における花粉ダイアグラム

曽井第２遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3　クリ　4　シイ属-マテバシイ属

5　コナラ属アカガシ亜属　6　ブドウ属　7　マメ科　8　マメ科

9　イネ属型　10　カヤツリグサ科　11　ソバ属　12　アカザ科-ヒユ科　13　アブラナ科

14　セリ亜科　15　シダ植物単条溝胞子　16　回虫卵　17　鞭虫卵

10μm

第２節　寄生虫卵分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は，花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており，人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて，トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり，寄生虫卵の種類から，摂取された食物の種類や，そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

２．方法

寄生虫卵の分離抽出は，微化石分析法を基本にして，以下の手順で行った。

１）サンプルを採量

２）脱イオン水を加えて撹拌

３）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

４）25%フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）

５）遠心分離（1500rpm，２分間）による水洗の後にサンプルを２分割

６）片方にアセトリシス処理を施す

７）両方のサンプルを染色後，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

３．結果および考察

分析の結果，池状遺構（SZ１，池跡？）南地点の埋土下部（試料２）からカピラリアとマンソン裂頭条虫卵，SF１（井戸跡）の埋土（試料１）からカピラリア，SF５（井戸跡）の埋土（試料１，２）から回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも少量であり，明らかな消化残査も認められないことから，集落周辺における通常の生活汚染程度とみなされ，トイレ遺構との関連性は低いと考えられる。

回虫と鞭虫はヒトの寄生虫であり，カピラリアとマンソン裂頭条虫卵は主に鳥およびヒト以外の哺乳類の寄生虫である。回虫と鞭虫は，どちらも中間宿主を必要としない種類であり，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は，腹痛を主とする消化器病症がおこり，多数寄生の場合は症状が重い。

文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p. 9 -55.

金原正明･金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151-158.

表１　曽井第２遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		ＳＺ１南			ＳＺ１北		ＳＦ１	ＳＦ２				ＳＦ３	ＳＦ５			ＳＦ６
学名	和名	1	2	3	1	2	1	1	2	3	4	1	1	2	3	1
Helminth eggs	寄生虫卵															
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵												1	3		
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵													1		
Capillaria sp.	カピラリア		1				1									
Diphyllobothrium mansoni	マンソン裂頭条虫卵		1													
Total	計	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	4	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	0.0	1.4 ×10	0.0	0.0	0.0	0.6 ×10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8 ×10	2.8 ×10	0.0	0.0
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)

第３節　珪藻分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映しており，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

２．方法

以下の手順で，珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１cm^3を秤量

２）10％過酸化水素水を加え，加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成

６）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

３．結果

（１）分類群

試料から出現した珪藻は，中－真塩性種（汽－海水生種）８分類群，貧－中塩性種（淡－汽水生種）１分類群，貧塩性種（淡水生種）113分類群である。分析結果を**表１**に示し，珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを**図１**～**図５**に示す。また，主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe（1974）や渡辺（2005），陸生珪藻については小杉（1986），環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉（1988），淡水生種については安藤（1990）の記載を参照した。

〔貧－中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Amphora montana, Anomoeoneis styriaca, Caloneis hyalina, Caloneis lauta, Denticula sp., Diploneis spp., Diploneis subovalis, Eunotia bilunaris, Eunotia flexuosa, Eunotia minor, Frustulia vulgaris, Gomphonema acuminatum, Gomphonema augur v. turris, Gomphonema gracile, Gomphonema mexicanum, Gomphonema parvulum, Gomphonema spp., Gomphonema truncatum, Gyrosigma spp., Hantzschia amphioxys, Navicula confervacea, Navicula contenta, Navicula elginensis, Navicula gallica, Navicula goeppertiana, Navicula gregaria, Navicula kotschyi, Navicula mutica, Navicula spp., Navicula submolesta, Navicula veneta, Neidium spp., Nitzschia brevissima, Nitzschia debilis, Nitzschia nana, Nitzschia palea, Nitzschia spp., Pinnularia acrosphaeria, Pinnularia appendiculata, Pinnularia borealis, Pinnularia gibba, Pinnularia

intermedia，Pinnularia microstauron，Pinnularia schroederii，Pinnularia spp.，Pinnularia subcapitata，Pinnularia viridis，Rhopalodia gibba，Stauroneis smithii，Surirella angusta，Surirella ovata

（２）珪藻群集の特徴

１）池状遺構（SZ１，池跡？） 図１：南地点の底面（試料３）では珪藻が検出されなかった。埋土下部（試料２）では真・好止水性種，陸生珪藻，真・好流水性種がほぼ同じ割合であり，流水不定性種も検出された。真・好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群のEunotia minor，真・好流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群のNavicula elginensis，陸生珪藻のNavicula mutica，Navicula contenta，Navicula confervaceaが多く，貧－中塩性種（淡－汽水生種）のRhopalodia gibberulaなども認められる。埋土上部（試料１）では陸生珪藻の占める割合が高く，Navicula muticaを主に，Navicula contenta，Hantzschia amphioxys，Pinnularia subcapitataなどが検出された。北地点の埋土下部（試料２）と埋土上部（試料１）でも，南地点の埋土とおおむね同様の結果である。

２）１号井戸跡（SF１） 図２：埋土（試料１）では，陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻ではNavicula confervacea，Navicula contenta，Navicula muticaが多い。流水不定性種ではNavicula goeppertiana，Navicula spp.など，真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群のEunotia flexuosa，真・好止水性種のGomphonema truncatumなどが検出された。また，真・好流水性のGomphonema parvulumも低率に検出され，貧－中塩性種（淡－汽水生種）のRhopalodia gibberulaも認められた。

３）２号井戸跡（SF２） 図３： 地山層（試料４）と埋土底部（試料３）では，珪藻がほとんど検出されなかった。埋土下部（試料２）では，陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻ではNavicula mutica，Hantzschia amphioxys，Amphora montana，Navicula contenta，Pinnularia subcapitataが多い。流水不定性種ではPinnularia spp.，Nitzschia palea，真・好止水性種ではPinnularia microstauronが低率に検出された。埋土中部（試料１）では，珪藻があまり検出されなかった。

４）３号井戸跡（SF３） 図４：埋土（試料１）では，陸生珪藻の占める割合が高い。陸生珪藻ではCaloneis hyalina，Nitzschia debilis，Amphora montana，Navicula contenta，Navicula mutica，Nitzschia brevissima，Hantzschia amphioxysが多い。また，流水不定性種のNitzschia paleaなどが低率に検出され，貧－中塩性種（淡－汽水生種）のRhopalodia gibberulaも認められた。

５）５号井戸跡（SF５） 図５：埋土（試料１）では，陸生珪藻の占める割合が極めて高い。陸生珪藻ではNavicula contentaが卓越し，Navicula mutica，Nitzschia debilis，Pinnularia subcapitataなどが伴われる。埋土（試料２）と井戸外（試料３）では，陸生珪藻のAmphora montana，Navicula contentaが多く，Navicula mutica，Nitzschia debilis，Pinnularia subcapitataなどが伴われる。流水不定性種では，Nitzschia paleaが多く検出された。

６）６号井戸跡（SF６）：試料１では珪藻が検出されなかった。

４．珪藻分析から推定される堆積環境

（１）池状遺構（SZ１，池跡？）：埋土下部の堆積当時は，水の流れ込みがあり水草が生育する水域から湿地，および湿潤な陸域を伴う多様な環境が推定され，池状の水域およびその周囲の環境が示唆される。埋土上部の堆積当時は，埋土の堆積などにより水域が減少し，湿潤な陸域が優勢になったと考えられる。

遺構底面では，珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと，水流による淘汰を受けたこと，土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

（２）井戸跡（SF１，SF２，SF３，SF５，SF６） 珪藻は，細胞内に葉緑体を持ち光合成を行っていることから，

表１　曽井第２遺跡における珪藻分析結果

※「SC1」は調査時の番号で報告書では「SZ1」のことです。

分類群	ＳＣ１南			ＳＣ１北		ＳＦ１	ＳＦ２				ＳＦ３	ＳＦ５			ＳＦ６
	1	2	3	1	2	1	1	2	3	4	1	1	2	3	1
貧塩性種（淡水生種）															
Achnanthes exigua		2													
Achnanthes lanceolata		4		3											
Amphora copulata				1											
Amphora montana	1	5			5	11	2	39	1		28	3	52	39	
Amphora spp.											2				
Amphora veneta	1	2		4	1										
Anomoeoneis styriaca						6									
Caloneis bacillum					3	1					1				
Caloneis hyalina		4			2	2					57	4	8		
Caloneis lauta		2		3	2			2							
Caloneis molaris				1											
Caloneis silicula					2										
Caloneis spp.														1	
Cymbella gracilis						3					1				
Cymbella lanceolata				2	2										
Cymbella minuta		2													
Cymbella naviculiformis					1										
Cymbella perpusilla						3									
Cymbella silesiaca		6		3	3	1								1	
Cymbella tumida	1	5		1	3										
Denticula sp.											3				
Diploneis spp.	7	3		3	2	3					1			1	
Diploneis subovalis	2	7		10	3	2					3				
Epithemia adnata		5													
Epithemia turgida	1	2													
Eunotia bilunaris						6									
Eunotia flexuosa						22									
Eunotia implicata						1									
Eunotia minor	6	52		10	14	2									
Eunotia naegelii												1			
Eunotia praerupta						2	1								
Eunotia pseudoserra					5										
Eunotia soleirolii	2														
Eunotia spp.	3				1										
Fragilaria capucina		1													
Frustulia rhomboides v. *saxonica*						1								1	
Frustulia vulgaris				1	6	4		1			6			3	
Gomphonema acuminatum		4		2	5	8									
Gomphonema affine				2											
Gomphonema angustatum		1		1	2										
Gomphonema augur		2													
Gomphonema augur v. *turris*				2	15	4									
Gomphonema clevei		3			2										
Gomphonema globiferum		1													
Gomphonema gracile		6		5	9	6					3				
Gomphonema minutum		5			3										
Gomphonema mexicanum						10									
Gomphonema parvulum	2	13		7	5	13					1		5	5	
Gomphonema pseudsphaerophorum		6		1	5										
Gomphonema sphaerophorum					2	3									
Gomphonema spp.	2	5		2	5	8								1	
Gomphonema truncatum		1			2	11									
Gyrosigma spp.	3	12		4	15										
Hantzschia amphioxys	10	4		37	2	9	7	44			10	9	23	5	
Melosira varians				1											
Navicula confervacea	1	12		4	4	71		2			1		1		
Navicula contenta	20	13		48	8	37	3	30			27	193	36	21	
Navicula cryptocephala														1	
Navicula cryptotenella					6										
Navicula elginensis	3	35		14	17	1		2			8	3		3	
Navicula gallica						4					3	2	1		
Navicula goeppertiana					1	35							1		
Navicula gregaria													8	8	
Navicula ignota				4											
Navicula kotschyi		1		1	1						4	3			
Navicula mutica	37	30		61	40	25	4	55			25	26	33	10	
Navicula mutica v. *ventricosa*													2		
Navicula pupula		6		1	2						2			1	
Navicula pusilla					3										
Navicula pusio							1								
Navicula spp.		1		1	2	13		2			3	2	3	4	
Navicula submolesta													11	2	
Navicula tokyoensis						1									
Navicula veneta					2	1							9	3	
Navicula viridula v. *rostellata*		3		1							1		3	2	
Neidium affine					1								3		
Neidium spp.	1			2	1			1			1	3	1	4	
Nitzschia brevissima				1	1	5		3	1		13	8	8	3	
Nitzschia debilis	2	1		2	6	10		4			35	21	7	8	
Nitzschia frustulum													1		
Nitzschia nana				1		2					5		8	2	
Nitzschia palea						3		9			14	30	43	40	
Nitzschia recta					1										
Nitzschia sinuata v. *delognei*														4	
Nitzschia spp.	1	1		1	3	1		4			6		3	6	
Orthoseira roeseana	3														
Pinnularia acrosphaeria	7	8		8	3										
Pinnularia appendiculata	2	1			2			2			2	3	3	1	
Pinnularia balatonis		2													
Pinnularia borealis	2			7	7		1	6			6	3	9	2	
Pinnularia brevicostata					2										
Pinnularia gibba	2	11		6	6										
Pinnularia hemiptera	1				4										
Pinnularia intermedia											3				
Pinnularia interrupta		1		1	8										
Pinnularia maior					1										
Pinnularia microstauron		3		6	2	4		8	2		5	1	50	3	
Pinnularia obscura				1											
Pinnularia schroederii	2	1		10	6	3	3	1				2		2	
Pinnularia spp.	7	2			5			13			6	4	5	2	
Pinnularia subcapitata	9			4	2	3	1	24			5	20	8	7	
Pinnularia viridis				1				2							
Rhopalodia gibba	6	2		4	4	1	1								
Rhopalodia spp.		1													
Stauroneis acuta				1											
Stauroneis anceps		1		1											
Stauroneis phoenicenteron		5		1	7										
Stauroneis smithii		2		2	2						7		1		
Stauroneis sp.1														1	
Stauroneis spp.		1													
Surirella angusta		1			1	1	2	5			3		4	3	
Surirella ovata				1				2	1		1		3	1	
Synedra ulna		1			1										
貧-中塩性種（淡-汽水生種）															
Rhopalodia gibberula	9	13		9	20	19	1				9		2		
中-真塩性種（汽-海水生種）															
Achnanthes delicatula	1	3			1										
Hantzschia elongata					1										
Nitzschia coarctata					2										
Nitzschia levidensis v. *victoriae*											1				
Nitzschia littoralis											2				
Nitzschia lorenziana					4										
Nitzschia sigma						2					2				
Nitzschia vitrea											1	1			
合　計	157	327	0	311	317	384	27	261	5	0	317	342	355	201	0
未同定	17	20	0	21	17	16	1	11	1	0	28	37	24	15	0
破片	80	134	0	88	79	69	10	78	0	0	73	39	77	66	0
試料１cm³中の殻数密度	5.7×10^{4}	3.5×10^{5}	0.0	9.6×10^{4}	5.1×10^{5}	5.1×10^{5}	1.3×10^{4}	9.3×10^{4}	4.0×10^{3}	0.0	7.9×10^{5}	1.9×10^{5}	1.0×10^{6}	4.1×10^{4}	0.0
完形殻保存率（%）	68.5	72.1	－	79.0	80.9	85.3	－	77.7	－	－	82.5	90.7	83.1	76.6	0.0

井戸内部の暗いところでは生育が困難である。したがって，遺構埋土から検出された珪藻については，遺構外からの混入（流入）の可能性が考えられる。なお，陸生珪藻については，井戸壁面上部の比較的明るく湿ったところに生育していたものが井戸内に堆積した可能性も考えられる。

6号井戸跡（SF 6）では，珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，前述のような要因の他に，珪藻の生育に適さない暗く密閉された環境であった可能性も考えられる。

文献

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・1-4.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌, 6 ,p.23-45.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

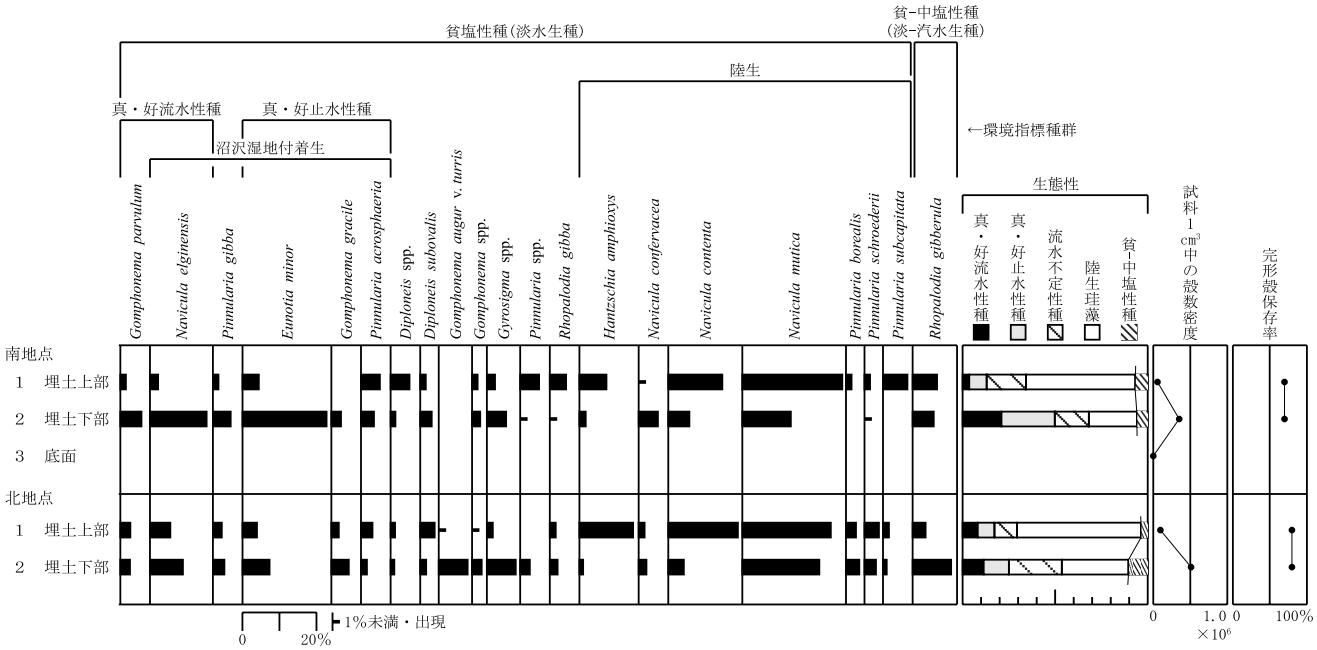


図1　曽井第2遺跡、SZ1（池跡？）における主要珪藻ダイアグラム

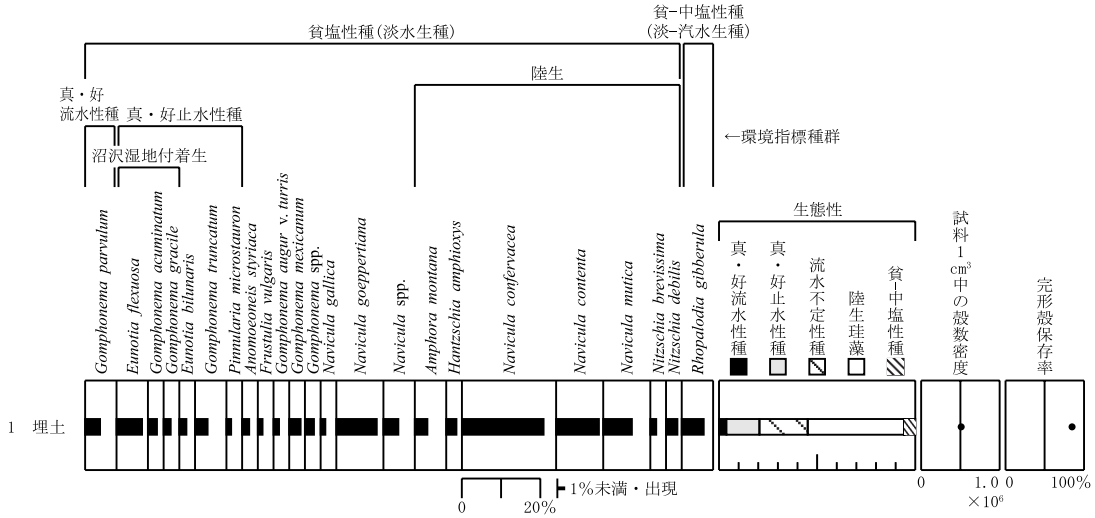


図2　曽井第2遺跡、SF1（井戸跡）における主要珪藻ダイアグラム

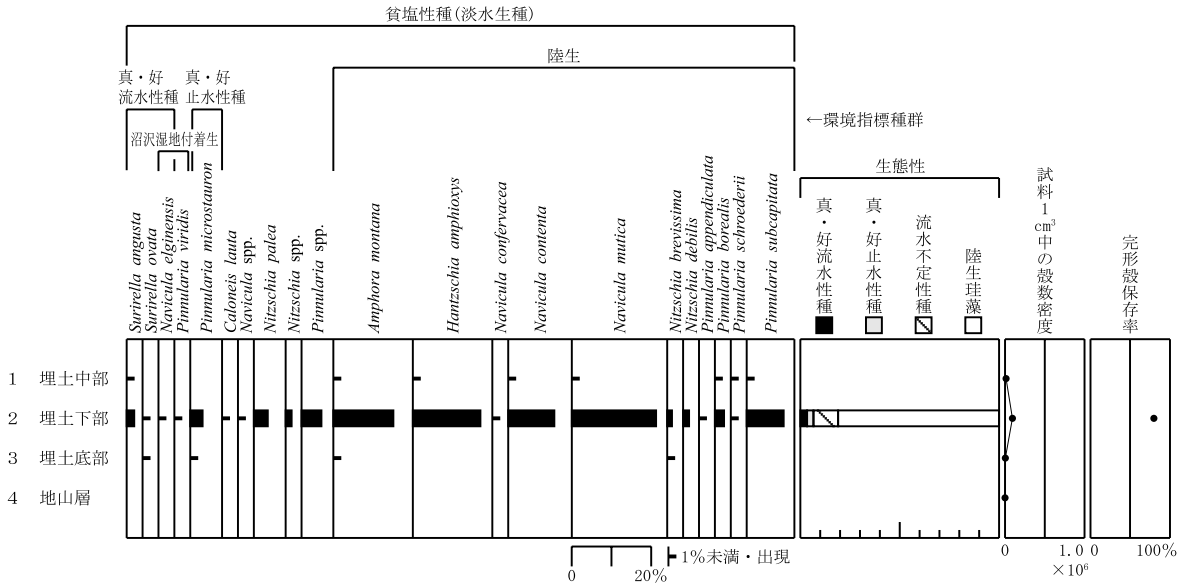


図 3　曽井第 2 遺跡、SF 2（井戸跡）における主要珪藻ダイアグラム

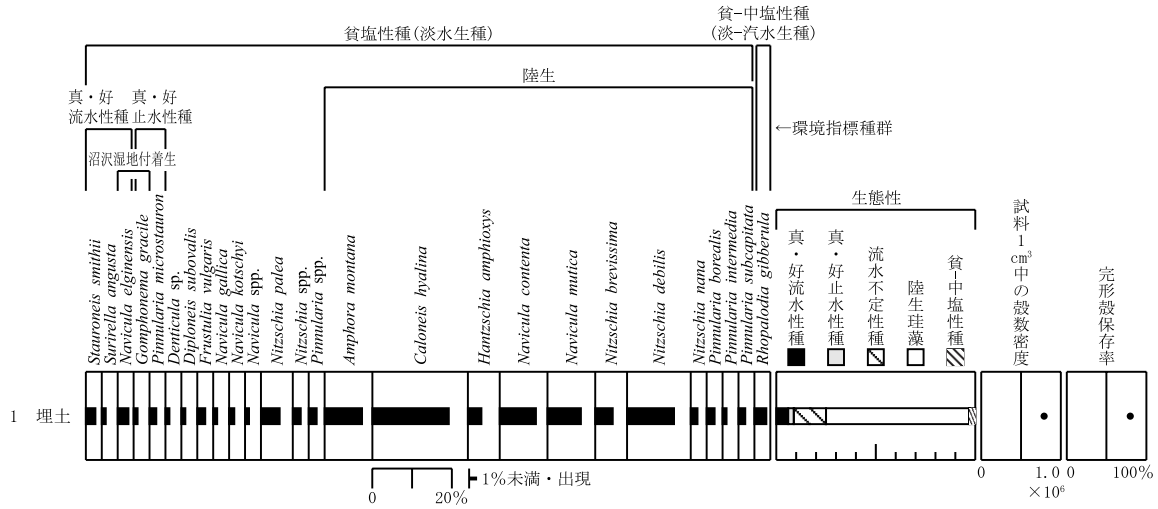


図 4　曽井第 2 遺跡、SF 3（井戸跡）における主要珪藻ダイアグラム

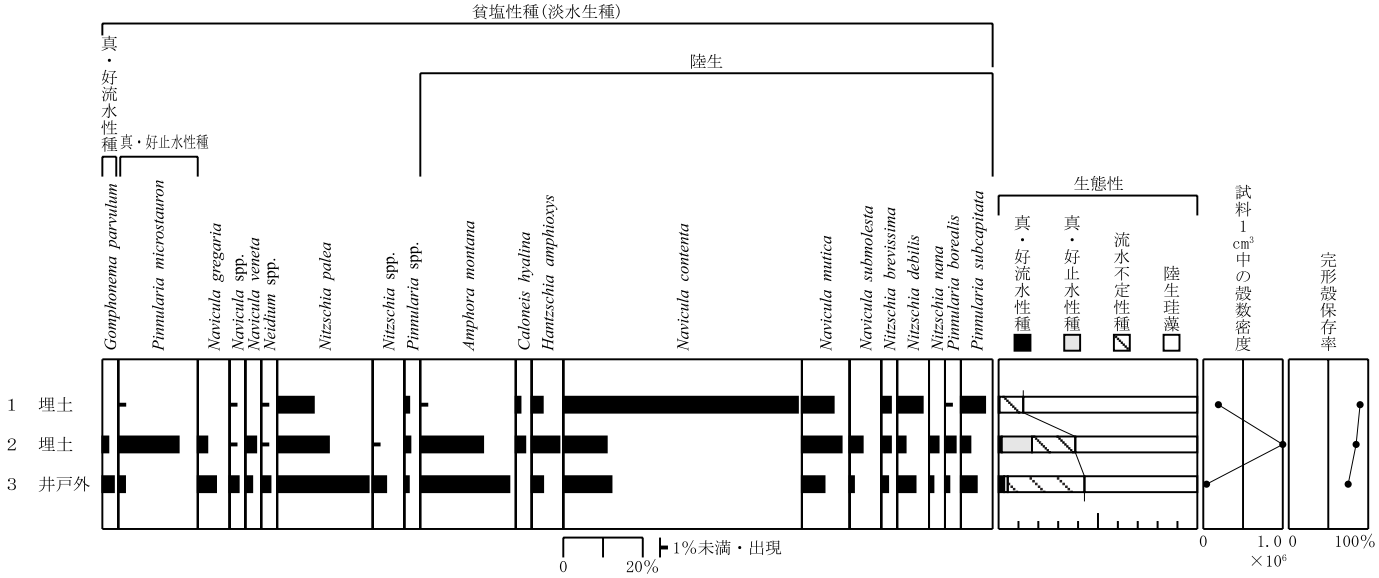
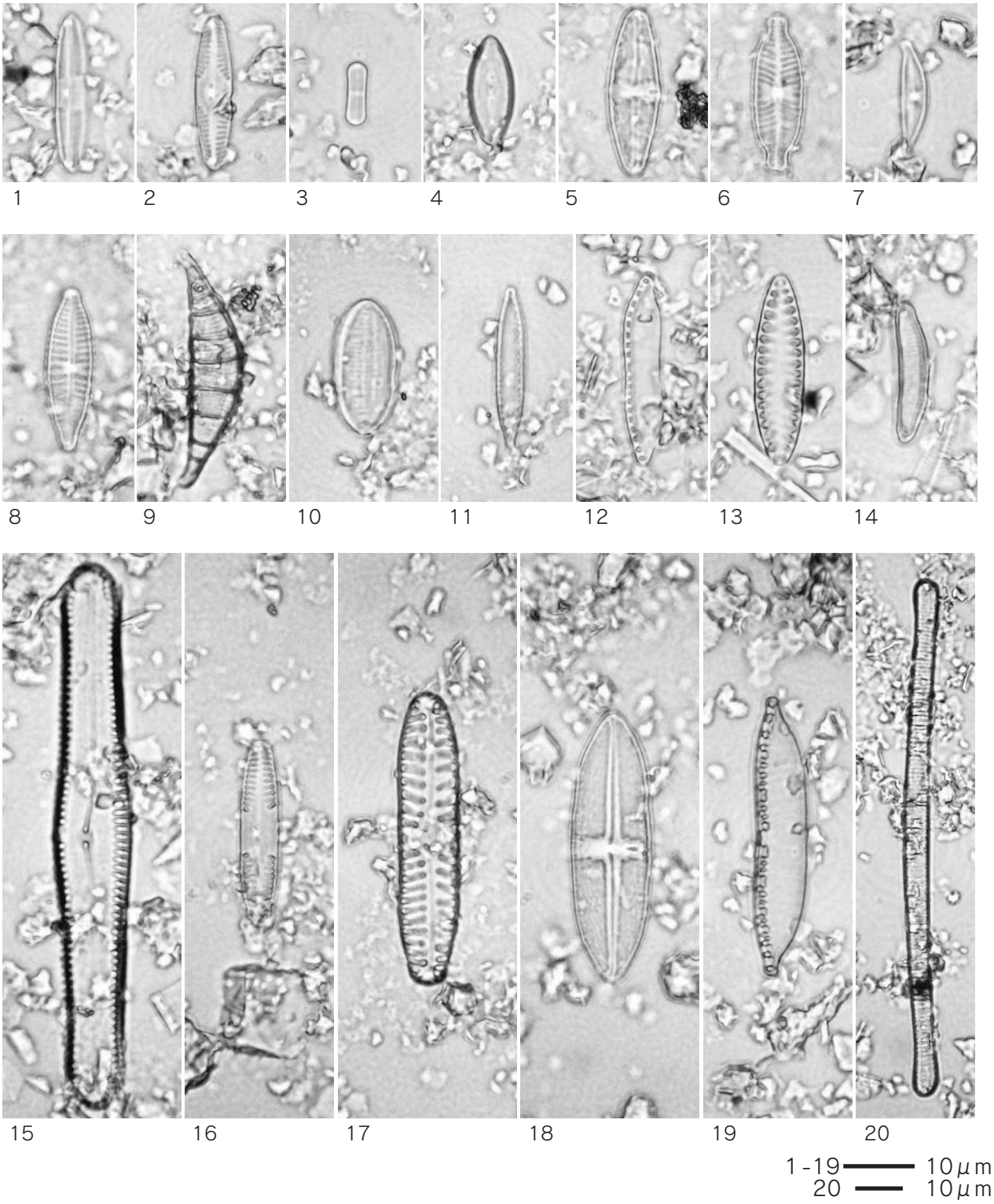


図 5　曽井第 2 遺跡、SF 5（井戸跡）における主要珪藻ダイアグラム

曽井第 2 遺跡の珪藻



1. *Caloneis hyalina* 2. *Pinnularia microstauron* 3. *Navicura contenta* 4. *Navicula confervacea* 5. *Navicula mutica*
6. *Navicula elginensis* 7. *Amphora montana* 8. *Gomphonema parvulum* 9. *Rhopalodia gibberula* 10. *Nitzschia debilis*
11. *Nitzschia palea* 12. *Nitzschia brevissima* 13. *Surirella angusta* 14. *Eunotia minor* 15. *Pinnularia acrosphaeria*
16. *Pinnularia subcapitata* 17. *Pinnularia borealis* 18. *Navicula goeppertiana* 19. *Hantzschia amphioxys* 20. *Eunotia flexuosa*

第４節　植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94，ススキ属（ススキ）は1.24，メダケ節は1.16，ネザサ節は0.48，ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

３．分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を**表１**および**図１**に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔**イネ科**〕イネ，ムギ類（穎の表皮細胞），キビ族型，シバ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など），ウシクサ族Ｂ（大型），ジュズダマ属

〔**イネ科ータケ亜科**〕メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），未分類等

〔**イネ科ーその他**〕表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔**樹木**〕ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

（１）植物珪酸体の検出状況

１）池状遺構（SZ１，池跡？）：南地点の遺構底部（試料３）では，樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）などが検出されたが，いずれも少量である。埋土下部（試料２）では，イネが比較的多く検出され，ススキ属型，ウシクサ族Ａ，メダケ節型，ネザサ節型なども認められた。イネの密度は3,700個/gと比較的高い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され，クスノキ科，ブナ科（シイ属）なども認められた。埋土上部（試料１）でも，おおむね同様の結果であるが，イネの密度は2,800個/gと比較的低い値である。

北地点の埋土（試料１，２）では，南地点の埋土とおおむね同様の結果であり，各試料からイネが検出された。イネの密度は埋土上部（試料１）では4,200個/gと比較的高い値であり，埋土下部（試料２）では1,400個/gと比較的低い値である。また，少量ながらマダケ属型やシバ属が認められた。

２）１号井戸跡（SF１）：埋土（試料１）では，イネが比較的多く検出され，ウシクサ族Ａ，メダケ節型，ネザサ節型なども認められた。イネの密度は3,600個/gと比較的高い値である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され，ブナ科（シイ属）なども認められた。

３）２号井戸跡（SF２）：地山層（試料４）では，ススキ属型やウシクサ族Ａなどが検出されたが，いずれも少量である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され，ブナ科（シイ属），アワブキ科なども認められた。埋土底部（試料３）では，ジュズダマ属，ネザサ節型などが出現し，マンサク科（イスノキ属）は減少している。埋土下部（試料２）では，イネが6,100個/gと多量に検出された。埋土中部（試料１）では，植物珪酸体は検出されなかった。

４）３号井戸跡（SF３）：埋土（試料１）では，イネが9,000個/gと多量に検出され，ススキ属型，ウシクサ族Ａ，メダケ節型，および樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）なども検出された。

５）５号井戸跡（SF５）：埋土（試料１，２）では，イネが多量に検出され，ムギ類（穎の表皮細胞），ススキ属型，ウシクサ族Ａ，メダケ節型，ネザサ節型，マダケ属型なども認められた。イネの密度は5,500個/gおよび6,200個/gといずれも高い値である。また，ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は700個/gおよび1,400個/gと比較的低い値である。樹木（照葉樹）ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され，ブナ科（シイ属）なども認められた。井戸外（試料３）でも，おおむね同様の結果であるが，ムギ類（穎の表皮細胞）は認められなかった。イネの密度は3,500個/gと比較的高い値である。

６）６号井戸跡（SF６）：埋土（試料１）では，マンサク科（イスノキ属）が多く検出され，ブナ科（シイ属），クスノキ科，アワブキ科なども認められた。イネ科ではキビ族型，ウシクサ族Ａなどが検出されたが，いずれも少量である。

４．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

（１）池状遺構（SZ１，池跡？）：遺構埋土の堆積当時は，周辺で稲作が行われていたと考えられ，そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また，遺構周辺で敷物や藁製品など何らかの形でイネ藁が利用されていたことも想定される。

当時の遺跡周辺には，イスノキ属，シイ属，クスノキ科などの照葉樹林が分布しており，部分的にメダケ属（メダケ節やネザサ節）やマダケ属，ススキ属，シバ属なども見られたと推定される。イネ科の草本類が少ないことから，遺構の周辺は比較的管理の行き届いた環境であった可能性が考えられる。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く，建築材や生活用具，食用などとしての利用価値が高い。

（２）井戸跡（SF１，２，３，５，６）：遺構埋土の堆積当時は，周辺で稲作が行われていたと考えられ，そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また，遺構周辺で敷物や藁製品など何らかの形でイネ藁が利用されていたことも想定される。５号井戸跡（SF５）の埋土では，少量ながらムギ類（穎の表皮細胞）が認められた。当時は稲作とともにムギ類などを栽培する畑作も行われていたと推定される。遺跡周辺の状況は，池状遺構（SZ１）とおおむね同様であったと考えられる。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　宮崎県、曽井第２遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

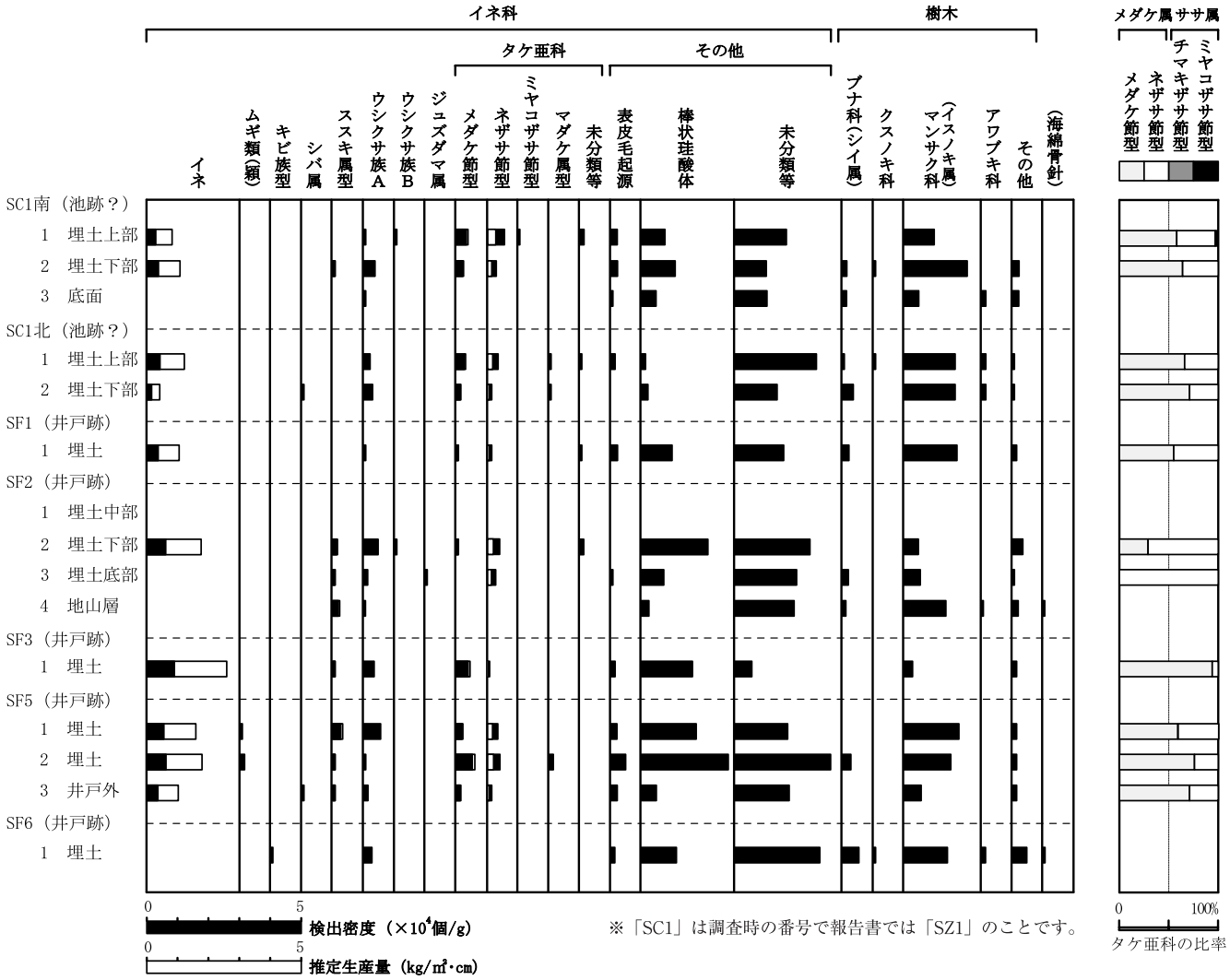
分類群	学名	地点・試料	SC1南 1	SC1南 2	SC1南 3	SC1北 1	SC1北 2	SF1 1	SF2 1	SF2 2	SF2 3	SF2 4	SF3 1	SF5 1	SF5 2	SF5 3	SF6 1
イネ科	Gramineae (Grasses)																
イネ	*Oryza sativa*		28	37		42	14	36		61			90	55	62	35	
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)													7	14		
キビ族型	Paniceae type																7
シバ属	*Zoysia*						7									7	
ススキ属型	*Miscanthus* type			7						13	7	19	7	27	7	7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		7	37	7	21	29	7		47	13	6	34	55	7	14	27
ウシクサ族B	Andropogoneae B type		7							7							
ジュズダマ属	*Coix*										7						
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		35	22		28	14	7		7			41	20	55	14	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		56	29		35	14	14		40	27		7	34	41	14	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		7														
マダケ属型	*Phyllostachys*					7	7								14		
未分類等	Others		14			7		7		13							
その他のイネ科	Others																
表皮毛起源	Husk hair origin		21	22	7	14		22			7		14	20	48	21	13
棒状珪酸体	Rod-shaped		77	110	48	14	22	100		216	73	25	166	178	282	49	114
未分類等	Others		167	102	104	264	137	158		243	200	192	55	171	310	176	275
樹木起源	Arboreal																
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*			15	14	7	36	22			20	12			28		54
クスノキ科	Lauraceae			7		7											7
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		98	205	48	166	166	172		47	53	136	28	178	152	56	141
アワブキ科	Sabiaceae				14	14	14					6					13
その他	Others			22	21	7	7	14		34	7	19	14	14	14	14	47
(海綿骨針)	Sponge											6					7
植物珪酸体総数	Total		516	614	263	631	470	560	0	729	413	415	455	758	1033	408	698

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

分類群	学名	SC1南 1	SC1南 2	SC1南 3	SC1北 1	SC1北 2	SF1 1	SF2 1	SF2 2	SF2 3	SF2 4	SF3 1	SF5 1	SF5 2	SF5 3	SF6 1
イネ	*Oryza sativa*	0.82	1.07		1.22	0.42	1.06		1.79			2.64	1.61	1.82	1.03	
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.09						0.17	0.08	0.23	0.09	0.34	0.09	0.09	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.40	0.25		0.32	0.17	0.08		0.08			0.48	0.24	0.64	0.16	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.27	0.14		0.17	0.07	0.07		0.19	0.13		0.03	0.16	0.20	0.07	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02														

タケ亜科の比率（%）

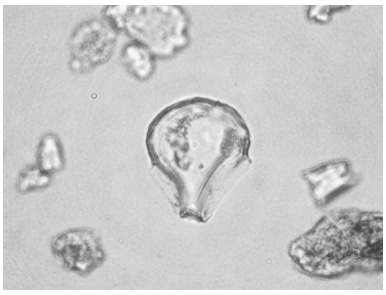
分類群	学名	SC1南 1	SC1南 2	SC1南 3	SC1北 1	SC1北 2	SF1 1	SF2 1	SF2 2	SF2 3	SF2 4	SF3 1	SF5 1	SF5 2	SF5 3	SF6 1
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	58	64		66	71	55		29			94	59	76	71	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	39	36		34	29	45		71	100		6	41	24	29	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	3														

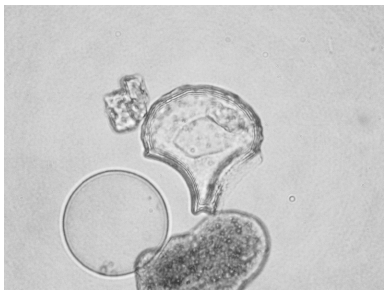


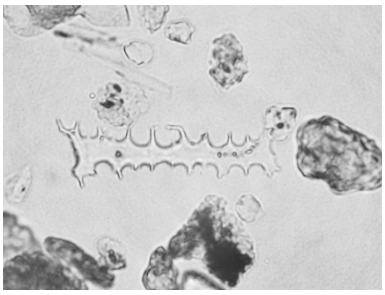
※「SC1」は調査時の番号で報告書では「SZ1」のことです。

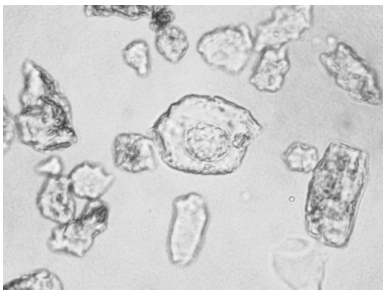
図１　宮崎県、曽井第２遺跡における植物珪酸体分析結果

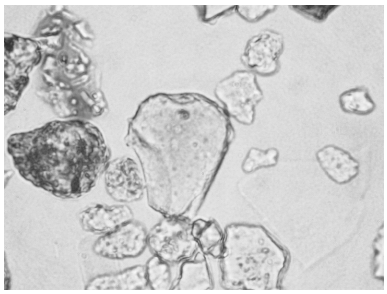
曽井第２遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

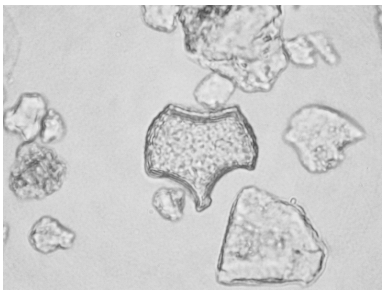

イネ
SC1北　2

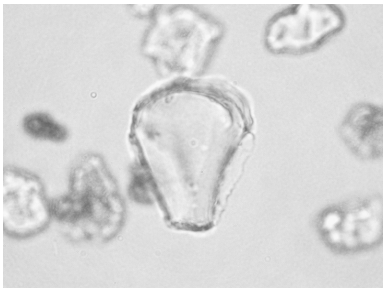

イネ
SF5　3

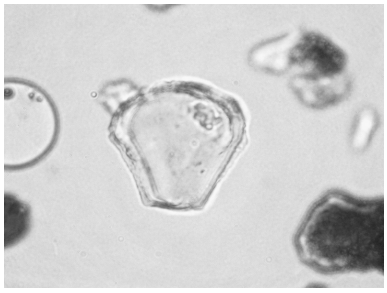

ムギ類（穎の表皮細胞）
SF5　2

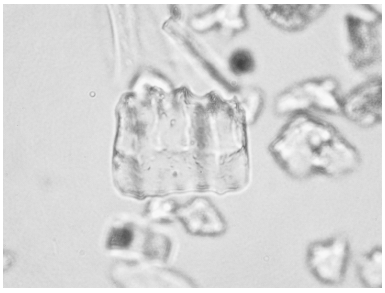

ジュズダマ属
SF2　3

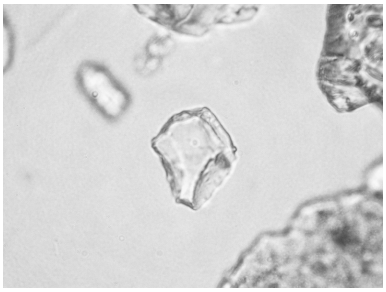

ススキ属型
SF5　2

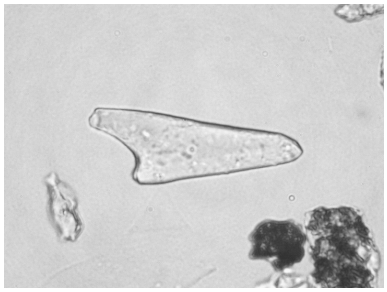

シバ属
SC1北　2

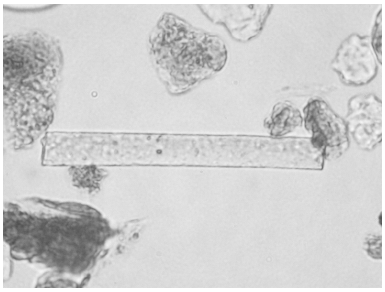

メダケ節型
SC1南　1

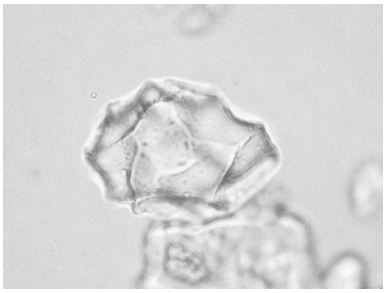

ネザサ節型
SC1南　1

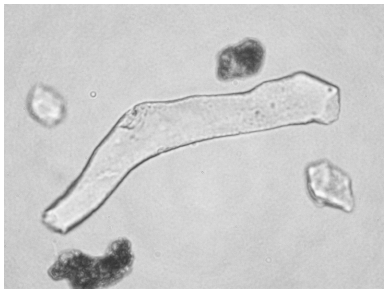

ネザサ節型
SF2　2

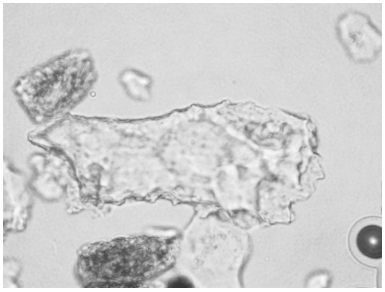

マダケ属型
SC1北　1


表皮毛起源
SC1北　1


棒状珪酸体
SC1南　1


ブナ科（シイ属）
SC1北　2


マンサク科（イスノキ属）
SC1北　1


アワブキ科
SC1南　3

50μm

※「SC1」は調査時の番号で報告書では「SZ1」のことです。

小 結 [第１節～第４節]

株式会社　古環境研究所

（１）池状遺構（SZ１，池跡？）

珪藻分析では，水の流れ込みがあり水草が生育する水域から湿地，および湿潤な陸域を伴う多様な環境が推定され，池状の水域およびその周囲の環境が示唆される。花粉分析でも，イネ科，カヤツリグサ科，セリ亜科，イボクサ，ミズアオイ属，ハスなどの水生植物が生育する池状の水域の存在が示唆される。当時の遺構周辺では，水田稲作をはじめソバ，アブラナ科などを栽培する畑作が行われていたと考えられる。イネの植物珪酸体については，遺構周辺で利用されていた藁製品に由来する可能性も考えられる。

遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類，シイ類，カシ類，イスノキ属，クスノキ科，クリなども見られる森林が分布していたと考えられ，スギは植栽や造林，マツ類は植栽や二次林が想定される。また，遺構の近隣にはブドウ属が生育していたと考えられ，カエデ属，ツツジ科，グミ属，カキ属などの存在も認められた。

埋土下部では，少量ながらカピラリアとマンソン裂頭条虫の寄生虫卵分析が検出された。これらは，主に鳥およびヒト以外の哺乳類の寄生虫である。

（２）井戸跡（SF１，SF２，SF３，SF５，SF６）

各遺構の埋土の堆積当時は，周辺で水田稲作をはじめムギ類，ソバ，アブラナ科などの畑作が行われていたと考えられ，遺跡周辺にはスギを主体としてマツ類，シイ類，カシ類，イスノキ属，クスノキ科，クリなども見られる森林が分布していたと推定される。３号井戸跡（SF３）では，マキ属が特徴的に認められ，近隣に生育していた可能性が考えられる。

５号井戸跡（SF５）では，アカザ科－ヒユ科，ヨモギ属などの草本類が優勢な日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆され，スギがあまり見られないことから，他の遺構とは時期や性格が異なる可能性が考えられる。また，同遺構では回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも少量であり，明らかな消化残査も認められないことから，集落周辺における通常の生活汚染程度とみなされ，トイレ遺構との関連性は低いと考えられる。

第５節　樹種同定（１）

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し，生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

表１に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シイ属　Castanopsis　ブナ科　図版１・２

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属には，スダジイとツブラジイがあり，どちらも本州（福島県，新潟県佐渡以南），四国，九州に分布する常緑高木で，高さ20m，径1.5mに達する。材は耐朽，保存性やや低く，建築，器具などに用いられる。

４．所見

分析の結果，SH１の柱穴から出土した柱材２点は，いずれもシイ属と同定された。シイ属は，温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素であり，当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

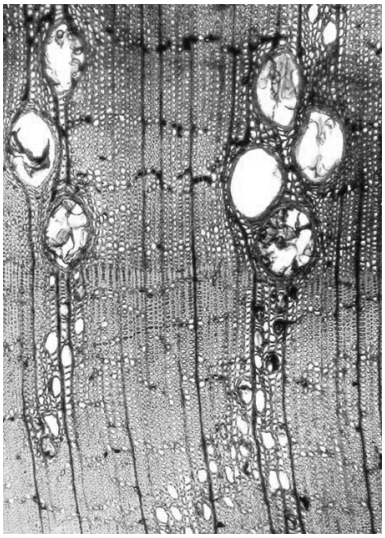
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

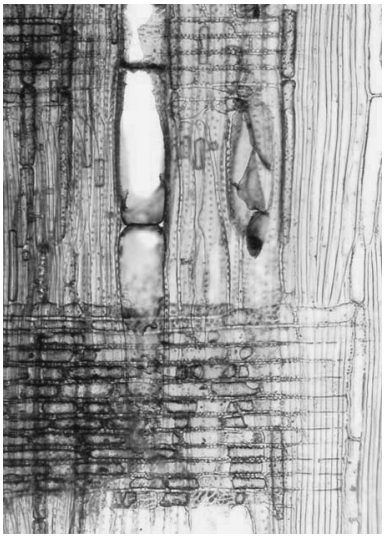
表１　曽井第２遺跡における樹種同定結果

試料		結果（学名／和名）	
SH１	柱穴出土材：大	*Castanopsis*	シイ属
SH１	柱穴出土材：小	*Castanopsis*	シイ属

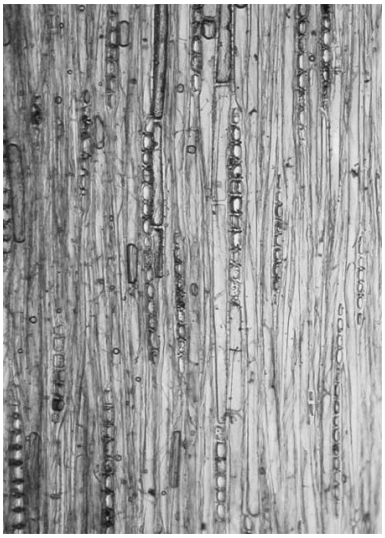
曽井第２遺跡の木材



横断面 ―――― : 0.5mm

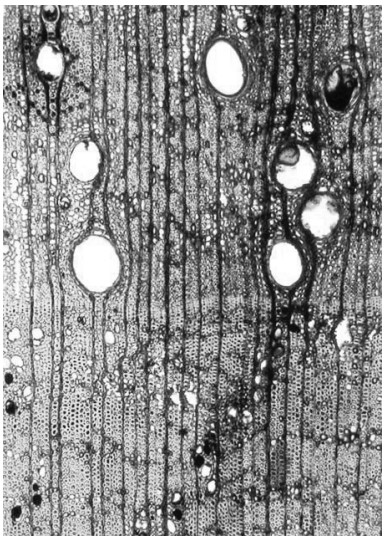


放射断面 ―――― : 0.2mm

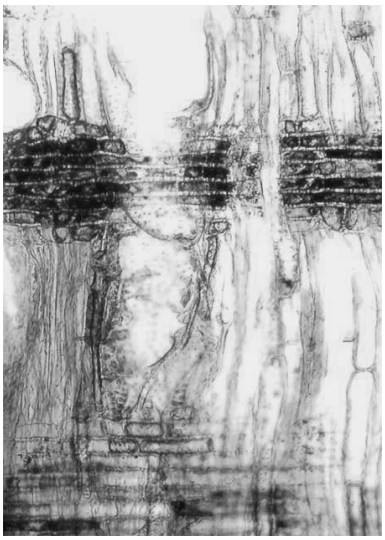


接線断面 ―――― : 0.2mm

１．大①　シイ属



横断面 ―――― : 0.5mm



放射断面 ―――― : 0.2mm

接線断面 ―――― : 0.2mm

２．小②　シイ属

第６節　樹種同定（２）

株式会社　吉田生物研究所

１．試料

試料は曽井第２遺跡から出土した建築部材４点、雑具３点、用途不明品１点の合計８点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹３種、広葉樹２種、タケ類１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）マツ科モミ属（*Abies sp.*）（遺物No.4）（写真No.4）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ゛型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

２）コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.*）（遺物No.2,3）（写真No.2,3）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて 狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州(福島以南)、四国、九州(宮崎まで)に分布する。

３）スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica D.Don*)（遺物No.1,5,6A）（写真No.1,5,6A）

木口では仮道管を持ち､早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

４）クスノキ科クスノキ属クスノキ（*Cinnamomum Camphora Presl*）（遺物No.8）（写真No.8）

散孔材である。木口では中庸の道管（～200μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～800μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

５）クスノキ科ハマビワ属（*Litsea sp.*）（遺物No.7）（写真No.7）

散孔材である。木口では道管（～100μm前後）は単独ないし2～3個が放射状または塊状に複合する。柾目では道管は壁がやや厚く、単穿孔と階段穿孔を有する。軸方向柔細胞は顕著な周囲状となり、柔細胞の一部は油細胞となる。道管放射組織間壁孔はふるい状で異性である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～1㎜以下からなる。油細胞は多く、そのほとんどは軸方向柔細胞にもみられる。ピスフレックがみられる。ハマビワ属にはハマビワ、バリバリノキ、カゴノキ、アオモジがあり、本州（千葉県以西)、四国、九州、琉球に分布する。

6）イネ科タケ亜科（*Subfam. Bambusoideae*）（遺物No.6B）（写真No.6B）

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

【参考文献】

島地 謙･伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙･伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎･村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

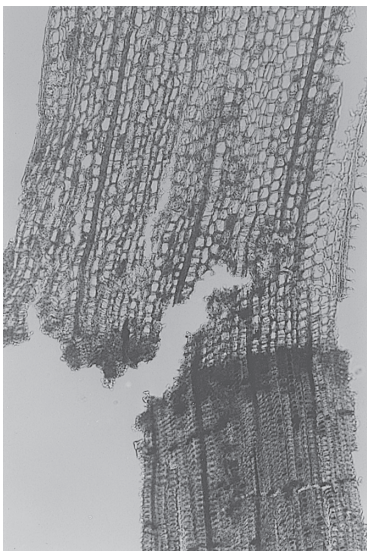
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

【使用顕微鏡】

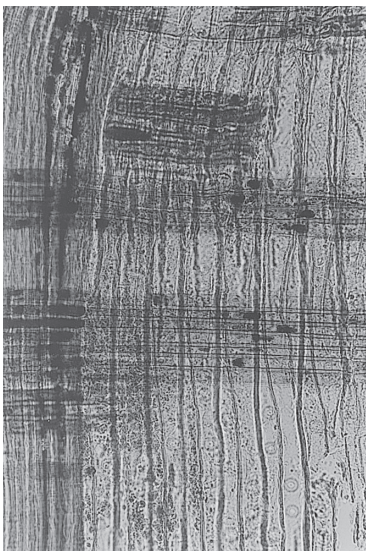
Nikon　MICROFLEX UFX-DX Type 115

No.	品　　名	樹　　種
1	SF 1 出土木製枠板（板状）	スギ科スギ属スギ
2	SF 5 出土木製隅柱（柱状）	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
3	SF 5 出土木製横桟（板状）	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
4	SF 5 出土木製枠板（板状）	マツ科モミ属
5	SF 5 出土木製釣瓶（円形底板）	スギ科スギ属スギ
6	SF 5 出土A木製釣瓶（側板） B　〃　（タガ）	スギ科スギ属スギ イネ科タケ亜科
7	SF 5 出土木製自在鉤	クスノキ科ハマビワ属
8	SZ 1 出土小型木製品（下駄？）	クスノキ科クスノキ属クスノキ

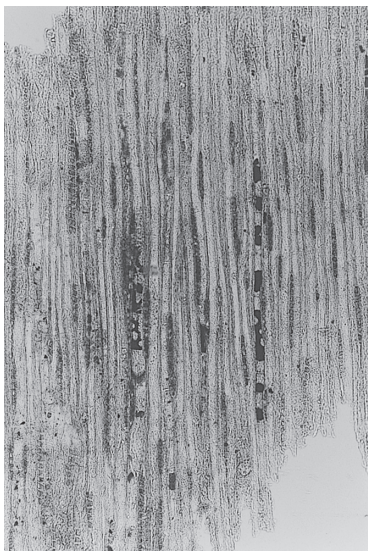
曽井第 2 遺跡出土木製品同定表



木口×40

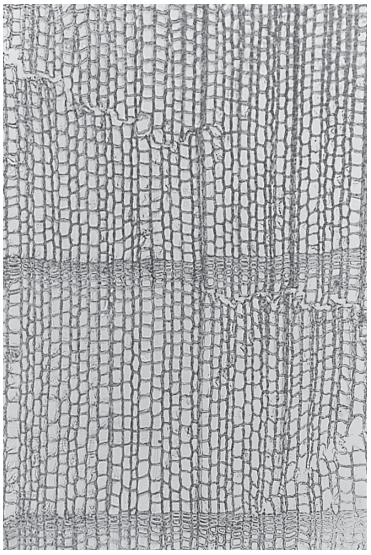


柾目×100



板目×40

No-1　スギ科スギ属スギ

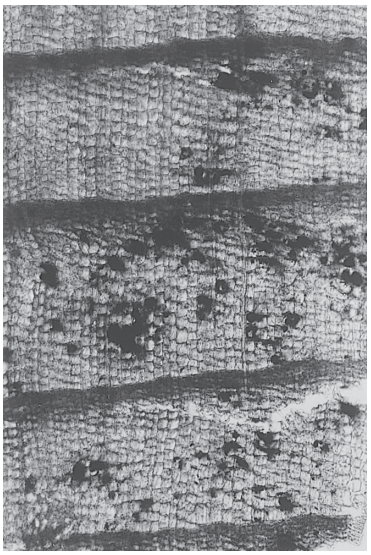


木口×40

柾目×100

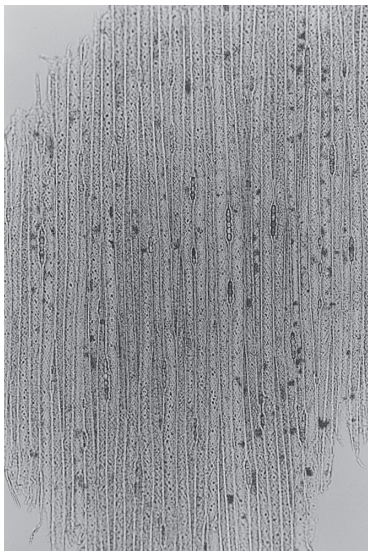
板目×40

No-2　コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ



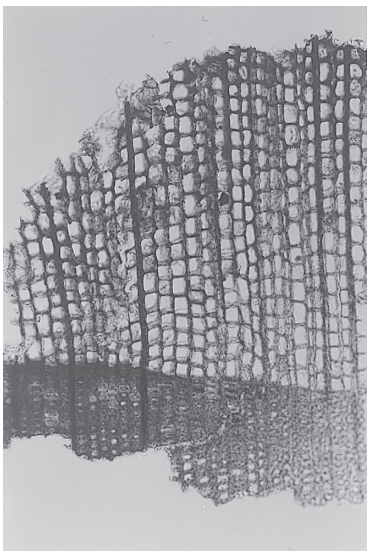
木口×40

柾目×100

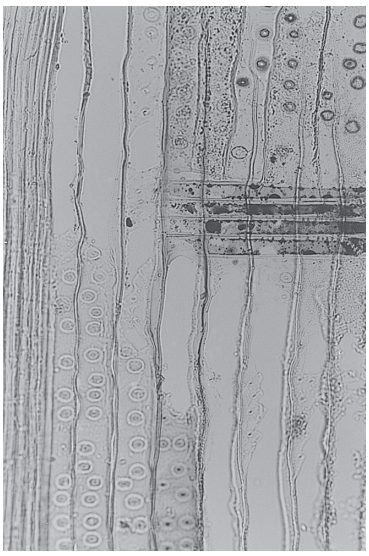


板目×40

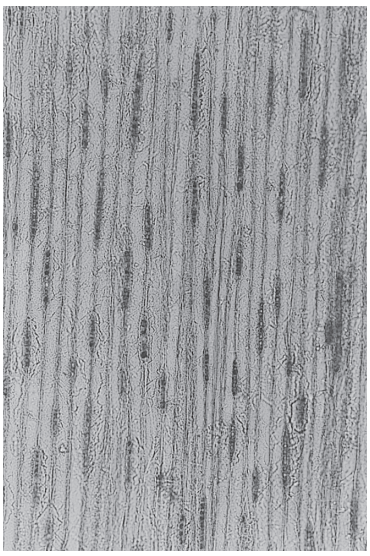
No-3　コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ



木口×40

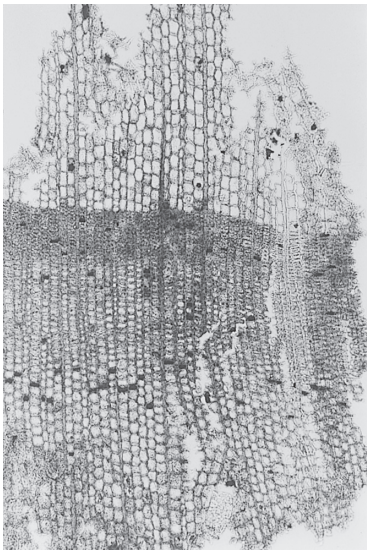


柾目×100



板目×40

No-4　マツ科モミ属

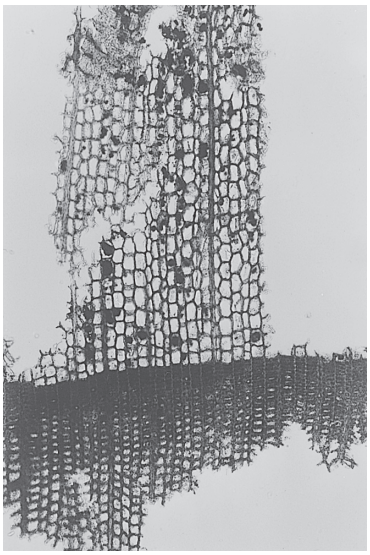


木口×40

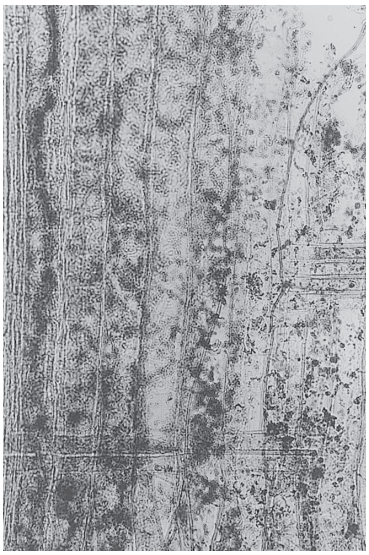
柾目×100

板目×40

No-5　スギ科スギ属スギ



木口×40



柾目×100

板目×40

No-6A　スギ科スギ属スギ